

北陸自動車道関係発掘調査報告書

木^き 崎^{さき} 山^{やま} 遺 跡

1992

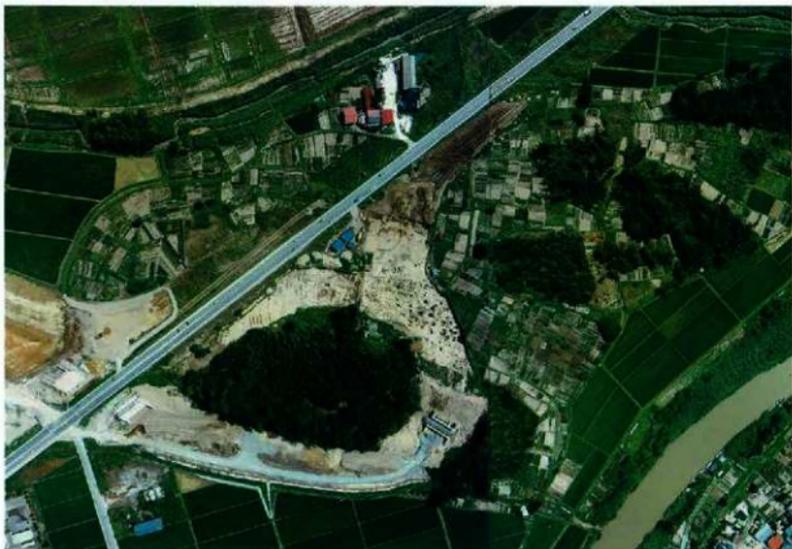
新潟県教育委員会

北陸自動車道関係発掘調査報告書

木^き 崎^{さき} 山^{やま} 遺 跡

1 9 9 2

新潟県教育委員会



遺跡空中写真



地鎮具

序

北陸自動車道は、新潟～米原を結ぶ日本海側の大動脈として建設が進められ、昭和63年7月20日には、全線の開通を見た。

新潟県教育委員会は、昭和48年以来、事業者である日本道路公団と協議を重ねながら、埋蔵文化財の発掘調査を実施してきた。これらの調査成果は、順次報告書としてまとめ、公表してきたところである。

本書は柿崎町木崎山遺跡の発掘調査報告書である。北陸自動車道関係では最後の報告書となる。この遺跡は、中世上杉氏の家臣として活躍した柿崎氏の居城として知られていた。調査の結果、古代と中世の遺構、遺物が多数確認された。古代では、奈良時代を中心として、堅穴住居跡、掘立柱建物跡が確認され、墨書土器には「郡」「佐味」などがあり、古代の頸城郡を考える上で重要な遺跡であることが判明した。

中世では13世紀～15世紀を中心として、遺構、遺物が多数出土し、戦国期以前の姿が明らかとなった。本書が頸城地方の古代、中世の歴史解明の一助となれば幸いである。

最後に、本調査に際し多大なご協力を賜った柿崎町教育委員会並びに地元の方々、また計画から調査実施に至るまで格別のご協力を賜った日本道路公団新潟建設局に対して、ここにあらためて衷心より謝意を表する次第である。

平成4年3月

新潟県教育委員会

教育長 堀川 徹夫

例 言

- 1 本書は、北陸自動車道建設に係る埋蔵文化財包蔵地のうち、昭和54年度、55年度に日本道路公団から新潟県が委託を受け、県教育委員会が発掘調査を実施した木崎山遺跡の記録である。
- 2 遺跡は、中頸城郡柿崎町大字柿崎字上の山に所在する。発掘調査面積は9,000㎡である。
- 3 発掘調査は県教育庁文化行政課埋蔵文化財係が担当し、地元有志の方々の協力を得て実施した。
- 4 発掘調査によって出土した遺物の注記には遺跡の略号「KJ」を付し、県教育委員会が保管している。
- 5 整理作業は、平成2、3年度に実施した。整理主体は、調査と同様である。
- 6 本書は、戸根与八郎を中心に以下のとおり分担執筆とし、北村亮・高橋保が編集した。
第Ⅰ～Ⅲ章 戸根、第Ⅳ章1 北村亮、第Ⅳ章2 高橋保、第Ⅴ章 戸根・北村・高橋、第Ⅵ章1 北村・高橋、第Ⅵ章2 北村・春日真実、第Ⅵ章3 伊藤秀和、第Ⅵ章4 A・B 戸根、第Ⅵ章4 C 藤巻正信、第Ⅵ章4 D 関洋介、第Ⅵ章4 E 小田由美子、第Ⅶ章1 戸根・高橋、第Ⅶ章2 北村・春日・高橋、第Ⅶ章3 高橋
- 7 遺物の実測図のうち、須恵器、珠洲焼の断面は黒塗りつぶしとした。また、赤彩部、黒色処理部、炭化物付着部等はそれぞれトーンで示した。
- 8 引用文献は、著者及び発行（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 9 鉄滓の分析は、川鉄テクノリサーチ株式会社総合検査・分析センターに委託した。
- 10 航空写真撮影は、株式会社アジア航測に委託した。
- 11 遺物番号は、時代種別ごとにそれぞれ通し番号とし、写真番号も同じとした。
- 12 発掘調査から本書に至るまで、下記の方々から多くのご教示・ご協力を得た。厚く御礼申し上げる。

（敬称略 五十音順）

宇野隆夫、岡本郁榮、垣内光次郎、草野英治、小林昌二、品田高志、齋柄俊夫、関雅之、高野武男、田島正和、前川要、室岡博、吉岡康輔、柿崎町教育委員会、日本道路公団新潟建設局

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	3
1 周辺の地理的環境	3
2 木崎山遺跡周辺の地形	4
3 頸城地方の古墳時代・中世遺跡	7
A 遺跡の分布	7
B 木崎山遺跡既往の調査	9
4 古代・中世の歴史的環境	10
第Ⅲ章 調査の概要	13
1 発掘調査	13
A 調査地の現況	13
B グリッドの設定	13
C 調査方法	14
D 調査経過	15
E 調査体制	18
2 整理作業	18
A 方法	18
B 整理経過と体制	19
第Ⅳ章 遺 跡	20
1 概 要	20
2 層 序	20
第Ⅴ章 遺 構	22
1 竪穴住居	22
2 掘立柱建物	25
3 井 戸	27
4 土 坑	29
5 溝	29
6 土壘状高まり	30
7 道状遺構	30

第VI章 遺 物	31
1 古代の土器	31
A 器 種 分 類	31
B 遺構出土土器	38
C 包含層出土土器	39
D 墨書土器	40
2 中世の土器・陶磁器	40
A 中国陶磁器	40
B 瀬戸・美濃焼	42
C 朝鮮陶器	45
D 珠洲焼	45
E 常滑焼・その他	51
F 瓦 器	52
G 中世土師器	53
H 墨書土器	56
3 縄文・弥生・古墳時代の遺物	56
A 縄文時代	57
B 弥生時代	57
C 古墳時代	58
4 その他の遺物	59
A 土 製 品	59
B 石 製 品	61
C 金 属 製 品	63
D 銭 貨	66
E 木 製 品	67
第VII章 ま と め	71
1 遺 構	71
2 遺 物	71
A 古代土器の編年的位置付け	71
B 墨書土器	73
C 中 世	73
3 遺跡の性格	79
【付 編】木崎山遺跡出土鉄滓の分析調査	80
《要 約》	85
《引用文献》	85
《観 察 表》	87

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置	2	第12図	黒色土器・土師器(1)の器種分類	35
第2図	遺跡周辺の土地更正図(明治26年)	4	第13図	土師器(2)の器種分類	36
第3図	遺跡周辺の土地利用	5	第14図	珠洲焼片口鉢類口径分布	49
第4図	周辺の地形と遺跡分布	6	第15図	中世土師器の器種分類	54
第5図	柿崎川河川改修・団体営区画整理事業に係る町教育委員会確認調査柱状図	10	第16図	縄文時代の石器実測図	57
第6図	古代類城郡の荘・保分布図	11	第17図	石鏝・玉類実測図	59
第7図	年度別調査区図	15	第18図	出土銭貨時代別一覧	67
第8図	年度別作業行程	19	第19図	古代の温書・寛書き文字・記号	74
第9図	基本土層位置図	21	第20図	主要遺構等出土の中世土師器	76
第10図	須恵器の器種分類	32	第21図	中世土師器変遷図	78
第11図	赤彩土器の器種分類	34	第22図	分析試料	83
			第23図	顕微鏡写真	84

表 目 次

第1表	出土銭貨一覧	66	第2表	鉄滓分析結果	81
-----	--------	----	-----	--------	----

図 版 目 次

図版図版

図版1	グリッド設定図・調査範囲図	図版25	中層遺構分割図(E地区)
図版2	土層断面図(1)	図版26	中層遺構分割図(E地区)
図版3	土層断面図(2)	図版27	上層遺構分割図(B地区)
図版4	土層断面図(3)	図版28	遺構個別図(1・2号竪穴住居)
図版5	土層断面図(4)	図版29	遺構個別図(3号竪穴住居)
図版6	土層断面図(5)	図版30	遺構個別図(4号竪穴住居)
図版7	土層断面図(6)	図版31	遺構個別図(5・6号竪穴住居)
図版8	下層遺構全体図	図版32	遺構個別図(7・8号竪穴住居)
図版9	下層遺構分割図(A地区)	図版33	遺構個別図(9・10号竪穴住居)
図版10	下層遺構分割図(O地区)	図版34	遺構個別図(11・12号竪穴住居)
図版11	下層遺構分割図(O地区)	図版35	遺構個別図(1~7・10号孤立柱建物)
図版12	下層遺構分割図(国道東側昭和54年度調査区)	図版36	遺構個別図(8・9・11~14号孤立柱建物)
図版13	下層遺構分割図(B地区)	図版37	遺構個別図(1・3・7号井戸)
図版14	下層遺構分割図(C地区)	図版38	遺構個別図(2号井戸)
図版15	下層遺構分割図(C地区)	図版39	遺構個別図(4~6・18号井戸)
図版16	下層遺構分割図(D地区)	図版40	遺構個別図(8号井戸)
図版17	下層遺構分割図(D地区)	図版41	遺構個別図(9・10号井戸)
図版18	下層遺構分割図(E地区)	図版42	遺構個別図(19・20・23号井戸)
図版19	下層遺構分割図(E地区)	図版43	遺構個別図 (32~34号井戸・12・14・17・19~21号土坑)
図版20	下層遺構分割図(E地区)	図版44	遺構個別図 (22・30・68・78・142・144号土坑)
図版21	中(上)層遺構全体図	図版45	遺構個別図(54~58・243~245・555号土坑)
図版22	中層遺構分割図(国道東側昭和54年度調査区)		
図版23	中層遺構分割図(B・C地区)		
図版24	中層遺構分割図(C地区)		

- 图版46 遺構個別図
(143・145・150・266・268・284・519・664号土坑)
- 图版47 遺構個別図 (663・665・666号土坑)
- 图版48 1号竪穴住居出土土器
- 图版49 2・3号竪穴住居出土土器
- 图版50 3号竪穴住居出土土器
- 图版51 3号竪穴住居出土土器
- 图版52 3号竪穴住居出土土器
- 图版53 4・5号竪穴住居出土土器
- 图版54 6号竪穴住居出土土器
- 图版55 7・8号竪穴住居出土土器
- 图版56 8・9号竪穴住居出土土器
- 图版57 10・11号竪穴住居出土土器
- 图版58 12号竪穴住居出土土器
- 图版59 12号竪穴住居、519号土坑出土土器
- 图版60 519号土坑出土土器他
- 图版61 包含層出土土器 (須惠器)
- 图版62 包含層出土土器 (須惠器)
- 图版63 包含層出土土器 (須惠器)
- 图版64 包含層出土土器 (円面硯・墨書・施書土器他)
- 图版65 包含層出土土器 (土師器)
- 图版66 包含層出土土器 (土師器)
- 图版67 包含層出土土器 (土師器)
- 图版68 包含層出土土器 (土師器)
- 图版69 包含層出土土器 (土師器・灰軸・製埴土器)
- 图版70 土坑出土遺物
- 图版71 54号土坑出土遺物
- 图版72 土坑出土土器
- 图版73 土坑出土土器
- 图版74 土坑、井戸、溝、土器出土土器
- 图版75 包含層出土土器 (青磁)
- 图版76 包含層出土土器 (青磁・白磁・青白磁・灰付)
- 图版77 包含層出土土器 (瀬戸・美濃焼)
- 图版78 包含層出土土器 (瀬戸・美濃焼・朝鮮陶器)

写真図版

- 图版113 遺跡周辺空中写真 (調査前)
- 图版114 遺跡空中写真
- 图版115 遺跡透景
- 图版116 遺跡調査前状況
- 图版117 A地区
- 图版118 A地区 (1・2号掘立柱建物、12号井戸、道状遺構)
- 图版119 O地区
- 图版120 B・C地区
- 图版121 C・D・E地区
- 图版122 E地区
- 图版123 国道東側 (昭和54年度調査区)
- 图版79 包含層出土土器 (珠洲焼)
- 图版80 包含層出土土器 (珠洲焼)
- 图版81 包含層出土土器 (珠洲焼)
- 图版82 包含層出土土器 (珠洲焼)
- 图版83 包含層出土土器 (珠洲焼)
- 图版84 包含層出土土器 (常滑焼)
- 图版85 包含層出土土器 (中世土師器)
- 图版86 包含層出土土器 (中世土師器)
- 图版87 包含層出土土器 (瓦器・中世土師器)
- 图版88 包含層出土土器 (中世土師器)
- 图版89 包含層出土土器 (中世土師器)
- 图版90 包含層出土土器 (中世土師器)
- 图版91 包含層出土土器 (中世土師器)
- 图版92 包含層出土土器 (中世土師器)
- 图版93 包含層出土土器 (中世土師器)
- 图版94 包含層出土土器 (瓦器)
- 图版95 包含層出土土器 (墨書土師器)
- 图版96 縄文・弥生・古墳時代土器
- 图版97 土製品 (土鉢・支脚・羽口他)
- 图版98 土製品 (土器片円盤)
- 图版99 土製品 (土器片円盤)
- 图版100 石製品
- 图版101 石製品
- 图版102 金属製品 (銅製品)
- 图版103 金属製品 (鉄製品)
- 图版104 金属製品 (鉄製品)
- 图版105 銭貨
- 图版106 木製品 (箸・櫛・杓・杵他)
- 图版107 木製品 (1号井戸杵)
- 图版108 木製品 (2号井戸杵)
- 图版109 木製品 (3・4・7号井戸杵)
- 图版110 木製品 (8号井戸杵)
- 图版111 木製品 (9号井戸杵)
- 图版112 木製品 (9・10号井戸杵)
- 图版124 3号竪穴住居
- 图版125 4号竪穴住居
- 图版126 5号竪穴住居
- 图版127 6・7号竪穴住居
- 图版128 7・8・9号竪穴住居
- 图版129 10・11号竪穴住居
- 图版130 12号竪穴住居
- 图版131 12・14号掘立柱建物
- 图版132 6・7・9号掘立柱建物
- 图版133 土器状高まり (5B・7D区)
- 图版134 1・2号井戸
- 图版135 3・4号井戸

- 図版136 5・6・7号井戸
 図版137 7・8号井戸
 図版138 9・10・23号井戸
 図版139 12・13・17・22・24・36・68・244・245号土坑
 図版140 54号土坑
 図版141 246・266・286・519・666・555・400・572・663号土坑
 図版142 遺構出土土器 (1・2・3号竪穴住居)
 図版143 遺構出土土器 (3号竪穴住居)
 図版144 遺構出土土器 (3・4・5号竪穴住居)
 図版145 遺構出土土器 (6・7・8号竪穴住居)
 図版146 遺構出土土器 (9・10・11・12号竪穴住居)
 図版147 遺構出土土器 (519・182号土坑、19号井戸)、包含層出土土器 (須惠器)
 図版148 包含層出土土器 (須惠器・円面観能)
 図版149 包含層出土土器 (土師器)
 図版150 包含層出土土器 (土師器・製塩土器)
 図版151 墨書・窠書土器
 図版152 土坑出土遺物
 図版153 土坑、溝、土器、包含層出土土器 (青磁他)
 図版154 包含層出土土器 (白磁・青白磁・瀬戸・美濃焼他)
 図版155 包含層出土土器 (瀬戸・美濃焼・朝鮮陶器)
 図版156 包含層出土土器 (珠洲焼)
 図版157 包含層出土土器 (珠洲焼)
 図版158 包含層出土土器 (常滑焼、瓦器)
 図版159 包含層出土土器 (中世土師器)
 図版160 包含層出土土器 (中世土師器・墨書土器)
 図版161 縄文・弥生・古墳時代土器、石器、玉類
 図版162 石製品 (硯・球状製品・紡錘車・浮子)、土製品 (土錘・紡錘車・支脚)
 図版163 土製品 (羽口・土器片円盤)
 図版164 金属製品 (銅製品・鉄製品)
 図版165 銭貨
 図版166 木製品 (井戸枠他)
 図版167 木製品 (井戸枠)
 図版168 木製品 (井戸枠)
 図版169 木製品 (井戸枠)

第 I 章 調査に至る経緯

北陸自動車道の建設 北陸自動車道は新潟市から長岡市を経て、日本海に沿って富山・石川・福井の各県を通過し、滋賀県の米原町に至る総延長478kmの高速自動車道路である。昭和63年には全線が開通しているが、北陸地域の交通の高速化は言うに及ばず、関東・関西地方と連絡する幹線道路として、物流や地域間の交流など様々な面で重要な役割を果たしている。

建設計画は昭和47年の長岡～上越間の法線発表に始まり、その後、各区間での工事が開始され、昭和54年には中頸城郡柿崎町～大潟町間の工事も発注されている。木崎山遺跡の取り扱いについて、日本道路公団（以下「公団」とする）が本格的に新潟県教育委員会（以下「県教委」とする）と協議を開始したのは昭和53年である。工事工程等の関係から、昭和54年には遺跡の内容を把握するために確認調査を実施し、その結果にもとづいて翌昭和55年に本調査を実施することで協議が成立した。

遺跡の発見 柿崎町の遺跡については、室岡 博氏（柿崎町雁海在住）によって精力的に分布調査され、縄文時代前期の鍋屋町遺跡〔寺村ほか1960〕、古墳時代後期の大久保遺跡〔室岡1972〕、中世の金谷墳墓〔室岡ほか1962〕などが発掘調査されている。木崎山遺跡については、江戸時代の文献に「木崎城」・「木崎山古城」などと記載されている。また、昭和10年代初めに刊行された『柿崎町史』〔柿崎町1936〕にも「木崎城跡」と紹介され、中世に上杉氏の家臣として活躍した柿崎氏の居城とされている。その後、昭和42年に県教委が刊行した『新潟県遺跡目録』に「木崎城」と登録され、「大字柿崎字木崎山に所在し、陶質土器を出土する」とある。

県教委は昭和46年に北陸自動車道建設に伴い、長岡～上越間の遺跡分布調査を県内在住の考古学研究者4名に依頼して実施した。この調査で木崎山遺跡を含めて総計54遺跡が確認され、結果を公団へ通知した。昭和53年5月には木崎山遺跡全体の分布調査を実施し、奈良・平安時代および中世の遺物が採集され、古代・中世の遺跡であることが再確認した。

確認調査 確認調査は昭和54年9月から12月にかけて、延60日間にわたって実施した。試掘坑（3×3m）およびトレンチで、法線内の土層堆積状況、遺構の有無、遺物の包含状況などを調査した。試掘面積は3,321m²で、法線内面積の2%にあたる。調査の結果、文化層は大別して古代と中世の2枚が確認され、溝・土坑などの遺構や須恵器・土師器・中世陶磁器・銭貨などの遺物が出土した。また、現在確認されている削平地・盛土については、当初中世の遺構と考えられたが、その多くが近世以降に畑地として改変された結果であるという結論に達した。本調査必要面積は約7,913m²である。

なお、確認調査の期間中に、国道8号線に架ける橋梁の橋台部分の発掘調査を翌年の本調査に先行して実施した。

本調査にむけて 木崎山遺跡の本調査年度は、前述したように昭和55年度実施することになっていた。工事工程などを勘案して公団と協議を重ね、調査は4月当初に着手し、9月末終了の予定とした。県教委では昭和55年3月に教文第131号で文化庁に発掘通知を提出し、柿崎町教育委員会の協力を得て作業員募集などの事前準備を開始した。



第1図 遺跡の位置

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 周辺の地理的環境

本崎山遺跡は、柿崎町大字柿崎字上の山に所在する。地理的には、新潟県の南西部にある高田平野の北端に近い砂丘上に立地している（第1・4図）。高田平野は、柿崎町・上越市・新井市を頂点とした三角形を呈している。平野の東側には新第三紀層に形成された関田山脈が北東から南西に走っており、平野付近では標高200m以下の低平な丘陵状地形であり、西頸城丘陵、東頸城丘陵と呼ばれている。これらの丘陵は段丘などにより複雑な起伏を示し、特に吉川町の原之町付近では原之町段丘が発達しているが、末端部分は沖積面下に没している。段丘の上部は火山灰の分析から、最終氷期中の重間氷期に形成されたものと推定されている。海岸線は北東から南西に直線的に走り、直江津から柿崎までは砂浜が発達し、柿崎町以北は柏崎市に至るまで岩礁海岸となっている。直江津から柿崎までの海岸線の総延長は約20kmで、これに沿って潟町砂丘と呼ばれる砂丘が発達している。潟町砂丘の表面はかなり起伏に富んでおり、J R信越本線の潟町駅付近が最高所で標高約40mを測る。砂丘の幅は潟町付近から上下浜までの間が最大で、2.5 kmから3 kmにおよぶ場所もある。砂丘全体としては海岸線に並行しているが、潟町付近では東西方向に走る小さな尾根がある。尾根と尾根の間の谷には、長峰池・朝日池・鶴ノ池・麴ヶ池などの湖沼群が砂丘の内陸側に並んでいる。潟町砂丘内部には赤褐色の粘質土層があり、これを境にして軟砂層（上部砂丘）と硬砂層（下部砂丘）に区分され、軟砂層は新期砂丘砂層、硬砂層は潟町砂層と呼ばれている【高田平原団体研究グループ1965】。潟町砂層はリス・ヴェルム氷期の海退によって形成されたものと考えられ、古砂丘Ⅰ・Ⅱに区分されている【新潟古砂丘グループ1967】。赤褐色粘質土層の層厚は一様ではないが、おおむね0.4mから1.7mで、堆積面は地形の起伏に沿っている。新期砂丘砂層の堆積は、柿崎川の河口付近や新堀川から関川河口一帯では厚く堆積し、潟町周辺では薄く堆積している。また、海岸に面した砂丘の斜面や起伏の多い窪地には厚く、後背湿地に臨む内陸側の傾斜地や内陸近くでは薄い。潟町から上下浜間の砂丘で、標高が低い場所では新期砂丘砂層が潟町砂層の上に薄く堆積もしくは欠落し、潟町砂層の上に直接赤褐色粘質土と腐植土が堆積している。

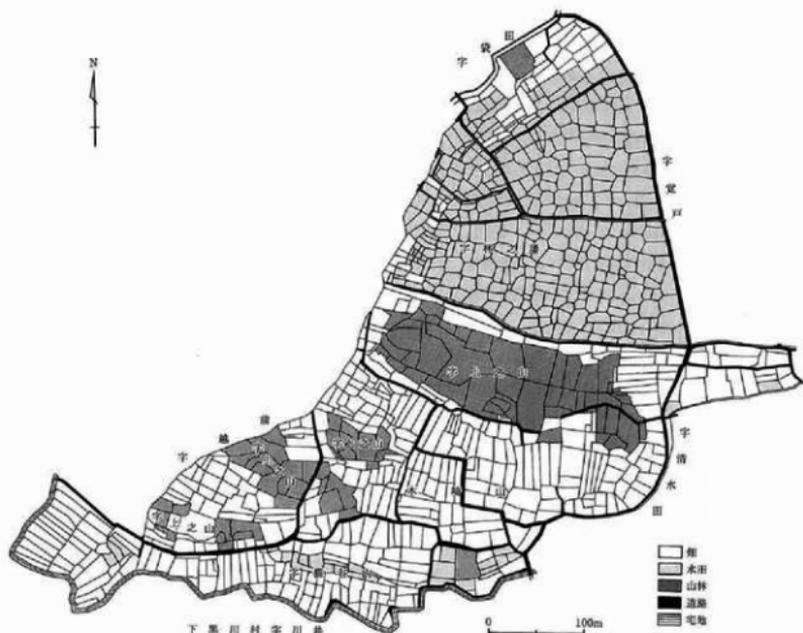
高田平野の主要河川は、関川をはじめ矢代川・保倉川・柿崎川などである。関川は同じく妙高山系から流下する矢代川とともに平野の南縁部に広大な扇状地を形成している。また、支流の大熊川・別所川・柳池川なども、丘陵から平野に出る部分に小扇状地を形成している。これらの中小河川はいずれも大きく蛇行しており、三日月湖などの痕跡を明瞭にとどめるものが多い。

関川流域の沖積面には、関川面・高田面と呼ばれる2段の河岸段丘が形成されている。関川面は高田面の下位に位置し、高田面との比高差は1m以上である。高田面は高田平野のほぼ全域にみられるが、関川面は関川と矢代川に挟まれた地域と関川下流の右岸で部分的に認められる程度である。段丘面には中小河川による自然堤防が発達し、集落の大半がこの上に営まれている。保倉川の北側と潟町砂丘との間は標高5～6mで、江戸時代末期に干拓された大潟などがあり、砂丘の後背湿地となっている。この後背湿地は、ボーリングデータによれば潟湖性の堆積で、海水の影響はまったく受けていないといわれている。

2 木崎山遺跡周辺の地形

木崎山遺跡は、潟町砂丘北端部の柿崎川右岸の独立砂丘上に立地している。海岸線は直線的で砂浜が発達し、並行して標高20～30mの砂丘が高低差を持ちながら連なっている。砂丘の幅は300～700mで、柿崎川左岸では標高20m前後と比較的低いものに対して、右岸では30m前後と高い。左岸の長崎池周辺や右岸の柿崎中学校付近で見られる露頭には、潟町砂層の上に新期砂丘砂層が載っているのが確認される。両者の間には潟町砂層の露頭は見られず、全て新期砂丘砂層である。柿崎町の市街地は新期砂丘砂層によって形成された砂丘上に広がっており、付近の小高い部分には「人見山」・「とんび山」など「山」の付された小字名が多い。

遺跡の東側には、低湿地を挟んで低丘陵が迫っている。丘陵の山麓線は複雑で、奥行きのある幅の狭い谷が入り込んでいる。これらの谷からは中・小河川が流れ出し、柿崎川と合流して遺跡の西側で日本海へ注ぐ。本遺跡の北側には砂丘の裾を縫うように米山川が、南側には小河川が、また西側には吉川と合流した柿崎川が流れている。柿崎川は柿崎町角取地内から国道8号線の柿崎川橋の間で大きく蛇行し、現在も過去の河道跡を顕著に残している。慶長2年作成といわれる『越後国郡絵図一頭城部一』には、萩谷・高



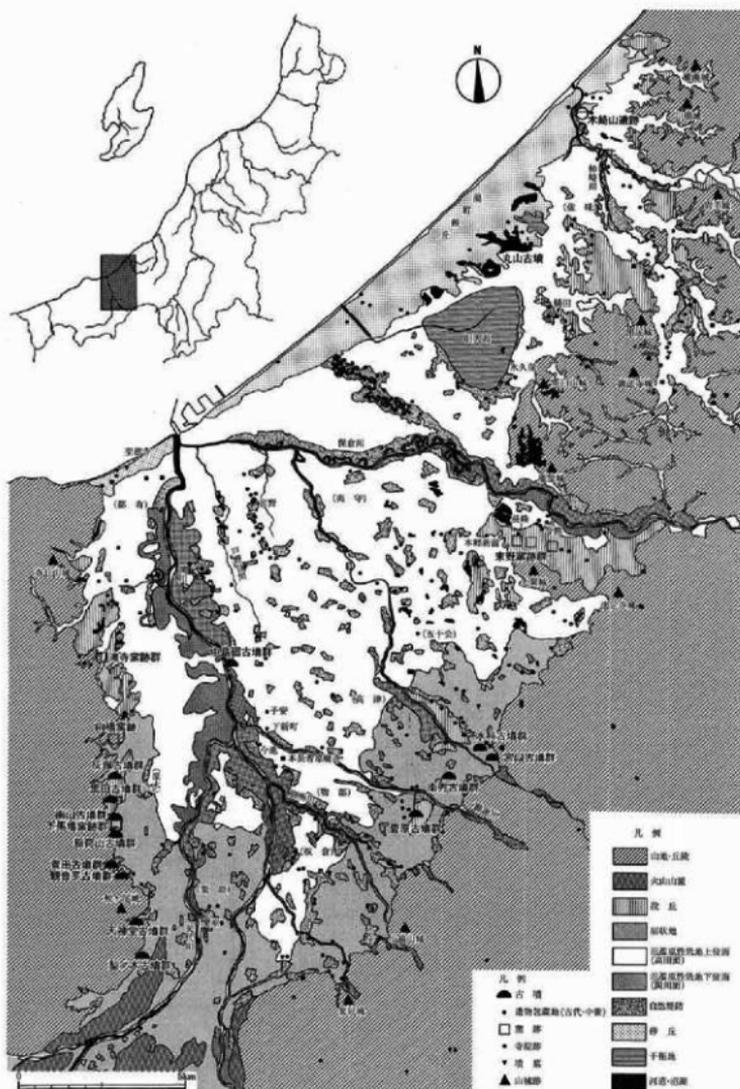
第2図 遺跡周辺の土地更正図（明治26年）

寺・川井を結んだ線の中に大きな湖沼が描かれている。また、本遺跡の北側には第2図の明治26年の地籍図でも読み取れるように、砂丘との間は湿地となっている。平成3年に柿崎町教育委員会が団体営の区画整理に伴って実施した確認調査でも、現地表下1m弱で黒褐色のガツボ層が検出されている。また、昭和20年代には、柿崎川河口が北西の季節風による飛砂などによってせき止められ、遺跡周囲の湿地帯はたびたび湛水していたといわれており、古代・中世にも木崎山遺跡の立地する砂丘の周囲は低湿地となっていたものと思われる。

木崎山と呼ばれている地域は東西300m、南北120mで、面積は約36,000m²を有する。本地域の東寄りには国道8号線が北東から南西に走り、遺跡を二分している(第3図)。北側には東西に走る標高24.4mの尾根があり、北側へは急傾斜で落ち込んでいる。丘陵尾根を中心とする地域は「上ノ山」と呼ばれ、現状は畑地及び山林となっている。南側は緩やかに傾斜し、平坦面を持ちながら順次標高を減じて小河川に接している。国道から東側は砂採取によって砂丘斜面が平坦に削平されているが、かつては砂丘が急激に沖積地へ落ち込んでいたものであろう。西側は相対的に東側より標高は低く、順次低くなって柿崎川に達する。



第3図 遺跡周辺の土地利用



第4図 周辺の地形と遺跡分布

3 頸城地方の古墳時代・中世遺跡

A 遺跡の分布

高田平野の古代・中世遺跡の分布は第4図のとおりであるが、当地方の遺跡については明治時代から注目され、学界へ紹介されたものも多い。沖積地の遺跡については、県教委で実施した昭和37・48年の全県の遺跡分布調査や昭和52年以降の遺跡詳細分布調査などによって、その分布状況が明確になってきている。さらに平成2年には上越市教育委員会が市内の遺跡分布調査を行ない、遺跡の範囲および時代・性格などがほぼ把握されている。ここに図示したものが高田平野周辺地域の古代・中世遺跡のすべてではなく、相当数の遺跡が未発見のまま地中に埋没しているものと思われる。これらの遺跡のうち、発掘調査で内容が把握されたものは少ないが、近年の各種開発事業に伴う事前調査で大規模に発掘調査され、頸城の古代・中世を考える上で重要な資料を提供している遺跡もある。

古墳時代 頸城地方は県内有数の古墳集中地域として多くの古墳群が確認されており、各古墳群を合わせた古墳の数は約200基を数え、頸城古墳群と総称されている。古墳群は高田平野の縁辺部に分布し、南東グループと南西グループに大別される。南東グループは関田山系から流れ出る飯田川・柳池川によって形成された扇状地を中心に分布し、菅原古墳群(清里村)を最大規模として南方(上越市)・宮口(牧村)・水科(三和村)などの古墳群がある。いずれも主体部は横穴式石室で円墳が大半を占めるが、菅原古墳群には県内唯一の後期の前方後円墳が1基含まれている。出土遺物は直刀・鉄鏃・刀子などの武器が一般的であるが、中には馬具や儀仗の装飾の太刀を伴う古墳も存在し、年代は出土遺物から7世紀頃と考えられている。南西グループは矢代川左岸の南栗山麓の丘陵上に立地する古墳群で、南から北へ梨ノ木古墳群・天神堂古墳群・観音平古墳群(以上新井市)、青田古墳群・稲荷山古墳群・南山古墳群・黒田古墳群・灰塚古墳群(以上上越市)と連続して分布している。天神堂古墳群・観音平古墳群は木棺直葬を主とする円墳群で、6世紀代の年代が与えられ、一部5世紀にさかのぼるものもあるが、出土遺物は概して貧弱である。その他の古墳群は、南東グループと内容・年代ともほぼ同じである。

近年まで砂丘地や沖積地には古墳は存在していないと考えられてきたが、上越市内の沖積地と大潟町の砂丘地から古墳が発見されている。沖積地から発見された古墳は中島廻り古墳で、上越市戸野目字中島廻りに所在している。標高約10mの高田面上にあって、区画整理事業に伴う発掘調査により2基が発見された。古墳のマウンドはいずれも削平されているが、1号墳では幅3~5m、深さ0.7~1mの周溝が検出され、周溝の規模や形状から一辺22m前後の隅丸方形の墳丘を有する古墳と考えられている【小島1991】。溝中からは古墳時代初期の供養用の土器がまとまって出土しており、頸城地方における古墳の成立を探る上で貴重な発見となった。一方、砂丘地で発見された古墳は大潟町湯町字丸山に所在する丸山古墳で、砂丘の内陸側にある鶴ノ池に半島状に延びる砂丘の先端部(標高約11m)に立地している。大潟町教育委員会により確認調査が実施された。詳細は不明であるが、一辺約18.5m、周溝底からの高さ約3.5mの二段構築の方墳と考えられている。墳丘の裾部からは、4世紀後半から5世紀前半頃の土器器が出土している【甘粕1988】。両古墳の発見は高田平野の古墳分布が海岸部にまで広がることや、出現期が古墳時代中期前半以前にさかのぼることなど大きな意味を持つ。

なお、古墳時代の集落などについては不明な部分が多いが、水科古墳群の下層から中期の土器器が出土していることなどから、高田平野には当該期の遺跡(集落跡)がかなり埋没している可能性が高い。

奈良・平安時代 集落跡・須恵器窯跡・国府関連遺跡・国分二寺推定地など多くの遺跡が確認されているが、中世の遺跡と重複して分布することが多い。これらの遺跡の分布状況を見ると、保倉川の旧河道を境にして北側と南側では大きく異なっている。以北では砂丘・潟湖の海岸堤防や低丘陵上、柿崎川上流の小支谷内に分布しているのに対して、以南では高田面に形成された保倉川・戸野目川・柳池川などの自然堤防上に立地しているものが多い。これらの自然堤防上にある遺跡を詳細に検討すると、ある程度グルーピングすることができる。このグルーピング単位については、不確定要素を多分に含んでいるが、古代の頸城郡にあった夷守郷・五公郷・物部郷・津有郷・高津郷・板倉郷などに相当するものと考えられる。保倉川旧河道沿いの自然堤防上に立地する榎井B遺跡・片津中之島A遺跡（以上頸城村）からは平安期の灰軸陶器が、戸野目川と飯田川に挟まれた自然堤防上にある宮野遺跡（上越市）からは靑帯石鈔や灰軸陶器が発見されている。また、柳池川流域に発達した自然堤防上にある今池遺跡は、奈良から平安時代初頭と平安時代中頃の遺跡である。掘立柱建物・橋・堅穴住居・井戸・土坑・溝などが検出され、掘立柱建物は全体で100棟以上あり、その大半が東西棟の建物である。最大規模の建物は桁行8間、梁間3間で、5間以上の建物が全体で十数棟存在する。出土遺物も多量に出土しているが、中でも墨書土器・円面硯・瓦塔や畿内からの搬入土器などがあり注目される。今池遺跡は地方官衙ないしは地方官人層の居宅とも考えられるものの、国府の政庁域とは考えられず、近接して存在する本長者原廃寺と有機的な関連をもつ遺跡と思われる。

古代の寺院跡としては、法花寺廃寺（三和村）がある。礎石や石敷遺構が発見されており、桁行6間、梁間3間の建物で基壇を伴うものとされている。年代は出土遺物から12世紀後半頃と考えられる。ただ、一堂一字なのか付属する堂塔が存在するのかわからない。

須恵器窯跡の分布は、関川左岸の西頸城丘陵裾部と右岸東頸城丘陵裾部に大きく分かれている。前者には下馬場窯跡群・向橋窯跡・滝寺窯跡群（以上上越市）が存在している。下馬場窯跡群は2基で構成され、7世紀末から8世紀初頭のかえりのある杯蓋が出土している。向橋窯跡は須恵器・平瓦を焼成した窯で、国分寺等の瓦窯として注目される。また、後者には本郷新溜窯跡群・末野窯跡群（以上三和村）、今熊窯跡群（蒲川原村）などがある。これらの窯跡は8世紀前半には生産を開始し、9世紀中葉まで操業している。ここで生産された須恵器は上越地方の広い範囲に供給されたものと考えられる。高田平野周辺部で最大規模を誇る窯業地帯である。

国府および国分二寺の位置については、今日まで先学によって論じられたきた。上越市普光寺浜・長者原、三和村法花寺、板倉町田井・関川、新井市堂庭・国賀・栗原、妙高村今府など諸説があるが、いまだ明確にはなっていない。しかし、上越市長者原周辺には本長者原廃寺や今池遺跡が存在し、本長者原廃寺では塔心礎と思われる礎石が存在したことや瓦が出土することなどから、国分二寺もしくは国府の可能性が極めて強いといえよう。埴原遺跡（蒲川原村）では古代末から中世の厦と考えられる遺構が6棟発見されている。桁行約47m、梁間約4mと長大で、南北に6棟並列するように配置され、古代の「牧」に関連した施設と考えられている。

このように、高田平野周辺部は、全県的な遺跡のあり方や出土遺物などから、律令期の越後のなかでも先進的地域と位置付けられよう。

中世 遺跡は沖積地や自然堤防に限らず、砂丘や丘陵山間地まで分布が広がってくる。特に、高田平野の東側にある東頸城丘陵の先端部や山間地には、城館跡をはじめとして塚・墳墓・寺跡などの他に石造物も多数分布している。廃寺跡には山寺薬師（板倉町）、岡峰廃寺（清里村）、法定寺・定鎮寺廃寺（蒲

川原村)、東京寺跡・林泉寺跡(柿崎町)、大乘寺跡(吉川町)、至徳寺跡(上越市)などがある。山寺薬師は奈良時代に僧行基によって開山されたと伝えられ、別名狹供養寺とも呼ばれている。本尊の木造薬師如来像の頂部には「大檀那三善讃阿動進沙門祐山 応永第二年大才乙戌七月二日 大仏師筑後法眼」、背部には「大檀那三善讃阿 応永第二年大才乙戌七月二日 大仏師筑後法眼」と墨書銘がある。この三善讃阿は三善為教の子孫と思われる、三善氏は鎌倉時代から室町時代初期にかけてこの地に相当な勢力を誇っていた氏族と考えられる。法定寺はもと真言宗の寺院で、周辺には法光坊・向坊・上屋敷・下屋敷などの地名が残っている。現在、寺には旧境内から出土した鎌倉時代の五銚鈴や五銚杵(県指定文化財)、経塚から出土した鈔銅製経筒などが保管され、鎌倉時代から室町時代にかけて相当繁栄していたものと思われる。また、周辺には中世の石仏が数多く残っている。これらの石仏は腹部・台座を省略しそのまま地中に埋め込む形式で、関山神社(妙高村)周辺にある関山仏といわれるものに類似している。浦川原村横住・岩室、三和村高津・大光寺・水吉などにも数多く分布し、一次石仏群を形成している。水吉堂日には首から上だけの石仏(県指定文化財)が3体(阿弥陀・観音・地藏)あり、首切り地藏と呼ばれている。いずれも凝灰岩製で、阿弥陀仏は高さ73cm、面幅43cm、頭回180cmである。林泉寺跡では、本堂跡と庫裏跡が確認されている。本堂は4間×5間、庫裏は4間×4間で柱間は1.7mである。上越市中門前にある林泉寺の前身といわれ、五輪塔・宝篋印塔・骨蔵器などが出土している。大乘寺跡は壊滅したが、そこにあった石塔は現在の大乗寺の鎮守境内に移されている。一つは一石五輪塔で「永禄十一年 龍勝辨定門 十一月二九日」、もう一つは五輪塔で「元龜二年 法印賢水大和尚位 七月廿日」と紀年銘が確認できる。至徳寺跡では礎石建物・井戸・土坑・溝などの遺構の他に、13世紀末から16世紀末におよぶ中国陶磁器や国産陶器が出土している。至徳寺は臨済宗の寺院で、至徳年間(1384~1387)の開山と伝えられ、「翰林蒞叢集」に「越之後州聖寿山至徳禪寺開山始祖仏印大光禪師慈容」とある。仏印大光禪師は通称僧可あるいは久庵といい、越後守護上杉憲房の子である。また、大潟町小船浜字孤山地内からは、鎌倉時代後期の古瀬戸四耳壺や銅製懸仏・骨蔵器などが出土し、寺院ないしは墳墓と考えられる。

集落跡として面的に調査された遺跡は少ないが、樋田遺跡(吉川町)・水久保遺跡(頸城村)では溝で囲まれた中に獨立柱建物・井戸などを持つ屋敷跡が検出されている。中国陶磁器や国産陶器をはじめ木製品・石製品などが出土し、13世紀から15世紀にかけての遺跡が多い。

塚・墳墓も数多く分布している。金谷塚・車地塚(柿崎町)、河沢塚(吉川町)、しらみ経塚(頸城村)、善光寺浜中世墳墓(上越市)などが調査されている。骨蔵器および外容器は14世紀頃の珠洲焼が大部分であるが、善光寺浜中世墳墓からは古瀬戸瓶子の骨蔵器が出土している。城館跡は中世を通じて数多く築かれているが、上杉謙信が春日山城を居城とした以降、これを中心に高田平野から外へ通じる街道の要所に番城が配されている。中・下越地方へ通じる米山峠を守るために顕法寺城(吉川町)・旗持城(柿崎町)が、関東地方へ通じる三国街道沿いには直峰城(安塚町)・松代城(松代町)が、信濃への北国街道沿いには鯉ヶ尾城(新井市)・箕冠城(坂倉町)などが、越中への北陸街道沿いには徳合城(能生町)・不動山城(糸魚川市)などがある。いずれも大規模な山城である。

B 木崎山遺跡既往の調査

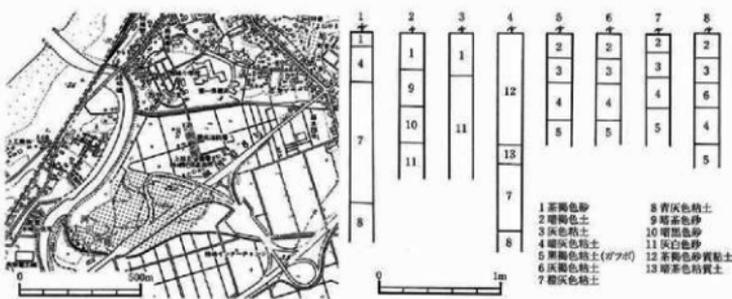
木崎山遺跡は昭和54・55年度に県教委が発掘調査を実施したが、報告書刊行までの間に、本遺跡に係る調査が柿崎町教育委員会によって2回行なわれている。遺跡の範囲や内容を考える上で参考になるので、調査の概要を簡単に紹介する。文中の土層色調については調査担当者が異なるため統一してある。

柿崎川河川改修に伴う調査（第5図1～4地点）

昭和63年度の確認調査結果を受けて106㎡を対象に平成2年に本調査を実施した（室岡1990）もので、調査対象地（柿崎町柿崎字釜谷内）は遺跡の南西端にあたる。基本層序は地山を含めて4層に分けられ、第1層：黒色砂（表土）、第2層：暗茶褐色砂（古代・中世遺物包含層）、第3層：暗灰黒色砂（弥生・古墳遺物包含層）、第4層：灰白色砂（地山）である。遺構としては土盛跡が認められ、中世の造成と考えられている。また、土塁の痕跡と思われる幅1m、高さ0.3m～0.7mの硬砂層が検出されている。遺物は縄文時代から中世のものが出土しているが、量的には極めて少ない。縄文土器は前期末葉の鍋屋町式、弥生土器では北陸系（小松式）、信州系（箱清水式）、東北系（天王山式）がみられる。奈良・平安時代のもものでは須恵器無台杯・有台杯・蓋・甕、土師器杯・甕・高杯が、また中世では珠洲焼播鉢・壺・甕、常滑焼などが出土している。その他、縄文時代の石獣や弥生時代の管玉未成品なども若干認められる。

団体営区画整備に伴う確認調査（第5図5～8地点）

平成3年に遺跡北側の水田および畑地（柿崎町柿崎字林腰）を確認調査したもので、調査結果から本調査は不要と判断されている。畑地の基本層序は5層に大別されるが、いずれも遺跡本体からの流れ込み砂と考えられ、遺物包含層は存在していない。遺物は奈良・平安時代の須恵器有台杯や土師器甍片が出土している。また、水田部では最下層でガツが層が検出されたことから、付近一帯が湿地帯であったことが判明している。遺物の出土も希薄であり、明確な包含層は存在していない。遺物は珠洲焼播鉢・甕、鉄滓などが出土している。



第5図 柿崎川河川改修・団体営区画整理事業に係る町教育委員会確認調査柱状図

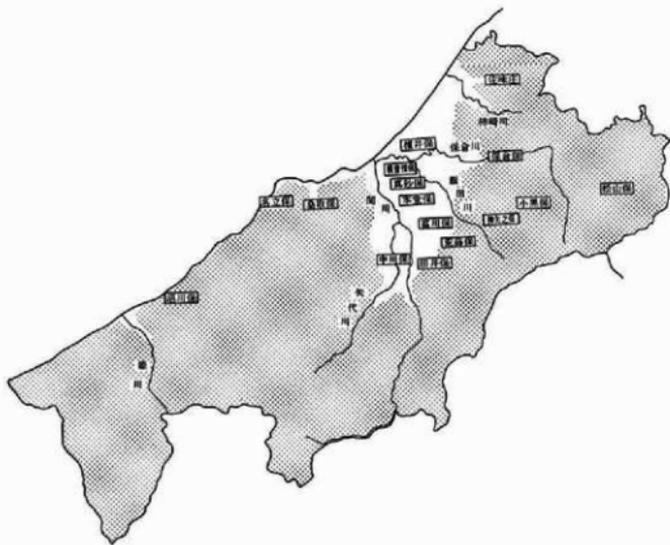
4 古代・中世の歴史的環境

本遺跡の所在している柿崎町は、律令時代にあつては頸城郡佐味郷に属していた。頸城郡の範囲は現在のの上越市を中心として中頸城郡・東頸城郡・西頸城郡を含む範囲と考えられ、『倭名類聚抄』によれば沼川・都宇・栗原・原本・板倉・高津・物部・五公・夷守・佐味の10郷が存在していたといわれる。それぞれの所在地は、式内社の所在や現在の地名などからおおむね以下の付近と推定されている。沼川郷は糸魚川市・能生町付近、都宇郷は上越市直江津付近、栗原郷は新井市栗原付近、板倉郷は板倉町付近、高津郷

は上越市・三和村付近、物部郷は清里村付近、五公郷は三和村付近、夷守郷は頸城村・三和村付近、佐味郷は柿崎町付近である。

佐味郷の範囲については古来から様々な説が存在し、中世の佐味庄と一致するか定かではない。『日本地理志料』は『越後野志』を引用し、「佐味郷廢、佐味莊存」とし以下、「其潟町驛、舊名厚潟、方言謂沼澤爲潟、即佐味潟也、後沼澤爲田云、按圖巨潟町、土底濱、直海濱、柿崎、鉢崎數十邑、其故區也、」と記している。吉田東伍の『大日本地名辞書』では現大潟町の大字厚潟および隈ヶ池の名称が佐味から転化したものとして、佐味駅を大潟町の中心集落である潟町に比定している。また、『訂正越後頸城郡誌編』には「佐味郷は米山麓にて柿崎・八崎・笠島等の辺を言ならんか。」と記している。いずれも、現在の大潟町・柿崎町に佐味郷があったという説である。その後、平野田三は『社会科研究紀要』第4集の「頸城の荘園と牧の研究」で、「佐味郷は大潟の潟東側周辺で、現在の柿崎町・吉川町・頸城村の一带である。」と述べている【平野1969】。

頸城郡に置かれた初期荘園としては、桜井庄（西大寺領）・津村庄（同）・石井庄（東大寺領）・吉田庄（同）・真沼庄（同）があった。西大寺領の桜井庄・津村庄は宝亀11（780）年の『西大寺資材流記帳』に見えるが、この両庄に関する史料は他にない。東大寺領石井庄については、大治5（1130）年の『東大寺諸荘文書并絵図目録』に「石井庄字吉田 一結庄解等十一通 一卷条理坪等四枚 天平勝宝五年四月九日 庄解状一通」と記されていることから、天平勝宝5（753）年までには成立していたことがわかる。しかし、永治2（1142）年の『越後国留守所帳』によれば、「府辺の要地」という理由で豊田庄と立て替えられている。これによって、頸城郡の初期荘園は完全に姿を消すことになる。吉田庄・真沼庄の成立時期



第6図 古代頸城郡の荘・係分布図

は定かでないが、長徳4(998)年の『東大寺領諸園庄家田地目録』には「並荒廃」となっている。

平安末期から中世において頸城郡に存在したといわれる荘園として、佐味庄・柿崎庄・関庄・梶庄・新井庄・岡田庄・笹倉庄・三善庄・直江庄・黒川庄・吉川庄・芦谷庄などがある。しかし、笹倉庄・三善庄・直江庄・黒川庄・吉川庄・芦谷庄については信頼できる史料が存在せず、関庄・梶庄・新井庄・岡田庄については存在そのものを窺わせる史料すらない。従って、石井庄が立て替えられたあと、頸城郡に存在した荘園は佐味庄だけとなる。これに対して、平安時代後半になると頸城郡には葦野保・田井保・富川保・横曾根保・飯取保・真砂保・本堂保・榎井保・保倉保・神矢之保・小黒保・中河保・名立保・沼川保などの国衙領が多く存在しているが、中には史料上検討を要するものもある。また、関川と飯田川に挟まれた地域に集中する傾向があり(第6図)、この地域一帯が国衙による支配を受けていた可能性が考えられる。

奈良・平安時代においては、都と地方を結ぶ交通路の整備も図られている。『延喜式』には越後の駅・伝馬として、「滄海8疋、鶴石・名立・水門・佐味・三嶋・多太・大家各5疋、伊神2疋、渡戸船2艘、伝馬頭城・古志郡各8疋」と記されている。佐味駅は佐味郷に通ずるとされ、滄海駅は青海町青海、鶴石駅は能生町鶴石、名立駅は名立町大町付近、水門駅は上越市直江津、佐味駅は『大日本地名辞書』では大潟町湯町、「柿崎町史」では柿崎町馬正面を比定地としている。佐味郷は頸城郡の中にあっても駅が置かれていたことから、古代交通上でも重要な位置を占めていたものと思われる。

佐味庄の史料上の初見は、『吾妻鏡』文治二年三月十二日の条に見える「鳥羽十一面堂領 預所大宮大納言入道家 佐味庄」である。鳥羽十一面堂は鳥羽上皇御領になるもので、佐味庄の成立を鳥羽院政期に想定することができる。預所の大宮大納言入道は、仁安3(1168)年に大納言となり養和2(1182)年5月に出家した藤原隆季であり、隆季は大宮あるいは四条と号していた。隆季は久安2(1146)年12月から久壽2(1155)年正月まで越後守になっており、院分受領として鳥羽院の十一面堂領預所を兼ねていたものと考えられる。佐味庄の所領関係については、これ以後延徳4(1492)年まで断続的に知ることができる。正応2(1289)年には燈油仏聖料田として西大寺四王院に施入されている。しかし、嘉元1(1303)年には平頼次領となっており、頼次は「佐味庄下條河井村内高寺田在家並かやは分限」を次女に譲っている。正中2(1325)年には平資家が、子の資宗に佐味庄柿崎宿の地頭職を譲っている。建武4(1337)年、足利尊氏は佐々木頼宗に恩賞として佐味庄三十二分の地頭職をあてがっている。しかるに貞治2(1363)年に足利義隆は上杉憲顕に対して、佐味庄赤沢・武直を西大寺雑掌に還付するよう命じ、翌年に憲顕はこれを嫡子である越後守護代憲将に伝えている。武直はその後宇佐中務丞らの横領するところとなり、応安7(1374)年に幕府は越後守護上杉憲榮にその停止を命じている。応永13(1406)年足利義満は鷲尾隆右の譲状によって、その子で權中納言隆教に佐味庄上下の地を安堵している。文安4(1447)年には隆教の孫隆遠が、さらに延徳4(1492)年には左少弁鷲尾伊佐助が論旨により安堵されている。庄域は史料でみられる限り、現柿崎町の柿崎・川井・下条・高寺、現吉川町の額法寺・赤沢・竹直などの地名が認められることから、柿崎川および支流の吉川・大出口川流域にかけて存在した比較的規模の大きい荘園であったと考えられる。

第三章 調査の概要

1 発掘調査

発掘調査は昭和54・55年度の2か年にわたって実施したが、地山が砂地であることから調査方法を検討する必要があった。特に、個々の遺構について検出から発掘写真撮影までの工程をいかに迅速に処理するかが大きな課題となった。

A 調査地の現況

木崎山遺跡は、日本海に並行する潟町砂丘の北端部に位置している。この砂丘は古砂丘をベースとし、新期砂丘の堆積によって形成されたもので、西側の海岸部では厚く、東側の内陸部では古砂丘が各所で露出し薄い。調査地は新砂丘に覆われた地点で、通称木崎山と呼称されている標高24mの砂丘裾部にあたっている。遺跡の東側は国道8号線によって開削され、特に国道東側は砂採取により標高約5mまで削平されている。西側ではD・E-6・7で国道のレベルまで削平され、他の地域はかなり大規模に平坦面が造成されていた。平坦面は砂丘の中腹から裾部にかけて存在し、裾に近づくほど平坦面の面積が広がっている。これに対して北側では中腹が広く、裾部で狭くなる傾向が認められた。平坦面間の段差は低い部分で1.5m、高い部分では3mであり、中世城館跡という曲輪群に類似しているが、空堀などは存在せず機能性が見出せないことから、後世にかなり改変を受けているものと推定された。南側の平坦面(C・D-6・7)では標高7~6mで、畑地として利用されていた。中央の砂丘頂部から中腹にかけては松林、北東部(C-I-1・2)は荒地となっていた。なお、平坦面については地元住民の聞き込みから、段差のある小区間の畑地は第二次世界大戦中および戦後の食糧増産に伴って、削平・開墾して造成したものであることが判明した。

B グリッドの設定 (図版1)

グリッドは30m方眼で、調査対象地全域をカバーできるように設定した。グリッドの方向は高速道のセンター杭K E 2-2の5+80と国道8号線抜幅工事に伴うNo12基準杭の東側幅杭を結んだ直線を基準(真北から東偏11°)とした。従来から城館跡といわれ土塁等が存在しているとの所見から、これらを切断する際に不都合が生じないこと、試掘調査で古代の竪穴住居跡が検出されていたが古代の場合は特に方位を考慮する必要がないこと、高速道インターチェンジで法線がループ状に異なることから方位に合わせた場合には調査が進めにくいと考えられたことなどによる。

グリッドは昭和54年の試掘調査の際に設定し、本調査でもそのまま使用した。30×30mを大グリッドとし、これをさらに3×3mに分割して小グリッドとした。大グリッドの呼称は西側から東側へアルファベットでA~L、北側から南側へは1~8と数字を付した。また、小グリッドは北西隅から東へ1~10、南東隅を100とし、これらを組み合わせ「1A1」「5B95」のように呼称(文中では「1・2-A・B」と表記することもある)することとした。なお、調査中の現場においては、便宜的に国道8号線を基準として柏崎市方向を「北」、上越市方向を「南」として呼称を統一した。

C 調査方法

調査工程については、基本的には通常の遺跡と同様であるが、砂丘地のため乾燥や降雨で遺構壁面が崩れやすいことが予想された。このため、遺構の面積や深度などに応じて調査方法を決定したうえで調査に臨んだ。

基本層序の確認 昭和54年の試掘段階で設定した小グリッドに沿って、任意の地点に幅3mのトレンチや3m四方の試掘坑を設定し、人力で掘り下げた。基本層序は表土・中世遺物包含層・間層・古代遺物包含層・地山であるが、古代と中世の遺物包含層が明確に区分できない地域が多い。また、中世の包含層中に黄褐色粘土や灰褐色粘土が堆積している部分が存在し、明らかに中世段階での搬入土と考えられた。

包含層の発掘 表土および間層の掘削は、基本的に重機を使用して行なった。しかし、表土から地山面まで浅い地域では、最初から人力により掘り下げた。排土は調査対象地内の決まった場所に集積し、順次調査区外へ搬出した。また、この時点から砂の乾燥や崩壊に対応するため、一回の調査範囲を大グリッド単位(30×30m)とした。これは次の工程である遺構検出・発掘までに遺構面を長期間放置しないための方策であり、実測・写真撮影まで一気に完了することを方針とした。

遺構の検出・調査 遺構の検出は砂地が乾燥して白くサラサラした状態では困難であり、迅速に行なう必要があるが、晴天時より適度な降雨が遺構識別に有力な一助となる。遺構番号は大グリッド単位で、種別毎に検出した順で付した。例えばB5区の2号住居跡は「B5住2」である。なお、遺構種別毎の調査方法は以下のとおりである。

竪穴住居 調査の手順は、①平面プランを検出し、中央で直交する十字ベルトを設定。②ベルトに沿って幅30cmのサブトレンチを設け、覆土堆積状況を確認。③カマド部分を除き、遺物を柱状に残しながら平面的に掘り下げ。④土層断面の実測・写真撮影の後にベルトを除去。⑤遺物の位置および平面実測・レベルング・写真撮影。⑥遺物取上げ、完掘後に写真撮影。⑦カマドの半載と断面実測、写真撮影。

掘立柱建物 遺構確認の段階で全体を把握できたものは少なく、大半はある程度の範囲を完掘後に柱間などから判断した。柱穴の発掘は平面的に徐々に掘り下げ柱痕を確認した後に、柱痕をかけるように半載した。調査は大グリッド単位で完結することを基本としたため、建物としての認識は周辺の複数グリッドが終了した段階で初めてできる状況であった。

土坑・井戸 ビット・土坑・井戸の区別については、直径20～50cm、深さ40～50cmをビット、直径51～150cm、深さ51～100cmを土坑、直径151cm以上、深さ101cm以上を井戸とした。これはあくまでも目安であり、枠を持つ井戸などは区分に当てはまらなくても井戸と分類した。覆土断面は基本的に半載して実測図を作成したが、井戸については湧水レベルに達するとかなりの水量があり、断面の崩壊など危険を伴う事例が多かった。このため、調査途中からは半載せずに上層から下層へ覆土状況のメモを探りながら掘り進めることにした。また、井戸枠は井戸周囲を広く重機で掘り下げた後に取り上げた。

実測・写真 遺構全測図は平板で1/30、竪穴住居の平・断面図は1/20、カマド断面図は1/10で作図した。また、土坑・井戸の平面図は全測図と同縮尺とし、土器出土詳細図や井戸の内部施設など特殊なものは1/10とした。なお、地山砂が乾燥すると浅い遺構の壁面は特に崩壊が著しく、竪穴住居など平面的に大形の遺構については、プランを確認した時点、周溝・柱穴を確認した時点、カマドを確認した時点など調査の各工程において平面図を追加作成し、最終的に1枚の図面に仕上げることにした。このため、

実測要員を多人数確保し、図化作業の迅速化を図った。写真撮影についても完掘後直ちに行なうことを基本としたが、複数的大グリッドに係る掘立柱建物などは関係するグリッドの調査が完了しなければ撮影できず、良好な状況の完掘写真が少ない原因となった。

D 調査経過

調査は昭和54年度に確認調査、昭和55年度に本調査を実施した。昭和54年度は当初、確認調査のみの予定であったが、公団との協議の結果、国道8号線に架かる橋の橋台部分を先行して本調査を実施することになった。

昭和54年度の調査（第7図）

当年度の本調査は、確認調査を含めて9月16日から12月12日まで実施した。9月17日には現地プレハブへ器材などを搬入し、その後、遺跡の現況写真撮影や補足測量を行ない調査開始に備えた。確認調査の開始は9月25日で、調査員3名、作業員25名の2班体制で木崎山北側および北東側の斜面から着手した。トレンチは平坦面で9m間隔、削平地や段差がある場合は小グリッドを連続させたトレンチを適宜設定する方法とした。

0 K・Lと1 K・Lの境界付近では、現地表面下20～30cmで地山の黄白色砂に達する。層序は上から暗褐色砂・黒褐色砂・黄白色砂で、黒褐色砂は遺物包含層と考えられるが非常に薄い（5cm弱）。この層は北・南・東側に向かうに従い厚く堆積している。土師器・須恵器・珠洲焼などの細片が出土しているが、大半は表土中からの出土で混在している。また、明確に遺構と考えられるものは検出されなかった。



第7図 年度別調査区画

2 Jでは地山が北西から南東に向かって傾斜し、包含層が上下2枚確認されている。上層の茶褐色砂層からは銭貨・鉄滓に混じって焼土が確認され、製鉄関連遺構の存在が想定された。下層の黒色砂層からは土師器の甕が潰れた状態で出土し、溝状遺構や大型土坑が検出されている。

1・2-F～Iのうち1・2-G・Hでは削平地が存在するため、トレンチ調査で土層状況や遺構分布を確認した。この結果、南北に走る溝が3条検出され、地山は1ラインの北側へ向かって急に傾斜している。Hラインの東側から国道までの間は地山面までの深さが浅く、遺物包含層は存在しなかった。相対的に出土遺物は少なく、銭貨が単発的に出土したのみであった。一部の削平地は中世の段階で造成されたもので、他は近・現代の所産と判断した。

1 B・Cでは地山までが浅く、古代・中世の土器が若干出土したにすぎないが、1 B89・1 C83では硬砂帯が検出され、東西に連なっているものと考えられた。レベルは西から東へ緩く傾いている。黒色褐色砂層は厚さ40cmであるが、遺物はほとんど出土しなかった。遺構は黒褐色砂を覆土とする井戸状遺構やピットが確認されたが、検出範囲は硬砂帯の南側に集中していた。地山は北側法線外の水田下に傾斜している。

5・6-D・Eおよび4・5-F・Gでは削平地があるため、これと直交するように直線や鋸形のトレンチを設定した。5・6-D・Eでは現地表面下80cmで地山面に達するが、5・6 Dの2～92ラインで約1.6mの段差がある。この段差は断面観察の結果から、中世に人為的に盛土されたものであると判断され、盛土下からは奈良・平安時代の竪穴住居跡や溝状遺構が検出されている。また、遺物包含層は黒褐色砂で、中世の珠洲焼や中世土師器などが出土する。遺構としては、粘土の入ったピットや人頭大の自然石などが検出されている。4 F・Gでは小規模な削平地が存在し、先端部には幅100cm弱、高さ40～50cmの土塁状遺構が巡っていた。断面観察により削り出しであることが判明しているが、この種の施設は海岸部砂丘の畑でよく見られるもので、飛砂と風から作物を守るために造られる。本遺構も中世以降の新しい時代のものと思われる。

5～7 Cでは現地表面下60cmで地山面に達する。しかし、7 C85・95ライン以南から徐々に地山は傾斜し、黒色砂は8 C5では暗褐色砂の下へ入り込んでいる。5 C～6 C51ラインまでは遺物包含層は1枚で、古代・中世の遺物が混在して出土するが、中世の遺物は比較的まとまって出土する傾向がある。遺構としては大型土坑・ピット・焼土などが確認された。5 C・Bの境界付近から地山は西側へ緩く傾斜し、5 B67では現地表面下3mと非常に深くなる。5 B66では現地表面下10cmで、黄褐色粘質土をつき固めたような遺構が検出された。検出された粘質土の方向はほぼ南北で、農道の方向に一致し法面をある程度意識して造られたものと思われる。6 C71ライン以南では遺構の集中度や遺物量も少ないことから、さらに試掘坑を中間に設定して確認した。結果的には遺構・遺物は少なかったが、7 C20・30では黒褐色砂を覆土とする土坑やピットが検出された。また、2 A～5 Aの東側に、砂丘の尾根を断ち切るように延長100mのトレンチを南北方向に設定した。この尾根は土塁とも考えられていたが、人為的な痕跡は認められなかった。

11月5日には確認調査を完了したが、調査の結果、0 K・L、1 K・Lおよび国道西側の橋台工事範囲については本調査不要と判断し、次年度の本調査必要面積は7,913m²となった。

11月6日から国道東側の橋台工事範囲(2 J)および1・2 H、2 Gの一部について本調査に着手した。2 Jでは砂丘の緩斜面で2枚の文化層が確認された。上層では小ピットや大型土坑が検出され、覆土中から中世の土器類が出土している。下層では黒色砂を覆土とする竪穴住居2基、溝状遺構3条や土坑が検出

されている。竪穴住居は出土遺物から古代のものと考えられ、うち1基は溝状遺構に切られている。いずれもカマドは確認されず、1号住居では焼土のみが検出されている。溝状遺構からは遺物が出土していないが、古代の文化層を掘り込んでいることから中世の所産と推定された。

1・2H、2Gの一部では、確認調査で検出された南北に走る3条の溝の他に、斜面に並行して延びる溝や土坑が検出された。3条の溝の中で14号溝の東側には、基底部幅約3m、高さ0.8mの土塁状の高まりが存在した。砂丘の緩斜面のあり方は人工的な削り出しによるものと判断され、途中で平坦面を造り出して北側へは急傾斜で、東側へは緩やかに傾斜している。平坦面では溝とわずかな土坑が検出された程度で、遺構分布の主体は傾斜面下部である。また、東側斜面では黒褐色砂中に準大の割石が検出され、配列などから橋などの柱に伴う根固め石の可能性が考えられた。遺物は砂丘裾部から主に出土しており、平坦面ではほとんど出土していない。

12月8日には2Jの調査が終了し、12日まで補足調査を実施して調査を完了した。なお、昭和54年度の確認および本調査面積は、実績で約4,220㎡であった。

昭和55年度の調査

当年度は、昨年度に引き続き、本調査を継続した。4月14日から9月30日までの約5か月半である。調査範囲を便宜的にA～E・O地区に分け、A・B地区→O・E地区→C地区→D地区の順で調査を進めた。A地区は木崎山の西側にあたり、遺構確認面は1面であった。遺構遺構、掘立柱建物、井戸等が確認された。B地区は上層、下層の2面が確認された。上層は中世で、土坑、溝、井戸があるが密ではない。下層では多くの遺構が確認されているが、古代と中世が混在する。竪穴住居3基は古代である。井戸も7基確認された。土坑・柱穴も多くあるが、この地区では掘立柱の建物は確認されなかった。

続いてO・E区の調査に着手した。遺構確認面は1面で、中世である。昨年度調査した地区で、縦堀状の溝が確認されている。今年度はその西側一部である。L字状の溝や掘立柱建物が確認された。E区とした所は、国道8号線に沿った地区で細長い。上下の2面が確認された。上面ではL字状の区画溝や土坑が多く確認された。特に54号土坑では地鎮に用いられたと考えられる鋼製の六器や花瓶が古瀬戸壺におさまった状態で発見された。下層でも多くの土坑や区画溝が確認された。区画溝の内側には、布摺りの総柱掘立柱建物が検出された。下層での確認であるが、区画溝の方位が上層の区画溝と一致するため、中世と判断される。竪穴住居も1基確認された。

つづいて、C区に着手したが、やはり上下の2面が確認された。上面は中世で、井戸、溝、ピット等が確認されたが、密ではない。下層は最も遺構が密集していた地区である。竪穴住居、掘立柱建物、井戸、溝が多く確認された。古代が中心と考えられるが、中世も認められる。

最後にD区の調査に着手した。当区は、後世の擾乱が大きく、確認は下層のみである。C区に比べると遺構密度は薄い、掘立柱建物、井戸等が確認された。調査は予定通り進行し、9月いっぱい調査を終了することができた。なお、全体の調査面積は、当初7,913㎡であったが、実質的には9,000㎡となった。

E 調査体制

【昭和54年度】9月17日～12月12日

総括	福島 寅嘉 (県教育庁文化行政課長 10月31日まで)
	南 義昌 (〃 11月1日から)
管理	関 和彦 (県教育庁文化行政課長補佐)
調査指導	金子 拓男 (〃 組織文化財係長)
調査担当	戸根与八郎 (〃 学芸員)
調査職員	稲岡 嘉彰 (〃 文化財主事)
	藤巻 正信 (〃 学芸員)
	佐藤 則之 (〃 学芸員)
	波田野至朗 (〃 学芸員)
	北村 亮 (〃 嘱託)
庶務	近藤 信夫 (〃 副参事庶務係長)
	獅子山 隆 (〃 主事)
	伊藤 和子 (〃 主事)

【昭和55年度】4月14日～9月30日

総括	南 義昌 (県教育庁文化行政課長)
管理	石山 欣弥 (県教育庁文化行政課長補佐)
調査指導	金子 拓男 (〃 組織文化財係長)
調査担当	戸根与八郎 (〃 学芸員)
調査職員	稲岡 嘉彰 (〃 文化財主事)
	波田野至朗 (〃 学芸員)
	高橋 保 (〃 学芸員)
	折井 敦 (〃 学芸員)
	北村 亮 (〃 学芸員)
	坂井 秀弥 (〃 嘱託)
	田辺 早苗 (〃 嘱託)
庶務	近藤 信夫 (〃 副参事庶務係長)
	獅子山 隆 (〃 主事)
	伊藤 和子 (〃 主事)

2 整理作業

A 方 法

遺構図面 現場で作成した遺構関係の実測図は、A1版の方眼紙で約160枚であった。実測図には大グリッド単位の平面図(1/30)、主要遺構平面図(1/20)、微細図(1/10)などがある。グリッドごとの

平面図と主要遺構平面図は、トレースを考慮してそれぞれ1/60、1/40の第2原図をコピーで作成した。

遺構全体分割図は1/200(18分割)、遺構全測図は1/600で作成し、全測図には確認調査トレンチ位置も合わせて表示した。また、個別遺構の仕上り縮尺は、掘立柱建物1/120、竪穴住居が1/80、カマドが1/60、井戸が1/30・1/60、土坑が1/40・1/60、土器出土状況微細図が1/15とし、竪穴住居の土層断面図は基本的に2本掲載した。土坑・井戸については、先述したとおり壁面の崩壊などで断面図が存在しないものもある。

遺物 出土遺物の大半は土器が占め、その中でも主体となるのは古代の土師器・須恵器である。次いで中世の珠洲焼を含む国産陶磁器と中国製陶磁器である。土器・陶磁器類については、現場で収納した袋単位で水洗・注記・分類を実施した。注記には土師器・土師質土器には墨汁、須恵器・珠洲焼・中国製青磁などには白色ポスターカラーを使用した。分類・接合作業は遺構出土を中心とし、図化用遺物の抽出もこれに準じた。

B 整理経過と体制

昭和55年に現地調査を終了したが、北陸自動車道や関越自動車道の供用に向けて調査すべき遺跡を多く抱えていたため、整理作業に着手できない状態が続いていた。昭和60年には関越自動車道、同63年には北陸自動車道が開通し、体制的に余裕が生じてきたため、平成2年度から2か年で整理を実施することになった。なお、図面・写真の基礎整理は現地調査中に、出土遺物の水洗・注記は調査終了後に他遺跡の整理の間を縫って平成元年度末までに終了している。

本格的な整理作業の開始は平成2年4月で、整理体制は、以下のとおりである。整理作業の工程は第8図に示したとおりであるが、遺物の時期や種類が多様であるため、平成3年12月から複数名の職員を投入して、原稿の執筆分担(例図)を行った。

【平成2・3年度】

総括	大嶋 圭己(県教育庁文化行政課長)
管理	吉倉 長幸(県教育庁文化行政課長補佐)
指導	本間 信昭(* 埋蔵文化財第2係長)
整理担当	戸根与八郎(* 主任)
作業員	文化行政課管和分室日々雇用職員

年度	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	備考
1979												4,220.5m ²
1980												9,000m ²
1990												分級・組合・実測
1991												製図・報告書作成

第8図 年度別作業工程

第IV章 遺 跡

1 概 要

遺跡が主に営まれた時期は、遺構や遺物の検出状況から奈良・平安時代と中世の2時期に大別される。この他には遺構の存在は明確ではないが、縄文・弥生時代の土器・石器、古墳時代の土器などが出土している。奈良・平安時代と中世の遺物は出土量の95%以上を占め、他の時期の遺物は散発的に出土したのみである。遺物包含層は古代から中世を中心に比較的良好に確認されたが、特に中世段階で地形改変が行なわれた際に土盛りした部分については、奈良・平安時代の包含層があまり改変を受けることなく残存している。以下に、奈良・平安時代と中世の概要を記す。

奈良・平安時代 中世と共に本遺跡の主体をなす時期で、遺構の分布は通称「木崎山」と呼ばれる砂丘の南東および南西緩斜面を中心に分布しており、南西部については8ラインに向かって少なくなる。

竪穴住居はすべて隅丸方形プランで一辺5～7mのものが多く、掘り込みは緩斜面に占地しているため傾斜下側が浅くなっている。カマドは南東隅や北東隅に設置されており、土師器の壺などを芯として粘土(砂混入)を貼り付けている。床面は砂地のままで粘土などを貼った様子はないが、いずれも堅く締まっている。床面隙間に周溝を伴うものは稀で、検出されても部分的である。遺物は覆土中に床面から浮いた状態で出土するが、カマド周辺に集中する傾向が認められた。

掘立柱建物は確実に古代と断定されるものはないが、6号建物は柱穴の径が大きく、他の建物とは深さも異なり、古代の可能性がある。井戸は古代と断定できるものは存在しない。

中 世 検出された遺構は調査対象地のほぼ全域に分布しているが、遺構種別により分布域が異なる傾向が認められる。砂丘の北側斜面から平坦部にかけて遺状遺構・溝が検出されたのに対し、南側斜面から平坦部では掘立柱建物・井戸・土坑が濃密に分布している。掘立柱建物の柱穴は、古代のものに比べて直径の小さいものが多く、柱穴内に礎石を伴うものや東柱を持つものなどもみられる。

また、井戸には素掘りのほかに板材を井戸側としたもの、石組みのものなどがみられる。板材を井戸側としたものは9基あり、中には丸木舟を切断して井戸側に転用したものも存在する。規模的には大きいものは直径8～9m、深さ3.5m前後であるが、直径2m、深さ1m弱の小型のものも認められる。複数の井戸埋土からは、イネ・ウリ・アサなどの植物種子や甲虫類の遺骸などが出土している。

土坑は平面形が円形・楕円形・長方形を呈しているものが多く、遺物を伴うものは全体の2割程度である。特筆されるものとして、仏具(花瓶・六器・飯食器)を納めた古瀬戸四耳壺と五結鈴を埋納した土坑があり、地鎮に関する遺構の可能性が考えられた。

2 層 序

層序は、地形が一様でないこと、後世の造成、攪乱等もあり一定しない。地区毎に概略を述べる。

B地区(第9図⑥、⑦図2) 北側が丘陵部分、南側が畑地部分である。4A区南側は丘陵裾部で畑の段切りが認められる。5A区は比較的平坦で、表土下に茶褐色、淡褐色砂があり、そこから中世の遺構が掘

り込まれている。その下の5層に黒褐色砂があり、これを覆土とする遺構が古代である。地山までの深さは約1mである。

C地区(第9図⑦、図版3)一丘陵南側東西方向の土層である。5B区を南北に走る道路(土塁)を境として東側が深くなり、鞍部となっている。道路の東側は比較的浅く地山まで1mで、表土下に暗茶褐色砂、暗褐色砂があり、その下層に黒色砂がある。道路西側は、複雑な堆積状況を示しており、整地等の結果と考えられる。表土下6、8層から掘り込んでいる11層(暗褐色砂)の遺構は中世である。地山までは深い所で3m近い。道路部分は、土塁状が高くなっている。基底幅約4.5m、高さは西側で2m近いが、東側では50cmとほとんど平坦である。上面幅は約2.3mとなる。構築は、西側から10、14層を押し付ける形で行われている。土塁下部には、古代の掘り込みがある。

D地区南側(第9図⑧、図版5)一南北の土層である。現況は平坦面が段状となっているが、土層断面からは、北側から土を押し出して斜面を平坦に整地した様子がわかる。特に5層の黒褐色砂と2層の暗褐色砂が互層に押し出しているのが特徴的である。

土塁状高まり(第9図⑩・⑪、図版5)一南北に延びる土塁状の高まりである。7D65(⑩)地点では、基底幅約5m、上幅2.5m、高さ東側で1m、西側で2mを測る。水平堆積で構築されている。6D94(⑪)地点では、基底幅7m、上幅4m、高さ2mを測る。⑩地点とは、規模にかなりの違いがある。現在道路として利用していることから、⑪地点では後世土塁を西側に押し出した可能性がある。

O地区(第9図⑬~⑮、図版6・7)一⑬地点は丘陵斜面に沿った東西の土層である。地山までの深さは比較的浅く、1m前後である。3条の縦壟状の溝が断面で確認される(11、14、15号溝)。溝が存在する地点には土塁状の高まりや段があるのは偶然であろうか。⑭・⑮(図版7)部分は南北土層である。⑭では、斜面を平坦に整地している様子がうかがえる。⑮は斜面下は平坦で人為的な表土の移動がわかる。



第9図 基本土層位置図

第V章 遺 構

本遺跡の主体となる時期は古代と中世であり、主な遺構は竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸、土坑、溝、土壇状高まり、道状遺構がある。時期の不明確なものもある。遺構種別毎に説明を加える。

1 竪穴住居

全て古代に属する。本遺跡における竪穴住居の分布は、国道8号線東側の2J区(1・2号住居)と木崎山南側の4・5A~D区(3~12号住居)の2地域で認められ、検出層位はすべて下層である。2J区は西側を除く3方向が調査区外のため、分布の広がりなど詳細は不明であるが、5A~D区では砂丘の傾斜変換点付近に沿うように東西に分布しており、山側調査区外の5C~E区にも存在すると予測される。

竪穴住居はいずれも砂丘の緩傾斜地に構築され、床面はほぼ水平で地山砂より若干堅くしまっているが、粘土などで貼床した状況は認められなかった。規模的には大型(長軸6.3~7.1m、床面積40m²以上)、中型(長軸5.2~6.0m、床面積23~34m²)、小型(長軸4.7m以下、床面積20m²以下)に分けられる。また、カマドは確認できた7基すべてが東壁に構築されている。

1号住居(図版8・12・28・123)

2J区で検出されたもので、調査区の中では一番東側に位置している。規模は東西7m、南北6.8mで、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は30cm前後で、南側の壁は地山の黄白色砂が傾斜しているため定かではない。周溝やカマドは検出されていない。柱穴は4基検出され、その規模は直径・深さともに50cm前後である。床面直上で焼土および炭化材が分布しているが、床面の状態を見る限り上屋の焼失によるものとは考えられない。床面に密着して土師器の壺(12~14)が出土している。

2号住居(図版8・12・28・123)

1号住居の南西約2.5mに位置し、西側の約半分は8号溝によって切られている。南側の壁は地山が傾斜していることから、明確には捉えられなかった。規模は掘り込みが判明する東壁から考えて一辺5.5m程度で、平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。壁高は20cm前後を測る。床面からは柱穴と思われるピットが2基検出され、規模は2基とも直径80cm前後であるが、南側のピットが深さ約60cmなのに対して北側は30cm程度で浅い。周溝やカマドは検出されていない。

3号住居(図版8・13・29・124)

4A区で検出されたもので、南側3.5mには4号住居が、南東7mには5号住居が存在する。規模は東西7.1m、南北6.2mで方形を呈するが、南北軸が短くコーナーも角張っている。壁高は北・東・西壁で40cm前後であるのに対して、南壁は10cm弱と低い。これは本住居が緩斜面に立地することに起因するもので、本来はほかの壁面と同様の高さを有していた可能性が高い。床面では柱穴と思われるピットが4基検出されているが、規模は長径45~70cm、深さ20~30cmで、その配置は住居の掘り込みに対してやや南へ偏っている。このほかに床面からは直径30cm前後のピットや長径100cmの楕円形土坑が検出されているが、住居に伴うものかは判然とし難い。また、南壁の中央部直下には幅22cm、延長3m、深さ5~10cmの溝状遺構が存在するが、壁際からやや離れていることなどから周溝の可能性は低い。カマドは検出され

なかった。覆土は自然埋没状況を示し、上層は暗褐色砂・茶褐色砂、中層は炭化物を多く含む黒褐色砂・黒色砂、下層は赤茶褐色砂である。遺物は床面に接しているものは少なく、大半が中層以上で出土している。土器の出土量は検出した竪穴住居の中では一番多く、器種にもバラエティーが認められる。遺物の中には底部外面に「郡」と墨書された須恵器有台杯(28)が存在し、本住居の性格を考える上で示唆的である。

4号住居 (図版8・13・30・125)

5A区の調査区西端に位置し、3号住居の南に隣接する。住居の西側一部は調査区外に延びている。規模は北および南壁長は不明であるが、東壁長は6.3mを測り、平面形は方形になるものと推測される。壁高は25cm前後を測る。壁面下には幅10cm、深さ6~12cmの周溝が巡り、南東コーナー付近にはカマドが設置されている。カマドは200×75cm、高さ35cmで、前面は赤褐色砂で堅く焼けているが、ほかは炭化物が混入した灰褐色および淡赤褐色砂で、芯材の土器は見られない。床面には直径15~40cm程度のピットが10基検出されたが、規則的な配置を示すものはない。遺物は床面に密着して出土したものではなく、大半は床面から15cmほど浮いた状態で出土している。土器はカマドの前面に集中する傾向が認められ、北東部には炭化物も集中する。覆土は自然埋没状況を示し、上層は暗黒褐色砂、中層は暗褐色砂および炭化物混入の黒褐色砂、下層は黒色砂である。

5号住居 (図版8・13・31・126)

5B区の北西隅、3・4号住居の東に隣接して検出されたものである。規模は東西5.2m、南北4.5mで、平面形は方形を呈する。壁高は北壁で30cm前後である。壁面下には幅10cm前後、深さ6cmの周溝が巡っているが、西壁側で途切れている。カマドは東壁中央北寄りに位置し、140×130cm、高さ34cmの規模である。カマドの芯はなく、上面から褐色粘質土、赤褐色砂、赤褐色+黄白色砂で、中位の赤褐色砂は堅く焼けている。床面には柱穴と思われるピットが4基認められ、いずれも直径40cm前後、深さ25cm前後を測る。また、床面の中央北西寄りには中世の34号井戸が切り合っている。遺物の出土はカマドの周囲に限られ、大半が床面から5cm程度浮いた状態で中層から出土している。覆土は自然埋没状況を示し、上層は暗褐色砂、中層は黒褐色砂、下層は淡褐色砂である。土器の出土量は少ないが、底部外面に「佐味」と墨書された須恵器有台杯(86)が出土しており、注目される。

6号住居 (図版8・14・31・127)

5B区の中央南東寄りに位置し、東西4.7m、南北4.3m、平面形は方形を呈する。北西コーナーがやや角張っているのに対し、南東および南西コーナーは丸みを帯びている。南壁は新しい時期のピット3基によって切られている。壁高は非常に浅く、10~15cmを測るにすぎない。カマドは北東コーナーやや南寄りの東壁に位置し、90×150cm、高さ32cmを測る。芯には土器の長壺が使用され、上層は茶褐色砂質土、下層は赤褐色粘質土で赤く焼けている。床面からは柱穴と思われるピットが3基検出され、直径40~60cm、深さ10~15cmを測る。遺物は床面から若干浮いた状態で出土している。覆土は自然埋没状況を示しているが、新しい時期のピット等により攪乱を受けている部分が多い。基本的には黒褐色砂と炭化物を含む暗褐色砂の2層からなり、一部に暗褐色砂層が介在している。

7号住居 (図版8・13・32・127・128)

6号住居の北側約4.5mに隣接して検出されたもので、西壁は後世の攪乱により判然としなが、南北6m、東西5.6mの規模を有し、平面形は方形を呈するものと考えられる。確認された壁高は、北および東壁で36cm前後と高く、南壁は10cm前後と低い。床面からは柱穴と思われるピットが3基確認された

が、径や深さなど規模が一様ではなく確証はない。周溝は検出されていない。カマドは北東コーナーに位置し、160×154cm、高さ20cmを測る。土師器壺など多くの土器が芯材として使用されており、カマド前面と底面は堅く焼けていた。遺物はカマドの周辺で比較的多く、床面からは若干浮いた状態で出土するのが大半である。出土遺物では底部外面に「品瀬部宮麻呂」と人名が墨書された須恵器有台杯(115)が含まれ、遺跡の性格を考える上で注目される。覆土は自然埋没状況を呈する。

8号住居(図版8・13・32・128)

5B・C区の境界は中央に位置し、7号住居に北東隅を切られて検出されたものである。壁の立ち上りは攪乱などにより北東コーナー部分しか確認できないが、壁高は22cm前後と思われる、一辺6.5m程度で平面形は方形を呈するものであろう。明確な柱穴は検出されず、床面には新しい時代の556号土坑をはじめとする大小の土坑が存在する。周溝は検出されていない。カマドの痕跡は明確ではないが、東壁に構築されていたものと思われる。

9号住居(図版8・15・33・128)

8号住居の西側に接して検出されたもので、北壁の一部でかろうじて立ち上がりが確認できた。一辺5.3m程度の方形を呈するプランを有するものと思われるが、詳細は不明である。カマドは東壁の中央部に位置し、150×90cm、高さ30cmを測り、芯材として土師器壺が使用されていた。周溝および柱穴は検出されていない。床面の中央北寄り、本住居より新しいと思われる方形土坑が検出されている。

10号住居(図版8・15・33・129)

5C区の中央南東より検出されたもので、プラン中央部を東西に確認トレンチで切られて南半が不明確であるが、一辺4.5m程度の方形プランを呈するものと思われる。壁高が確認できる北側では、35cm前後の深さを測る。柱穴と思われるピットは床面の北半で3基検出されているが、径35cm、深さ10cm前後と浅い。周溝は検出されていない。カマドは東壁の北東コーナー寄りに位置するが、攪乱により壊されている部分が多い。覆土は確認できる範囲では、自然埋没状況を示している。

11号住居(図版8・15・34・129)

10号住居の西側に隣接して検出されたもので、覆土断面観察で確認された範囲では、一辺4.2m程度の方形プランを有する小型の住居と思われる。床面からは径25～80cmのピットが多数検出されたが、柱穴の特定は困難である。壁高は18cm前後と思われるが、周溝およびカマドは確認されていない。覆土は自然埋没状況を呈している。遺物は南東コーナー付近の5層中で、床面から浮いた状態で比較的多く出土している。6・7・12号住居などでは、カマド周辺から遺物が比較的多く出土していることから、南東コーナー付近にカマドが構築されていた可能性も考えられる。

12号住居(図版8・15・34・130)

5D区の南半中央で検出されたもので、一辺6.5m前後を測る。西側は地山の傾斜のため掘り込みを確認できなかったが、平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。壁高は北壁で50cm前後と高く、壁際の周溝は検出されなかった。床面には径75～90cm、深さ50cm前後の柱穴と思われるピットが5基確認されているが、南西隅の柱穴は2基が切り合っており、本来は4本柱の上屋構造と考えられる。カマドは東壁の中央北寄りに構築されており、110×100cm、高さ30cmを測る。覆土は自然埋没状況を呈するが、西半では後世の攪乱を受けている。遺物はカマド周辺の覆土中・上層で、床面から浮いた状態で多量に出土している。

2 掘立柱建物

発掘調査時に確認したものと整理作業時に図上で認定したものを合わせて14基であるが、柱穴と思われる小ピットが多く検出されており、ほかにもかなりの掘立柱建物が存在していたものと考えられる。特に6C区の6号掘立柱建物周辺には、直径・深さともに1mを超える柱穴が多く確認されており、大型建物の存在した可能性が高い。掘立柱建物は、木崎山の北側に当たる1B区・1F区と南側の5・6C区、4F・G区で確認されている。規模や柱穴の配置は様々であるが、主軸方向は地形の傾斜に規制される関係で、おおむね南北および東西方向のものが多く、所屬時期は柱穴内からの遺物出土が少ないため明確ではないが、規模や形態および周囲の出土遺物の時期などからその可能性を考えた。

1号掘立柱建物 (図版8・9・35・118)

1B区の南西隅で検出されたもので、東西に延びる道状遺構とはほぼ直交する桁行2間(1.8m)、梁間1間(1.6m)の東西棟である。桁行の柱間寸法は0.8~1.0m、柱穴は平面形が円もしくは楕円形を呈し、径30~50cm、深さ15~25cmであるが、規模は極めて小型で通常の建物とは考えにくい。道状遺構と関連する何らかの施設とも考えられるが、詳細は不明である。

2号掘立柱建物 (図版8・9・35・118)

調査区外南に延びる梁間2間(3.0m)の南北棟で、桁行は1間分が確認された。柱間寸法は1.4m・1.6mで、柱穴は平面形が円形を呈し、径30~35cm、深さ25~30cmと比較的揃っている。

3号掘立柱建物 (図版8・10・35)

1Fの調査区外北に延びる梁間2間(3.9m)の南北棟で、桁行は1間分が確認された。柱間寸法は桁行が1.9m・2.0m、梁間が1.9m・2.1mで、柱穴は平面形が楕円形を呈し、径40~55cm、深さ25~58cmである。

4号掘立柱建物 (図版8・15・35)

9号壁穴住居の南に隣接して検出された桁行3間(6.7m)、梁間2間(4.4m)の東西棟で、北西隅の柱穴は27号井戸が切り合っているため確認できなかった。柱穴は平面形が円もしくは楕円形を呈し、径50~70cm、深さ25~46cmで、柱間は2.1~2.3mと比較的揃っている。

5号掘立柱建物 (図版8・15・35)

4号掘立柱建物の東7mで検出された桁行3間(5.9m)、梁間1間(2.9m)の東西棟で、身舎の北側に廂をもつ。身舎南西隅の柱穴は確認できなかった。柱間は桁行で1.7~2.1mとやや不揃いで、廂の出は1.6mである。柱穴の平面形は円もしくは楕円形を呈し、径50~75cm、深さ13~44cmであり、廂の柱穴もほぼ同規模である。

6号掘立柱建物 (図版8・14・35・132)

6C区の北西隅で検出された桁行4間(7.8m)、梁間1間(5.6m)の東西棟である。桁行の柱間寸法は1.7~2.4mで、柱穴の規模は径95~125cm、深さ44~107cmと周囲の掘立柱建物に比べて極端に大きく、平面形も隅丸方形を呈するものが多い。北桁行の3m北に同規模の柱穴が並んで検出されており、本遺構が大きくなる可能性も考えられるが、柱通りが極めて悪いため、除外して考えた。

7号掘立柱建物 (図版8・15・35・132)

6号掘立柱建物の約7m東に位置する桁行4間(7.3m)、梁間2間(4.4m)の南北棟である。西半部分

で8号井戸や他の遺構との重複が激しく、4本の柱穴を確認できなかった。柱間は桁行が1.5~2.1m、梁間が2.1~2.3mと不揃いである。柱穴の平面形は円もしくは楕円形と思われ、径45~70cm、深さ38~79cmである。

8号独立柱建物 (図版8・15・36)

7号独立柱建物の東に隣接して検出された桁行3間(5.7m)、梁間2間(5.0m)の東西棟である。柱間は桁行が1.7~2.4m、梁間が2.5~2.6mである。柱穴は梁間側が径85~120cmであるのに対して、桁行側が径50~70cmと小さい。

9号独立柱建物 (図版8・16・36・132)

6C区の南西寄りで検出された桁行5間(10.1m)、梁間3間(5.4m)の東西棟である。本遺跡唯一の礎石建物であるが、便宜的に掘立柱建物とした。面積は、検出された掘立柱建物の中で最大規模である。柱間は1.6~2.2mと不揃いで、北桁行と東梁間で礎石の多くが失われている。礎石は径30cm前後の扁平楕円形を用いており、西梁間の3ヶ所は浅い掘り込みの中に掘えられている。

10号独立柱建物 (図版8・16・35)

6D区南西隅で検出された桁行3間(5.0m)、梁間2間(3.1m)の東西棟である。柱間は1.4~1.9mで、柱穴の径は40~55cm、深さ18~36cmである。本遺構の南側には約5m離れて21号溝が南から弧を描いて接しており、溝底に柱穴列が本遺構に南桁行に平行して検出されている。構もしくは扉とも考えられるが、詳細は不明である。

11号独立柱建物 (図版8・17・36)

7D区のほぼ中央で検出された東西棟で、東側は調査区外に延びているものと思われ、桁行間数は不明である。梁間は2間(5.5m)である。桁行柱間は2.3mと揃っているが、梁間は中間の柱穴がやや北に偏っている。柱穴の平面形は円形を呈し、径60~95cm、深さ31~57cmである。

12号独立柱建物 (図版8・19・36・131)

4F区の南端中央で検出された桁行3間(7.3m)、梁間3間(4.6m)の総柱建物である。南側は一部後世の削平を受けているが、西から南にかけて19号溝が軸方向を合わせて直角に巡っている。梁間方向はいわゆる布掘りで、溝の間隔は2.3~2.7mを測る。溝底部に径150cm前後、深さ30~50cmの柱穴を有し、柱間は1.4~1.6mである。それぞれの溝を覆うように黄色粘土が貼られており、よくしまっている。

13号独立柱建物 (図版8・19・36)

12号独立柱建物の東に隣接して検出されたもので、南側は国道8号開削時に削平されているため詳細は不明である。桁行・梁間ともに2間以上の総柱建物になるものと思われ、黄色粘土が貼られている柱穴が多いが、北東隅は粘土の下で柱穴は検出できなかった。柱間は梁間が2.1~2.3m、桁行が3.4mである。柱穴は平面形が楕円形を呈するものが大半で、径45~80cm、深さ20~40cmである。

14号独立柱建物 (図版8・20・36・131)

13号独立柱建物の北東に隣接して検出された総柱建物で、南側は国道8号開削時に削平されている。桁行3間(6.2m)、梁間3間(4.9m)と思われ、柱間は桁行で2.0~2.3m、梁間で1.6~1.7mである。柱穴は本遺跡の中では比較的大きなもので、平面形は円もしくは楕円形を呈し、径90~120cm、深さ35~46cmを測る。12・13号独立柱建物と同様に大半の柱穴は黄色粘土で覆われているが、貼り粘土下部で柱穴が検出できなかったものもある。

3 井 戸

中・下層で検出されたものを合わせて34基の井戸が確認されたが、31～33号井戸以外はすべて下層で検出されている。下層での分布状況を見ると、木崎山北側の1B区、南側中央の5・6-B・C区、調査区南端7D・8C区の大きく3地区にまとまる傾向がある。中層では5C区を中心に、3基が検出されたにすぎない。

形態的には素掘りのものが大半であるが、井戸側をもつものでは木製の8基と石組みのもの1基が認められる。素掘りのものは規模や形状などから井戸と判断したが、土坑としたものの中にも井戸が含まれる可能性もある。調査中の地山砂崩壊が著しく、掘り込みは本来の規模・形状を残していないものが多い。出土遺物が少なく、明確な所属時期を特定できるものは多くない。以下、主要な井戸を概観する。

1号井戸 (図版17・37・134)

調査区南端の8C区で検出されたもので、周囲では4基の井戸が集中している。長径2.6m、深さ1.2mを測るが、本来はさらに深かったものと思われる。壁面は地山砂の崩壊で、かなり大きくなっている。底面の西寄りに一辺約70cmの隅柱をもつ方形縦板組横棧留めの井戸側を設置し、下部に水溜施設として径60cmの曲物を伴う。出土遺物は須恵器壺・土師器甕・珠洲焼片が少数みられる。中世である。

2号井戸 (図版17・38・134)

7D区で検出された長径8.6mの大型井戸で、深さは3.4mを測る。壁面は地山砂の崩壊により、かなり大きくなっている。底面中央西寄りに一辺1.7m、深さ35cmの隅九方形の穴を掘り込み、一辺110cmの隅柱をもつ方形縦板組横棧留めの井戸側を設置している。須恵器、土師器、珠洲焼、中世土師器が出土している。中世である。

3号井戸 (図版17・37・135)

8C区北西隅で検出されたもので、長径2.5mの不整楕円形を呈する。確認面から底面までの深さは約0.6mと浅い。一辺90cmの方形縦板井籠組みの井戸側が検出され、下部には径50cm、深さ25cmの掘り込みに径44cmの曲物を設置している。珠洲焼、土師質皿が出土している。中世である。

4号井戸 (図版17・39・135)

1号井戸の南に接して検出されたもので、平面形は長径2.9mの不整楕円形を呈するが、北西の突出部は別遺構が重複しているものと思われる。確認面からの深さは約1.0mを測り、底面の中央北東寄りに一辺65cmの方形縦板組横棧留めの井戸側を設置し、下部に水溜施設として径48cmの曲物を伴っている。管玉、棒材が出土している。井戸側のつくりから、中世と考えられる。

5号井戸 (図版17・39・136)

2号井戸の南1.5mに隣接して検出されたもので、平面形は長径3.8mの楕円形を呈する。確認面からの深さは1.9mを測り、西側の壁面中にテラスを有する。井戸側は検出されていないが、底面中央から一辺63cm、深さ35cmの隅九方形の掘り込みが検出されていることから、何らかの施設が存在した可能性が考えられる。須恵器、土師器、土師質皿が出土している。中世であろう。

6号井戸 (図版17・39・136)

本遺跡唯一の石組み井戸で、調査区(8C区)の最南端で検出された。石組み下部で掘り込みが確認できなかったことから、井戸の基底部と思われる。石組みは川原石の割石を中心にして円形に組まれており、

中には五輪塔地輪（図版100-22）も含まれている。中世である。

7号井戸（図版13・37・136・137）

5B区の中央南東寄りで見出された井戸で、6号住居の西に接している。平面形は長径4.3mの楕円形で、確認面からの深さは2.3mを測る。壁面は比較的緩く立ち上がり、南西側ではテラスを有する。底面の南東寄りには、一辺80cmの方形縦板組み横棧留めの井戸側を設置している。

8号井戸（図版14・40・137）

6C区中央北寄りで見出された長径8.2mの大型井戸であるが、地山砂の崩壊が著しく、当初の平面形や規模は不明である。確認面からの深さは2.4mで、底面に一辺約1.0mの丸木舟部材を転用した縦板組みの井戸側が設置されている。中世であろう。

9・10号井戸（図版13・41・138）

5A区の調査区境で見出された井戸で、2基が切り合っている。西側は調査区外に伸びているため全容は不明であるが、長径7.0mの楕円形を呈するものと思われる。覆土堆積状況を見ると、10号井戸が人為的に埋め戻された後に9号井戸が構築されたことが分かる。9号井戸は確認面から深さ1.6mを測り、底面に一辺1.1mの方形縦板組み横棧留めの井戸側を設置する。縦板は最大で5重に組まれており、横棧の位置から考えると内法は1.0m前後であろう。10号井戸は確認面からの深さ1.7mを測り、底面北側に一辺80cmの方形縦板組み横棧留め井戸側が設置されている。瀬戸・美濃焼灰軸皿が出土していることから、9、10号ともに中世と考えられる。

18号井戸（図版13・39）

5B区の中央西寄りで見出された素掘りの井戸で、平面形は長軸3.6mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは1.4mで、底面は平坦である。瀬戸・美濃焼皿が出土していることから、中世であろう。

19号井戸（図版13・42）

18号井戸の北西に近接して見出された素掘りの井戸で、平面形は長径4.1mの不整楕円形を呈し、確認面からの深さは2.0mを測る。壁面は崩壊により明確ではないが、東側に幅広のテラスを有する。須恵器が出土している。

20号井戸（図版14・42）

5B区南側の調査区境で見出された素掘り小型の井戸で、平面形は径1.3mの円形を呈する。壁面はほぼ垂直に立ち上がって円筒状になり、確認面からの深さは2.0mを測る。

23号井戸（図版14・42・138）

6B区北西隅で見出されたもので、平面形は長径4.2mの不整形を呈する。確認面からの深さは2.3mを測り、底面はほぼ中央に一辺80cm、深さ25cmの掘り込みを有する。本来は井戸側が設置されていた可能性が考えられる。また、井戸部から北西に向かって順次浅くなる幅1.1mの溝状遺構が見出されており、井戸への進入路の可能性も考えられるが、詳細は不明である。須恵器、珠洲焼、中世土師器が出土している。中世である。

32号井戸（図版24・43）

5C区の南西隅で見出された素掘りの井戸で、平面形は径2.1mの円形を呈する。確認面からの深さは2.1mを測り、断面形はバケツ状である。須恵器、土師器、中世土師器が出土している。中世である。

33号井戸（図版24・43）

32号井戸の東約6mで見出された素掘りの井戸で、平面形は長径4.0mの不整楕円形を呈する。壁面西

側に飛び出しがあるが、別遺構が切り合っている可能性も考えられる。確認面からの深さは1.0mで、底面中央に一辺1.1m、深さ1.2mの隅丸方形の掘り込みを有する。須恵器、土師器、中世土師器が出土している。中世である。

34号井戸 (図版13・43)

5 B区の北西隅にある5号住居と重複して検出された素掘りの井戸で、平面形は長径1.8mの楕円形を呈する。確認面からの深さは1.9mで、覆土は自然堆積であることを示す。5号住居の観察から、本遺構が埋没した後に5号住居が構築されたことが分かる。須恵器、珠洲焼が出土している。

4 土 坑

上～下層をあわせて土坑と判断したものは666基検出されているが、遺物の出土などから明確な所属時期や性格を把握できるものは少ない。分布状況は全体の遺構分布範囲に合致して調査区のほぼ全域で検出されており、規模や形態のバラエティとともに特徴的な遺構も存在する。個別図を掲載した土坑の概要は観察表を参照願ひ、ここでは特徴的な遺物の出土状態を示すものを中心に概観する。

54号土坑 (図版25・45・140)

5 E区は中央の調査区境で検出された不整楕円形土坑で、北側は調査区外へ延びている。確認面は中層である。短径96cm、深さ63cmを測り、底面の南隅から青銅製仏具一式を納めた古瀬戸四耳壺が出土した。また、四耳壺の南で底面から約30cm浮いた状態で青銅製五銚鈴とその舌が出土しており、地鎮に関する仏具を一括埋納した遺構と考えられる。

519号土坑 (図版14・46・141)

6 B区の中央東寄り検出された径2.6m、深さ1.5mの円形大型土坑で、断面形は楕円状を呈する。確認面は下層である。覆土上半から古代の土師器・須恵器を中心とした遺物が多量に出土した。土坑がある程度埋没した時点で、土師器等を一括廃棄したものであろう。上層部で中世の遺物も若干出土しているが、時期的には古代の所産と考えられる。

その他の土坑 (図版139・141)

個別図としては図示しなかったが、6 D-32区の553号土坑や7 C-9区の572号土坑からは、中世土師器皿が一括出土している。また、遺構としては認識しなかったが、木崎山北側の2 G-20区や2 H-11区では中世土師器皿が重なった状態で出土したほか、5 B-73区では朝鮮製陶器皿を重ねて青磁碗を被せた状態で出土しており、極めて一括性の高い遺物として重要な事例である。

5 溝

溝は各層合わせて31条確認されている。多くは区画溝であるが、竪堀と考えられるものもある。

1・2・18号溝 (図版21・25)

5・6 D区にあり、南北よりやや東偏する方位の溝である。幅1.5～2mで、深さ0.5m前後と浅い。2号溝では、中世土師器皿が出土している。

3・4号溝 (図版21・26)

5・6 E・F区にあるL字状の溝である。南北の角度はやや西に傾く。溝幅1.1m、深さ20～30cmで

ある。区画溝と考えられ、区画内に建物等が想定されるが、調査では確認できていない。

5・6号溝 (図版21・23)

5B・C区に南北に並行して走る溝である。幅1.1m、深さ30～60cmを測る。溝と溝との間隔は13mである。2つの溝に挟まれて多数のピットがあり、建物の存在が予想される。

8・9・10号溝 (図版8・12)

2J区に位置する。南北に3本が密着して走る。溝幅1.8m前後、深さは8・9号が60～70cmと比較的深いが、10号は30cmと浅い。方位はやや西に傾く。2号堅穴住居跡を切っている。

11・14・15号溝 (図版8・11・119)

2G区(O地区)に位置する。木崎山中央部丘陵尾根を挟んで、北側斜面に位置する。斜面に直交するように3本の溝が約13mの間隔で縦横状に並ぶ。いずれも幅2m前後、深さ50～80cm前後である。11号溝からは青磁、14号溝からは瓦器が出土している。

19号溝 (図版8・19)

4・5F区に位置するL字状の溝。幅1.6m、深さ54cm。方位は西に7°偏る。溝の内側には方位を同じくする3×3間の総柱建物(12号)がある。

21号溝 (図版8・16・17)

7C・D区に位置する弧状の溝である。南側及び東側は確認されていない。幅約0.8m、深さ25cmと浅い。

6 土塁状高まり (第9図㉑・㉒・㉓、図版3・5・133)

5～7B区に南北に延びる道及び5～7D区に南北に延びる高まりである。この高まりとはほぼ同一方向または直交する溝には、3号溝、4号溝、8号溝、9号溝、12号溝、13号溝、17号溝、19号溝がある。

D区—南北に延びる。7D65(㉑)地点では、基底幅約5m、上幅2.5m、高さ東側で1m、西側で2mを測る。水平堆積で構築されている。6D94(㉒)地点では、基底幅7m、上幅4m、高さ2mを測る。㉑地点とは、規模にかなりの違いがある。現在道路として利用していることから、㉒地点では後世土塁を西側に押し出した可能性がある。現存する延長は約25mである。

B区—道路部分である(㉓)。基底幅約4.5m、高さは西側で2m近いが、東側では50cmとほとんど平坦である。上面幅は約2.3mとなる。構築は、西側から10、14層を押し付ける形で行われている(図版3)。土塁下部には、古代の掘り込みがある。現存する延長は、約20mである。

7 道状遺構 (図版8・9・117・118)

1A～C区で確認された。幅約2～2.5mで、山裾に沿った東西方向に走る。まわりに比べて堅く締まっており、土層断面から粘土混入土(10、16、20、22層)及び砂層が互層に入っていることがわかる。版築工法を用いている。直交するように1号建物がほぼ道幅規模で存在するが関連性はつかめない。少なくとも建物が道より古いことはない。

第Ⅵ章 遺物

出土遺物は、古代・中世の土器・陶磁器・土製品・石製品・金属製品・木製品を中心に縄文時代の土器・石器や弥生～古墳時代の土器・玉類、近世陶磁器など平箱（縦60×横38×深10cm）で約440箱（木製品67箱、金属製品24箱）を数える。遺物の出土状況は、古代の竪穴住居や一部の土坑で比較的まとまっているほかは、大半が包含層からの出土である。本報告では遺構からの出土遺物を中心に概観するが、遺構出土品に認められない器種や遺存度の高いものについては、包含層出土でも可能な限り掲載することとした。

なお、本遺跡は戦国時代の榊崎氏居城跡との伝承が残り、中世末から近世初頭の出土遺物が期待されたが、16世紀末から17世紀初頭の陶磁器（初期唐津の胎土目皿など）がわずかに見られる程度で、明確な当該期の遺構も認められないことから図示はしていない。

1 古代の土器

竪穴住居及び一部の土坑・井戸から一括遺物が出土しているが、大半は包含層からの出土である。一部の竪穴住居出土遺物に古墳時代後期から終末の特徴を有する土器が見られるが、同一住居内から古代（7世紀末～8世紀前半）の土器が出土していることなどから、便宜的に6世紀後半以降も含めて古代として扱う。

なお、竪穴住居出土に含めた土器の中には、住居範囲内と想定される確認面以上の包含層出土も含めているため、すべてが住居に伴う一括性の高いものとは限らない。このため、床面直上やカマド付近出土遺物については、実測図版の遺物番号にアンダーラインを付して区別した。また、整理作業中の不手際から実測図のない土器が写真図版に掲載されているが、実測図遺物番号の末尾に続けて番号を付し、観察表にも記載した。

以下、種別及び器種分類の概要を説明した後、遺構出土・包含層出土の順に記述する。

A 器種分類

器種分類に当たっては形態（径高指数）・製作技法による分類を基本とし、同一器種内で細分の必要がある場合は、各器種ごとに法量などで細分類した。各類の呼称は、アルファベットやローマ数字を適宜使用し、複数の要素を含む場合は「A I b類」のように表記した。また、全体の器形や法量が判明しないものでも、一部の要素で分類したものもある。このため、各種別・器種ごとで分類基準は不統一であることを了解願いたい。

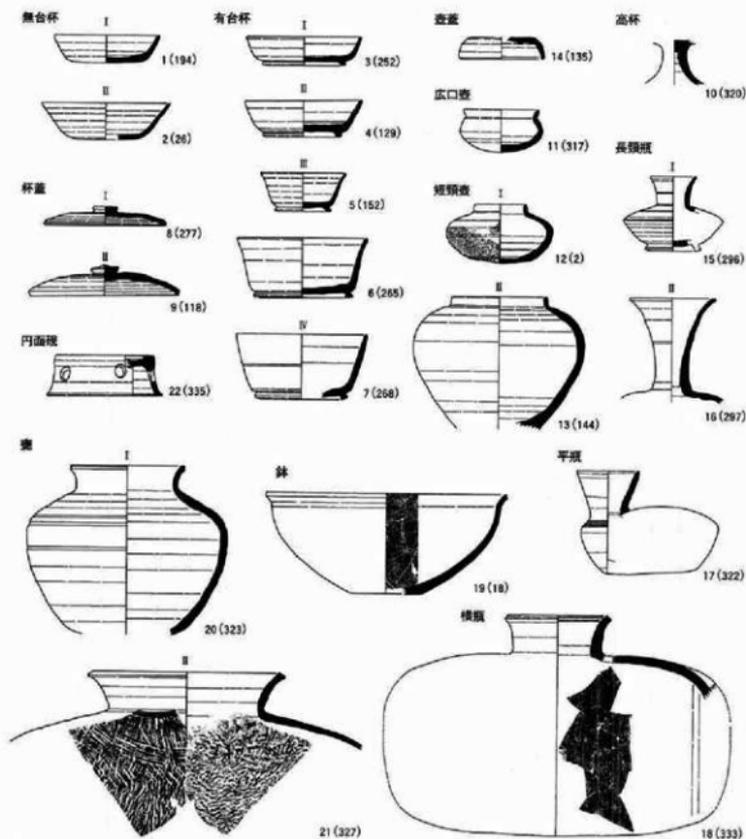
須恵器（第10図）

食膳具の無台杯・有台杯・高杯、貯蔵具の壺・瓶類・鉢・甕が大半を占める。その他、円面視が2点認められる。

無台杯（1・2）杯のうち、高台を持たないもの。分類は法量を基本とし、径高指数29未満の浅身のもの（I類）と29以上の深身のもの（II類）に分けた。さらにそれぞれ口径により10～14cm未満（a類）と14～16cm（b類）に細分したが、IとIIの境界は必ずしも明確ではない。なお、底面が丸みを帯びる器

形は、無台杯Ⅱ類に特徴的なものである。底部切り離しは確認できるものすべてが回転ヘラ切りで、切り離し後にナデ調整を施すものが多い。胎土は大きく微細砂粒を含む精良なものと、長石・石英をはじめ比較的大粒の砂粒を含む粗いものに二分される。焼成は良好（堅緻～普通）が大半であるが、灰白色や淡黄色を呈し軟質なもの（生焼け）も若干含まれ、有台杯よりその比率は多い。

有台杯（3～7）杯のうち、高台を持つもの。食膳具の主体を成すもので、食膳具の中で個体数は最も多い。分類は分量を基本とし、径高指数27未満の浅身のもの（Ⅰ類）、27以上～35未満の深身のもの（Ⅱ類）、35以上の特深身のもの（Ⅲ類）に分けた。さらに口径により12cm未満（a類）、12cm以上15cm未満（b類）、15cm以上（c類）に細分した。このほか、体部外面に1～数条の沈線を施らす金属器模倣と考



第10図 須恵器の器種分類

えられるもの(有台杯Ⅳ)もわずかに認められる。浅身のⅠ類には、小型のa類は存在しない。また、特深身のⅡ類には、中型(b)類が極めて少なく小型(a類)と大型(c類)に偏る。高台は総じて比較的低く、接地面は水平なものと同端接地のものがいずれにも認められる。底部切り離しは無台杯と同様に回転ヘラ切りで、大半がナデ調整を施すが、板目匠痕を残すものもわずかに認められる。胎土は概して精良・緻密で、焼成も良好である。

杯蓋(8・9) 縁部の形態から、返りを有するもの(Ⅰ類)と縁部端が下方に屈曲するもの(Ⅱ類)に分けられ、それぞれ縁部径により12cm未満(a類)、12cm以上15cm未満(b類)、15cm以上(c類)に細分した。摘み部を欠失しているものも多いが、残存するものではボケン状と擬宝珠状が認められ、各類での偏り傾向はない。基本的には天井部をロクロケズリしているが、ナデ調整を施すものもわずかに見られる。胎土は砂粒などを含む比較的粗い印象のものや精良なものがあるが、返りを有する杯蓋Ⅰ類に粗い胎土がやや多いように感じられる。

高杯(10) 2点のみの出土で、いずれも脚部片である。

広口壺(11) 口径が体部最大径に近く、口縁部が短く立ち上がるもの。数点出土している。

短頸壺(12・13) 短く直立した口縁を持つもので、小型(Ⅰ類)と大型(Ⅱ類)が見られる。短頸壺Ⅰは12の1点のみで、体部は潰れた球形を呈し高台は付かない。短頸壺Ⅱ類は一般的に見られる形態で、一般的に高台を持つものである。壺蓋とセットになるとと思われる。出土数は少ない。

壺蓋(14) 個体数は少なく、いずれも小片である。推定口径では10cm未満と以上の2種類認められるが、短頸壺Ⅰ・Ⅱ類共に蓋を持つものと考えられる。

長頸瓶(15・16) 口縁部で大きく開き長い頸部を持つ瓶(壺)で、頸部の長さから2種類(Ⅰ類・Ⅱ類)認められる。全体の器形が判明するものはほとんどない。

平瓶(17) 口縁部片を含めて2点のみで、いずれも自然釉が厚くかかる。

横瓶(18) 比較的直立した口縁部が付き、外面に厚く自然釉がかかる。

鉢(19) 径の小さな底部から大きく開いて立ち上がる体部を持つもので、体部外面中ほどから底部にかけてヘラケズリを施す。胎土は精良であるが、焼成は軟質である。1点のみ出土した。

甕(20・21) 貯蔵具としては長頸瓶と並んで多いが、出土数は少ない。形態的には叩きがない比較的小型のもの(Ⅰ類)と、口径20cm以上で叩き(外面:格子・平行、内面:同心円)を有する大型のもの(Ⅱ類)が見られる。Ⅰ類は図示した1点のみである。Ⅱ類は外反する口縁部に波状文を施すものが多い。

円面碗(22) 2点出土しており、ほぼ同様の器形・法量と思われる。いずれも脚端部が外方に挽き出され、脚部中ほどには径1.5cm前後の丸窓が数か所開けられている。

赤彩土器(第118)

基本的には須恵器の杯類と同様の製作技法で、内外面に赤彩が施されたものである。器種は食器に限られ、無台杯・有台杯・杯蓋・高杯が認められる。なお、赤彩の痕跡はないが技法や胎土から赤彩土器と考えられるもの、外面赤彩だが内面黒色処理されるものも赤彩土器として扱う。赤彩の色調は、明るい明赤褐色から褐色に近い暗いものまで様々である。

無台杯(1・2) 須恵器の無台杯と同様の分類基準とするが、すべて浅身(Ⅰ類)のもので深身(Ⅱ類)は存在しない。口径は小型(a類)と大型(b類)に分けられる。底部切り離しは回転ヘラ切りで、切り離し後に軽くナデ調整を施すものが多く、ヘラケズリされるものもわずかに存在する。器形的には須恵器と同様であるが、底部からやや開き気味に立ち上がり、口縁端部で短く外反する特徴的なものが一定量認め

られる。同様の器形は須恵器Ⅰb類(図版55・114)の生焼けにもわずかに存在することから、これらも本来は赤彩されていた可能性もある。胎土は微細砂粒をわずかに含み精良なものと、比較的大粒の砂粒を含むものが存在し、焼成は総じて良好である。

有台杯(3~5) 器形的には須恵器と同様であるが、全体器形・法量が判明するものに限れば、浅身の中型(Ⅰb類)と特深身の小型(Ⅲa類)及び大型(Ⅲc類)のみが存在する。底部切り離しは基本的に回転ヘラ切りで、切り離し後にナデ調整を施すものも見られる。胎土は精良なものと砂粒を比較含むものがほぼ同じ比率であるが、砂粒を含むものは大半が焼成軟質である。なお、5は内面が黒色処理されている。

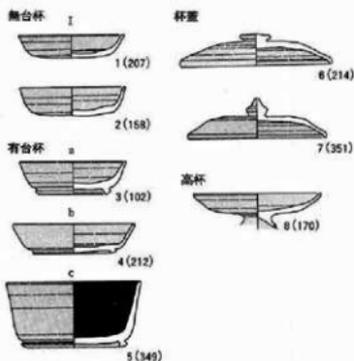
杯蓋(6・7) 須恵器杯蓋の分類基準Ⅱ類のみで、法量的には縁部径を確認できるものはすべて15cm以上(c類)である。出土数はそれほど多くない。摘み部を欠失しているものが多く、残存するものではボタン状と擬定球状が見られる。7のように高く先端突出の摘みを持つものは、一般的な有台杯に伴わない可能性もある。天井部はロクロケズリで、内面をナデやヘラミガキするものもわずかに認められる。

高杯(8) 極めて浅い杯部に大きく開く低い脚部を持つものと思われ、図示した1点のみの出土である。器面は内外面ともヘラミガキが施され、他器種に比べて丁寧に仕上げられているようである。

土師器・黒色土器(第12・13図)

土師器には、食膳具の無台杯・碗・高杯、煮炊具の鉢・甕類・鍋・瓶などがあり、このほか、壺・手捏ね土器・筒状土製品がわずかに出土している。また、黒色土器は、体部内面に黒色処理を施したもので、器種的には碗と高杯が認められる。

碗(第12図1・2・14~20) 器形や製作技法などから非ロクロ成形(A類・B類)とロクロ成形(C類)に分類されるが、出土点数は非ロクロが大半を占める。A類は非ロクロの碗として一般的なタイプで、口径10.5cm以下の小型品(Ⅰ類)と11.0cm以上的大型品(Ⅱ類)がある。いずれも径高指数は35~50と深身タイプが大半であるが、25以下の浅身タイプ(図版53~87)もわずかに存在する。内外面ともヨコナデを施すものが多いが、黒色土器と同様に内外面にヘラミガキを施すものも見られる。胎土は砂粒を含むものが多い。B類は径高指数が50以上の特深身タイプで、器壁が比較的厚く左右非対称の粗製品が大半である。体部内外にハケ目調整を施すものも多く、小型の鉢と考えた方が妥当かもしれない。C類はロクロ土師器の碗に一般的に見られるもので、底部切り離しはいずれも回転糸切りである。器壁は概して薄く、胎土は微砂をわずかに含んで精良で焼成も良好なものが多い。出土点数が少ないため細分は行なわなかったが、体部が内清気味に立ち上がるものを中心に、直線的に開くものや浅い皿状のものなどもわずかに認められる。1・2は黒色土器である。出土数は極めて少なく特に分類は行なわれないが、大半は技法や器形から土師器碗AⅡ類と同様なもの(1)で、底部が丸底になるもの(2)も1点存在する。丁寧にヘラミガ



第11図 赤彩土器の器種分類

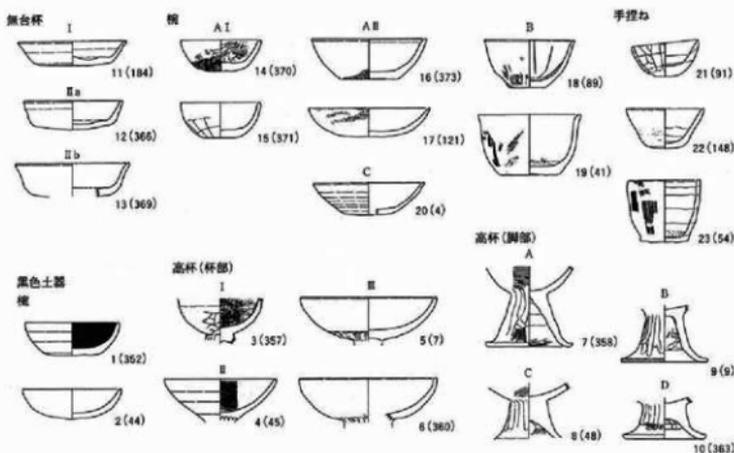
キを施すものが多く、焼成は相対的に良好である。

高杯 (第12図3~10) 杯部形態3種類と脚部形態4種類に分けられる。杯部では湾曲しながら上方へ立ち上がり口径が比較的小さくなると思われるもの (I類)、直線的に斜め上方へ立ち上がるもの (II類)、緩やかに湾曲しながら立ち上がり口径が大きいもの (III類) が見られる。III類には黒色処理が施されないものを含めた。また、脚部では裾端部が短く反り返るもの (A類)、裾部が緩やかに開くもの (B類)、裾部の開きが弱く中実に近いもの (C類)、脚部が低く中実に近いもの (D類) が存在する。杯部・脚部ともにヘラミガキを施すものが多く、焼成は比較的堅緻である。全体の器形が判明するものは少ないが、杯部I類+脚部A類、杯部II類+脚部C類、杯部III類+脚部B類の可能性が考えられる。

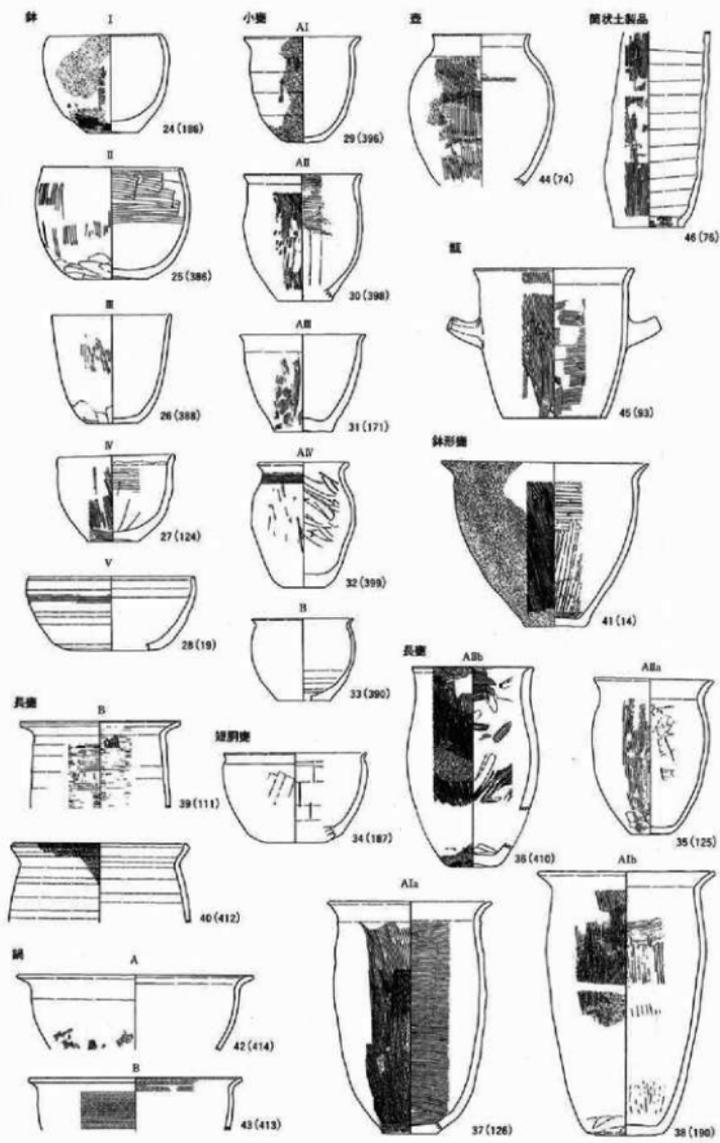
無台杯 (第12図11~13) 須恵器の無台杯II類を模倣したと思われるもので、形態や製作技法が基本的に同じである。須恵器 (生焼け) との区別は明瞭でないものもあるが、胎土・色調 (橙色系が強いもの) と焼成具合で分けた。出土点数は少ない。分類は須恵器に順じたが、底面が丸みを帯びる深身小型のもの (IIa類) が大半を占め、ほかには浅身大型 (Ib類) と深身大型 (IIb類) がごく少数見られるのみである。底部切り離しは回転ヘラ切りで、切り離し後にナア調整を施すものが多いが、ヘラケズリを施すものもわずかに存在する。胎土は砂粒を多く含むものが目立ち、須恵器に比べて相対的に粗い印象である。

手捏ね土器 (第12図21~23) 輪積み痕を明瞭に残すもので、口径は10cm以下と小さい。器形や調整は碗A類やB類と共通で、それぞれを模倣した小型品とも考えられる。

鉢 (第13図24~28) 主に器形から5分類できる。内外面に炭化物 (スス) が付着しないものもあり、煮炊以外の機能 (食器具など) を有するものも含まれるようである。I類は内湾する体部からそのまま口縁部が内傾するもので、径高指数は85~130程度である。内外面ともにハケ目調整されるものが大半である。II類はI類に比べて器高が低く全体的に大きい鉄鉢形のもので、径高指数は85以下である。体部外面下半をヘラケズリし、内外面に粗いハケ目調整を施す。胎土には微砂粒を多く含むが頗密で、焼成は他類より



第12図 黒色土器・土師器 (1) の器種分類



第13圖 土師器(2)の器種分類

絶じて堅緻である。Ⅲ類は口縁部が内傾せずに直線的に立ち上がるもので、出土数は少ない。Ⅳ類は基本的にはⅢ類と同様の器形であるが、口縁部が短く外反するものをまとめた。小壺AⅡ・Ⅲ類との区分が明確にできないが、法量的にやや小型である。Ⅴ類は径高指数が50以下の浅いもので、ロクロ成形のもの(28)も見られる。出土点数は少ない。

小壺(第13図29-33) 高さ18cm以下の壺を小壺とした。大半が非ロクロ成形(A類)であるが、ロクロ成形(B類)もわずかに出土している。被熱して変色し、炭化物が付着するものが目立つ。非ロクロ成形は器形の違いにより4細分した。Ⅰ類は体部が丸みを持っており、口縁部で外反するものである。径高指数は100前後のものが一般的であるが、図版59-217のようにやや低いものもある。Ⅱ類は器高16cm以上とやや大型で、体部の丸みが少ないものである。Ⅲ類は胴部最大径より口径が大きいものである。Ⅳ類は胴部最大径より口径が小さいもので、頸部のくびれがきつい。1点のみ確認されている。

短頸壺(第13図34) 口径が大きく器高が低いもので、体部内外にヘラナデを施す。1点のみ確認されている。

長壺(第13図35-40) 長胴の壺で、煮炊具の主体をなすものである。非ロクロ成形(A類)とロクロ成形(B類)が認められるが、非ロクロが圧倒的に多い。非ロクロ成形は、法量により大型(Ⅰ類)と小型(Ⅱ類)に細分される。Ⅰ類ではさらに、器高27-30cm(a類)と32-34cm(b類)の2グループに分けられるが、口径はどちらも18-25cmでそれぞれに顕著な差は認められない。胴部形態には、中央付近に最大径を持ち丸みを帯びて張るタイプ、胴部径が比較的均等で直線的なタイプ、最大径が胴部下半にあるタイプなどが見られる。また、口縁部形態も緩く外反するもの、ほぼ水平に強く外反するもの、「く」の字状に直線的に外傾するものなど様々である。Ⅱ類は基本的には器高20-23cmに収まるもの(a類)であるが、頸部のくびれがほとんどなく、器壁は極端に厚いもの(36)も存在する。他の壺類と比べて異質であり、確認されるのは1点であるがb類として分類した。ロクロ成形は、全体の器形や法量が判明するものがなく、出土点数も少ないことから細分はしなかったが、形面的に見てさらに分類が可能である。

鉢形壺(第13図41) 径高指数は80前後、口径が26cm以上で、体部から口縁にかけて大きく開くものである。出土点数は少ない。

鍋(第13図42-43) 非ロクロ成形のA類とロクロ成形のB類が存在するが、出土点数は極めて少ない。いずれも、被熱の痕跡または炭化物の付着が認められる。

壺(第13図44) 球形の体部を持ち頸部で大きくすぼまるものと思われ、緩く外反する口縁部が短く立ち上がる。確認できたのは2点のみである。

甗(第13図45) 全体の器形が判明するものは1点(45)のみであるが、形面的には底部全体が孔となり一対の把手を持つものと、底部が多孔となるものの2種存在するようである。法量的には前者が大型で、後者は比較的小型になるものと思われる。

筒状土製品(第13図46) 用途不明の土製品が2点出土している。いずれも輪積み成形で、外面ハケ目のもの(46)と平行叩き目のもの(図版69-425)がある。被熱していることから、カマドなどに関連したもの(支脚)とも考えられる。

その他

灰軸陶器(図版69-426-428) 皿が3点出土しているが、いずれも小片で全体器形は不明である。器壁は比較的薄手で、体部外面下半から底部は回転ヘラケズリで、口縁部内外に灰軸を刷毛がけしている。形態から光ヶ丘1号窯式期(9世紀末)と思われる。

甕埴土器 (図版69-429~447) 小片化しているものが多いが、5 D区を中心に一定量出土している。器形はいずれもバケツ状に開くものと思われ、口径は40cm 近い大型のものから20cm 程度の小型のものまで見られる。輪積み痕を明瞭に残し、内面はほぼ例外なくハケ目調整が施される。糸魚川市立ノ内遺跡出土品に類似し、9世紀後半の所産と考えられている。

B 遺構出土土器 (図版48~60)

1号竪穴住居 (1~14)

須恵器杯・短頸壺、土師器杯・高杯・甕がある。4~6は糸切り底で9世紀後半以降と考えられることから、当遺構に伴うものではない。須恵器はいずれも当住居に伴うものと思われる。高杯は内黒で杯部に丸みを持つ。土師器甕は4点ともに形態の異なるものであるが、いずれもハケ調整のA類で口縁部のヨコナアは弱い。12~14は床直である。8世紀初頭から前葉に位置付けられる。

2号竪穴住居 (15~20)

須恵器杯蓋Ⅱa類・鉢、土師器高杯・鉢がある。1号同様内黒高杯を伴う。20の鉢はハケ調整。15の須恵器蓋は、小型で9世紀以降の可能性があり、他の遺物と時期的にあわない。他は8世紀段階に収まるであろう。

3号竪穴住居 (21~76)

多くの土器が出土している。須恵器無台杯にはⅠa、Ⅱa、Ⅱb類があるが、24、25など底部に丸みを持つものが特徴的である。26は底部まで全て削り調整である。有台杯はⅠc、Ⅱb、Ⅱc、Ⅲがあるが、口径の大きいc類が揃っている。長頸瓶の37は肩の張るものである。土師器は杯、碗、鉢、高杯、甕、甎が揃っている。碗は非ロクロで大型が主体を占める。高杯は、脚部を除き全てが内黒で、杯部は丸く、口縁の外反はない。甕は口縁部にヨコナアが加えられるが、体部はハケ調整で、底部は平底となる。76は筒状土製品である。かまどの支脚であろうか。8世紀前半であろうが、21~26の無台杯は8世紀初頭まで溯る可能性がある。

4号竪穴住居 (77~84)

須恵器は3号竪穴住居と同じ在り方を示す。84の甎は底部径が比較的大きい。

5号竪穴住居 (85~93)

墨書「佐味」の有台杯はⅢ類である。口縁部やや外反する。8世紀中葉くらいに位置付けられようか。甎は把手が付く。手握ね土器を伴う。

6号竪穴住居 (94~112)

須恵器高台は低く偏平となり、蓋も丸みがなくなる。赤彩有台杯が認められるが小型である。土師器甕はロクロ成形で口縁部くの字に外反する。112は輪積痕を明瞭に残す甎である。ロクロ土師器甕の採用から8世紀後半まで降るであろう。

7号竪穴住居 (113~126)

115の墨書土器は底部やや丸みを持ち高台は外方にふんばる。8世紀前半の典型である。蓋はいずれもⅡc類であるが、116が天井部ナアに対して、117、118は体部に丸みを持ち、天井部ケズリである。119は短頸壺の蓋。122は赤彩の蓋である。天井部に丸みを持つ。鉢、甕類はハケ調整、平底である。116の蓋は8世紀後半まで降る可能性がある。121の土師器杯は、中世であろうか。時期にばらつきがある。

8号壺穴住居 (127~141)

土師器甕はハケ調整のA類と(138、140)とロクロ調整のB類(139、141)の二者が認められる。140は口縁外反し特異な形態である。他地域の影響であろうか。130~134の蓋は、形態にばらつきがあり一定しない。特に134は口径大きく、8世紀初頭まで溯る可能性もある。当住居出土土器には、8世紀前半からロクロ土師器甕まで存在し時期決定が難しい。

9号壺穴住居 (142~150)

土師器の杯、碗、甕がある。甕はハケ調整である。須恵器短頸壺は体部に丸みを持つ。土師器甕はハケ調整であるが、142の須恵器蓋等は、小型で8世紀末まで降る可能性もある。

10号壺穴住居 (151~167)

赤彩土器が特徴的である。無台杯、有台杯、蓋があるが、いずれも大型である。甕はいずれもハケ調整。167は口縁部に強いヨコナデが加えられる。

11号壺穴住居 (168~173)

170は赤彩の高杯。浅い皿状の身をのせる。脚は大きく間く。土師器甕はハケ調整。8世紀前半であろう。

12号壺穴住居 (174~193)

須恵器は有台杯(Ⅱb類とⅠc類)と蓋(Ⅱc類)である。土師器鉢、甕類はハケ調整で平底となる。有台杯は小型化(b類)の傾向が見られる。蓋も179のように天井部が平坦なものも認められる。8世紀後半に入るであろう。

519号土坑 (194~226)

上層を中心として多くの土器が出土した。赤彩土器(無台・有台杯、蓋)が多く出土している。杯類はいずれも浅身のⅠ類である。蓋は214のように丸く、深い。甕は平底であるが、ハケ調整とロクロ調整の二者が認められる。226は甕であろうか。

その他の遺構 (227~236)

227は杯蓋Ⅰ類で返りを有するものである。遺構では唯一の出土である。231は短頸壺の蓋であろう。

C 包含層出土土器

須恵器 無台杯・有台杯・杯蓋・長頸壺・短頸壺・短頸壺蓋・広口壺・平瓶・高杯・甕・横瓶・円面碗があるが、器種分類は、前述のとおりである。須恵器全般では、奈良時代のものがほとんどである。上越地方では底部糸切りが8世紀後半に出現するが、当遺跡では殆ど認められない。蓋ではA類が多く出土していることが特徴である。7世紀末を代表する器形である。法量的にはa、b、cの3類があり、それに対応する杯身が存在したであろう。遺構からの出土はない。有台杯は、小型の出現を後出と考えれば、246・247(Ⅲa類)、248・249(Ⅱa類)は8世紀の後半の可能性もある。

円面碗 (334、335) いずれも小型の脚部である。334は推定脚口径15cmを測る。丸蓋と考えられる透かし及び線刻があるが詳細は不明。外面暗青灰色であるが、断面内面は褐色である。335はやや小さく推定口径14cmとなる。約1/4の残存。高さ5.1cm。作りは雑で鋭さに欠ける。円形透かしは5個あったことが間隔からわかる。大きさは1.5cm前後で一定しない。海部分は一部残存するが、著しい使用痕跡は認められない。

赤彩土器 (347~351) 器形、成形技法は須恵器と同様である。器種には無台杯・有台杯・杯蓋がある。赤彩土器は8世紀前半に特徴的で、どこの遺跡でも出土するものではない。特殊な使われ方をしたものと

考えられる。これだけ多くの赤彩土器が出土したのは県内で初めてである。

黒色土器 (352~359) 器形、成形技法は土師器と同様である。器種には無台杯・高杯がある。

土師器 無台杯・椀・鉢・甕・甔・筒状土製品がある。器種分類は、前述のとおりである。ハケ調整はほとんどで、ロク口調整は少ない。杯類の中には、糸切りは少なく、1号住居4~6、包含層出土の375、382、383程度である。9世紀後半以降で、この時期の遺物は少ない。

D 墨書土器 (第19回)

「郡」(28) 有台杯底部 中央よりやや外れて書かれている。筆跡は太く明瞭。

「佐味」(86) 有台杯底部 中央に書かれている。身の一部を欠損する。

「上」? (99) 断定はできないが上であろう

「小郡」? (256)

「 」(252) 墨跡のみで文字は認められない。

「品運部宮麻呂」(115) 底部高台部に沿って書かれている。人名である。

「 」(336) 墨跡であるが、文字として認識できない。

「十」? (337) 漢数字の十と考えられる。

「 」(338) 不明

「 」(340) 不明

「経」? (342) 経であろうか

「 」(290) 不明

「阿刀」(339) 人名

他は窠書きで文字か記号か明確でない。

2 中世の土器・陶磁器

珠洲焼・瀬戸・美濃焼・中世土師器などの国産陶磁器のほかに、青磁・白磁・青白磁・染付などの中国陶磁器・朝鮮陶器なども出土しており、年代的には13世紀から15世紀にかけてのものが主体を占める。出土状況は土坑などの遺構から散発的に出土はするが、大半は包含層からの出土である。このため、図版には遺構出土遺物を最初に掲載したが、記述は遺構・包含層出土を分けて種別・器種ごとにまとめた。

A 中国陶磁器 (図版70・73~76)

青磁 (図版70・73~76)

碗 (47・73・84~121) 口縁部が内湾もしくは直線的に伸びるもの (84~91・97~99・104・115・118・119)、口縁端部が玉縁状を呈するもの (47・100)、口縁部が外反するもの (103・111~114)、口縁部が「く」字状に屈曲するもの (120・121) がある。

84・91は片切彫りにより鏤を持つ細身の蓮弁文を表す。84は身が浅く高台が細い。高台皿付を除いた全面に施釉し、皿付は酸化して赤褐色を呈する。

85・92・93・118・119は篋先による素描の蓮弁文を表す。85は先端の尖る蓮弁文を表す。92は見込みと底部外面には施釉しない。93は内面に片切彫りによる文様を表すが、モチーフは不明である。118は口縁

部に凹溝を連続させ、蓮弁の先端のみを表現する。119は先端の丸い蓮弁を表し、高台の内面途中まで施軸する。

86～90・94～96は片切彫りにより、鑲を有する幅広の蓮弁を表す。95・96は底部が厚手で、高台壘付および内面は露胎である。97・98・103は口縁部付近に片切彫りによる雷文帯を表す。

97・98は口縁部が直線的に伸びるもので、97は比較的端正な雷文を表し、98は5条の沈線を施した後、数か所を針線により区画する。103は口縁端部が外反し、外面には硬化した雷文を表す。99・102は片切彫りによる2本の沈線で口縁部内面を区画する。

99は口縁部に輪花をもつ。102は区画内に片切彫りによる飛雲文を表す。

100は口縁端部が玉縁状を呈する。内面を2本の突線で区画し、区画内にはそれぞれ異なった花文(スタンプ)を施す。

101・104は内面に片切彫りによる草花文を表すが、104は外面にも片切彫りによる文様を表す。

73・105～110は碗の底部であり、73は高台および底部外面には施軸しない。105は全面施軸の後、底部外面の軸をかきとる。内面には片切彫りにより文様を描くが、モチーフは不明である。106は厚手の底部を持ち、高台壘付および内面は露胎である。見込みには片切彫りにより飛雲文を描く。107は見込み、高台壘付および内面は露胎である。108は細く小さい高台を持ち、高台壘付以外は全面施軸されている。壘付は酸化し、赤褐色を呈する。110は全面施軸の後、底部外面の軸をかきとる。109・110は二次的に熱を受けており、軸が白濁して光沢がない。

47・111～115は無文の碗で、47は口縁部が玉縁状を呈する。111～114は口縁端部が外反する。111・112は軸が薄くかかり、シャープなつくりである。115は口縁部が内湾気味に伸びるもので、全体に厚い軸がかかる。二次的に熱を受けており、軸が白濁して光沢がない。110と同一個体の可能性がある。

116・117は片切彫りにより蓮弁を表すが、鑲は明瞭でない。高台内面にまで施軸する。116は見込みにスタンプによる花文を施す。120・121は口縁端部が「く」字状に屈曲し、片切彫りによる鑲を有する幅広の蓮弁文を施すが、同弁は持たない。

それぞれの所属時期は、99・101・102・104・106が12世紀中葉～13世紀初頭、86～90・94～96・120・121は13世紀、84・91・98・108・109・116・117は14世紀、85・92・93・97・100・111～114は15世紀、103・119は15世紀後半～終末、118は16世紀に比定したい。

壘 (13・14・60・80・122～132) 13は口縁端部が外反し、内面は細線により蓮弁文を表す。122・123は口縁部が内湾する。122は外面に片切彫りによる鑲を持つ細身の蓮弁文を描き、高台壘付を除き全面に施軸する。123は内面に丸彫りによる蓮弁文を表す。

14・124～126は口縁部を上方につまむ。14・124・125は内外面とも無文であるが、126は内面に丸彫りによる蓮弁文を表す。

60・80・127～131は壘の底部である。60・128は両面に、127は外面にのみ丸彫りにより蓮弁文を表す。80は花文、129はスタンプによる魚文を見込みに施す。60・131は全面施軸、80は高台先端部および内面は無軸である。

所属時期は13が16世紀に、80は13世紀に遡る可能性がある。ほかは14～15世紀と思われる。

香炉 (133～136) 4点とも筒形の香炉である。133は口縁端部に広い面を有する。134～136は口縁端部を丸く納め、136は口縁部に2条の沈線を施す。

白磁 (図版76)

碗 (142・144・145・148・150) 142は小型の碗であり、腰部には張りがあり口縁部は外反する。144は口縁端部に軸がかからない「口禿げの白磁」であり、口縁端部が外反する。145は口縁端部が外反し、体部上半に1条の沈線が巡る。148は断面方形の削り出し高台をもつ。150は細く低い削り出し高台を持つ。高台畳付および内面には施軸しない。釉はやや青味がかっており、青白磁の可能性もある。

所属時期は144・148が13～14世紀、143は16世紀に比定できる。

皿 (137～140・143・149) 137は口縁部が内湾気味に伸び、全体に黄味を帯びた釉がかかる。138は体部中央に段を持つ。139・140は「口禿げの白磁」であり、口縁端部が外半する。149は丸みのある低い削り出し高台を有する。

所属時期は139・140・149が13～14世紀、137が15世紀、143が16世紀に比定できる。

杯 (141・146・147) 141は口縁部が外反し、端部に面をとる。146・147はいわゆる多角杯であり、内面の全面と外面の口縁部に施軸し、釉には細かい貫入が入る。

所属時期は3点とも15世紀である。

青白磁 (図版76)

梅瓶 (151～157) 151は口縁部中央に突帯をもち、内外面ともに施軸する。152は文様を施さず、外面にのみ施軸し、内面は露胎である。153～155は外面に櫛掻きによる渦文を施す。3点とも外面にのみ施軸し、内面は露胎である。156は体部下半に沈線を2条巡らし、内外面とも施軸する。151・153・154・157は二次的に熱を受けており、釉には光沢がない。

蓋 (158) かえりを持つもので、外面には花文を表現し施軸するが、釉には光沢がなく灰白色を呈する。内面は露胎であり、酸化して赤褐色を呈する。

合子 (159・160) 159は蓋であり、外面に丸彫りによる蓮弁文を2段に配する。外面にのみ施軸し、内面は露胎である。160は全面施軸の身であり、外面には片切彫りによる蓮弁文を2段に配す。下段の蓮弁文は鱗が明瞭であるが、上段は鎖をもたない。所属時期は13世紀後半～14世紀と考えられる。

染付 (図版76)

碗 (163) 口縁部が直線的に伸びるもので、外面は口縁端部付近に界線を1条巡らし、その下に唐草文を表す。内面は口縁端部付近に唐草風の渦文を表し、上方に1条、下方に2条の界線を巡らす。二次的に熱を受けている。

皿 (161・162・164) 161は口縁部が外半し、外面は口縁端部付近に界線が1条通り、その下に唐草文を表す。162の内面は口縁端部付近に界線を1条巡らし、下部に魚文を表現する。所属時期は2点とも15世紀後半～16世紀前半であろう。

以上みてきたように本遺跡からは12世紀～16世紀の中国陶磁器が出土しているが、数量的には12世紀中葉～15世紀のものが大半を占め、16世紀のものは少ない。また、輸入陶磁器の大半は青磁碗であり、12世紀中葉～15世紀のものが継続的に確認できるほか、青磁の盤・香炉、青白磁の梅瓶・合子といった高級品も一定量存在し、高い階層性が窺える。

B 瀬戸・美濃焼 (図版70・71・73・74・77・78)

瀬戸・美濃焼には鉄軸(7・165～184)を施す天目茶碗・半筒碗・皿・香炉・茶壺などと灰軸(11・15・46・48・69・77～79・185～235)を施す平碗・折縁深皿・卸し皿・皿・鉢・四耳壺・瓶子・花瓶・香炉・蓋

などが存在する。

天目茶碗 (165~178) いずれも内面は全面、外面は体部下半まで鉄軸を施す。165~170・174は口縁部がS字状にくびれるが、くびれが大きいもの(165・166)と緩いもの(167~170・174)がある。165は体部下半を鉄化粧する。167・168・170は二次的に熱を受けており、軸に光沢がない。171~173・175は口縁部が上方に屈曲するが、171・175は屈曲が大きく、172・173は緩やかな屈曲である。172は削り出しの内反り高台であり、高台脇に沈線が1条巡る。体部下半には施軸前に施した鉄が残る。173は二次的に熱を受けて軸に光沢がない。露胎部分は灰色を呈する。176は口縁部が内湾気味にのびるもので、底部は削り出し輪高台である。177は高台脇に段がなく、178にはわずかに段がある。

所属時期は165・166が14世紀前半、167~170・172~174・176~178は15世紀、171・175は16世紀後半に比定できる。

半筒輪 (179) 筒形の胴部が腰部ではほぼ直角に屈曲するもので、内面は全面、外面は胴部のみ鉄軸を施し、腰部は鉄化粧する。16世紀後半のものと思われる。

香炉 (7・181~183, 231~233) 7・181~183は鉄軸である。181は筒形を呈するもので、口縁端部を外備につまみ、内面は口縁上半、外面は体部下半まで施軸する。7・182・183は頸部がくびれ、腰部がふくらむ器形である。7・182は全体的に低平であり、内面は口縁上半、外面は体部下半まで施軸する。183は頸部のくびれが弱く、内外面とも体部下半まで施軸する。182の底部には3ヶ所に低い足が付き、底部外面には回転糸切り痕が残る。所属時期は181が14世紀末~15世紀前半、183は15世紀後半に比定できる。231~233は灰軸である。231は体部がやや丸みをもち、頸部は長く伸びる。外面にのみ施軸する。232は底部外面に低平な足が付き、回転糸切り痕が残る。233は体部に張りがあり、頸部は強くくびれ、底部には比較的高い足が3ヶ所付く。内面は頸部まで、外面は体部下半まで灰軸を施す。時期的には233が14世紀末~15世紀初頭、231は16世紀代に比定できる。

茶壺 (184) 短い口縁部が直立するもので、内面は口縁部のみ、外面は全面に鉄軸施軸する。

平碗 (185~193) 小型の185~189・191・192と大型の190・193がある。いずれも内面は全面、外面は体部下半まで灰軸施軸する。185は口縁部が直線的に伸び、186・190は口縁部が内湾気味に伸びる。187~189は口縁端部で緩く「S」字状にくびれ、189の体部中央には沈線が1条巡る。193は口縁部が直線的に伸びるが、ほかに比べて外傾の度合いが大きい。

所属時期は191が14世紀後半、192は15世紀中葉~後半、193は16世紀に比定できる。ほかのものは、15世紀代と考えられる。

折縁深皿 (194~198) いずれも口縁部が外反気味に伸び、内外面とも灰軸を施軸する。194は口縁端部が肥厚し、195は口縁端部に内傾する面を有する。196・197は口縁部が外備に屈曲し、口縁端部中央に突帯をもつ。198は口縁端部が内外に開いて三叉状になる。

所属時期は196・197が15世紀前半~中葉、198は15世紀後半に比定できる。

卸し皿 (199・214~220) 大型の199・218・219と小型の214~217・220がある。いずれも灰軸である。199は口縁端部が内外に開いて三叉状になり、口縁部外面のみに施軸し、内面は露胎である。214・215は口縁端部中央に浅い凹みが巡る。口縁部外面のみに施軸し、内面は露胎である。216は口縁部内面に斜格子状の卸し目を持ち、内外面とも露胎である。217~220は底部片で、見込みに格子状の卸し目を有する。220は低部外面の回転糸切り痕を撫で消すが、217~219は回転糸切り無調整である。217・218・220は内外面とも露胎であるが、219は内外面に薄い軸がかかる。

所属時期は214・215が14世紀前半～中頃、199は15世紀後半に比定できる。

皿 (48・79・180・201～213) 180は鉄軸、他は灰軸である。48は断面方形で低平な高台をもつ大型の皿である。見込みには髹漆による波状文を施す。高台壘付および内面は施軸しない。79・201～203・211・212は高台を有する小型の皿である。201は削り込み高台であり、全面に施軸する。202は口縁部が内湾気味に伸び、底部は削り出し高台である。見込みと高台壘付および内面は施軸しない。203・211は口縁部が内湾気味に伸び、口縁部のみに施軸する。211は削り出し高台で、見込にはスタンプによる菊花文を施す。また、重ね焼痕が残る。79・212は削り出し高台で、口縁部は内湾気味に伸びて端部でわずかに外反する。見込にはスタンプによる菊花文を施し、口縁部のみに施軸する。

204～207は口縁部が直線的に伸びるもので、204は内外面とも口縁部上半のみに施軸し、205～207の内面は全面、外面は口縁部上半のみに施軸する。207は回転糸切り後、無調整である。208は口縁部に片口が付くもので、口縁端部をわずかに上方につまむ。209は口縁端部を上方につまみ、内面には機軸工具による波状文を施す。210は口縁部が直線的に伸び、端部は面取りされている。213は口縁端部を上方につまみ、内面には丸彫りによる蓮弁文を表す。180は口縁部から腰部にかけて大きく屈曲するもので、内外面ともに腰部途中まで施軸する。

所属時期は204～207が15世紀後半～終末、201～203・211は16世紀中葉～後半、213は16世紀後半～終末、79は16世紀末～17世紀初頭に位置付けられる。180は、16世紀後半に比定できる。

鉢 (200) 内湾気味に体部がのび、口縁端部が外反するものである。13世紀に比定できる。

四耳壺 (15・46・77・78・221・222) いずれも灰軸である。15は口縁部に縁帯をもち、底部には張りがある。16～27の金属器は这其中に納められていたものであり、頸部径より大きいものが含まれていることから、頸部を折り取って金属器をいれたものと考えられる。

46は3～4本を一単位とする沈線を肩部に1か所、胴部に2か所巡らし、肩部にスタンプによる花文を施す。77は口縁部に狭い縁帯をもち、78は口縁部を折り返す。77・78は2点とも内面は口縁部上半に、外面は全面に施軸する。78は二次的に熱を受けており、軸に光沢がない。221の肩部には張りがあり、耳部には髹漆による沈線を施す。外面にのみ施軸し、内面は露胎である。二次的に熱を受けており、軸に光沢がない。222は「ハ」字状に開く高台をもつ。外面には施軸するが、内面は露胎である。

所属時期は78が12世紀末～13世紀初頭、77は13世紀前半、15は13世紀中葉～後半、46は13世紀後半～14世紀前半にそれぞれ比定できる。

瓶子 (11・69・223) 11は体部であり、外面のみ灰軸を施す。69は肩部に2条1単位の沈線を2か所巡らし、外面にのみ灰軸を施す。223は肩部にヘラ描きによる草花文を表す。外面は全面、内面は肩部上半まで施軸する。

花瓶 (224～230) いずれも灰軸である。224・226は頸部が直線的に伸び、口縁部が外反する。224は内外面とも全面に、226は外面全面と内面口縁部上半まで施軸する。225は体部が球形を呈し、外面は全面、内面は下半のみに施軸する。227・228は頸部が「ハ」字状に開き、229は口縁部がラッパ状に開く。3点とも外面にのみ施軸し、内面は露胎である。228は二次的に熱を受けており、軸に光沢がない。230は高台が「ハ」字状に開き、外面は高台途中まで軸がかかる。

所属時期は230が14世紀、ほかは15世紀に比定できる。

蓋 (234・235) 2点とも蓋の蓋と考えられる。234は小型のもので、外面にのみ灰軸を施し、内面は露胎である。235は外面を棒状の浮文により十字に区画し、区画内には円形の浮文を貼り付ける。外面にの

み施釉し、内面は露胎である。時期的には235が14世紀前半～中葉、234は15世紀後半に比定できる。

以上のように、本遺跡からは13～15世紀および16世紀中葉～17世紀初頭の瀬戸・美濃焼が確認できるが、16世紀初頭～前半のものはほとんど存在しない。また、13～14世紀前半のものは四耳壺や鉢などごく一部の器種であり、出土量も少ない。器種・出土量とも増加するのは14世紀後半からであり、15世紀には中国陶磁の量を上回る。

C 朝鮮陶器 (図版78)

朝鮮陶器の器種としては、皿のみが出土している。いずれも5 B73区から重なるように出土したもので、一括性の高い資料として重要である。

皿 (236～248) 底部はいずれも削り出し高台であり、全面に濃緑色の灰釉がかかる。見込みと高台畳付には胎土目痕が残る。236・238・240・242～244・246・247は二次的に熱を受けており、釉が白濁して光沢がない。所属時期は16世紀に比定できる。

D 珠洲焼 (図版70・72・74・79～83)

出土量は中世陶磁器類の中では最も多く、平箱に換算して約8箱が出土している。この出土量は、過去に発掘調査された県内の中世遺跡でも最多と思われる。器種的には甕・壺・片口鉢類が存在し、その比率はおおむね2:1:2の割合である。いずれの器種も灰色から黒灰色を呈し、焼成が比較的堅緻のものが多く、胎土には珠洲焼に特徴的な海綿状骨針の混入が顕著である。破片資料が大半を占め、全体の器形が判明するものは少ない。

壺 (1～3・32・61～64・66・249～288)

成形技法による分類 [吉岡1982b] に従えば、ロクロ成形の「R種」、叩き締め成形の「T種」、叩き締め成形後に叩き目を捺り消す「K種」の3種に大別できる。このうちR種とT種の割合はほぼ半々で、確実にK種と確認できるものは284・286の2個体のみである。

R種 (62～64・66・249～267)

口径9～12cmと小型のものが多く、焼成はいずれも堅緻で灰色から暗灰色を呈するが、胎土には砂礫粒をほとんど含まない精良なものから、径5mm以上の礫を比較的多く含むものまで多様である。口縁部および体部外面に櫛目波状文を施文するものと素文のものがみられる。

62・66・249・267は口縁部片である。62は626号土坑から出土したもので、外反する口縁端部を外方に短く折り曲げたものである。66は3号井戸から出土したものである。口縁部を「く」字状に短く屈曲させた小型の短頸壺で、250のような器高の低い体部になるものであろう。口縁端部は角頸状を呈し、頸部外面には櫛目波状文が施文されている。249は比較的大きく外傾する口縁外端部を引き出し、断面三角形状に突出させたもので、口縁端部はヨコナデにより中央がやや凹む。端面と外面には、5本1単位とする細かく鋭い波状文を施す。257はやや外反しながら立ち上がり、端部が外方にわずかに肥厚するもので、端面はヨコナデにより平坦に仕上げられている。

63・64は628号土坑から出土したものである。63は口縁部を除いて器形復元できたもので、張り出した肩から直線的に底部に至る器形である。口縁部は欠失しているが頸部断面は3mm程度と非常に薄く、短く直立するか立ち上がりずにそのまま取まるものであろう。頸部がみられず特異な器形で、内面にはロクロ成形痕を明瞭に残す。暗灰色から黒灰色を呈し、体部上半にはスズ状の黒色附着物が認められる。底部

外面は静止糸切りで、縁辺はヨコナデが施されややくぼむ。64は数点の破片から復元したもので、体部の器形は63とはほぼ同様であるがやや大振りである。外面底部付近はヘラ削りが施され、ハケ状工具によると思われる数条の沈線が巡る。底部外面は静止糸切りである。

250・251・258～260は頸部から肩部にかけての体部片である。250は肩の張った球状の体部をもつ器高の低い壺である。肩上部から体部中ほどにかけて9本一単位の繊細で鋭い波状文を4条巡らし、以下はヘラ削りが施されている。251は直線の罫目文を施文したもので、肩がやや張る器形である。

253～256は罫目波状文を巡らした体部片である。252は外面にロクロ削りを施し平滑に仕上げられているもので、珠洲系陶器にはあまりみられない技法である。胎土も砂粒をほとんど含まず粘りがあり精良であることから、須恵器の可能性も考えられる。

261は肩があまり張らずに丸みをもって底部にいたるもので、口径9cm、器高約21cm、底径8.8cmである。口縁部は外反しながら立ち上がり、外端は外側へやや引き出される。端面はヨコナデによって中央部がやや凹む。外面底部付近はヘラ削りが施され、底部外面は静止糸切りである。

262は唯一の完形品で、口径9.5cm、器高19.2cm、底径8.3cmである。肩部は張りが少なく丸みを有する。口縁部は短く外反しながら立ち上がり、端部はやや肥厚する。外面底部付近はヘラ削りを施し、底部外面は静止糸切りである。

263は比較的短く外反して立ち上がる口縁で、肩の張ったやや長い体部をもつものである。口径10cm、器高約22cm、底径約11cmである。口縁外端がわずかに肥厚して玉縁状を呈し、底部付近はヘラ削りを施す。体部外面下半には、数本一単位の罫目文を縦方向に施文する。底部外面は静止糸切りの後ナデ調整が施されるが、部分的に糸切り痕が残る。

264～267は底部片である。底部外面は264・266・267が静止糸切り、265が回転糸切りである。264は底部付近に幅約1mmの沈線が2条巡り、体部内外面には漆と思われる黒色付着物が認められる。267は底部が外側に広がるもので、底面はやや内湾している。体部外面から底面にかけては、比較的丁寧なナデが施される。

このR種では、罫目波状文を施すうち、251に見られる弧状の文様や253などは、Ⅱ期（13世紀前半）の特徴を有している。249、250は波状文に乱れが見られ、Ⅲ～Ⅳ期くらいであろうか。器形のある程度わかる261～263はⅡ～Ⅲ期くらいであろうか。

T種（1・32・61・268～283・285・287・288）

口径14～21cmと大きさにバラツキがみられるが、総じて中製品が多い。色調は灰色から暗灰色を呈し、胎土は糠粒を含まない比較的精良なものが多く、焼成も堅緻である。叩き目は上半が水平もしくは緩斜状で、下半は右下がりとなるものが大半である。体部内面はいずれも円形押しあて具痕で、口縁部形態からA～Fの6類がある。

A類（268・269） 口縁端部を外側へほぼ直角に折り曲げて大きく突出させたもので、外端は細く円頭状に収まるもの。

268はやや外傾しながら直線的に長く立ち上がる口縁で、比較的肩の張った体部を有すると思われる。口縁内端には明瞭な稜をもつ。外面の叩き目は不規則で、格子目状を呈する部分もある。口縁端面と外面には、10数本一単位の罫目波状文を施文する。269はほぼ直立する比較的短い口縁で、体部にかけてなだらかに下る。口縁端面はヨコナデによって中央がややくぼみ、内端は丸みを帯びて稜を有しない。

B類（270～274） 口縁外端部を引き出して断面三角形にしたもので、ほぼ直立するものと外反する

ものがみられる。270は口径約20cmの外反気味に開く口縁で、体部は丸みをもって球状に張る器形である。口縁内外端は鋭い稜を有する。口縁部内外面は丁寧なヨコナデが施され、外面の叩き目は1段目が水平方向、2段目以下は放射状である。体部内面は円形押しあて具痕であるが、上半は部分的に指先により斜めのナデが施されている。口縁部内面から体部外面にかけて、透明の降灰釉がかかる。ほかに比べて器壁が薄い。274は口縁部が弓状に大きく外反するもので、外端が肥厚気味に引き出される。

C類 (275~277) 口縁端部が肥厚し玉縁状になるもので、立ち上がりは外反せずに直線的である。口縁内面から頸部外面にかけては、ヨコナデが施される。275・276の体部内面は、縦方向のナデにより円形押し具痕が消されている。体部外面は叩き目であるが、275にはヘラ描きによる線刻文と思われるものが描かれる。

D類 (278) 口縁が「く」字状にひろくもので、端部は角頭状で直線的に収まる。内外面はやや強いヨコナデ調整が施される。

E類 (279) 口縁中央でやや肥厚し、端部が細まりながらわずかに外折するもの。胎土は精良であるが軟質で磨耗が著しく、色調は灰白色を呈する。

F類 (285) 大きく外傾してひろくもので、端部は受口状に上方へ引き出されている。このような口縁形態は珠洲焼には認められず、胎土にも海綿状骨針を含まないことから、他窯製品もしくは須恵器の可能性が考えられる。

体部 (1・32・280~283) いずれも頸部から胴部にかけての破片である。1は糸線地原体に「X」印を附加した叩き目が特徴的なもので、胎土には砂礫粒を多く含むが海綿状骨針は認められない。輪積み部分で破損していることから、板状の粘土をおおむね4cm単位で積み上げたことがわかる。本例と同様の叩き目を有するものでは、山形県楯の腰塚塚出土の壺 [吉岡1977a] が有名であるが、頸類には乏しい。280・281は調整および器形から同一個体の可能性が高い。

底部 (61・287・288) ロク口成形の鉢形で、底部外面はいずれも静止糸切りであるが、61・288はナデによって糸切り痕を消している。288は内外面に漆様の黒色付着物が認められる。

K種 (284・286)

284は口径約22cmで、肩の張った体部から短く弓なりに外反した口縁を有するものである。口縁部内外面は丁寧なヨコナデが施され、体部内面には円形押しあて具痕が残る。外面はハケ状工具で叩き目を弱く掻き消しており、部分的に叩き目が残る。肩部には円弧に矢印状凹文の刻印が押し入れ、器面には黄緑色のこま降り灰釉がかかる。286は肩部にいわゆる鰭耳を付けたもので、球状の体部を有するものと思われる。頸部の破損面の幅が5mm程度であることから、短く立ち上がった口縁が付くものであろう。内面肩部上半はヨコナデで、以下は円形押しあて具痕である。外面は丁寧なナデ調整を施し、かなり平滑に仕上げている。胎土は精良であるが海綿状骨針は含まず、焼成は堅緻で黄灰色を呈する。

壺 (31・289~315)

全体の器形が判明するものがほとんどなく、体部片が大半を占める。ここでは口縁部資料を中心に説明するが、口径が推定できるものは7点にすぎない。体部片をみるといずれも内面に円形押しあて具痕、外面は珠洲焼独特の水平叩き目が認められる。口縁形態によって5類に大別できるが、口径は38~56cmと一様ではない。

A類 (289) 短く直線的に立ち上がった口縁先端を掴んで外側へ短く屈曲させたもので、端面はほぼ水平である。口径約41cmの中型品であるが、器厚1cm内外と分量に比べて薄い。口縁端面中央はヨコ

ナデによりやや凹む。

B類 (290~292) 口縁部先端を2~3cmほど弓なりに深く折り返して水平にしたもので、端部は強いナデによって平らなもの(290・291)と、そのまま丸く収まるもの(292)がある。いずれも口縁部内外面はヨコナデ調整で、290の肩部には記号文「○」が刷印される。

C類 (293~301) 基本的には頸部から「く」字状に比較的短く外折するものであるが、口縁端部の処理でバラエティーがみられる。

293・300は直線的に外折するもので、内面は平直にナデられている。293の頸部外面には、棒状工具でナデのような鋭い凹線状の溝が走る。いずれも口縁部内面から体部外面にかけて、黒灰色のごま降り灰釉がかかる。

294~298・301は端部をやや肥厚させ弓なりに短く折り返し、口縁端面は丸く収まるもの。295・296・298・301は体部内面の円形押圧具痕を、指頭による縦方向のナデで消している。また、295はほかに比べて全体に肉厚で、頸部内面には凹線状の凹みが走る。緑灰色のごま降り灰釉がかかる。

299は弓なりの折り返しが強く口縁を水平にしたもので、外端には鋭い稜を有し、外側を平直に仕上げている。体部内面の円形押圧具痕は丁寧なナデによって消され、内面には二次的な被熱によると思われるハゼが認められる。口縁部内面から体部外面にかけては、白色のごま降り灰釉がかかる。

D類 (302) 肥厚した口縁を短くわずかに外傾させたもので、体部外面にかけて自然釉がかかる。

E類 (303・304・307) 「く」字状に緩くひろく口縁部で、立ち上がり方が比較的長いものである。303・304は同一個体と思われ、端面が円頭状で外端がやや肥厚する。体部内面はハケ状工具によるヨコナデで円形押圧具痕を消す。303の外側叩き目の凹み部分には朱色の付着物がわずかに認められ、器面に朱を塗彩していた可能性が考えられる。307は頸部の屈曲が少なくわずかにひろくもので、外面には刻文が施文される。

体部 (305~313) 体部外面にヘラ描きの刻文を施文したものと、特殊な叩き目のあるものを図示した。刻文の種類には線刻文(305・306)、記号文(310)、抽象文もしくは刺字文(308・309・311)などが認められる。なお、311は内面にロクロ成形痕が認められることや破片の湾曲などから、壺R種の体部片の可能性が高い。

312・313は3条一単位の繊細な条線を数段に施した打圧原体により、横位・斜位に旋筒要素の強い叩き目を施したものである。内面には円形押圧具痕が認められることから、壺T種の体部片と思われる。

底部 (314・315) いずれも底部からごく緩い角度で体部へ立ち上がるもので、内面にはロクロ成形痕が顕著である。底部外面には砂の付着が認められ、縁辺はナデによって擦り消されている。立ち上がり部分はヨコナデで、それ以上は斜め方向の叩き目である。314は外面に光沢のある焦し銀色の釉がかかる。315は焼成時の焼き歪みが著しい。

壺では、A類の289の口縁部形態はコの字状でI期の特徴を備えている。290~292は外方に丸く突き出る口縁部形態で、Ⅲ期に求められる。293~295はⅣ~Ⅵ期の形態である。

片口鉢類 (4・28・29・33・65・82・316~363)

珠洲焼の中に占める出土量の割合は壺とほぼ同じであるが、器形復元が可能な口縁部資料は最も多い。器種的には挿鉢と節目のない捏ね鉢が認められるが、口縁部小片では区別が困難なものも存在する。口径をみると約16~35cmで幅があるが、捏ね鉢では16~22cm前後の小型が中心であるのに対して、挿鉢には25cm前後の中型と30~35cmの大型の2種が存在するようである(第14図)。節目は施文原体の種類や

条数など多様で全体の正確な条数は不明なものが多いが、D・E類で太く粗いものが多い。底部外面は大半が静止糸切りであるが、回転糸切りが2点(320・324)認められた。

体部や口縁端部の形態は様々で明確に区別することはできないが、ここでは基本的に口縁端部の形態によってA～Eの5類に大別した。ただ、A類は体部の形態がほかに比べて特徴的な一群をまとめたもので、ほかの4類とは分類基準が異なる。

B～E類については、片口鉢類の口縁端部形態から時期的な変遷を考えた出雲町香場遺跡[坂井1987]の分類基準におおむね従ったもので、それぞれ香場遺跡のA～D類にあたるものである。

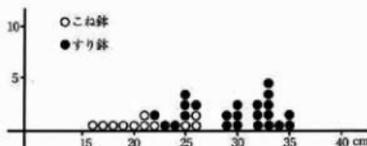
A類(316～321・323) 体部の中ほどから上部1/3あたりで屈折して立ち上がる器形で、器壁は捏ね鉢に限られる。口径は約16～22cmと捏ね鉢の中でも比較的小型なものが大半で、器厚も口縁部付近で6mm前後と薄い。口縁端部の形態には外削ぎ状と丸く収まるものが見られる。316は口縁端面が外傾し平直な面を有し、幅の狭い小さな片口を外方へ引き出す。胎土には白色細砂粒を少量含み、焼成も堅緻である。317は円皿状に収まる口縁端部で、体部外面はヨコナデによって平滑に仕上げられている。体部内面は使用によると思われる磨耗が観察される。318は口縁端部がやや外傾し、中央がやや凹む。体部内面は磨耗が著しく、酸化鉄が付着する。底部外面は静止糸切りで、高台風に低く立ち上がる。319はほかに比べて体部のひらきが大きく、口径に対する高さの割合が小さい。口縁端部は外傾し、平坦面を有する。底部外面は静止糸切りと思われる。320は口縁の一部を除いてはほぼ完形である。口縁端面は外傾し、内端が上方へわずかに積み上げられて、小さな片口が引き出されている。内面は使用による磨耗が著しく、二次焼成を受けたと思われるハゼが全面に認められる。321は口縁端面が平坦でやや外傾する。白色細砂粒を含む胎土は緻密であるが、焼成が悪いため全体に磨耗が著しく灰色を呈する。底部外面は静止糸切りである。323は体部の屈折がやや弱く、口縁端面は外傾して平直、内外端は明瞭な稜をもたずに丸みを帯びる。

B類(326・333) 口縁端部が外傾して面をもち、内端が上方へ積み上げられわずかに尖るものである。326は口径26cmとこね鉢の中では大型で、ほぼ直線的にひらく体部を有し、内外面にはロクロナデ痕が残る。内面下半は使用による磨耗が顕著である。333も同様な器形を有するもので、内外面にはロクロナデ痕を明瞭に残す。卸目は幅2.2cm、12本一単位の細密なものである。胎土には微細砂粒を含み、焼成は堅緻である。全体に暗灰色を呈するが、内面は青味を帯びた光沢が観察される。

C類(28・322・327～332・334～337) 基本的には口縁内端の積み上げがなく丸みを帯びるものと、外端が肥厚し外側に尖るものが認められ、いずれの場合も端面は外傾する。体部は直線的なもの、やや内湾気味に張るもの、外反するものの3種が認められる。28・322・327は体部が内湾気味に立ち上がる捏ね鉢、口縁端部がわずかに丸みをもつ。

28は小さな片口が引き出される。内外面はロクロナデであるが、口縁内端および体部内面下半は使用によって荒れている。底部内面はナデ調整が施されるが、外面の切り難し技法は不明である。255号土坑出土。327は体部内面が良く磨滅しており、この部分に黒色付着物が認められる。

328・330・331は直線的にひらく体部で、口縁端面が外傾して平らな面を有する。内外端は稜をもたずに丸みを帯びる。いずれも内外面にロクロナデ痕が明瞭に残る。卸目は328が幅1.9cm、12本一単位の細く浅いものである。330は幅2.2cm、9本一単位で全体に密に施す。331は幅2.4cm、14本一単位で使用に



第14図 珠洲焼片口鉢類口径分布

より下部は不明瞭になり、特に底部付近は完全に消えて平滑である。底部は静止糸切りである。

329は口縁端面が外傾し中央がやや凹むもので、片口の引き出し部分が残る。内面には輪積み痕が認められる。卸し目は細密で幅2.2cm、14本一単位と思われる。

332・336は体部が外反して開くもので、口縁外端が肥厚して尖る。いずれも端面が中央でややくぼみ、内端は比較的丸い。唇厚は1cm以上でほかに比べて厚い。336の外面には、ヘラ状工具によると思われる細く浅い沈線が1条巡る。卸し目は332が幅2.7cm、15本一単位である。336は幅3.1cm、17本一単位である。

334・337は口縁外端がわずかに尖るもので、端面の外傾度が弱い。334の口縁内端下には、浅い凹みが1条巡る。卸し目は334が幅2.3cm、10本一単位でやや粗く、墨状の黒色付着物が認められる。337は幅2.6cm、11本一単位と思われる。

335は口縁内外端がやや引き出されて明瞭な稜を有するもので、端面は広くなり丸みを帯びる。内外面にはロクロナデによる比較的大きな凹凸が認められ、卸し目は幅2.5cm、9本一単位で鋭い。

D類 (33・338~341) 基本的には口縁端部が明瞭に水平になり、端面中央がやや凹むものである。端部の形態はそれぞれ微妙に異なるが、内端の下部に凹みが生じる。

33は口縁端面が広く外端に向かって厚くなるもので、内端の稜は比較的明瞭である。胎土に微細砂粒を多く含み砂っぽい印象を受けるが、器面は丁寧にヨコナデされて焼成も良好である。519号土坑出土。338は体部がほぼ直線的にひろくもので、口縁内端は内側へわずかに引き出される。内外面ともロクロ成形痕が顕著であるが、内面には横位の条線が認められることから、ヘラ削り調整が施された可能性がある。卸し目は断面が鋭く、密に引かれており、幅1.5cm、8本一単位である。内面は降灰軸により光沢を有する。339はやや内湾気味に急角度で立ち上がる体部で、口縁内外端は丸みを帯びる。卸し目は幅2.2cm、13本一単位で浅く鋭さに欠ける。口縁部外面には黒灰色の降灰軸がかかる。

340は底部から内湾気味に立ち上がり、中ほどから外反して口縁部に至る器形である。口縁外端は外側に引き出され、内端は丸みを帯びる。底部外面は静止糸切りで、縁辺部をナデている。卸し目は使用による摩滅のため明確ではないが、幅2.9cm以上、12本以上一単位と思われる。

341は内湾気味に比較的急角度で立ち上がる器形で、口縁端部は外側に折り曲げられたように屈曲し、嚙状に大きく尖る。卸し目は断面三角形で幅3.8cm、15本一単位である。

E類 (342~350) 口縁端面が内傾するものをまとめたが、端部形態によってさらに細分することができる。また、端面を樽目波状文で加飾したもの(346~348)がみられる。

342は口縁端部を外側に弱く外折したもので、内端はやや肥厚し稜を有する。卸し目は粗く浅いもので、幅3.4cm、10本一単位である。

343は内湾気味に立ち下がる体部で、口縁端部をわずかに外折したものである。内端は丸みを帯びて端面が不明瞭で、幅の広い大振りな片口が引き出される。内面にはロクロナデ痕を明瞭に残し、外面には粘土紐巻き上げ痕が観察される。卸し目は不規則で粗く、幅2.9cm、9本一単位である。

344は口径約22cmで、342と共に卸面のある片口鉢の中では小型の部類に入る。口縁端部は外反してわずかにひろくもので、端面は不明瞭である。ロクロナデ痕が明瞭に残り、輪積み部分で破損している。卸し目は太く粗いもので、幅2.5cm、9本一単位である。

345は343と同様の口縁部形態を示すものであるが、外端下部に細い凹みが1条巡る。外面には粘土紐巻き上げ痕が残る。全体に灰白色を呈し、焼成は軟質である。卸し目は幅3.2cm、11本一単位であるが使用による摩滅が著しい。

346は内湾気味に大きくひらく器形で、内削ぎ状の口縁端部が特徴的なものである。卸目は条を密に施文したもので、幅2.0cm、8本一単位である。

347は342と同様の口縁であるが、端部を強く揃まして引き出したもので、外面が大きく凹む。卸目は太く幅1.6cm、6本一単位である。内面には灰色のごま降り灰釉が一面にかかる。

348～350は口縁内端が肥厚し、下部の凹みが大きくなるものである。いずれの胎土も精良ではなく、特に350は緻密さが感じられず粗い。349には引き出しの弱い片口が付く。卸し目は348が条を密に施文した幅2.2cm、8本一単位。349が幅2.3cm、9本一単位。350は幅3.0cm、12本一単位であるが、卸目が摩滅した後に内面を叩いて粗くし、再度使用している様子が窺える。

特殊な卸目(351～353) 351・352は同一個体と思われ、幅1.6cm、7本一単位の波状文を施したものである。353は内面に抽象図文もしくは花押状文と思われる曲線文をヘラ描きしたものである。

片口鉢類底部(4・29・65・324・325・354～363) 324・325が捏ね鉢で、それ以外はすべて擂鉢である。底部外面は静止糸切りが大半を占めるほか、縁辺をヨコナデしているもの(4・357・358・360～363)が多く認められる。325は底部外端をヘラ削りしている。

片口鉢では、卸目のないA類としたものが、I期の特徴を備えている。また、櫛波状文を施す351～353は、II期に見られる文様である。口縁端部があまり肥厚せず端部が水平または外方に向くものは(328～339) III～IV期、口縁端部が三角形に肥厚し内面を向くものは、V～VI期であろう。このように片口鉢はI期に定量認められるものの、IV期以降が圧倒的に多いことがわかる。

E 常滑焼・その他(図版84)

常滑焼の出土量は非常に少なく、器種の判明するものは寛に限られる。いずれも破片で口縁付近の残存率が低いため明確ではないが、口径50cmを超える大甕と思われる。器形は大きく張った肩から頸部にかけてすままるもので、367を除いて「N」字状に強く折り返された口縁帯をもち、端部内面には「V」字状の深いくぼみを有する。胎土は368・372を除いて石英・長石粒を多く含み、茶褐色を呈する。

364は体部内面に成形時の粘土紐巻き上げ痕を明確に残し、調整は口縁部から体部外面上端までは比較的丁寧なヨコナデ、体部内面はナデである。外面頸部以下には、緑色の自然釉が厚くかかる。

365は肩の張りがやや弱いものであるが、成形・調整技法などは364と同様である。緑色自然釉がかかるが、口縁下端部内面にも釉が認められることから、焼成時に倒立の状態であったと考えられる。

366は全体に器厚が厚く、口縁部の造りも大振りである。緑灰色の自然釉が頸部から下で認められる。

367は口縁部小片のため不明確であるが、口縁部のひらきは図より大きくなるかもしれない。また、図では口縁上端が収まっているが、実際には折損面が観察されることから短く立ち上がっていた可能性が高い。口縁部外面には緑色の自然釉がかかる。

368・369は底部片である。調整は369の内面で比較的丁寧なヨコナデが施されているほかは、外面はいずれも弱いヨコナデで、底部外面は不調整である。368は胎土に褐色礫粒を多く含み、ほかとは異なる。

370～376は押印が施された体部片である。370・371は粗大な櫛状文に横長の「×」印を組み合わせたもの。372は繊細な櫛状文と「×」印の組み合わせであるが、内外面はハケ状工具によるナデ調整が認められることや橙灰色を呈することなど、ほかのものとは異なる特徴を有する。笹神丘陵を中心とする甕器系陶器連の製品の可能性も考えられる。373・374は格子目文と「×」印の組み合わせ。375・376は同一個体で、細密な櫛状文を帯状に2段押印している。

常滑焼の編年の位置付けを考える上でメルクマールになる口縁部形態をみると、364~366は口縁の縁帯が広く明瞭な「N」字状で、端部内面に「V」字状の凹みが顕著である。これは大甕の生産が大量化する第Ⅲ段階【赤羽1977】に特徴的なもので、13世紀後半から14世紀中頃に位置付けられよう。

F 瓦 器 (図版70・72・74・87・94・158)

器種的には碗・火鉢・風炉・香炉がみられるが、出土量は総じて少ない。従来、「瓦器」という呼称は土師器の系譜を引く碗類に限って使用され、それ以外の器種については「瓦質土器」として区別されることが多かった。しかし、その特質および生産目的はいずれも同じと考えられており【菅原1989】、ここではすべて「瓦器」と称する。

碗 (452~456)

いずれも口径10~13cm程度で、口径部が内湾気味に立ち上がるものである。452は口縁部内面のみに、また453~456は口縁部内面と外面上端にヘラミガキを施す。すべて畿内産と考えられ、所属時期は13世紀後半から14世紀初頭と思われる。

火鉢 (574~581・583~586)

図示したのは口縁部資料のみであるが、形態的にはA~Eの5類に大別できる。胎土は比較的精良で緻密なものから、大粒の砂粒を多く含むものまで様々である。色調は576・580・581が明橙色のほかは、灰白色から黒灰色を呈するものが多い。

A類 (574~578) 内湾して立ち上がる浅鉢形の体部を有するものと思われ、口縁部を内側に屈曲させて端部を水平にするもの。口径は26~37cmで、端部内面は574・577・578のように明瞭に屈曲点をもつものと、575・576のように緩い弧を描くものがみられる。肩部には突帯を2条巡らし、その間にスタンプを連続して押印する。スタンプの種類は花菱文 (574~576)、雷文 (577)、重格子「X」文 (578) がみられる。いずれも器面には丁寧なミガキが施され、574には光沢も認められる。底部外面縁辺の3か所には、猫足もしくは逆台形の足が付くものであろう。

B類 (579~581) 基本的な器形はA類と同様であるが、肩部に突帯を巡らさないもの。口径は26~32cmで、法量的にはA類との差は認められない。器面のミガキも丁寧で、580・581の肩部には抽象化した菊花文のスタンプが押印される。

C類 (583・584) 直線的に立ち上がる体部をもち、ヘラで外面から縦方向に押しつけて体部を輪花状にしたもの。口縁端部は丸く収まるもの (583) と水平になるもの (584) がある。口縁部外面には抽象化した大型の菊花文を押捺し、底部外面縁辺には逆台形の足が付くものと思われる。口唇部から外面にかけてはヘラミガキであるが、A・B類に比べてやや雑である。内面は縦方向のナデの後に、ヘラ状工具により格子目状のミガキが施される。また、いずれにも内面に棒状工具による径9mmほどの孔が斜めに開けられているが、その目的などは不明である。

D類 (585) 体部が筒状に立ち上がり、口縁端部がやや肥厚するもの。口径約31cmで、器厚はほかに比べて薄い。外面から口唇部にかけてヘラミガキで、内面はヨコナデ調整が施される。器面の粗れが著しいことや、外面にスズ状の黒色付着物が認められること、器形を考慮すれば、深鉢としての機能を考える必要があろう。

E類 (586) 長方形の箱形を呈し、体部はやや外傾して立ち上がる。口縁部外面に写実的な菊花文スタンプを押印する。器面調整は全体的に粗く、黒灰色を呈する。底部外面四隅には、逆台形の足が付く。

風炉 (582・587～589)

茶の湯で釜の湯を沸かすための火鉢状の道具で、本遺跡では4点確認されているが、それぞれ異なるタイプである。

A類 (587) 肩の張った広口短頸壺様の器形である。口縁部を短く直立させて、肩部には円形の火窓を開けている。口径約24cmで、口縁部外面から口唇部にかけては丁寧なヘラミガキが施され、色調は燻銀色を呈する。底部縁辺の3ヶ所に、猫足が付くものと思われる。

B類 (588) 広口短頸壺様の体部を有する風炉の底部(円筒形)と思われる。突帯を2条巡らした間に蓮弁文のスタンプを連続して押印し、その上には大型の花文を押捺する。色調は明橙色を呈し、外面は丁寧なヘラミガキを施す。A類とは肩部の突帯の有無や円筒形の底部で異なる。底部には猫足が付くものであろう。

C類 (582) 肩の大きく張る無頸壺様の体部を有し、肩部には格子状開風の火窓が開けられている。口径は約20cmを測り、肩部には抽象化した大型の菊花文を押印する。調整は外面が縦方向の丁寧なヘラミガキ、内面はヨコナデが施される。

D類 (589) 体部内面に髹を巡らすものであるが、全体の器形は不明である。外面に2条の沈線を巡らして、その間に大型の抽象化した菊花文スタンプを連続して押印する。文様帯の下には決りの一部が認められる。外面は縦方向のヘラミガキで、内面にはヨコナデ調整が施される。灰橙色の内面は火熱を受けて変色していることから風炉としたが、ほかの器種の可能性も考えられる。

香炉 (30)

内湾して立ち上がる器形で、口縁端部は角頭状を呈して水平である。口径は約8cmと小型である。口縁部外面には浅い沈線を2条巡らし、その間に横S字状文のスタンプを連続して押印する。口唇部から外面にかけては、丁寧なヘラミガキが施され光沢をもつ。

猫足 (590・591)

火鉢もしくは風炉の底部に付く猫足で、いずれも比較的丁寧なミガキが施されている。色調は灰黒色である。火鉢・風炉などの暖房用具・喫茶用具の生産は、畿内(特に大和国)を中心に14世紀後半から開始されたと考えられている。これらに押印された花菱文の変遷【菅原1989】から考えれば、火鉢・風炉のA類にみられる花菱文は15世紀頃に比定され、口縁部形態の類似する火鉢B類もほぼ同時期と思われる。そのほかの所属時期は不明である。

G 中世土師器 (図版70・72～74・85～93・95)

本遺跡ではかなりまとまった量の中世土師器が出土しているが、器種的には皿のみが確認できる。ここでは非ロクロ成形のもの(A類)とロクロ成形で回転糸切りのもの(B類)に大別し、それぞれ法量ごとに概略を説明した後に、細部の形態および調整技法などから細分類する。(15図)

なお、法量は大きく3種に分けることが可能であり、口径13～15cm、器高3～3.5cm前後を大皿、口径10～13cm、器高3cm前後を中皿、口径8～10cm、器高1.5～2cm前後を小皿とする。

非ロクロ成形(A類) (8・34・37・38・68・70・72・74・81・377～451)

小皿と中皿が認められ、それぞれ口縁部に二段ナデを施すものと一段ナデのものがみられる。

72・74・377～417は小皿である。386は口縁部に二段ナデを行なうが、ほかは一段ナデである。382は焼成後に底部中央を穿孔する。384・403・413は内外面とも黒色を呈するもので、瓦器の小皿を意識したも

のと推定できる。378・387・388・400・412・417は口縁部に、また389は底部内面に炭化物が付着する。

8・34・37・38・68・70・81・418~423・425~451は中皿である。432・434は口縁部に二段ナデを施すが、ほかは一段ナデである。37・68・442・447~451は口径がやや小さく、深身の器形である。423・444・446は灰白色を呈し、ほかと比較すると精良な胎土を用いる。446・448・は口縁部に、434は体部内面に炭化物が付着する。

【分類】

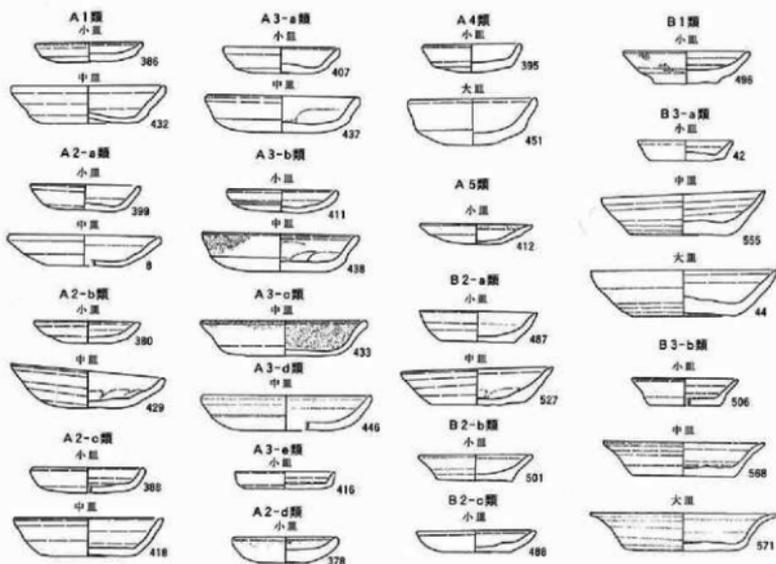
A 1類 口縁部に二段ナデを施すもの。小皿と中皿が確認できるが、本遺跡での出土量は少ない。

A 2類 口縁部に一段ナデを施し、端部が直線的に伸びるもの。口縁部下の外面および底部外面は不調整であり、細部の形態により4種に細分できる。

A 2-a類：口縁端部に面を取るもので、薄手でシャープなつくりのものが多く。胎土の特徴では、中皿には海綿状骨針を含み径1mm前後のチャート・長石を少量含む精良なものが多いが、小皿は径0.5mm前後の砂粒を大量に含みザラついたものが多い。法量的には中皿と小皿が確認できる。

A 2-b類：口縁端部を丸く収め、指頭圧により底部を丸底気味にするもの。海綿状骨針や径0.5mm前後の長石・雲母などを少量含み、しっとりとした感じの胎土が多い。法量的には中皿と小皿が確認できる。

A 2-c類：底部が安定した平底で、断面形が箱形を呈するもの。口縁端部は丸く収める。胎土には海綿状骨針と長石・雲母を少量含み、しっとりとしたものが多い。法量的には中皿と小皿が確認できる。



第15図 中世土師器の器種分類

A 2-d 類：口縁部が内湾気味にのび、底部が若干凹むもの。浅身で器壁は厚手のものが多く、胎土は海綿状骨針以外に混入物が少なく、しっとりとしたものが多い。法量的には小皿のみが確認できる。

A 3 類 口縁部に一段ナダを施し、ヨコナダによって口縁部下端に突出した稜が生じるもの。体部下半と底部外面は不調整であり、細部の形態により 5 種に細分できる。

A 3-a 類：口縁部に面を取るもの。法量的には中皿と小皿の 2 種が確認でき、小皿は一定量存在するが、中皿の出土量は少ない。胎土は径 0.5mm 前後の砂粒を多く含み、ザラついたものが多い。

A 3-b 類：口縁端部を丸く取めるもので、見込みに静止ナダを施すものが多い。法量的には中皿と小皿の 2 種が確認でき、相対的に出土量が多い。胎土は A 3-a 類と同様であるが、中皿には灰白色で精良な胎土のものが一定量存在する。

A 3-c 類：口縁部下端にヨコナダによって生ずる稜がほとんど存在せず、口縁部がやや外反するもの。中皿が多い。出土量は少ない。

A 3-d 類：口縁部下端のヨコナダによって生じた稜が退化し、沈線により稜を表現するもの。中皿が多いが、出土量は少ない。

A 3-e 類：鋭く屈曲する短い口縁部をもつもの。小皿のみが確認され、出土量は少ない。

A 4 類 ほかの類に比べて口径がやや小さく、深身の器形となるもの。口縁部には一段ナダを施す。法量的には中皿と小皿のみが確認できる。胎土には砂粒をあまり含まず、海綿状骨針が入りしっとりとしたものが多い。

A 5 類 口縁部に一段ナダを施し、底部がやや中底気味になるもの。口縁部は外反する。16世紀の京都系土師器の影響下に成立したものと推測する。本遺跡では小皿のみが確認され、出土量は少ない。

口口成形 (B 類) (10・12・35・36・39-45・49-59・67・71・75・457-573)

小皿、中皿、大皿が存在するが、口径 15cm 以上、器高 5 cm の特大皿もわずかに認められる。

35・36・40-42・50-53・67・457-518・520・521は小皿で、精良な胎土で底部外面が回転糸切り無調整のもの (35・36・40-42・50-53・457-481・497-500・505-507)、砂粒を多く含みザラついた胎土で底部外面に板目圧痕を残すもの (482-495・501-504・508-518・520・521) がみられる。51・67・463・467は内外面とも黒色を呈する。40・457-460・472-478・480・498-500は口縁部に炭化物が付着する。

10・12・54-56・58・59・71・519・522-544・545・567は中皿である。精良な胎土で底部外面が回転糸切り無調整のもの (10・12・71・522-525・528・529・532-538)、精良な胎土で底部外面をヘラ状工具でナダるもの (55・56・58・59・544・545)、砂粒を多く含むザラついた胎土で底部外面に板目圧痕を残すもの (526・527・530・531・539-542) がある。543は内外面とも暗灰色を呈する。12・532は口縁部に、528は内面に、539は全面にそれぞれ炭化物が付着する。

43-45・49・57・75・546-566・568-571は大皿で、いずれも底部外面の外縁をヘラ状工具によりナダつける。550-552は口縁部に、569は外面に炭化物が付着する。

572・573は特大皿である。572は口径 15.7cm、器高 4.9cm を測り、口縁端部が外反する深身の器形である。573は口径 19.8cm、器高 5 cm で、外面底部から体部にかけてヘラ状工具でナダつける。

B 1 類

口縁部が内湾気味にのび、底部が若干突出するもの。小皿のみが確認でき、本遺跡での出土量は少ない。平安時代の口口土師器の系譜を直接引くものと推定する。

B 2 類

見込みに静止ナデを施し、底部に板目瓦痕を残すもの。B 1 類と比較すると、底部が大きく低平な器形である。胎土は砂粒を多く含むザラついたもので、A 3-a・b 類と共通する。口縁部の形態から 3 種に細分できる。

B 2-a 類：口縁部が内湾気味に伸びるもの。中皿と小皿が確認できる。

B 2-b 類：口縁部が外反するもの。小皿のみ確認できる。

B 2-c 類：口縁部は内湾するが、B 2-a 類に比べて器高が高い。小皿のみ確認できる。

B 3 類

内面に密で明瞭なロクロ目を残すもの。B 2 類と比較すると、見込みから体部内面にかけての立ち上がりシャープである。口縁部の形態により 2 種に細分するが、いずれも混入物の少ない粉っぽい胎土で、色調は灰白色を呈するものと赤味を帯びるものがある。

B 3-a 類：口縁部が内湾もしくは直線的に伸びるもの。法量的には大皿・中皿・小皿のほか、口径 20 cm 前後の特大皿も存在する。小皿の底部外面は回転糸切り無調整、大皿は底部外面の外縁をヘラ状工具によりナデつけている。中皿の底部外面の調整には、両者が確認できる。

B 3-b 類：口縁部が外反するもので、大皿・中皿・小皿が確認できる。底部外面の調整は B 3-a 類と同様である。

ロクロ成形の B 類は、遺構で一括出土が見られる (572 号土坑)。共存した青磁盤は、15 世紀頃の年代が考えられる。また、553 号土坑でも全て B 類あることから、この時期、中世土師器は B 類で占められている可能性がある。この B 類は、長岡市三貫梨遺跡でもまとまった出土があり、15 世紀代とされている。このことから当遺跡の B 類を 15 世紀代としておきたい。非ロクロの A 類については、A 2 b 類が、吉川町樋田遺跡、柏崎市小児石遺跡等で出土があり、13~14 世紀代の年代が与えられている。またこれより身の深くなる A 3 類等も、前述の遺跡で認められ、同年代が考えられる。A 4 類としたものは、より深いものであるが、吉川町樋田遺跡に類例がある。A 5 類とした 412 は薄いつくりの皿で、これのみ 15 世紀後半から 16 世紀前半に位置づけられる。このように、中世土師器は、13~14 世紀が非ロクロ系の A 類が、15 世紀にはロクロ系の B 類と著しい変化が認められる。

H 墨書土器 (図版 95)

中世土師質土器皿に墨痕が認められる。

592~594、596~599 は文字の判読ができない。600 は榎木鉢状に底部中央の円形穴が認められ、現代の可能性もある。カタカナの「ク」であろうか。595 は底部両面に文字が認められる。内面の文字は当初「佐己」かと認識したが、「佐」の解は「御」の方が妥当性があること、「己」は己の左側にも墨痕があることから、扁が欠落している別字と推測される。よって「佐己」と判読することは難しい。

3 縄文・弥生・古墳時代の遺物

古代・中世の遺物のほかに、縄文時代から古墳時代にかけての遺物が出土している。これらの出土量は非常に少なく、平箱で 1/4 箱程度である。遺構に伴うものは認められず、すべて遺物包含層などから単発的に細片となって出土したものである。この時期の遺物は調査対象地域域外からも採集されており、該期

の遺跡の中心は調査範囲外に存在するものと思われる。

A 縄文時代 (第16・17図、図版96)

縄文時代の遺物には土器と石器があり、土器は中期前葉のものと同後期中葉のものがある。

土器 (図版96 1~7)

1は縄文地に半截竹管で格子目文と綾杉文を施文する。色調は灰黄色を呈し、焼成は良好である。胎土には雲母・砂粒を含む。中期前葉と思われる。2・3は同一個体と思われるもので、羽状縄文地に幅2~3mmほどの浅い沈線で区画文が描かれ、内部の縄文を磨り消している。黒褐色を呈し、焼成はやや良好である。後期中葉と思われる。4~7は燃糸もしくは縄文が施文された粗製土器で、いずれも詳細な所属時期は不明である。4・5は同一個体と思われ、燃糸を施文する。にぶい褐色を呈し、胎土には雲母を含む。6はL R縄文を施文し、胎土には小礫を含む。7はR L縄文を施文し、胎土に雲母・砂粒を含む。

石器 (第16図 49~51、第17図 52)

49は斑縞岩製の磨製石斧であり、形態的には小千谷市城之腰遺跡のI群1 [藤巻1991]に類似する。刃部が急角度であることから、折損したものを再生使用したものであろう。全体に風化が進んでいる。

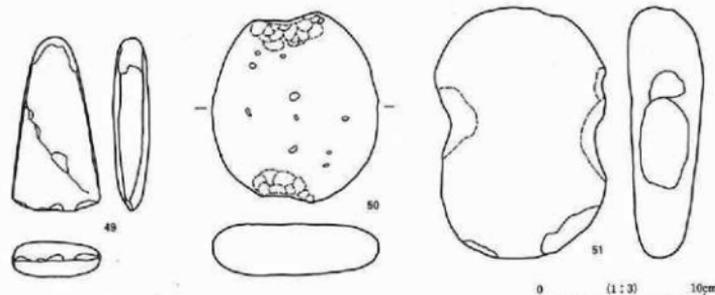
50・51は扁平楕円形の礫を素材とする安山岩製の石鐮である。50は長軸両端に両面からの剥離により繩かけ部を作り、剥離内部を敲打によって調整している。51は短軸両端に大振りな剥離を施して繩かけ部を作り剥離内部を磨いている。いずれも表面にススが附着している。第17図52は硅化玉髄製の有蓋石鏝 (両面調整)で、柄部がやや広がる長い二等辺三角形形状を呈する。長さ2.9cm、最大幅1.0cmを計る。

B 弥生時代 (図版96)

弥生時代の遺物は土器のみであり、器種には甕・器台などがみられる。所属時期は中期後半および後期後半に分けられる。

土器 (8~15)

8・9は中期後半のものである。8は口縁が大きく外反する甕の口唇部片で、端部には櫛歯状工具による刻目が施され、口縁内面には三角形の刺突文を2段にわたって施文する。色調は褐色を呈し、焼成は不良である。内面にススが附着している。9は甕の頭部片で、櫛歯文系の土器である。横位に山形状の沈



第16図 縄文時代の石器実測図

線が引かれる。色調は黄灰色を呈し、焼成はやや良である。

胎土には砂粒を含む。8は北陸地方の小松式土器、9は東北地方の天王山式土器に系譜が求められるものであろう。

10～15は後期後半の土器で、10～14は甕である。10は口縁部が緩く外反し、肩部は丸く収まる。内外面ともヨコナデを施し、にぶい黄褐色を呈する。胎土には雲母・小礫・砂粒を含み、焼成は良好である。外面の一部にスガが付着する。11は口縁部に面をもち、下端がやや垂下する。内外面ともヨコナデで、淡黄色を呈する。胎土には径1～2mmの砂粒を多く含み、焼成はやや良好である。外面にはスガが付着し、鼠歯状痕が顕著である。12は口縁端部が揃み上げられ、面をもつものである。端部内面が若干凹む。内外面ともヨコナデを施し、灰褐色を呈する。胎土には小礫を含み、焼成は良好である。13は頸部が「く」字状を呈し、口縁部は中位で屈曲して受口状である。最大径を口縁部に有する。口縁部から頸部内外面とも強いヨコナデを施し、胴部外面はハケ、内面にはヘラ削りが施される。色調は浅黄褐色で焼成はやや良好、胎土には小礫を含む。口縁部の一部と胴部外面にスガが付着している。14は二重口縁を呈し、口縁部に浅い凹四線を施す。色調は灰褐色で胎土には雲母・砂粒を含み、焼成は良好である。

15は有段の器台脚部で、内面はヨコナデ、外面はミガキが施される。色調は浅黄色で、胎土には雲母・砂粒を含み焼成は良好である。

C 古墳時代 (図版96、第17図)

古墳時代の遺物には土師器・須恵器・玉類が認められるが、土器でみる限り前期から後期までかなりの時期幅をもっている。

土師器 (図版96 16～23・28～30)

16・17・22・23は高杯である。16は柱状の脚部に水平に近い杯部をホソの嵌入によって接合する。脚部内面に接合痕をとどめる。胎土には雲母・砂粒を含み、焼成はやや不良でにぶい褐色を呈する。杯部内面と口唇部欠失後の断面にスガが付着していることから、灯明皿として再利用された可能性がある。柱状を呈する高杯型土器の脚部である。17は脚部が「ハ」字状に開き、裾部が強く外反する。内外面ともハケ目痕をとどめるが、ナデ調整である。胎土には雲母・砂粒を含み、焼成は良好で浅黄褐色を呈する。径1cm前後の透かしを3か所持ち、外面に赤彩が施される。22は太身中膨らみ状を呈し、急に屈曲して裾部に至る。内面にしほり痕をとどめる。胎土には白色砂粒を含み、焼成はやや不良で浅黄褐色を呈する。外面にはスガが付着する。23は末広がりとなるもので、杯部との接合はホソの嵌入であらう。内面に横位の調整痕が溝状に残る。胎土には雲母・砂粒を含み、焼成は良好で浅黄褐色を呈する。所属時期は、いずれも中期前半と考えられる。

18～21は小型器台である。18は内湾して立ち上がる杯部である。内面はナデで外面はハケの後にミガキを施す。内外面ともに赤彩される。胎土には雲母・砂粒を含み、焼成はやや良好である。19～21は脚部である。19～21は受部が「く」字状に屈曲し、脚部は「ハ」字状にひろく。19・21は径1cm前後の透かしを3か所持ちのものであろう。また、20・21は受部内面と脚部外面に赤彩が施されている。20は脚部内外面ともハケ調整である。胎土には砂粒を含み、焼成は良好でにぶい黄褐色を呈する。21は外面ミガキ、脚部内外面ハケ調整である。胎土には径1～2mmの砂粒を含み、焼成は良好でにぶい黄褐色を呈する。19は内外面ともヨコナデである。胎土には雲母・砂粒を含み、焼成はやや良好で浅黄褐色を呈する。所属時期は、いずれも前期と考えられる。

24~26は菱形土器である。24は直線状に立ち上がる口縁部で、あまり張らない胴部が続くものと思われる。口縁部内面と胴部外面にハケ目痕をとどめる。色調は黄褐色を呈し、焼成はやや良好である。25は胴上部以上を欠失するもので、平底の底部からあまり張らない胴部をもつものであろう。底部と胴部の接合部は、ハケの後にナデられている。胴部内外面と底部外面にハケ目痕を残す。胎土には径2~3mmの小礫を含み、焼成は良好で浅黄褐色を呈する。胴部内外面の一部にススが付着している。26はほぼ完形で、左右非対称のプロポーションをもつ胴部に、緩く外反する口縁部がつく。底部は平底で、口縁部内外面ともヨコナデである。胴部内外面ともハケ目調整を施す。胎土には小礫を含み、焼成はやや良好で褐色を呈する。口縁部と胴部外面の一部には、ススが付着する。

須恵器等 (図版96 27~30)

27~29は口径13.1~14.1cm、高さ4cm前後を測る杯蓋であり、天井部は回転ヘラ削り、内外面とも口クロナデである。27は天井部が凹み、口縁部が外反気味である。胎土には黄白色砂粒を含み、焼成はやや良好で黄白色を呈する。28はほかと比べて器壁が厚い。胎土に黄白色砂粒を多く含み、焼成は良好で灰色を呈する。29は薄手のつくりで、胎土に砂粒・小礫を含み、焼成は良好で暗灰色を呈する。

30は杯で、口径13.1cmを測り、立ち上がりと受部とが1条の沈線で区画され、上端はやや外反して丸く収まる。底面は回転ヘラ削りである。胎土には白色砂粒を含み、焼成はやや良好で淡灰色を呈する。胎土の特徴から加賀産と考えられる。TK47~MT15形式と思われ、6世紀前半の年代が与えられる。

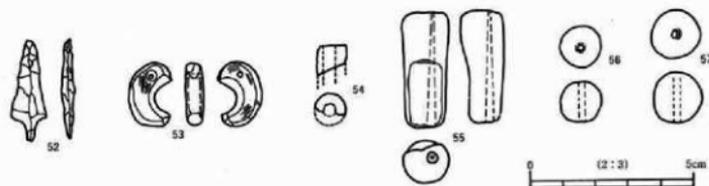
玉類 (第17図 53~57)

勾玉・管玉・丸玉が存在する。53は滑石製の勾玉で、研磨痕を側面の頭部から腰部にかけてとどめる。両面穿孔である。54・55は太型管玉で、55は正面に下端面からの階段状剥離面が残っており、そのまま研磨して仕上げている。孔径が上部に向かって細くなっており、下部方向からの一方方向穿孔を窺わせる。上端面にはわずかながら貫通剥離が認められる。石質は54が凝灰岩、55が碧玉である。56・57はガラス製の丸玉で、56は乳白色、57は暗緑色である。

4 その他の遺物

A 土製品 (図版97~99)

土錘・紡錘車・支脚・羽口・土器片円盤などがみられるが、大半が包含層からの出土で詳細な所属時期は特定できない。



第17図 石錘・玉類実測図

土鍾 (1~22・25・26・28)

土師質の土鍾であり、越後では平安時代以降の遺跡に多量に出現する。漁撈用網の鍾として使用されたものが主で、形状的には管状を呈し、細型・中型・太型の3種が認められる。いずれも粘土を芯棒にからめ、掌指によって掘り成形するものである。その際、ただ単に粘土塊を芯棒にからめて掘ったもの(22)、ねじりを加えたもの(2・3)、粘土板を巻きつけることによって体部中央の罫線が鈍角となって膨らむもの(2・17~20)などがある。芯棒の抜き取りはひねり抜きのもの(10・17)が少なく、直線抜きのものが多い。両端面は平坦に成形されているもの(2・3・5・7・11・17~20)があり、器面がナデ・ミガキによって調整されているもの(18~20)もある。また、全体的に被熱頻度が高く、赤変・黒変したもの(1・4・11・18)、ハジケが生じているもの(5・10・17)、黒色の付着物が認められるもの(21)もある。

なお、25・26・28は漁撈用釣針の鍾として使用されたものと思われるが、28は円形扁平であることから紡錘車の可能性も考えられる。25・26は扁平球状を呈し、中央には円孔が穿たれている。両端面は丁寧に調整されている。

紡錘車 (23・24・27)

23・24は土鍾を加工して紡錘車に転用したと思われるものである。23は太型の土鍾の体部に擦り切り溝を全周に入れて、両端を切断除去したものである。24は中型土鍾の体部両端を折り取った後に、両端面を削って滑らかにしている。27は芯棒に粘土をからめて断面台形に成形したもので、上下端面を平坦にして全面にミガキを施して滑らかに調整している。

支脚 (31~42)

すべて土師質で、形類的には円柱状のもの(31・33・34)、器状のもの(32・35~38)、円筒状のもの(39~42)が認められる。円柱状のものを除いて、器面の調整はハケ目が施されている。

円柱状のものはほぼ台形に成形され、器面はナデ調整である。いずれも被熱しており、31は黒色、34は赤色に変色している。31は4号住居のカマド、33は3号住居、38は2号住居から出土している。

器状のものはコップ形で粗い輪積みで成形され、厚く平坦な底部と口縁をもつ。器面には縦位のハケ調整が施されて、内面は輪積み頂を指頭で軽く押えた凹凸が明瞭に残る。正立もしくは倒立で使用されたものと考えられるが、製塩の最終工程である煎熬・焼塩の器の可能性もある。

円筒状のものには細型と太型の2種が認められる。39は厚い体部に平坦な底部を有するもので、底部には棒抜きによる細い孔が開けられている。被熱剥落して器面は荒れており、調整は不明である。40~42は太めの円筒状を呈し、外面はハケ調整、内面はナデ調整されているが輪積み痕が残る。接地面は平坦で、いずれも体部より厚くなっている。42は体部に複数の円孔が穿たれており、接地面の端部は内側へのびて嘴状である。

羽口 (43~47)

フイゴの羽口で、直径は6~8cmとおおむね一定である。43は先端を欠失しているが、そのほかは高熱によりガラス化している。通風孔は棒抜きによるが、捻り抜きのもの(43・46・47)と直線抜きのもの(44・45)が存在する。外面はナデ調整され、胎土には細粉を多く含むもの(43・46・47)、若干のスサを混入して良く練ったもの(44)、砂粒を多く含む軟質なもの(45)がみられる。

土器片円盤 (48~133)

粘土から直接成形したのではなく、土器片(陶器を含む)を再加工したものである。県内でも中世の遺跡から出土するケースが多く、特に室町時代前半の遺跡で顕著である。本遺跡では土師器(48~65)、須

恵器 (66-77)、珠洲焼 (78-126)、瓦器 (129-130・133)、常滑焼 (127・128・131・132) を素材とするものがみられる。量的には珠洲焼が圧倒的に多く、瓦器・常滑焼は少ない。利用している破片の部位としては甕の胴部片が多く、中には珠洲焼の片口鉢体部片も見られる。

平面形は円形や四角形、多角形で大きさも直径1~4cmと様々であるが、径が小さいものほど円形を呈するものが多い。縁線は片面あるいは両面から剥離されているもの、全周に磨面があるもの、剥離面と磨面が混在するものがある。

土器片の周縁を二次的に加工して円盤状にしたものは、縄文時代の遺跡でも多く出土している。縄文時代のものは研削具 [藤巻1989] と考えられているが、中・近世の遺跡から出土するものについては諸説がある。形態から祭祀的な遺物とする説やおはじきや石蹴り具など玩具とする説のほか、泥めんこの一種とする説、紡錘車説、漁撈錘説などがある。また、機能面から灯明皿の灯芯を押える重し説 [兼康1988] などがあるが、未だ用途が不明確な遺物である。

その他 (29・30)

29は球状を呈した粘土塊であるが、焼成の痕跡はない。灰色を呈し、表面には鉄分の付着と鼠歯状痕が認められる。30は断面が長方形で、上面に向かって細くなり端部は丸く収まるものである。全面にハケ調整が施されている。支脚の一種とも考えられるが定かではない。

B 石 製 品 (図版100・101)

硯・石臼・石鉢・五輪塔のほかに、砥石・軽石製品などが出土している。完存品はほとんどみられず、細片化しているものが多い。

硯 (1-9)

完形をとどめるものはなく、いずれも破砕している。9を除いて長方硯で、小型のものと大型のものが見られる。1・2は小型で、1は陸の下方が木瓜状に、海の上方は円弧を描くように削り出されている。2は表面にも硯面のあるもので、表裏の硯面が同一方向ではなく90°ずれている。石材は安山岩である。3~8は大型の長方硯である。3の両側面は上方へ開き、逆台形を呈する。5は陸の右隅部分で、陸の下方は円弧状を呈するものと思われる。縁帯には細い1条の沈線が通っている。側面はほぼ垂直に立ち上がる。8は海の左隅部分で、木瓜状に削り出され、上面には波頭文が刻まれている。7は表面の左右に硯面があるもので、左側の硯面には海・陸が備わっているが、右側の硯面は平坦で海・陸の区別が認められない。縁帯には細い1条の沈線が通り、一部に波頭文が刻まれている。側面および底面は研磨され、底面にはノミ痕が残る。9は上面が剥落し海のみが残っている。形態的には長方硯のように一定せず、上面および右側面が研磨され、左側面および底面は破損している。海の上方は円弧を描くように削り出され、硯面の大きさから小型のものであろう。石材は2を除き堆積岩系の石を使用している。

球状製品 (10)

青緑色の凝灰岩を扁球状に研磨したものであるが、上部の平坦面は磨かれておらず、深さ約1cmの円孔が穿たれている。

紡錘車 (11)

上面は甲盛で、下面が平坦な紡錘車である。孔は両側穿孔で、全面研磨されている。

浮子 (13-15)

13は下半が欠失しているが、扁平な円盤の中央部に大小2個の孔が貫通している。また、裏面にも2か

所に貫通の孔が認められ、左側面には磨擦による平坦面が観察される。14は扁平円礫の短軸両端に、削りによって切り欠きを作り、ほぼ全面に磨擦面が認められる。15は円礫の側面に円孔ないしは抉りを入れたものである。側面には平坦な磨擦面がある。石材は3点とも軽石で、水に浮かべると全体の1/3が水面上に出る。2個の孔が貫通していることや抉りが入っていることから、浮子として使用されたものであろう。孔および抉りは、縄かけ部と理解される。

石臼 (16・17)

2点とも穀磨臼の小白であり、供給口は上面では四角状を呈し、片側が開いているが途中から円形となって細くなる。下面は内湾し、溝が刻まれているが磨滅している。特に供給口の下端部付近の溝は潰れている。側面には方形の枘穴が認められる。17の底面は著しく磨滅しており、部分的に溝が観察される。2点とも安山岩製である。

石鉢 (18・19)

2点とも石材は三和村で産出する大光寺石と呼ばれる凝灰岩で、成形時のノミ痕が顕著に残る。18は平底の底部で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は平坦である。内面は口縁部を除き滑らかに磨滅し、摺鉢と同様に使用されたものと思われる。19は平面形が方形を呈し、底面の四隅には脚が付くものである。

五輪塔 (20~22)

20は一石で作られた空風輪で、空輪の頂部は欠失している。ホゾは認められずやや内湾し、成形時のノミ痕が残っている。21は胴部中央に最大径を有する水輪である。上下面はやや凹み、ノミ痕が残る。被熱して破砕しており、1/5程度の遺存である。22は地輪で、下面に敲打剥離痕が残る。ほかの面は円滑に仕上げられている。石材はいずれも大光寺石で、種子は認められない。

砥石 (23~30・32~54)

23~29は転用砥石で、素材は28・29を除いて珠洲焼片を利用したものである。23~27は珠洲焼の妻ないしは蓋片利用で、磨面を破片の周縁のみにもつもの(23~26)と破片周縁と器面にもつもの(27)がある。28は回転糸切り痕を残す底部片で、側面が磨滅している。29は中世末期の摺鉢片と考えられ、上面と右側面が磨滅している。

30・32~54は角柱状もしくは板状の砥石で、石材は凝灰岩・粘板岩・砂岩がみられる。成形技法には、端面の観察から鋸で切ったもの(33~37)、敲打剥離によるもの(50)が認められる。また、成形後に研磨によって調整するもの(48)と刃物により削りが施されるもの(51)もみられる。使用部位は角柱の4面が基本であるが、端面を使用したもの(34・40・45・46)もある。

砥石の基本形態は角柱状を呈する。使用の結果、表裏面および両側面が砥磨面として使用され、中央部が細くなる一群と、表面および側面が砥磨面として使用され、中央部の幅が変わらずに厚さのみが薄くなる一群がある。前者は手持ち砥石として鎌などの砥磨に用いられたものと思われる。後者には38・48・50・51などのように幅で深い溝などがあり、置き砥石として先端の尖った工具などを砥磨したものであろう。また、折損部をさらに磨き、砥面としているもの(33・43)もある。砥磨方向は左上から右下方向のものが大部分で、上下方向のものも認められる。47の上部には円孔が穿たれている。

その他 (12・31)

12は凝灰岩の自然礫片で、正面の原石面に3か所の円孔が認められる。いずれの孔も貫通はしておらず、孔底は丸い。穿孔痕が明確でないため自然の孔の可能性もある。31は細長い小礫を研磨して舟形に成形し

たもので、長軸の上下端近くに細い擦り切り溝を同一方向から入れている。下端は擦り切り溝の部分で折損している。

C 金属製品 (図版70・71・102~104)

古代から中世の遺物と考えられるが、その所属時期を明確に把握することはできない。金属製品のうち、銅製地鎮具(一拵)や銅製花瓶を除く大半のものは遺物包含層からの出土である。銅製品と鉄製品に大別されるが、銅製品は装飾品に、鉄製品は実用品に大きく偏る傾向がある。

銅製品 (図版102-1~36)

器種には帯金具や留具などの各種金具類や刀装具・煙管・鏡・仏具などがあり、材質的には金銅製と青銅製が認められる。また、鍍金されているものは大半が剥落しており、痕跡をとどめているものは少ない。

帯金具 (1) 小型扁平の銅鍍丸磨である。三隅には裏面から打ち抜いた小孔があるが、周縁のガジリによって孔は欠損している。正面は滑らかであるが、裏面中央には縦位の凹みが残っていることから、成形時に敲打を伴ったものと思われる。

留具 (2~6) 2は無文円形の留具で、裏面に格子刻みの円形鉄と被留の銅板片が残る。3~5は文様が施され、装飾性が高いものである。3・4は笠形を呈し、3の上面には草葉文、4には双鶴文が彫り出されている。5は全体に鍍金されており、放射状に刻みを施した円板を3枚重ね、頂部は半球形の鉄で円板3枚を貫いている。鉄の断面は方形で、先端は二股に割れている。6は半球形の体部に扁平な縁がつき、縁には細かい刻みが施される。体部には2個の半月形が穿たれている。

刀装具 (8~11) 8は黄金具である。9は鞘口金具で、側面には小孔が穿たれている。10は舟形の切羽、11は鞘金具ないしは黄金具と思われる。これらはいずれも鍍金されていたものと思われるが、現状ではその痕跡は認められない。

飾金具 (7・12~18・24) 飾金具と思われるものであるが、詳細な用途などは不明のものが多く、7は細い銅線の途中に青色のガラスを膠着させたものである。12の形態は楕円形を呈するものと考えられ、断面も楕円形で厚い。13は薄い銅板を波形に打ち出し、眼鏡状に中央部を折り曲げたものである。上下端の中央には山形の切り込みがあり、その両側には2個一対のハート形の小孔が穿たれている。左側の表面には、鍍金の痕跡が残っている。14・15は環状のものである。14は断面が薄い板状で、15は円形を呈する。16は平面形が紡錘状を呈し、側面はわずかに湾曲する。上下および四周とも円滑に仕上げられ、中央部に2個の孔が穿たれている。17は平面形が「U」字形を呈し、上端部が平に広がることから、引出の把手と思われる。18は「L」字形に折り曲げられ、端部近くに方形の孔が穿たれている。24は断面「U」字形を呈し、側面の上下端は内側に幅広となって小孔が穿たれている。

鏡 (19~21) 丸い笠をもつもので、軸の断面はいずれも方形である。19・21の軸先端部は、5と同様に二股に割れている。20の軸先端部には小孔が穿たれ、笠の側縁部はやや潰れていることから、鏡以外の用途も考える必要があろう。

締金具 (25) 刷毛の締金具である。扇形を呈するもので、上端の2本の釘で木柄に固定し、下端の袋部で毛束を束ね締めるものであろう。正面の中央部には、小さく数字の「9」が陰刻されている。近・現代のものである。

受金具 (26) 浅く扁平な皿状を呈し、中央に円形の小孔が穿たれている。燭台のロウを受ける皿と考えられる。

煙管 (27-35) 27・28は羅字を二分した際に用いた鍍手金具で、厚手の張合わせにより上下両端が若干膨らみ、玉縁状を呈している。29は細い首のつく火皿で、内面にはヤニが付着している。30は厚手の雁首で、正面に白銅象嵌の装飾が施されている。31は潰れているが、張合わせは正面にある。32-35は吸口で、いずれも正面で張合わせている。32-34は薄手、35はやや厚手の銅板を使用している。

鏡 (36) 打ち出しの鏡片で、口縁は丸く外側へ折り曲げられている。体部には2条一対の浅い沈線が2段施されている。破片であり歪みも激しいことから、口径などは不明である。

その他 (22-23) 用途不明の銅製品である。22は断面が方形で、上端面は挫られて先端部には湯口痕が残る。全体的に被熱しており、滲が付着している。上端面の擦り切りは二次的に行なわれた可能性がある。釣手金具とも思われるが、詳細は不明である。23は断面が四角で、下端は被熱して溶けている。4面のうち2面が挫れて丸みを持ち、鍍金が部分的に残っている。

仏具 (図版70-9・図版71-16-27) 仏具としては、花瓶・五鈴鈴・飯食器・六器がある。いずれも土坑内から出土したもので、16-27は54号土坑から一括出土している。9は68号土坑出土の花瓶である。頸部は長く、口縁は直立して口縁帯をなしている。体部は倒卵形で、高台は「ハ」字状に広がる。口縁帯には2条の細い沈線が、頸部には2条の紐帯が、また肩部および体部には手持3条の紐帯が巡っている。底部には木栓が詰められていた。

18-27は古瀬戸四耳壺 (図版71-15) の中に収納されていたものである。16の五鈴鈴と17の舌は壺の外側に置かれていた。16は把部と鈴身を別々に鍛造して接合した五鈴鈴で、鈴部の中鈴は断面方形で下部には筋がある。脇鈴には高さのない嘴形がつき、脇鈴間には縦の樋が刻まれている。把部中央には4個の鬼目が力強く描かれ、その上下には蓮華文が配されている。また、要所は2条の紐帯で締められている。鈴身はナゲ肩で下部は外側に広がり、胸ノ爪も厚い。鈴身上半には蓮華文・珠文・紐帯が巡り、中・下半には手持3条の紐帯が巡っている。鈴身内面上半には把手の差し込み部が見られ、舌の釣手金具は欠損している。裾部内面はかなり摩滅しており、長期間にわたって使用されたものと思われる。外面には墨痕のある和紙が付着している。17は五鈴鈴の舌である。形状は上半が薄く下半が乳房状を呈し、上半には円孔が穿たれている。18は9より小型であるが、ほぼ同形の花瓶である。口縁帯には2条の細い沈線が、頸部には2条の紐帯が、肩部および体部には手持3条の紐帯が巡っている。底部には木栓が詰められていた。

19-21は素文の飯食器である。19は脚部裾が単純に広がるもので、器体の厚さは20・21と比べて薄い。20・21は杯部下半に稜があり、脚部の裾は段を持って広がる。2点とも脚部上半には2条の紐帯が、裾には2条の細い沈線が巡っている。

22-27は六器で、小鏡 (22) と台皿 (23-27) がある。22は口縁が嘴状に外方へ開き、腰が張るものである。高台はほぼ垂直で、厚く鑄出されている。23-27はほぼ同形で、内面には界帯が巡っている。いずれも素文で、高台は高く厚い。一部に鍍金が残っているものもある。

54号土坑から出土した仏具は密教法具であるが、壇供としては類量・種別で異なっている。本例の場合は台皿が5枚あることから、花瓶・飯食器・小鏡とセットとなることを意識して収納されたものと思われる。これらの仏具は、古瀬戸四耳壺の口頸部を意図的に打ち欠いて収納されたもので、壺は漆で接合されている。なお、五鈴鈴は壺の上に載せられていた可能性が考えられ、出土状況から地鎮具として使用された後に埋納された可能性が高い。

鉄製品 (図版103・104-37-99)

短刀・刀子・鑿・釘・鋸などが出土しているが、銅製品と比べて日常生活に密着したものが多く、全体

の形態を把握できるものは少ない。

短刀 (37~42・50) 平様平造りであるが、全体の形状を把握できるものはない。37は両側を備え、身は22cmを測る。茎は目釘穴の位置で折損している。38は切先・茎の大部分を欠失している。40は茎に柄の木質部が残っており、裏面で柄の差し込み範囲が明瞭に認められる。42は全体が若干細身で、上下端を欠失している。39・41・50は茎の部分片で、41には縦長の穴が3か所に穿たれているが、当初からのものかは不明である。

刀子 (43~47) 43は細身の刀子と考えられ、茎の大半を欠失している。44は薄手の茎で、木質部が残っている。45~47は茎の部分片である。

鎌 (48・49) 断面形は上半部が方形、下半部が円形になるもので、鉄鎌の茎部と考えられる。48には鋭抜きがある。

刀装具 (51) 卵形の鞘金具もしくは貫金具と思われるが、詳細は不明である。

鑿 (53・54) 53は上部は袋状になって方形を呈し、表面で合わせ閉じになっている。袋の内部には木質が遺存している。身は反り、先端部は薄く刃部となっている。54は幅広の刃部先端部を欠失しているが、柄を残している。

鎌 (55) 小型の鎌で、背から刃部への湾曲は少なく、茎は欠失している。

鍔 (56) 比較的大型の和鉄で、把部と刃部の境には段がない。切先は丸く取められ、柄は明瞭で刃部角も急である。

熊手 (57) 二股の熊手で、先端部は欠失している。茎は長く、途中に木製の柄を固定する円形の締金具が付いている。

おろし金 (58) 板状の鉄板に小孔を穿ったもので、表面に押し出された鉄板は3片にめくれている。

灰均し (59) 扁平な鉄板で作られた灰均しで、柄の頂部は山形をなし、先端部の刃にあたる部分は欠失している。

吊金具 (60) 上端が環状に丸められ、下端は「L」字状に折り曲げられている。断面は方形で、先端部は欠損している。

環 (61~64) 環状の製品で、61~63は円形、64は楕円形を呈する。断面はいずれも円形で、太いものと細いものがある。61・62の接合面は銀継ぎされている。用途は不明である。

引手金具 (65・66) 箆筒の引手と思われるものである。65は断面円形で中央部が太く、両端ほど細くなって端部は内側へ折り曲げられている。66は中央部の断面が方形で、側面は板状を呈する。側面には方形の窓が開けられている。

標番 (67~70) 67・68は断面円形で、「L」字形に折り曲げたものである。69は標番の受金具で、受部の断面は楕円形、釘部の断面は長方形である。先端ほど薄く尖っている。70は入金具で、環が付いている。

懸 (71~73) 71・72は断面が長方形、73は方形で、折曲部から先端部まで同様な断面形態をなし、細くないしは薄くなって先端部に至る。

釘 (74~86・88) 大・中・小の3種があり、いずれも頭部は折り曲げられている。

楔 (87・89) 頭部は打たれて潰れている。2点とも断面は長方形で、先端部ほど薄くなっている。

小札 (90) 表面から裏面に向かって小孔が穿たれている。

飾り釘 (94) 飾り釘の頂部と考えられるもので、平面は四葉形を呈し、頂部は甲盛りとなっている。釘部は欠落しており、痕跡が裏面に残っている。

火打鎌(95) 笠形に鍛造した扁平な鉄板で、両端は曲線を描いて上方に反るものと思われる。中央山形の頂部に1孔を穿ち、銅製の環が付されている。断面は下縁に向かって厚みを増す。

縛金具(96-97) 断面長方形、形態は円形ないし方形を呈し、非常に薄く仕上げられている。何らかの柄を固定する縛金具と考えられる。

鎖(98) 断面円形で、形状は歪んでいるが楕円形を呈していたものであろう。接合面のつなぎ痕はなく、鎖の輪と考えられる。

鈴(99) 扁平球形状の鈴で、上面には鋳の痕跡がある。側面には接合痕が残り、体部中央から下部にかけては円形の目があり、口が開いている。

その他(52・91~93) 52は柄の把部と考えられる。背は水平で、柄頭は環状を呈している。断面は長方形で、木質部の付着などはない。91は菱形の鉄板に吊手状の突起を付したもので、縛金具の一部とも考えられる。93は「L」字形の金具で、断面は扁平な長方形を呈する。箱物の角飾りであろうか。

D 銭貨(図版105)

銭貨は江戸時代の寛永通寶を含めて、総数382枚が出土している(第1表)。このうち、271枚が中国からの渡来銭で、漢銭の五銖銭から明銭の水滸通寶まで見られる。銭種は35種を数え、書体も真書・篆書などがあることから、さらに多くなるものと考えられる。最も多い銭種は皇宋通寶で39枚、次いで熙寧元寶35枚、元豊通寶33枚などで、全体に占める割合は皇宋通寶10.2%、熙寧元寶9.2%、元豊通寶8.6%である。時代別に見ると北宋銭が227

枚で約59.4%を占め、以下、唐銭が20枚で約5.2%、明銭が16枚で約4.2%になる。なお、銭名不詳とした一群が83枚あるが、無文銭・鉄銭6枚を除く77枚は、書体などから渡来銭と判断され、これを加えると渡来銭は348枚となる。

銭貨の出土状況は、寛永通寶や近代銭が表土から出土しているのに対して、渡来銭はすべて遺物包含層からの出土である。明確に遺構に伴うものは確認されず、単独もしくは2~3枚重なって出土するものが大半である。また、東西に延びる木崎山の南側と北側では、銭種の分布に若干の相違が認められる。南側では192枚の北宋銭が出土してい

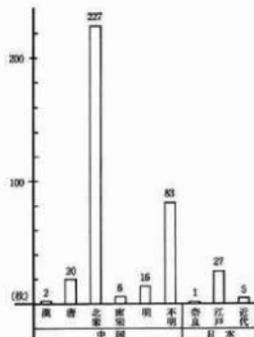
番号	時代	銭種	初出年	書体			合計	割合	備考
				真	行	篆			
100	唐	乾元重宝	706	1			1	0.3%	
101	唐	高宗	長118				2	0.6%	
102-103	漢	五銖	621	20			20	5.2%	
104	北宋	聖宗元寶	960	21			21	5.5%	
105	北宋	太平通寶	976	2			2	0.5%	
106	北宋	祥符通寶	960		2		2	0.5%	
107-108	北宋	景祐通寶	955	1	1		2	0.5%	
109	北宋	咸平通寶	955	3			3	0.8%	
110-111	北宋	聖母元寶	1004	4			4	1.1%	
112	北宋	祥符通寶	1008	4			4	1.1%	
113	北宋	祥符通寶	1008	6			6	1.6%	
114	北宋	天禧通寶	1017	4			4	1.1%	
115-116	北宋	天聖元寶	1023	5	7		12	3.1%	
117	北宋	明道元寶	1025	2			2	0.5%	
118	北宋	景祐通寶	1034	2			2	0.5%	
119-121	北宋	皇宋通寶	1038	20	19		39	10.2%	
122-123	北宋	至和元寶	1054	1			1	0.3%	
124	北宋	嘉祐通寶	1056	2			2	0.5%	
125	北宋	嘉祐通寶	1056	3			3	0.8%	
126-127	北宋	治平元寶	1064	6			6	1.6%	
128-132	北宋	熙寧元寶	1065	17	18		35	9.2%	
133-135	北宋	元豐通寶	1078	10	10		20	5.2%	
136-137	北宋	元祐通寶	1080	9			9	2.4%	
138-139	北宋	紹聖元寶	1094	2	5		7	1.8%	
140	北宋	元符通寶	1098	4			4	1.1%	
141-143	北宋	崇寧元寶	1101	8	3		11	2.9%	
144	北宋	大觀通寶	1107	7			7	1.8%	
145-147	北宋	政和通寶	1111	9	4		13	3.4%	
148	北宋	宣和通寶	1119	1			1	0.3%	
149	南宋	淳熙元寶	1174	1	2	85	88	23.0%	
150	南宋	紹興元寶	1130	1			1	0.3%	
151	南宋	慶元通寶	1150	1			1	0.3%	
152	南宋	嘉泰通寶	1201	1			1	0.3%	
153	南宋	咸淳元寶	1265	2			2	0.5%	
154	明	小	5				6	1.6%	
155-157	明	洪武通寶	1368	2			2	0.5%	
158-159	明	永樂通寶	1408	14			14	3.7%	
160	明	小	16				16	4.2%	
161-165	江戸	寛永通寶	1636	27			27	7.1%	
166-180	不明	銭名不詳		83	83		166	43.5%	
	合計		209	1	2	85	297	80.6%	

第1表 出土銭貨一覧

るが、北側ではまったく出土していない。これは遺構などの時期を直接示すものではないが、出土土器類を見ると北側は13～14世紀、南側は15世紀以降の遺構が多い傾向にある。なお、北宋銭が多く出土するのは、全国的な銭貨出土状況でうかがえる。

100は和銅開元である。107は至道元寶の隔切銭で、ほかには治平元寶に1枚存在する。158～160は無文銭で、160の銭穴は円形である。161～165は寛永通寶である。161は古寛永銭で、寛永3（1626）年から寛文8（1668）年にかけて铸造されたものである。ほかは寛文8年以降の新寛永銭である。162～164の背には「元」・「文」・「佐」の背文がある。

なお、『訂正越後頸城郡誌稿付図本崎山古城絵図』に小字菟谷内の東、殿橋を渡った小河川左岸に「維新ノ際瓶ニ入タル古銭ヲ掘出す」と記載されているが、現物は所在不明である。



第18図 出土銭貨時代別一覧

E 木製品 (図版106～112)

木製品は箸状木製品・櫛・杓子・木臼・井戸枠部材などが出土しているが、大半は井戸底部から出土しており、種類のには井戸枠部材が最も多い。時期的には中世の所産と考えられる。なお、材の樹種同定は実施していない。

1) 日常生活用具 (1～21)

箸状木製品 (1～9) 1号井戸および656号土坑からまともに出て出土したもので、棒材を多面体に削り、両端を尖らせている。現在の箸のように片方だけ尖らせているものはない。長さ25cm、幅0.8cm前後のものと同長さ20cm、幅0.6cm前後のものがある。

棒状木製品 (10・11) 10は上下端に面取り調整を施した板材を縦割りにしたもので、割り口の調整は行っていない。11の上端側面は浅く抉られ炭化している。下端から10cmの部分に段が設けられ、先端に向かって細く削られている。この段がストッパーになる杓子の柄の可能性が考えられる。

櫛 (15) 梳き櫛の背の部分で、背は直線で断面は角形を呈する。歯は板片の表裏面から鋸で斜めに挽き出され、目は0.5mm間隔で非常に細かい。塗布剤は認められないが、黒色化している。

杓子 (16・17) 「めしやくし」に類似した形態をしているもので、身の先端部を丸く削り半円形に成形している。16は肩部の張り出しが小さく、柄が長めである。17は肩部の張り出しが大きい。16は柄に、17は身の部分に片面だけ不規則な刃物痕が残り、工作台として利用された可能性がある。

曲物底板 (18～20) 本遺跡出土の曲物は、井戸枠部材に使用されたものを含め、側板と底板を接合する手法に以下の4種類が認められる。

- a類：側板に底板をはめ込み、側から木製釘を打って止めたもの。
- b類：側板に底板を合わせ、底板から木製釘を打って止めたもの。
- c類：底板の上部周縁を削って断面を凸形にし、凸部を側板にはめ込んだもの。釘は使用しない。
- d類：底板が側板の内側に直接はめ込まれるもの。底板側面に法をつけ接合しやすくする。釘は使用しない。

18は底板部分で、周縁に段が設けられたc類である。19も底板部分で、周縁に釘穴の痕跡が見られることからb類と思われる。中心には約1cmの円孔が1つ穿たれており、蒸器の目皿などに転用されたものであろうか。20は柵目板材で、周縁・断面に釘穴は認められずd類と考えられる。

木白(21) 削り抜きの木白である。内面は瘤鉢状に削り抜かれ、削り込み径約24cm、深さ約20cm(推定)を呈し、内外面の調整は丁寧である。口縁部は磨滅し、底部は腐植のため穴が開いている。胴部下よりには手がかりと思われる凹みが2対存在する。この凹みは「横8」字状を呈し、両側から穿たれているため、中心に瘤状の残存部をもつ。また、胴部には1条の凹みが巡り、凹みには1か所の用途不明穿孔が認められる。穴は内外面から穿たれ、「v」字状に貫通している。穴の大きさは縦4cm、横2cmの縦長である。底部は浅く伏られ、放射状のくはみがある。杵を用いる携き白と考えられえが、現在のものに比べると小振りである。木白の出土例は広島県草戸千軒町遺跡[広島県草戸千軒町遺跡調査研究所1982]にあるが、県内では初めての出土である。

その他(12-14) 12の上端は腐植しているが原形に近いものと思われ、中央部に円孔が存在する。下駄の可能性も考えられるが、非常に薄い。13は腐植のため外形線は不明であるが、手斧痕がよく残っている。中心には凹みが見られる。14は節を持った扁平な竹で、竹製品の部材であろう。

2) 井戸枠部材(22-118)

木組井戸はすべて縦板組で建築部材を転用したものが大半であるが、丸木舟の転用が1点認められる。井戸底面に近いほど遺存状態がよく、井戸の構造が明確に判明するものがある。なお、井戸の部分名称は[宇野1982]に従った。

1号井戸(22-39) 22-26は横棧である。仕口は日違い納で組まれ、納と納穴は鋸とノミで造り出されている。22の納の先端面に両端からノミを入れ、折り取った痕跡が残っている。22の納は長さ4.4cm、幅2.4cm、25の納穴は長さ5.2cm、幅3.2cmである。横棧は柵目板を用いている。22-25は長さ同じ一組で、井戸はほぼ正方形であったと考えられる。27・28は隅柱で、柵目板を削って棒状に加工したものである。下端の納は欠損している。29-38は縦板である。板目板を利用し、厚さは29の1.0cmから31の3.2cmまで幅がある。下半は地下水で保護され遺存状態は良好であるが、上半は腐植が著しく長さの推定はできない。31・35・36には成形のための手斧痕が見られるが、多くは未調整である。39は曲物の側板で、井戸底部の水溜りに使用されていたものである。側板は薄板の2枚重ねに外側底部付近で、幅5.2cmの薄板を巻いた3重構造である。外側板は調整が丁寧である。側板は1枚ごとに榫(板皮)で殺じられ、榫の幅は外側板1.1cm、中側板1.3cm、内側板は痕跡のみで不明である。内側板のみ約1cm間隔で、刃物による縦方向の刻みが入れている。底板は欠損しているが、接合の仕方はa類である。側板から木製釘を打ち込んで接合したもので、釘は計41本打たれて部分的に残存している。補修のためか、同じ場所に2本の釘が打たれている部分がある。釘は断面方形で、径0.5-0.6cmを測る。

2号井戸(40-60) 40-43は横棧である。仕口は1号井戸と同様に日違い納で組まれている。41の納は長さ3.6cm、幅2.0cm、43の納穴は長さ4.0cm、幅3.2cmである。42・43は両側面にも納穴が設けられているが、これは隅柱の納を受けるものである。納穴の大きさは腐植のため不明である。40-42は丸木材をノミ削りしたもので歪んでいる。44-47は隅柱で、横棧と同じく丸木材をノミで成形し、下端に納を設けている。44・46の納は中心からずれている。46の納は一辺1.0cmを測る。48-60は縦板である。縦板は2cm前後の厚さの板材が多く使われているが、50・60のように3-4cmと厚いものもある。縦板は

調整が粗く、手斧痕が明瞭に残っている。調整は主に縦方向に行なわれているが、50・60は調整方向が異なっている。56・58には裏面に当て板痕が見られ、54の下端には面取り調整が施されている。58の釘穴は断面方形、一辺0.3～0.4cmを測るが、49・60にも釘穴が見られ、建築部材の転用が多い。

3号井戸 (61～68) 61～64は横棧で、仕口は目違い納である。納は鋸とノミ、納穴はノミで造り出されている。62の納の大きさは長さ2.4cm、幅2.0cmで、納穴は63が長さ2.8cm、幅2.2cm、64は長さ3.6cm、幅2.4cmである。62・64には手斧痕が見られ、64の納穴部分には組み合わせ時の縦板圧痕が残っている。65～68は縦板で、腐植が著しく板材調整の工具痕などは不明である。

4号井戸 (73～85) 74～77は横棧で、ほかの横棧とは仕口の組み方が異なっている。両端の側面に納穴を設け、納穴同士を組み合わせるものである。納穴は鋸とノミで造り出されている。74はノミ削りで整形されている。73も横棧であるが、両端が欠損しているため仕口の形態は不明である。78～83は縦板である。厚さは78が2.2cm、80が2.4cmで厚いほかは、1.5cm前後のものが多い。78～80は当て板痕が見られ、81・82には手斧痕が見られる。78～80には縦3.6cm、横2.4cmの納穴が穿たれていることから、建築部材の転用と考えられる。84・85は水溜に使用された曲物の側板で、ほかとは材質が異なり、白い木目が細かく調整が丁寧である。2つ重ねて使用されていた。84は薄板を丸め、幅0.5cmの榫(板皮)で1か所綴じ合わされている。内面には刃物のおよそ0.5cm間隔の刻みが施されている。底部付近は欠損しており、底板との接合方法は不明である。85の側板は大きさを揃えるためか、短い薄板を足して2か所0.5cm幅の榫により綴じている。内面には0.5cm間隔で縦方向の刻みが施されている。欠損のため底板との接合方法は不明である。

7号井戸 (69～72) 69～72は横棧で一組である。仕口は目違い納で組まれているが、全体の腐植が著しいため、納と納穴の大きさは推定で図示している。調整痕は不明である。

8号井戸 (86～91) 部材は縦板のみである。86・89～91は丸木舟の転用材で、舟体を切断し舷側から舟底の曲線を利用して隅丸方形に成形している。切断面は木材の痩せのため、面取りされたような状態である。86は丸木舟として接合した状態である。89と90も接合する可能性があるが、断面の痩せのため明確ではない。反り具合から見ると、幅がさらに大きくなる部分があったと考えられ、丸木舟としては大型のものである。86の両舷下端に角型に抉られた部分があるが、これは丸木舟として機能していた時点から存在したのか、井戸側部材に加工された際のものかは不明である。また、8か所に銹痕が残存しているが、丸木舟使用時に亀裂の広がりを防ぐために施されたものと思われる。銹は鉄製の角型で、86・89には残存している部分が認められるが、銹は舟底まで貫通していない。大きさは長さ1.2～1.6cm、幅0.8～1.2cmと一定していない。また、節を円形(86)もしくは方形(91)に抉り、節穴を木片で埋めた部分がある。87・88は反りのない板材である。88には縦1.0cm、横0.8cmの方形の釘穴、縦2.6cm、横2.0cmの納穴があり、建築部材の転用である。

丸木舟を井戸側に転用する例は、県内では豊浦町曾根遺跡[家田1981]で2例、栄町半ノ木遺跡[岡ほか1973]、新潟市小丸山遺跡[藤塚ほか1987]で知られ、時期的にはいずれも古代のものと考えられている。

9号井戸 (92～111) いずれも横棧で、仕口は目違い納で組まれている。納と納穴は鋸とノミで造り出され、92の納は長さ6.2cm、幅4.8cm、97の納穴は長さ6.4cm、幅5.2cmである。92～94は丸木材の一面を裁ち落して成形したものである。95～97は板材を使用している。93の端部付近には幅0.3cmの鋸目痕が認められる。94・96は仕口以外にもノミで造り出された納穴が存在し、建築部材からの転用と思われる。94の納穴は縦5.6cm、横9.2cm、96は縦2.0cm、横8.4cmである。97には手斧痕が明瞭に残る。98～111

は縦板で、4重に組まれている。多くは板目材であるが、105は柃目材で規則正しく同一方向に手斧で整形されている。下端付近には刃渡り約2cmのノミ痕が残る。節のない美しい板で、端部は面取りされる。100～105・107・111には手斧痕が良好に残存している。106は当て板が残っている。

10号井戸(112～118) 112～114は横棧で、仕口は目違い桝で組まれている。桝と桝穴は鋸とノミで造り出されている。112の桝は長さ4.4cm、幅4.4cm、114の桝穴は長さ4.6cm、幅3.6cmである。112の桝部分には当て板痕が残っている。115～118は縦板で、厚さは平均して2.0cm前後のものが多い。115には手斧痕がわずかに残る。

第七章 ま と め

1 遺 構

第V章で個別遺構の説明を行ったが、検出された遺構の年代は出土遺物から古代と中世に大きく分けることができる。遺構図面では中・上層と下層とに分けて分布図を提示したが、中世の擾乱等も大きく、上・下層での確認遺構が時代を直接反映しているとは言い難い。したがって下層に中世の遺構が重複しており、明確に各遺構の時代を提示できないことは残念なことである。ここでは可能な範囲で古代と中世に遺構を分け、その分布を見ていきたい。

古 代

竪穴住居 12基全てが古代に属する。出土土器から概ね8世紀代(奈良時代)の遺構と考えられる。

掘立柱建物 礎石建物を含め、遺跡全体で14基確認されている。ほとんどが東西棟で、主軸方位は、グリッド軸からやや南に傾くもの(3号・10号・12号・14号)とほぼ軸方向か北に傾くものがある。竪穴住居の多くがやや北に傾いていることからすると、C・D地区の多くの掘立柱建物が同方向となる。しかし、礎石建物が古代とは考えにくく、方位で時代を確定するのは困難である。したがって、古代にも掘立柱建物は存在したであろうが、特定するに至らない。しかし、6号掘立柱建物は、柱穴規模が他に比べて大きく、深さも深いことから、古代の可能性を持っている。

井戸 出土遺物から古代と特定できる井戸はない。

その他、土坑では、一括して多くの土器の出土した519号土坑がある。

古代の遺構は、木崎山の内陸側山裾に沿って竪穴住居、掘立柱建物が並行して配置される。「郡」「佐味」の黒書土器、遺跡の位置から、近くを古代北陸道が通過していた可能性がある。

中 世

中・上層確認遺構は、中世と考えることができる。3・4号溝で構成されるL字状の溝は、軸方位がやや南に傾くが、5・6号溝は逆に北に傾く。3・4号溝で構成する区画と同一方位をとるのが、下層確認の19号溝である。中世の可能性が高い。中に存在する12号建物も中世にならうか。同一方向の14号・3号建物も中世にならう。井戸枠を持つ井戸はすべて中世である。土塁と考えられる高まりは、南北方向に2本確認されたが詳細な時期は明確でない。他の遺構配置と土塁との相関性もつかめないことから、遺構を構成した時期(13~15世紀)以降の所産の可能性もある。A地区の遺構は全て中世であろう。11・14・15号溝は、丘陵斜面に対して直交しており、縦堀としての性格が考えられる。中世の遺構は、丘陵周辺を廻るように分布している。

2 遺 物

A 古代土器の編年的位置付け

3号住居 一括して多くの土器が出土している。須恵器では、無台杯Ⅱ類とした、底部に丸みがあり、深いものが認められる。特に26は、底面全体にケズリが認められる。東海型の器形であろう。8世紀初頭

の新井市栗原遺跡にも存在する。有台杯は口径が大きく、高台内側で接地する。長頸瓶は体部直角に角張る。このような特徴は奈良時代前半に認められるもので、今池編年のⅠ期または栗原段階に位置づけられる。土師器に関しても、内黒の高杯の残存、ハケ調整の甕から須恵器と符合する。

7号住居 墨書土器115の有台杯は、台部内側で接地し杯中央部がやや窪む。8世紀前半の器形である。蓋はいずれもⅡc類であるが、各々口径、天井部の調整、口縁端部のつくりに違いがあり、共通性が見られない。赤彩土師器蓋は丸みを持つ。甕、鉢類はいずれもハケ調整であることから、当堅穴住居出土土器は8世紀前半代の年代が考えられる。

5号住居 86の有台杯墨書土器は、口縁がやや反り気味に立ち上がる。形状からは今池編年のⅡまたはⅢ期に位置づけられようか。92の甕、93の瓶はハケ調整。

6号住居 大きな変化は、土師器の甕類がロクロ成形であることである。須恵器杯はヘラ切りであるが、94は糸切りの可能性がある。5号堅穴より新しい傾向で今池編年のⅢ期くらいであろうか。ロクロ成形の甕類が出土しているのは他に8号堅穴住居がある。

頸城地方の編年標準は、栗原今池編年にある。須恵器、土師器の変遷で、画期を判断する基準として、以下のことが参考となる。包含層出土土器もあわせると以下の段階を設定できる。

①木崎山Ⅰ期 須恵器返り杯蓋の段階……栗原段階以前7世紀後半 包含層出土

遺構からの返り杯蓋の出土はほとんどなく、伴う土器が明確でない。返り杯蓋は、口径の小～大(271～281)までであるが、当該期の杯蓋はa、b類の小型で、小型無台杯の237～245等がセットと考えられる。土師器は、黒色杯、高杯、ハケ調整の鉢、甕等がある。

②木崎山Ⅱ期 大型有台杯出現の段階……7世紀末～8世紀初頭

7世紀末段階としては、大型の返りのある蓋(279～281)と有台杯(260、261)のセットが考えられるが、いずれも包含層出土で、遺構では確認できない。土師器の変化はつかみにくい。

③木崎山Ⅲ期 須恵器返り杯蓋消失……今池Ⅰ期8世紀前半

3号堅穴・4号堅穴住居がある。有台杯は大型で②段階と変わらず、蓋もそれに伴って大型である。黒色土師器高杯は残存する。

④木崎山Ⅳ期 土師器高杯の消失の段階・赤彩土師器……今池Ⅱ期8世紀中葉

5号堅穴・7号堅穴・10号堅穴・12号堅穴住居がある。有台杯は依然として大型であるが、深みのあるⅣ類が認められる。黒色土師器高杯の消失と共に赤彩土師器が伴う。しかし、赤彩土師器の出現段階は明確でない。

⑤木崎山Ⅴ期 土師器ロクロ甕・鉢出現の段階……今池Ⅲ期8世紀後半

6号堅穴・8号堅穴住居がある。大きな変化は、ロクロ土師器甕、鉢が出現することである。赤彩土師器は存続する。ただし、8号堅穴住居には古い土器も認められる。

⑥木崎山Ⅵ期 底部糸切り須恵器杯の出現……今池Ⅳ期8世紀末

糸切り底の須恵器が当遺跡では少ない。頸城地方西部(上越周辺)とは異なった在り方を示すと考えるより、この時期が抜けていると考えた方がよさそうである。

⑦木崎山Ⅶ期 底部糸切り土師器甕—今池Ⅵ期……9世紀後半

この時期の須恵器は殆ど確認できない。1号堅穴住居4～6が一般的な当該期の甕である。また、375、379も同様である。他には、光が丘1号甕式期の灰軸(426～428)や製塩土器(429～447)がある。382、383はもつと降り、10世紀後半以降であろう。

B 墨書土器

いくつかの重要な墨書土器が出土している。

- ①人名「品運部宮麻呂」(115) …「品治」は西日本に多く認められる氏名である。越前国の品部君(公)氏は、阿国坂井郡の郡領家として知られる。越中までは確認されるが、越後では初である。越後頸城郡まで広がっていたことが理解できる。土器は8世紀前半である。

〔阿刀〕(339) …やはり西日本に多く認められる。「阿刀」は物部氏の氏族。県内では初例。県内の遺跡出土遺物の人名は、他に佐渡国分寺瓦の「三国真人」、新井市栗原遺跡の「栗原借伏日」がある。

- ②地名「佐味」(86) …古代越後国頸城郡には、十郷あり、その中の1つが「佐味」である。また、延喜式にある駅制に「佐味駅」がある。「佐味」の出土からこの地域が「佐味郷」であった確率が高くなった。

「佐味駅」は当然佐味郷にあったであろうから、近くに駅存在の可能性も高まった。地名ではないが、「郡」(28)も出土している。県内では、これまで新井市「栗原遺跡」、「豊浦町曾根遺跡」、上越市「下新町遺跡」で出土が知られる。いずれも一般集落とは異なる在り方を示す遺跡である。

その他「上」(99)、墨痕などがある。また、墨書きの文字や記号もある(1、143、200、230、343~346)。

C 中世

中世土器の年代については、珠洲焼、中世土師器を除いて、第VI章の個別説明で簡単に触れているため、ここではこの2種について年代観を述べたい。

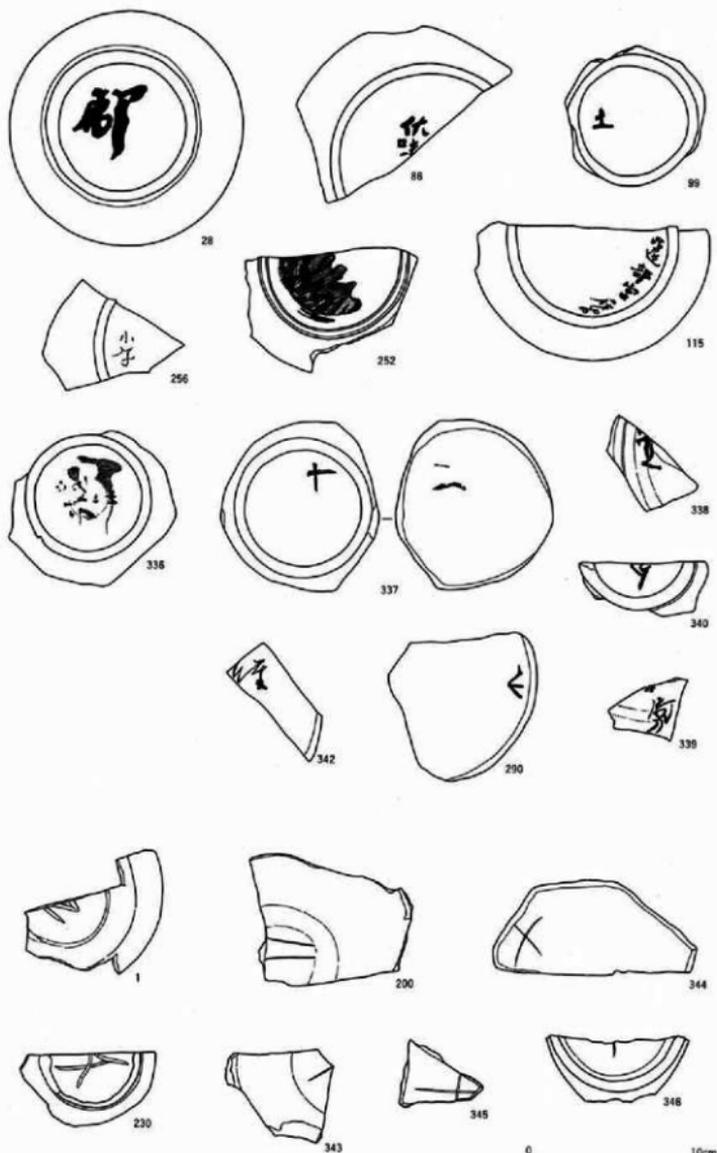
1) 珠洲焼

現在珠洲焼の編年は吉岡康輔氏によってⅠ～Ⅶ期に区分され〔吉岡1982b他〕、それぞれの年代観は12世紀中葉～13世紀初頭(Ⅰ期)、13世紀前半～中葉(Ⅱ期)、13世紀後半(Ⅲ期)、14世紀(Ⅳ期)、15世紀前半(Ⅴ期)、15世紀後半(Ⅵ期)、16世紀前半(Ⅶ期)が与えられている。本遺跡の出土資料を見るとⅠ～Ⅴ期のものが認められるが、中心をなすのはⅢ・Ⅳ期と思われる。各期の様相は以下のとおりで、生産地の各窯資料〔吉岡ほか1976〕に対比して説明する。

Ⅰ期 片口鉢類のA類のみが本期に属するものと思われ、他の器種は認められない。罎目のない捏ね鉢に限られ、体部上半で屈曲して立ち上がる器形を特徴とする。寺社2号窯で顕例がみられる。

Ⅱ期 壺T種E類・壺A類・片口鉢類B類が本期に該当しよう。壺A類(289)は短く立ち上がった口縁部先端を外側に折り曲げたもので、寺社窯の系譜を引くものと思われる。

Ⅲ期 壺・片口鉢類が多く、壺の出現率がやや低い傾向にある。壺T種B～D類・壺R種の一部(249)・壺B類及びC類の一部(299)・片口鉢C類などで、個体数ではⅣ期に次いで多い時期である。壺T種B類は馬線窯、C・D類は郷窯で比較的多くまとった資料が見られ、馬線窯期若しくはやや滞る時期に比定されるものであろう。壺B類は弓なりに強く折り返した口縁が特徴的なもので、法住寺3号窯期直後でⅢ期でも古手に属する可能性がある。



第196図 古代の陶器・簡書き文字・記号

Ⅳ期 個体数では珠洲焼の中心を占める時期で、中でも甕の出現率が高い。壺Ⅰ種A類・壺Ⅱ種・壺Ⅲ種・壺Ⅳ種・片口鉢Ⅰ類が本期に属するものと思われるが、甕の口縁部形態にはバラエティーが見られ、時期的にやや下るものが含まれるようである。壺Ⅰ種A類は、長めに直立した口縁端部を外側に折り曲げて突出させたもので、大島窟で同様の資料が検出されている。壺Ⅱ種に付いては、破片資料のため明確ではないが284などは口縁部形態からⅢ期に属する可能性がある。

Ⅴ期 明確に本期と捉えられるのは壺Ⅰ類と片口鉢Ⅱ類に限られ、個体数では片口鉢Ⅰ類が大半を占める。壺Ⅰ類はいずれも胎土が粗く、叩目を含めた全体の印象も粗雑に感じられる。片口鉢Ⅱ類は口縁端部が内傾したものであるが、端部内面が肥厚して下部に凹みを有するもの(348-350)と肥厚しないものに分けられる。344・347など口縁端部を外側へわずかに屈曲させるものは焼成もややあまく、後統期(Ⅵ期)の可能性が高い。

2) 中世土師器

今回の調査では519号土坑、553号土坑及び572号土坑から中世土師器の良好な一括資料を得た。また、明確な遺構は確認できなかったが、2G-20区、2H-11区褐色砂層、6D-1-11区粘土層、6C-20・21区出土の土器群も、狭い範囲から比較的まとまった中世土師器が出土しており、土坑出土と同等若しくはこれに準じた一括性の高い資料として扱えるものと考え(第20図)。越後の中世土師器の編年に付いては、坂井秀弥氏が大略を示し(坂井1988)、近年では品田高志氏が編年案を提示した(品田1991)。ここではこれらの業績に依拠しつつ、周辺地域の研究を参考にしながら、前述した資料を中心に当遺跡出土の中世土師器の編年を行いたい。

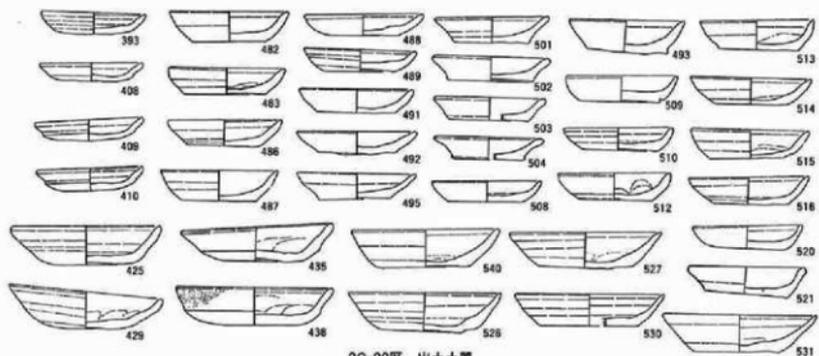
編年の概要 非ロクロ土師器の出現を12世紀中葉と考え、12世紀中葉から16世紀初頭までを3期7小期に区分した。以下第21図に添ってその概要を述べる。

I 期

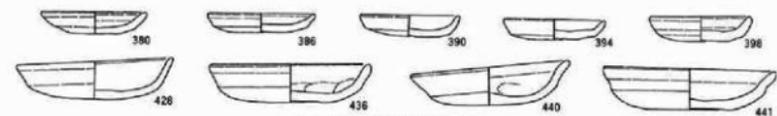
非ロクロ成形のA類とロクロ成形のB類が共存する時期である。B1類の有無から前後2小期に細分する。年代はI1期が12世紀中葉～13世紀初頭、I2期は13世紀前半～中葉と推測する。

I1期 良好な一括資料が当遺跡には存在せず、後述する2G-20区出土土器に先行する要素を持つ土器を任意に抽出した。分量は中皿と小皿の二種が存在するものと考え。中皿・小皿ともにA1類(432)、A2-a類(8)、B1類(496)から構成されるものと考え。432・8は京都の12世紀中葉～13世紀前半の土師器に類似し、496の体部が内湾ぎみに伸び、底部が突出する形態は平安期のロクロ土師器の形態を直接引くものと考え。京都からの影響によって越後においても非ロクロ土師器が出現する一方で、前代からのロクロ土師器も存在し、二系統の土器群が依存する時期として捉えられる。

I2期 2G-20区出土土器を標識とする。分量は中皿と小皿の二種が存在する。中皿はA2-b類(429)、A3-b類(438)が確認でき、小皿はA2-b類(393)、B2-a類(483)、B2-b類(502)、B2-c類(488)が確認でき、B1類は確認できない。当期、新に出現するB2類は、B1類よりも底径が大きく、低平な器形であり、見込みに静止ナデを行うものであり、在地のロクロ土師器の系譜のみからはその出現が理解できないものである。ロクロ成形で底部切り難し技法が回転系切りという在地の技術を用い、A類の技法を模倣したものと推定できる。また、2G-20区出土のB2類の胎土は砂粒を多く含むザラついたものであり、B1類とは異なり、A3-b類の胎土と類似する。当期は、A類とB1類が併存するI1期からA類のみに一化されるII期への過渡的な時期として理解できる。



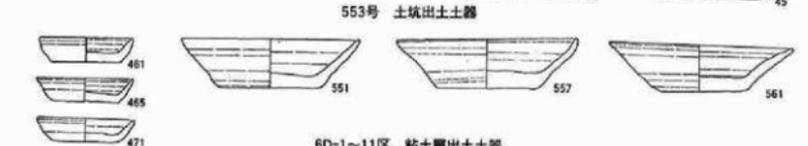
2G-20区 出土土器



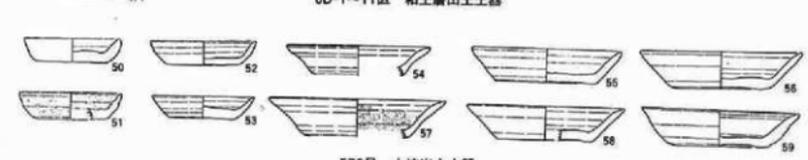
2H-11区 褐色砂層出土土器



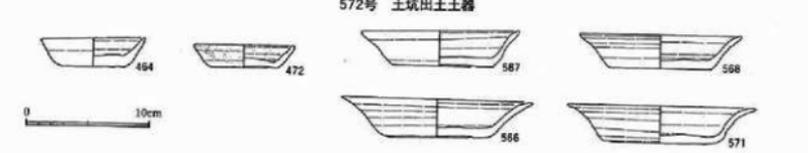
519号 土坑出土土器



553号 土坑出土土器



6D-1~11区 粘土層出土土器



572号 土坑出土土器



6C-20-21区 土坑出土土器

第20図 主要遺構等出土の中世土器

なお、2G-20区出土土器のA類とB類の比率は約4:1でB類が圧倒的に多いが、これを当期の越後の一般的な状況とは考えていない。

Ⅱ 期

ロクロ成形のB類が確認できなくなり、非ロクロ成形のA類に齊一化される時期である。前後2小期に細分する。年代はⅡ1期が13世紀後半～14世紀前半、Ⅱ2期が14世紀中葉～末と推測する。

Ⅱ1期 2H-11区褐色砂層出土土器を標式とする。法量は中皿と小皿の二種が確認できる。中皿はA3-b類(436)のみ確認できⅡ2期のものと比較すると、口縁部のヨコナデによって生じた稜がシャープでなくなる。小皿はA2-b類(380)が確認でき、Ⅱ2期に主体を占めたA3-b類は確認できない。

Ⅱ2期 当期は良好な一括資料が存在しないため詳細は不明である。ここではA類のうち2H-11区褐色砂層出土土器に後継する要素を持つ土器を任意に抽出した。法量は中皿と小皿の二種が存在するものと推測でき、中皿はA3-c類(433)、A4類(448)、小皿はA3-e類(416)、A4類(395)によって構成されるものと推測する。A4類の出現は13世紀末に溯る可能性があり、深身の器形は京都の土師器G類(伊野1987)を模倣したものとして推測する。胎土は海綿状骨針を含み、砂粒があまり入らないしっとりとした感じのものが多く、A2-b・c類に似る。

Ⅲ 期

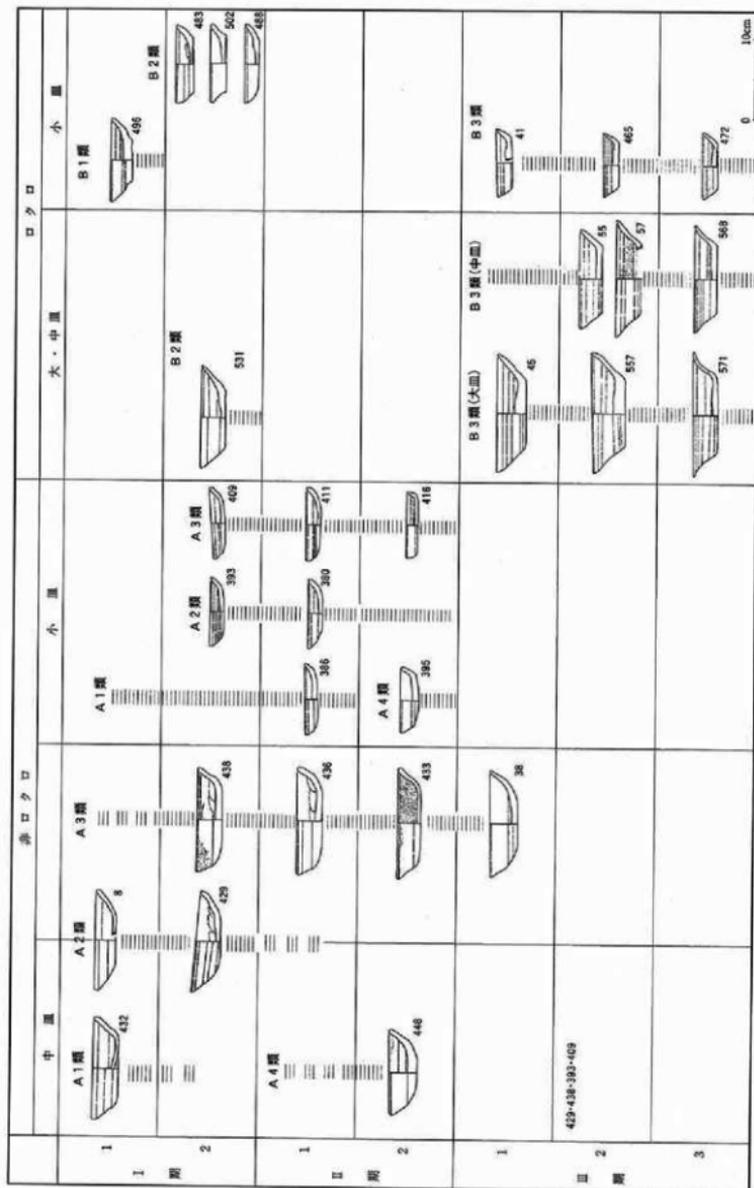
A類が減少し、B3類が新たに出現して主体を占めるようになる時期。B3類の出現は、借州もしくは上野からの影響と推測する。当期には良好な一括資料がいくつか存在するが、519号土坑を除いた他のものはB3類のみで構成されており、これはA類からB3類への変化が比較的短期間に起こったことを示すものと考えられる。口径13～15cm、器高3～3.5cm前後の大皿が新たに出現し、法量は3種となる。大皿・中皿の形態から、3小期に細分する。年代はⅢ1期が14世紀末、Ⅲ2期は15世紀中葉～後半、Ⅲ3期は15世紀末～16世紀初頭と考える。

Ⅲ1期 519号土坑、553号土坑を標式とする。519号土坑からはA3-a類とB3-a類が出土しており、当期にもA類は確認できるが、その量は少ないものと推測する。法量は3種確認できる。大皿、小皿はB3-a類(45、41)が主体を占める。

Ⅲ2期 572号土坑、6D-1～11区粘土層出土土器を標式とする。当期はB3類のみ確認でき、A類は存在しないものと考えられる。法量は3種確認でき、大皿はB3-b類(567)、中皿はB3-a類(55)、B3-b類(57)の両者が確認でき、小皿はB3-a類(465)のみ確認できる。

Ⅲ3期 6C-20・21区出土土器を標式とする。法量は3種確認でき、大皿・中皿はB3-b類(571、568)が確認でき、Ⅲ2期のものと比較すると口縁部の外反の度合いが大きくなる。小皿はB3-a類(472)が確認できる。

以上のように、木崎山遺跡では12世紀中葉を前後する時期に京都に類似した非ロクロ土師器が出現し、在地のロクロ土師器と共存した。そして、13世紀後半には在地化が進行しながら、非ロクロ成形の土師器に齊一化される。こうした動きは北陸の他地域とは共通するものである。ただし、15世紀には再びロクロ土師器が大皿を占めるようになり、以後16世紀まで非ロクロ土師器はほとんど確認できない。近年、富山県井ノ口城などにおいてB3類に類似した土師器が出土し、県外においても頻例が増加しつつあるが、これらは15世紀後半～16世紀初頭に位置づけ得るものであり、14世紀末～15世紀初頭に溯るものは存在しない。14世紀末から15世紀におけるB3類の出現は北陸の他地域には見られない越後独自の様相と考える。また、13～14世紀の越後ではロクロ成形で底部が回転ヘラ切りの土師器を主体とする阿賀野川以北と、



第21図 中世土師器実測図

非クロコ土師器が主体を占める阿賀野川以南という土師器皿の地域性が存在したが、B3類の土師器は越後全域で確認でき、14世紀末～15世紀にはそれ以前に見られた土師器皿の地域性が確認できなくなる。

B3類が出現する14世紀末～15世紀の越後国守護は関東管領である上杉氏であり、守護代として実質的に越後国を支配したのは上杉氏の直属の家臣である長尾氏であった。上杉氏は南北朝期には足利尊氏の下で上野国守護・関東執事として室町政権の関東支配において重要な役割を担っており、南朝の勢力を一掃するために14世紀前半当時南朝の拠点の一つであった越後国に、越後国守護として任命された。ただし、長尾・上杉両氏による越後国支配が安定するのは14世紀末～15世紀初頭の上杉房方の時代である。房方は越後各地に上杉氏の一族・被官を送り込み、また、在地の国人の被官化も進行した(新潟県1987)。14世紀末～15世紀初頭における土師器皿の変化及び越後国内での土師器皿の地域性の解消もこのような政治的な動向と連動したものである可能性が高い。

3 遺跡の性格

木崎山遺跡は、縄文時代から近世に至るまでの遺物が確認され、生活立地条件が整っていた場所と言えるが、古墳時代までは断片的な遺物の出土のみである。

本格的に集落が営まれるのは7世紀後半に入ってからで、8世紀が中心である。竪穴住居、掘立柱建物があり、出土遺物も豊富である。墨書文字の「郡」「佐味」「品運部宮麻呂」「阿刀」や赤彩土師器からは、一般集落とは考えにくい一面をのぞかせる。「佐味」は、頸城郡の郷名、駅名として表われ、この周辺に佐味郷、佐味駅(北陸道)が存在した可能性をうかがわせる。しかし、当遺跡の遺構から官衙的性格を導き出すには至らない。

中世では、出土遺物の密教地鎮具が目される。埋納されていた古瀬戸四耳壺から、13世紀代ということがわかる。このような地鎮具を用いるのは地域の有力領主層の館跡または寺院と考えられるが、遺構の状況からは寺院とは考えにくい。木崎山は、以前から戦国上杉氏の家臣柿崎氏の居館とされてきた。しかし、今回の調査では、戦国期(16世紀代)の遺物は少なく、中世の当遺跡は13～15世紀を中心とした地域領主層の居館跡と考えられる。柿崎氏との関連を直接示す資料は得られなかった。

【付 編】 木崎山遺跡出土鉄滓の分析調査

川鉄テクノリサーチ株式会社
総合検査・分析センター

A はじめに

新潟県教育庁文化行政課で発掘調査した木崎山遺跡出土品のうち、鉄滓試料6点について学術的な記録の一貫として化学分析を含む自然科学的な観点からの調査依頼があった。以下、分析調査結果を報告する。

B 調査項目及び方法

1) 化学成分分析

分析はJIS規格の鉄鉱石分析法に準じて実施し、方法及び分析結果を第2表に示す。本調査は化学成分から鉄を作るための原料の推定と、生産工程のどの部分で発生した滓かの判断用データを得ることを目的とした。

2) 顕微鏡組織観察 (第23回)

試料の一部を切り出して樹脂に埋め込み、細かいサンドペーパーで鏡のようになるとまで研磨する。その後、顕微鏡で観察して代表的な組織を100倍・400倍で写真撮影し、熔融状況や鉱物の混合状態等から加工状況や鉄滓の材質の判断を行った。

3) 試料別所見

3号井戸底面 (試料1)

径20mmの小塊で、角々が落とされた状態の礫状の緻密な鉄滓である。化学成分は全鉄分 (T. Fe) が多いが、中でも第一酸化鉄 (FeO) が特に多く、造滓成分である建酸 (SiO₂)・酸化アルミニウム (Al₂O₃)・酸化カルシウム (CaO)・酸化マグネシウム (MgO) が少ないなど、一般的な鍛冶滓の傾向を示す。顕微鏡組織写真を見ても、白い菌状のウスタイト (FeO) が全面に観察され、地には珪素と酸化鉄の化合物結晶であるファイアライト (2FeO.SiO₂) がレース状に見える。

5 A10 (試料2)

表面がゴンゴンしており、気泡が多いものの比較的重量感のある鉄滓である。化学成分は試料1とはほぼ同じであるが、酸化チタン (TiO₂) がやや高く、顕微鏡写真でもウスタイトの結晶が全面に観察される。黒く点在しているのは、空隙で白く光っているものが金属鉄 (M. Fe) の微小な粒である。成分的には鍛冶滓の様相を示しているものの、酸化チタンの量や金属鉄の存在などを考慮すると、一次精錬後の鉄塊から鉄含有量の多い部分を選別する作業で発生する精錬鍛冶滓と想定される。

5 B63 (試料3)

外観は凹凸が激しく、気泡のある鉄滓である。化学成分も試料1と同様の傾向を示している。顕微鏡写真でもウスタイトの結晶が全面にあり、地にファイアライトの組織が見られるなど、試料2と同様の鍛冶滓と考えられる。

単位 (%)

試料	成分	TiFe	MFe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	Cr ₂ O ₃	C	V	Cu	C-W
1	3号井戸底面	55.50	0.10	59.40	13.20	19.20	4.10	1.83	0.82	0.22	0.05	0.34	0.02	0.14	0.01	0.01	0.37
2	5 A 10	56.30	0.11	53.70	20.60	14.20	4.83	2.04	0.82	0.74	0.11	0.34	0.01	0.12	0.04	0.01	1.26
3	5 B 63	55.70	0.21	50.10	23.60	15.00	3.34	2.61	0.97	0.19	0.04	0.67	0.01	0.17	0.02	0.01	1.70
4	5 B 78	51.20	0.12	35.70	33.40	20.60	2.90	1.20	0.63	0.19	0.07	0.30	0.01	0.65	0.01	0.01	2.87
5	8 C 16-17-26-27	48.00	0.08	55.10	7.26	25.70	5.15	1.21	1.36	3.30	0.18	0.16	0.05	0.05	0.20	0.01	0.23
6	6 D 12	54.10	0.22	59.80	10.60	20.60	3.88	1.68	1.12	0.33	0.11	0.44	0.01	0.04	0.03	0.01	0.60

【分析方法】JIS法に準拠し、以下の方法とした。

T.Fe：三酸化チタン還元-ニクロム酸カリウム滴定法

M.Fe：臭素メタノール分解-EDTA 滴定法

FeO：ニクロム酸カリウム滴定法

Fe₂O₃：計算その他：ガラスビード蛍光X線分析法

C：燃焼-赤外線吸収法

V,Cu：原子吸光法

C-W：カーボンフィッシャー法

第2表 鉄滓分析結果

5 B 78 (試料4)

外観は表面がやや平で裏は凹凸が激しく、周辺部が多孔質な鉄滓である。化学成分は全鉄分がやや低いものの、ほぼ同一の成分状態と見られ、酸化鉄の中で酸化第二鉄 (Fe₂O₃) が高くなっている。顕微鏡写真ではウスタイトが全面に出ているが、地のファイアライトと共に結晶粒が大きく、ゆっくりと冷却された様子が観察される。

8 C 16・17・26・27 (試料5)

本試料は、他の試料と全く性状を異にしている。外観は表面に溶岩のような皺があり、厚みも薄く偏平で、裏は平滑な部分とガスの抜けた多孔質の部分が観察される。このような鉄滓は、試料1~4のような鍛冶作業の際に発生するものと異なり、原料から鉄を取り出すときに発生する鉄滓によく見られる。化学成分でも全鉄分48.0%と比較的少なく渣滓成分が33.4%あり、さらに酸化チタンが3.3%と高くなっている。顕微鏡写真でも全面にファイアライトが観察され、さらに拡大すると点々と酸化鉄の一種のマグネタイト (Fe₃O₄) と酸化チタンの化合物ウルボスピネルの小結晶らしいものが見える。これらの所見を総合すると、本試料は砂鉄を原料として精錬した際に発生したもので、溶融して炉外に流出した後、比較的短時間に冷却された鉄滓と考えられる。

6 D 12 (試料6)

外観は周辺部が摩耗したような形状の鉄滓で、全面的にガスの抜けた孔が観察される。化学成分では試料1~4と同様の傾向を示しており、鍛冶滓と思われる。顕微鏡写真では全面に微細な空隙があるため黒点が点在しており、組織写真を撮影するためほぼ全面を観察したが、いずれも同様な状況であった。

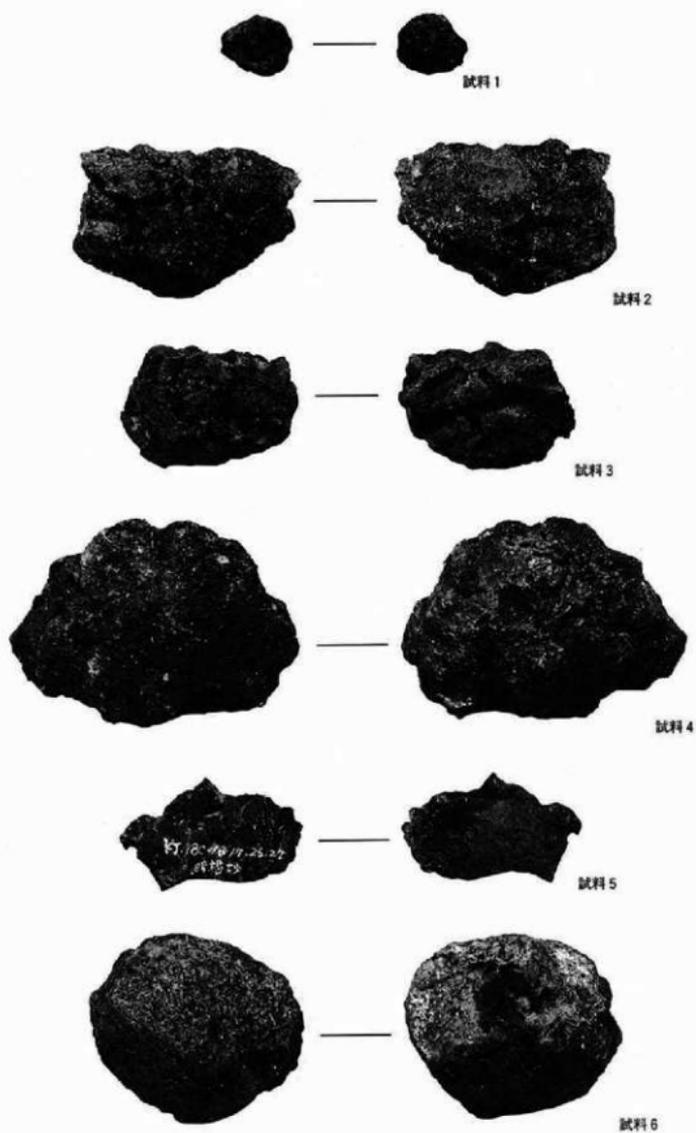
C ま と め

鉄滓の発生を鉄の生産工程から大まかに分類すると、以下の種類に分けられる。

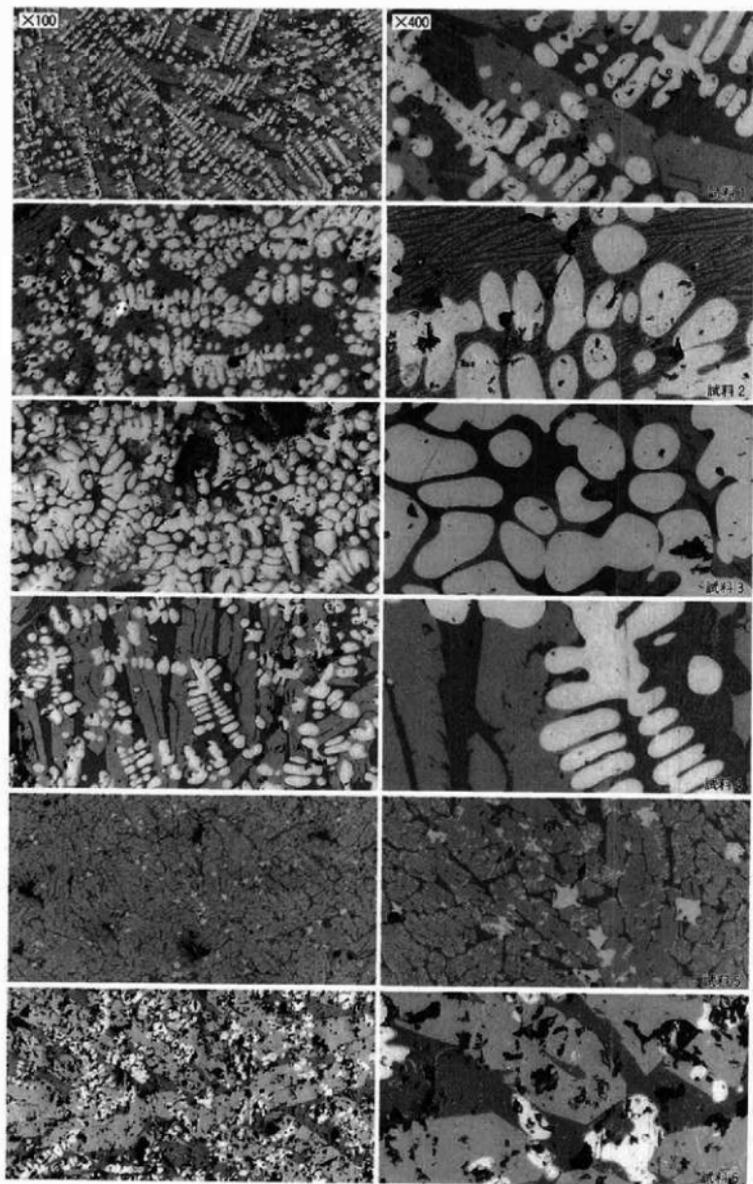
- ①砂鉄や鉄鉱石を還元して鉄を取り出す時に発生する精錬滓
- ②①でできた鉄塊から不純物を取り除く時に発生する鍛錬鍛冶滓
- ③鉄を加熱・加工して製品を作る過程で発生する鍛冶滓
- ④鉄を溶かして鋳型に流し込んで鋳物を作る時に発生する鋳物滓

今回調査した鉄滓のうち、試料1・3・4・6は砂鉄を原料として作られた鉄塊を製品に仕上げていく工程で発生する鍛冶滓と判断される。また、試料2は前述のとおり砂鉄を原料として精錬し、できた鉄を含む塊から鉄の多い部分を取り出す際に発生した精錬鍛冶滓である。試料5は精錬滓と推定される。精錬過程の鉄滓が存在する理由については、他の出土品などからの遺跡の性格付けや、近隣遺跡での製鉄関連遺物の検討から解明しなければならない。

鉄は当初より再加工（リサイクル）の可能な素材として利用されてきたと考えられるので、鍛冶場には各所で生産された鉄が持ち込まれていると考えるのが妥当である。素材である鉄の出所や製鉄技術の進歩などについては、特定製鉄遺跡に付随する鍛冶工房や、製品としての鉄器具の調査研究を進めていく過程で解明されることを期待する。



第22回 分析試料 (S-約2/3)



第23図 顕微鏡写真

要 約

- 1 木崎山遺跡は、日本海岸の柿崎町大字柿崎字上の山に所在する。地理的には新潟県の南西部高田平野の北端に近い砂丘上に立地している。
- 2 発掘調査は北陸自動車道の建設に伴い、昭和54～55年に実施した。調査面積は約9000㎡である。
- 3 調査の結果、古代・中世を中心として、縄文時代から近世までの遺構・遺物が検出された。検出遺構は全体で堅穴住居12基、掘立柱建物14基、井戸34基、土坑666基、溝31条、土塁状高まり2、遺状遺構1である。堅穴住居はすべて古代に属するもので、丘陵に沿って配置されている。掘立柱建物は規模・構造に違いがあり、時代・性格を反映したものであろうが、時代を特定するまでには至らない。礎石建物が1棟ある。井戸は井戸枠を持つ規模の大きいものが多く、大部分は中世である。土坑の中では、地鎮具を納めた中世の54号土坑が注目される。土塁と考えられる2条の高まりは、時期判別が難しい。
- 4 遺物は、古代・中世を中心として多種、多様出土している。古代では8世紀を中心としているが、7世紀末の返りのある蓋が多く出土した集落は、県内では初例であろう。また、赤彩土師器が多く出土したことも珍しく、遺跡の性格を考える上でも重要である。古代の墨書土器で「郡」・「佐味」・「品理部宮麻呂」も同様である。

中世では、13～15世紀を中心とした珠洲焼・中世土師器・輸入陶磁器が多い。中でも中世土師器は量も多くバラエティに富む。注目されるのは、地鎮具として埋納された仏具で、器種としては、花瓶・五鈴鉢・飯食器・六器がある。

- 5 木崎山遺跡は、上杉氏の家臣柿崎氏の居館であるとされてきたが、発掘調査によって、その確証を得ることはできなかった。しかし、古代・中世ともに当該期の頭城地方北部を考える上では貴重な資料となった。

引用参考文献

- 赤羽一郎 1977 「常滑一知多半島古遺址群」『世界陶磁全集3 日本中世』小学館
- 甘粕能・小野昭他 1988 『丸山遺跡発掘調査報告書』新潟県大潟町教育委員会
- 家田順一郎 1981 『豊浦町文化財報告(三) 曾根遺跡1』新潟県豊浦町教育委員会
- 伊野近富 1987 「かわらけ」考』『京都府埋蔵文化財論集』第1集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 宇野隆夫 1982 「井戸考」『史林』第65巻第5号
- 越後頸城郡誌編刊行会編 1969 『訂正越後頸城郡誌』豊島書房
- 柿崎町史編纂会 1936 『柿崎町史』新潟県柿崎町史編纂会
- 兼康保明 1988 「中・近世の小型円板とその用途」『考古学叢書』中巻 吉川弘文館
- 小島幸雄 1991 『中島廻り遺跡発掘調査報告書』新潟県上越市教育委員会
- 駒形敏朗 1987 『三貫架遺跡―第2次発掘調査―』新潟県長岡市教育委員会
- 佐伯有清 1984 『新潟姓氏録の研究』考證篇第三・四・六 吉川弘文館
- 坂井秀弥 1983 『栗原遺跡第6次発掘調査概報』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1984 『今池遺跡群における奈良・平安時代の土器について』『新潟県埋蔵文化財調査報告書』第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡 新潟県教育委員会

- 坂井秀弥 1987 『第Ⅷ章まとめ』『新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集 香場遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1988 『新潟県における中世考古学の現状と課題』『新潟考古学談話会会報』第1号 新潟考古学談話会
- 品田高志 1991 『越後の中世土師器』『新潟考古学談話会会報』第8号 新潟考古学談話会
- 品田高志 1991 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第15 小兒石』新潟県柏崎市教育委員会
- 菅原正明 1989 『西日本における瓦器生産の展開』『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集 国立歴史民俗博物館
- 間雅之・本間信昭 1973 『南蒲原郡采村半ノ木道跡調査報告』『新潟県埋蔵文化財緊急調査報告書第1集』
新潟県教育委員会
- 高田平原団体研究グループ 1965 『高田平原北部の第四系—高田平原の団体研究・そのⅤ—』『新潟大学教育学部高田分校研究紀要No.9』
- 高橋保 1985 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第49集 立ノ内遺跡』新潟県教育委員会
- 田中耕作・鶴巻康志徳 1990 『新発田市埋蔵文化財調査報告第13 三光館跡・宝積寺館跡』
新潟県新発田市教育委員会
- 寺村光晴・室岡博他 1960 『鍋原町遺跡』新潟県柿崎町教育委員会
- 新潟県 1987 『新潟県史』通史編2 中世
- 新潟県教育委員会 1967 『新潟県文化財年報第六 新潟県遺跡目録』
- 新潟古砂丘グループ 1967 『新潟県の砂丘—その研究史と問題点—』『新潟大学理学部地質鉱物学研究室研究報告』
4 新潟大学理学部地質鉱物学教室
- 秦繁治 1990 『樋田遺跡第2次発掘調査概報』新潟県吉川町教育委員会
- 平野国三 1969 『頸城の荘園と牧の研究』『社会科学研究紀要』第4集
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1982 『草戸千軒町遺跡第28・29次発掘調査概要』
- 藤巻正眞 1988 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第27集 西田・鶴巻田遺跡群』新潟県教育委員会
- 藤巻正眞 1989 『土器片円盤について』『新潟考古学談話会会報』第3号 新潟考古学談話会
- 藤巻正眞 1991 『第Ⅳ章遺物2 縄文時代C石器』『新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集 城之腰遺跡』
新潟県教育委員会
- 藤塚明・小池邦明他 1987 『新潟市小丸山道跡発掘調査概報』新潟市教育委員会
- 源川公章校訂 1974 『越後野誌』(上・下) 小田島光武 歴史図書社
- 室岡博・寺村光晴 1962 『越後国柿崎町金谷の墳墓』『歴史考古』第7号 歴史考古学会
- 室岡博 1972 『頸城地方の海と海底・海浜遺跡』『上越市総合博物館教養選書第1集』新潟県上越市総合博物館
- 室岡博 1990 『木崎山館城跡第三次発掘報告』新潟県中頸城郡柿崎町教育委員会
- 吉岡康暢・平田天秋 1976 『珠洲古窯跡』『珠洲市史』第1巻 石川県珠洲市役所
- 吉岡康暢 1977a 『加賀・珠洲』『世界陶磁全集』3 日本中世 小学館
- 吉岡康暢 1977b 『珠洲陶の歳年をめぐる問題』『珠洲法住寺第3号窟』石川県教育委員会・珠洲古窯跡
発掘調査委員会
- 吉岡康暢 1982a 『珠洲系陶器における加飾法の展開と特質』『東洋陶磁』第8号
- 吉岡康暢 1982b 『北陸・東北の中世陶磁をめぐる問題』『庄内考古学』18 庄内考古学会
- 吉岡康暢 1987 『中世陶器の生産経営形態—能登・珠洲窯を中心に—』『国立歴史民俗博物館研究報告』
第12集 国立歴史民俗博物館
- 吉岡康暢 1989 『日本海城の土器・陶器』中編 六興出版
- 吉田東伍 1971 『大日本地名辞書』増補版 富山房
- 渡辺ますみ 1990 『新潟県における古代・中世の井戸』『新潟考古学談話会会報』第6号 新潟考古学談話会

別表1 遺構観察表

【竪穴住居】

()は推定

遺構No	図面No	検出位置	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深 (m)	主 軸	埋没積 (m ²)	柱穴	オマレ	掲載遺物
1号竪穴住居	12-28	2J-28-29-37~39	隅丸方形	7.01	6.84	0.30	N-71°-E	47.6	4	不明	図版46-1~14
2号竪穴住居	12-28	2J-54-56-64-65	隅丸方形	(5.46)	—	0.30	N-57°-E	50.0	(4)	不明	図版49-15~20、図版97-38
3号竪穴住居	13-29	4A-47-48-97~99他	方形	7.11	6.24	0.40	N-72°-W	44.0	4	不明	図版49-21~33、図版103-44 図版104-82
4号竪穴住居	13-30	5A-18-19-28-29-38-39	(方形)	6.30	—	0.25	N-76°-W	(39.7)	不明	東宮南東溝	図版53-77~84、図版97-31
5号竪穴住居	13-31	5B-11-12-21-22	方形	5.13	4.55	0.30	N-68°-W	23.4	4	東壁北寄り	図版53-85~93 図版101-43
6号竪穴住居	14-31	5B-76-78-86~88	方形	4.67	4.32	0.15	N-74°-W	30.2	(4)	東壁北寄り	図版54-94~112、
7号竪穴住居	13-32	5B-46-49-58-59	方形	6.06	(5.56)	0.36	N-60°-W	33.7	(4)	東壁北東溝	図版55-113~126
8号竪穴住居	13-32	5B-50-60-70-41-51-61	(方形)	(6.50)	—	0.22	N-88°-W	(42.9)	不明	(東壁中央)	図版55-127~図版56-141 図版100-15
9号竪穴住居	15-33	5C-52~54-62~64	(方形)	(5.30)	—	(0.35)	N-73°-W	(38.1)	不明	(東壁北寄り)	図版56-142~150 図版103-47
10号竪穴住居	15-33	5C-57-58-67-68	(方形)	4.46	—	0.35	N-67°-W	(19.9)	(4)	東壁北寄り	図版57-151~167
11号竪穴住居	15-34	5C-69-79-89	(方形)	(4.20)	—	0.18	N-54°-W	(17.6)	不明	(東壁南東溝)	図版57-168~173
12号竪穴住居	15-34	5D-74~76-84~86	隅丸方形	6.58	—	0.52	N-61°-W	(43.3)	4	東壁北寄り	図版56-174~図版59-193

【掘立柱建物】

()は推定

遺構No	図面No	検出位置	長軸 (m)	短軸 (m)	主 軸	面積 (m ²)	備 考
1号掘立柱建物	9-35	1B-61	1.85	1.60	N-15°-E	3.0	
2号掘立柱建物	9-35	1B-95-96	—	2.99	N-32°-E	—	
3号掘立柱建物	10-35	1F-87-88-98-99	—	3.93	N-9°-W	—	
4号掘立柱建物	15-35	5C-86~88	6.65	4.40	N-72°-W	29.3	
5号掘立柱建物	15-35	5C-82-83	6.92	4.53	N-68°-W	36.8	
6号掘立柱建物	14-35	6C-21~24-31~34	7.83	5.36	N-73°-W	42.0	
7号掘立柱建物	15-35	6C-17-27-37	7.32	4.44	N-14°-E	32.5	
8号掘立柱建物	15-36	6C-89-90-99-100	5.70	4.95	N-77°-W	28.2	
9号掘立柱建物	16-36	6C-61~64-71~74	10.12	5.42	N-75°-W	54.9	礎石建物
10号掘立柱建物	16-36	6D-81-82他	5.11	3.08	N-85°-W	15.7	
11号掘立柱建物	17-36	7D-45-46-55-56	—	5.54	N-80°-W	—	
12号掘立柱建物	19-36	4F-86~88-96~98他	7.30	4.58	N-85°-E	33.4	
13号掘立柱建物	19-36	4F-80-90-100	—	4.36	N-12°-E	—	
14号掘立柱建物	20-36	4G-32-33-43-52-53	—	4.93	N-12°-E	—	

【土坑】

()は想定

遺構No	図面No	出土位置	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深 (m)	埋藏遺物	備考
12号土坑	43	5B-22 上層	楕円	1.1	1.0	0.3	図版100-19	
13号土坑	43	5B-23 上層	楕円	0.9	0.8	0.3		
14号土坑	43	5B-32 上層	楕円	1.5	1.0	0.4		
17号土坑	43	5B-41 上層	楕円	1.6	1.4	0.4	図版70-4	
19号土坑	43	5B-42 上層	不整形円	1.0	0.8	0.5		
20号土坑	43	5B-52 上層	楕丸長方	1.0	0.9	0.6		
21号土坑	43	5B-43 上層	不整形円	1.6	0.9	0.4		
22号土坑	44	5B-43 上層	楕円	1.0	0.9	0.3	図版70-5	
30号土坑	44	5B-71 上層	楕丸長方	1.6	1.3	0.5		
54号土坑	45	5E-34 中層	不整形円	1.3	1.0	0.3	図版71-15-27	地鉄具類納
55号土坑	45	5E-44 中層	楕円	1.0	0.8	0.3		
56号土坑	45	5E-45 中層	円	1.0	0.9	0.3		土師
57号土坑	45	5E-44 中層	楕円	1.0	0.8	0.3		
58号土坑	45	5E-44 中層	楕円	1.1	0.8	0.3		土師・土師質灰
68号土坑	44	6E-1-2-11-12 中層	方	2.8	2.3	0.3	図版70-8-9	
78号土坑	44	6E-22 中層	楕丸長方	3.3	1.6	0.5	図版60-229	
142号土坑	44	5B-32 中層	楕円	1.8	1.2	0.7		須恵・土師・土師質灰
143号土坑	46	5B-32-33 中層	不整形円	2.7	2.2	1.7		須恵・土師・土師質灰
144号土坑	44	5B-41 中層	円	2.0	2.0	1.2	図版70-12-14	
146号土坑	46	5B-43-43 中層	不整形円	2.7	2.0	1.6		
150号土坑	46	5B-52-33 中層	長方	2.7	2.0	0.7		
243号土坑	45	2G-57 下層	楕円	1.3	0.8	0.3		
244号土坑	45	2G-77-78 下層	不整形円	1.5	1.0	0.2		
245号土坑	45	2G-68-78 下層	楕円	1.4	1.3	0.2		
266号土坑	46	5B-13-14 下層	楕丸長方	2.4	1.5	0.6		
268号土坑	46	5B-5-15 下層	楕丸方	1.9	1.7	0.7		
284号土坑	46	5B-53-54 下層	楕丸方	1.4	1.3	0.9		
519号土坑	46	6B-48-58 下層	円	2.6	2.4	1.6	図版59-194、図版60-225、図版72-33-38-39、図版100-13	
555号土坑	45	2G-68 下層	楕円	0.9	0.7	0.1		土師
653号土坑	47	5B-63-73-83 中層	楕丸	7.6	1.3	0.9		土師・埴洲
664号土坑	46	5A-61 下層	円	2.6	2.4	1.8		土師・須恵・埴洲
666号土坑	47	6B-6 下層	楕丸長方	3.8	2.3	1.1		土師・須恵・埴洲
666号土坑	47	5B-41-51 下層	楕円	3.7	2.6	1.6	図版74-67、図版58-62、図版59-119 図版101-47、図版104-92	

【井戸】

()は基点

通称No	区画No	検出位置	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深 (m)	井戸枠	埋藏遺物
1号井戸	37	8C-5 下層	不整形円	2.6	2.3	1.2	圓柱+縦板組み横杭との +倉物	図説106-1~4-10-12-14- 16・17-19-20
2号井戸	38	7D-61~63-71~73 下層	楕円	8.6	7.7	3.4	圓柱+縦板組み横杭との +倉物	図説106-16
3号井戸	37	8C-13 下層	不整形円	2.5	2.2	0.6	縦板組み組 +倉物	図説74-65、図説106-11
4号井戸	39	8C-15 下層	不整形円	2.9	2.2	1.0	縦板組み横杭 +倉物	依17冊-54
5号井戸	39	7D-91-92 下層	楕円	3.8	2.9	1.9	素掘り	
6号井戸	39	8C-28-36 下層	円	1.6	1.3	0.5	石組	図説100-22
7号井戸	37	5B-76-77 下層	楕円	4.3	3.6	2.3	縦板組み横杭 +倉物	
8号井戸	40	8C-15-16-25-26 下層	不整形	8.2	5.9	2.4	丸木合部材組用	
9号井戸	41	5A-60 下層	円?	7.0	-	1.6	縦板組み横杭 +倉物	
10号井戸	41	5A-50 下層		-	-	1.7	縦板組み横杭 +倉物	
11号井戸		1B-93-94 下層	円	1.3	1.3	1.8		
12号井戸		1B-96-97 下層	楕円	2.1	1.3	1.6		
13号井戸		1B-97-98 下層	楕円	1.9	1.5	1.5		
14号井戸		5B-31-32 下層	楕円	3.1	3.1	1.5		
15号井戸		8C-14 下層	楕円	1.5	1.1	1.2		
17号井戸		5B-71-81 下層	円	1.6	1.5	1.9		
18号井戸	39	5B-63 下層	隅丸長方	3.6	3.1	1.4		
19号井戸	42	5B-55-56 下層	不整形円	4.1	3.7	1.8		図説60-227
20号井戸	42	5B-53 下層	円	1.3	1.2	2.0		
22号井戸		5B-96-97 下層	不整形	3.0	1.9	2.3		
23号井戸	42	5B-98-99、00-8-9 下層	不整形	4.2	(4.0)	2.3		
24号井戸		6B-38 下層	楕円	2.6	1.6	1.2		
25号井戸		6B-59 下層	楕円	1.6	1.3	1.2		
26号井戸		6B-39-49 下層	楕円	1.3	1.1	1.7		
27号井戸		5C-62-72 下層	不整形円	4.1	3.0	1.7		図説74-70
28号井戸		6C-1 下層	円	1.6	1.4	1.7		
29号井戸		5C-85 下層	円	2.0	1.4	2.3		
30号井戸		6C-57 下層	楕円	2.1	1.3	1.5		
31号井戸		5B-61 中層	円	1.8	1.6	2.3		図説74-68
32号井戸	43	5C-82 中層	円	2.1	2.0	2.1		
33号井戸	43	5C-74-75 中層	不整形円	4.0	3.0	2.2		
34号井戸	43	5B-11 下層	楕円	1.8	1.5	1.9		図説60-230、図説74-65

【表】

標高(m)	国別	位置	検出面	埋存長	幅 (m)	深 (m)	主軸	掲載建物
1号溝	26	8D-57-6D-35	中層	28.1	1.9	0.58	N-30°-E	
2号溝	26	8D-66-6D-27	中層	20.9	1.5	0.22	N-20°-E	図庫74-71
3号溝	26	5E-68-5E-25	中層	23.0	1.1	0.31	N-80°-E	
4号溝	26	5E-68-6E-20	中層	15.8	1.1	0.23	N-10°-W	
5号溝	23	5B-27-5B-57	中層	9.2	1.1	0.27	N-30°-E	
6号溝	23	5C-32-5C-41	中層	5.6	1.1	0.55	N-20°-E	
7号溝	12	2J-7-2J-37	下層	10.8	0.7	0.17	N-11°-E	
8号溝	12	2J-24-2J-65	下層	13.7	1.3	0.60	N-7°-W	
9号溝	12	2J-34-2J-75	下層	15.0	1.8	0.73	N-7°-W	図庫74-72
10号溝	12	2J-43-2J-63	下層	7.0	2.2	0.28	N-7°-W	
11号溝	11	1G-99-2G-60	下層	19.2	2.2	0.52	N-11°-E	図庫74-73
12号溝	10	1F-99-1G-85	下層	17.3	1.7	0.62	N-7°-W	
13号溝	10	2G-3-1G-97	下層	12.6	1.7	-	N-70°-E	
14号溝	10	2G-15-2G-55	下層	13.8	1.7	0.86	N-11°-E	図庫74-75
15号溝	10	2G-31-2G-51	下層	7.8	2.3	0.67	N-11°-E	
16号溝	10	2F-46-2G-12	下層	18.2	1.0	0.16	N-70°-E	
17号溝	14-15	8B-48-6D-24	下層	51.0	1.1	0.48	N-83°-W	図庫60-231、232
18号溝	15	9D-75-6D-35	下層	23.4	0.9	0.12	N-5°-E	図庫60-235、図庫74-74、75
19号溝	19	4F-84-5F-25-5F-15	下層	21.9	1.6	0.54	N-7°-W	
20号溝	20	4G-2-4G-13	下層	3.6	1.9	0.38	N-20°-E	
21号溝	16-17	6D-92-7C-9-7C-55	下層	29.7	0.8	0.24		
22号溝	10	1G-84-2G-4	下層	4.9	0.4	0.12	N-7°-W	
23号溝	15	5C-46-6C-66	下層	6.3	0.4	0.23	N-11°-E	
24号溝	15	5C-47-6C-67	下層	6.1	0.4	0.11	N-11°-E	
25号溝	15	5C-48	下層	1.6	0.5	0.28	N-11°-E	
26号溝	14	5C-81-6C-1	下層	5.2	0.8	0.24	N-11°-E	
27号溝	14	6B-59-6C-51	下層	6.3	0.6	0.26	N-80°-W	
28号溝	15	6D-31-6D-22	下層	8.3	0.9	0.12	N-83°-W	
29号溝	15	6D-3-6D-12	下層	7.8	0.8	0.32		
30号溝	15	5C-79-5C-80	下層	4.7	0.7	-	N-80°-W	
31号溝	20	3G-48-3G-68	下層	8.3	1.8	0.45	N-16°-E	

番号	品名	単位	数量	仕入状況	備考
100	54	6号仕立	10	仕入	内装化粧紙
101	54	6号仕立	10	仕入	
102	54	6号仕立	10	仕入	
103	54	6号仕立	10	仕入	
104	54	6号仕立	10	仕入	
105	54	6号仕立	10	仕入	
106	54	6号仕立	10	仕入	
107	54	6号仕立	10	仕入	
108	54	6号仕立	10	仕入	
109	54	6号仕立	10	仕入	
110	54	6号仕立	10	仕入	
111	54	6号仕立	10	仕入	
112	54	6号仕立	10	仕入	
113	54	6号仕立	10	仕入	
114	55	7号仕立	10	仕入	
115	55	7号仕立	10	仕入	
116	55	7号仕立	10	仕入	
117	55	7号仕立	10	仕入	
118	55	7号仕立	10	仕入	
119	55	7号仕立	10	仕入	
120	55	7号仕立	10	仕入	
121	55	7号仕立	10	仕入	
122	55	7号仕立	10	仕入	
123	55	7号仕立	10	仕入	
124	55	7号仕立	10	仕入	
125	55	7号仕立	10	仕入	
126	55	7号仕立	10	仕入	
127	55	7号仕立	10	仕入	
128	55	7号仕立	10	仕入	
129	55	7号仕立	10	仕入	
130	55	7号仕立	10	仕入	
131	55	7号仕立	10	仕入	
132	55	7号仕立	10	仕入	
133	55	7号仕立	10	仕入	
134	55	7号仕立	10	仕入	
135	55	7号仕立	10	仕入	
136	55	7号仕立	10	仕入	
137	55	7号仕立	10	仕入	
138	55	7号仕立	10	仕入	
139	55	7号仕立	10	仕入	
140	55	7号仕立	10	仕入	
141	56	8号仕立	10	仕入	
142	56	8号仕立	10	仕入	
143	56	8号仕立	10	仕入	
144	56	8号仕立	10	仕入	
145	56	8号仕立	10	仕入	
146	56	8号仕立	10	仕入	
147	56	8号仕立	10	仕入	
148	56	8号仕立	10	仕入	
149	56	8号仕立	10	仕入	

標榜	品名	規格	分類	質量 (g)	測定	計士	色調	液色	濁度	性状・特徴等	備考
200	5197-21	砂	B	14.8	粗砂	粗砂	灰	混濁	1.5	水へ浮き、水へ沈み	内へ浮き、外へ沈み
201	5197-22	砂	B	15.8	粗砂	粗砂	灰	混濁	4.5	水へ浮き	水へ浮き
202	5197-23	砂	B	15.8	粗砂	粗砂	灰	混濁	3.4	水へ浮き	水へ浮き
203	5197-24	砂	B	15.7	粗砂	粗砂	灰	混濁	1.4	水へ浮き	水へ浮き
204	5197-25	砂	B	15.7	粗砂	粗砂	灰	混濁	1.4	水へ浮き	水へ浮き
205	5197-26	砂	B	15.8	粗砂	粗砂	灰	混濁	1.4	水へ浮き	水へ浮き
206	5197-27	砂	B	15.8	粗砂	粗砂	灰	混濁	1.4	水へ浮き	水へ浮き
207	5197-28	砂	B	15.8	粗砂	粗砂	灰	混濁	4.5	水へ浮き	水へ浮き
208	5197-29	砂	B	14.2	粗砂	粗砂	灰	混濁	3.4	水へ浮き	水へ浮き
209	5197-30	砂	B	14.8	粗砂	粗砂	灰	混濁	4.5	水へ浮き	水へ浮き
210	5197-31	砂	B	14.8	粗砂	粗砂	灰	混濁	1.4	水へ浮き	水へ浮き
211	5197-32	砂	B	14.0	粗砂	粗砂	灰	混濁	1.2	水へ浮き	水へ浮き
212	5197-33	砂	B	14.8	粗砂	粗砂	灰	混濁	5.6	水へ浮き	水へ浮き
213	5197-34	砂	B	14.8	粗砂	粗砂	灰	混濁	2.5	水へ浮き	水へ浮き
214	5197-35	砂	B	18.5	粗砂	粗砂	灰	混濁	1.3	水へ浮き	水へ浮き
215	5197-36	砂	B	16.8	粗砂	粗砂	灰	混濁	1.3	水へ浮き	水へ浮き
216	5197-37	砂	B	14.9	粗砂	粗砂	灰	混濁	7.8	水へ浮き	水へ浮き
217	5197-38	砂	B	13.7	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
218	5197-39	砂	B	15.0	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
219	5197-40	砂	B	15.0	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
220	5197-41	砂	B	15.7	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
221	5197-42	砂	B	15.7	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
222	5197-43	砂	B	18.6	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
223	5197-44	砂	B	18.7	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
224	5197-45	砂	B	17.2	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
225	5197-46	砂	B	17.2	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
226	5197-47	砂	B	17.2	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
227	5197-48	砂	B	15.7	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
228	5197-49	砂	B	15.7	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
229	5197-50	砂	B	15.7	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
230	5197-51	砂	B	15.7	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
231	5197-52	砂	B	11.8	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
232	5197-53	砂	B	6.0	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
233	5197-54	砂	B	10.4	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
234	5197-55	砂	B	15.4	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
235	5197-56	砂	B	15.4	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
236	5197-57	砂	B	11.1	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
237	5197-58	砂	B	11.4	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
238	5197-59	砂	B	11.4	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
239	5197-60	砂	B	11.9	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
240	5197-61	砂	B	11.4	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
241	5197-62	砂	B	11.4	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
242	5197-63	砂	B	12.5	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
243	5197-64	砂	B	13.0	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
244	5197-65	砂	B	13.0	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
245	5197-66	砂	B	12.6	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
246	5197-67	砂	B	13.5	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
247	5197-68	砂	B	9.7	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
248	5197-69	砂	B	11.3	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き
249	5197-70	砂	B	11.2	粗砂	粗砂	灰	混濁	10.6	水へ浮き	水へ浮き

番号	国名	出土位置	類別	器種	分類	口径(%)	体高(%)	胎土	色調	焼成	産否	注記・調査号	備考
250	61	8C-18	須臾	有柄杯	B	13.0	5.7	6.3	灰	黄	1/3	底へ少留り痕	
251	61	6B-39	須臾	有柄杯	B	13.1	3.8	6.9	灰白	黄	2/5	底へ少留り痕ナ	体割速く自然蝕
252	61	7D-53	須臾	有柄杯	1b	14.0	3.5	9.1	灰白	黄	1/3	底へ少留り痕ナ	底面腐蝕
253	61	7D-53	須臾	有柄杯	1c	15.5	3.5	11.0	灰	黄	1/4	底へ少留り痕ナ	体割自然蝕
254	61	7C-54	須臾	有柄杯	B	14.2	4.5	10.3	灰	黄	4/6	底へ少留り痕ナ	
255	61	7C-54	須臾	有柄杯	B	14.4	4.5	9.4	灰	黄	1/3	底へ少留り痕ナ	
256	61	5C-53-70	須臾	有柄杯	1b	13.8	3.3	7.9	灰	黄	1/6	底へ少留り痕	底面文字遺存
257	61	7D-86	須臾	有柄杯	1c	13.9	3.3	7.9	灰	黄	1/6	底へ少留り痕	内面文字自然蝕
258	61	5C-54	須臾	有柄杯	B	14.2	4.0	8.0	灰白	黄	4/6	底へ少留り痕ナ	
259	61	4A-7	須臾	有柄杯	B	14.0	4.4	7.5	灰	黄	2/3	底へ少留り痕ナ	底面腐蝕
260	61	5B-31	須臾	有柄杯	1c	15.5	4.7	10.0	灰	黄	1/3	底へ少留り痕ナ	
261	61	4A-7	須臾	有柄杯	1c	15.7	4.5	8.7	灰	黄	3/5	底へ少留り痕ナ	
262	61	4A-7	須臾	有柄杯	B	14.9	4.8	8.7	灰	黄	2/3	底へ少留り痕ナ	
263	61	6B-62	須臾	有柄杯	B	15.0	5.2	10.0	灰	黄	2/3	底へ少留り痕ナ	
264	61	5D-62	須臾	有柄杯	B	15.0	5.3	13.1	灰	黄	2/3	底へ少留り痕ナ	
265	61	6B-62	須臾	有柄杯	1c	15.9	5.3	13.1	灰	黄	2/3	底へ少留り痕ナ	
266	61	6B-62	須臾	有柄杯	1c	15.9	5.3	13.1	灰	黄	2/3	底へ少留り痕ナ	
267	61	6B-62	須臾	有柄杯	1c	15.9	5.3	13.1	灰	黄	2/3	底へ少留り痕ナ	
268	61	6B-62	須臾	有柄杯	1c	15.9	5.3	13.1	灰	黄	2/3	底へ少留り痕ナ	
269	61	6B-62	須臾	有柄杯	1c	15.9	5.3	13.1	灰	黄	2/3	底へ少留り痕ナ	
270	61	7D-55	須臾	有柄杯	B	14.0	7.4	10.5	灰	黄	4/6	底へ少留り痕ナ	
271	61	7D-55	須臾	有柄杯	B	14.0	7.4	10.5	灰	黄	4/6	底へ少留り痕ナ	
272	62	6D	須臾	有柄杯	B	14.0	7.4	10.5	灰	黄	4/6	底へ少留り痕ナ	
273	62	7D-3-4	須臾	有柄杯	B	14.0	7.4	10.5	灰	黄	4/6	底へ少留り痕ナ	
274	62	7-8C-4	須臾	有柄杯	B	14.0	7.4	10.5	灰	黄	4/6	底へ少留り痕ナ	
275	62	8C-2	須臾	有柄杯	1c	15.6	6.1	11.2	灰	黄	1/3	底へ少留り痕	
276	62	8C-2	須臾	有柄杯	1c	15.6	6.1	11.2	灰	黄	1/3	底へ少留り痕	
277	62	8C-18	須臾	有柄杯	1c	15.6	6.1	11.2	灰	黄	1/3	底へ少留り痕	
278	62	8C-18	須臾	有柄杯	1c	15.6	6.1	11.2	灰	黄	1/3	底へ少留り痕	
279	62	7-8C-18	須臾	有柄杯	1c	15.6	6.1	11.2	灰	黄	1/3	底へ少留り痕	
280	62	7-8C-18	須臾	有柄杯	1c	15.6	6.1	11.2	灰	黄	1/3	底へ少留り痕	
281	62	4A-52	須臾	有柄杯	1c	18.4	4.1	18.0	灰	黄	1/3	底へ少留り痕	
282	62	5C-63	須臾	有柄杯	1c	18.4	4.1	18.0	灰	黄	1/3	底へ少留り痕	
283	62	7D-38	須臾	有柄杯	B	13.4	3.6	8.0	灰	黄	4/5	底へ少留り痕	
284	62	7D-38	須臾	有柄杯	B	13.4	3.6	8.0	灰	黄	4/5	底へ少留り痕	
285	62	8C-41	須臾	有柄杯	1c	15.7	3.7	9.4	灰	黄	1/4	底へ少留り痕	
286	62	6B-3	須臾	有柄杯	1c	15.7	3.7	9.4	灰	黄	1/4	底へ少留り痕	
287	62	6B-3	須臾	有柄杯	1c	15.7	3.7	9.4	灰	黄	1/4	底へ少留り痕	
288	62	6B-3	須臾	有柄杯	1c	15.7	3.7	9.4	灰	黄	1/4	底へ少留り痕	
289	62	6B-3	須臾	有柄杯	1c	15.7	3.7	9.4	灰	黄	1/4	底へ少留り痕	
290	62	6B-3	須臾	有柄杯	1c	15.7	3.7	9.4	灰	黄	1/4	底へ少留り痕	
291	62	6B-3	須臾	有柄杯	1c	15.7	3.7	9.4	灰	黄	1/4	底へ少留り痕	
292	62	6B-3	須臾	有柄杯	1c	15.7	3.7	9.4	灰	黄	1/4	底へ少留り痕	
293	62	6B-3	須臾	有柄杯	1c	15.7	3.7	9.4	灰	黄	1/4	底へ少留り痕	
294	62	6B-3	須臾	有柄杯	1c	15.7	3.7	9.4	灰	黄	1/4	底へ少留り痕	
295	62	6B-3	須臾	有柄杯	1c	15.7	3.7	9.4	灰	黄	1/4	底へ少留り痕	
296	62	6B-3	須臾	有柄杯	1c	15.7	3.7	9.4	灰	黄	1/4	底へ少留り痕	
297	62	6B-3	須臾	有柄杯	1c	15.7	3.7	9.4	灰	黄	1/4	底へ少留り痕	
298	62	6B-3	須臾	有柄杯	1c	15.7	3.7	9.4	灰	黄	1/4	底へ少留り痕	
299	62	6B-3	須臾	有柄杯	1c	15.7	3.7	9.4	灰	黄	1/4	底へ少留り痕	
300	62	6B-3	須臾	有柄杯	1c	15.7	3.7	9.4	灰	黄	1/4	底へ少留り痕	

別表3 土器・陶磁器等観察表

報告 No	国産 No	出土位置	類別	器種	分類	寸法		色調	備考(手続ほか)	
						口徑	底径			
1	70	8号土坑	燕西	甕	丁種			灰		
2	70	8号土坑	燕西	甕				灰		
3	70	8号土坑	燕西	甕				灰		
4	70	13号土坑	燕西	片口鉢			8.2	灰白		
5	70	22号土坑	瓦器	瓦器		24.0		灰白	587号同一	
6	70	126号土坑	瓦器	火鉢		26.5		白に灰	587号同一	
7	70	66号土坑	瀬戸・美濃	香炉		11.0		黄緑	黄緑	
8	70	66号土坑	中世土器部	中皿	A2-a	12.0	2.5	5.8	黄緑	
9	70	66号土坑	中世土器部	花瓶		3.2	12.4	4.0		黄さ231.0
10	70	91号土坑	中世土器部	中皿	B3-a	10.1	2.2	6.3	黄緑	
11	70	127号土坑	瀬戸・美濃	菓子				才灰	灰胎	
12	70	144号土坑	中世土器部	中皿	B3-a	10.2	2.5	5.9	黄緑	
13	70	144号土坑	中世	甕		24.4				
14	70	144号土坑	中世	甕		24.6				
15	71	54号土坑	瀬戸・美濃	四耳甕		11.3	30.0	7.6	才灰	灰胎
16	71	54号土坑	中世土器部	五輪鉢			16.5			黄さ477.8
17	71	54号土坑	中世土器部	五輪鉢(青)			6.4			黄さ29.8
18	71	54号土坑	中世土器部	花瓶		2.8	11.3	3.2		黄さ157.8
19	71	54号土坑	中世土器部	飯食部		6.4	4.0	3.6		黄さ36.5
20	71	54号土坑	中世土器部	飯食部		6.6	4.5	4.0		黄さ77.7
21	71	54号土坑	中世土器部	飯食部		6.6	4.5	4.2		黄さ68.9
22	71	54号土坑	中世土器部	六部(新)		7.2	3.8	3.4		黄さ51.6
23	71	54号土坑	中世土器部	六部(旧)		6.4	1.0	4.6		黄さ44.4
24	71	54号土坑	中世土器部	六部(旧)		6.4	1.0	4.8		黄さ40.4
25	71	54号土坑	中世土器部	六部(旧)		6.4	0.9	4.8		黄さ38.1
26	71	54号土坑	中世土器部	六部(旧)		6.8	1.0	4.8		黄さ34.8
27	71	54号土坑	中世土器部	六部(旧)		6.4	0.9	4.8		黄さ44.1
28	72	255号土坑	琉球	片口鉢	C	26.0	11.0	11.8	才灰	断面：幅3.3cmで15本
29	72	255号土坑	琉球	片口鉢				14.0	才灰	
30	72	280号土坑	瓦器	香炉			8.2		才灰	
31	72	489号土坑	琉球	甕					才灰	
32	72	297号土坑	琉球	甕	丁種				才灰	
33	72	519号土坑	琉球	片口鉢	D				才灰	
34	72	359号土坑	中世土器部	中皿	A2-a	12.2	(3.1)			
35	72	385号土坑	中世土器部	小皿	B3-a	8.8	2.2	5.8	黄緑	
36	72	430号土坑	中世土器部	小皿	B3-a	8.3	2.0	6.2	黄緑	
37	72	434号土坑	中世土器部	中皿	A4	11.1	3.7		才灰	
38	72	519号土坑	中世土器部	中皿	A3-a	12.8	3.4	5.6	黄緑	
39	72	519号土坑	中世土器部	大皿	B3-a	13.5	3.5	7.3	黄緑	
40	72	556号土坑	中世土器部	小皿	B3-a	7.8	1.7	4.7	黄緑	
41	72	553号土坑	中世土器部	小皿	B3-a	8.1	2.0	6.2	黄緑	
42	72	553号土坑	中世土器部	小皿	B3-a	7.5	3.7	5.8	黄緑	
43	72	553号土坑	中世土器部	大皿	B3-b	13.6	3.4	7.9	黄緑	
44	72	553号土坑	中世土器部	大皿	B3-a	15.0	3.8	8.2	黄緑	
45	72	553号土坑	中世土器部	大皿	B3-a	14.1	3.5	8.2	黄緑	
46	72	560号土坑	瀬戸・美濃	四耳甕					才灰	灰胎
47	72	568号土坑	青磁	甕		17.2			才灰	
48	72	568号土坑	瀬戸・美濃	甕					灰土	灰胎
49	72	569号土坑	中世土器部	大皿	B3-b	13.1	2.5	7.0	黄緑	
50	72	572号土坑	中世土器部	小皿	B3-a	7.4	1.9	5.6	黄緑	
51	72	572号土坑	中世土器部	小皿	B3-a	8.0	2.2	6.2	黄緑	
52	72	572号土坑	中世土器部	小皿	B3-a	8.3	2.0	5.7	黄緑	
53	72	572号土坑	中世土器部	小皿	B3-b	8.0	1.8	5.1	才灰	
54	72	572号土坑	中世土器部	中皿		11.2			黄緑	
55	72	572号土坑	中世土器部	中皿	B3-a	12.0	2.7	7.8	黄緑	
56	72	572号土坑	中世土器部	中皿	B3-a	12.9	3.0	6.6	黄緑	
57	72	572号土坑	中世土器部	大皿	B3-b	13.9			黄緑	
58	72	572号土坑	中世土器部	中皿	B3-b	12.5	3.7	7.5	黄緑	
59	72	572号土坑	中世土器部	中皿	B3-b	12.6	3.0	6.8	黄緑	
60	72	372号土坑	青磁	甕				15.2	才灰	
61	74	628号土坑	琉球	甕	丁種			12.2	灰	
62	74	628号土坑	琉球	小皿	立種	9.8			灰	
63	74	628号土坑	琉球	甕	立種			8.6	灰	
64	74	628号土坑	琉球	甕	立種				灰	
65	74	34号井戸	琉球	片口鉢				11.5	灰白	断面：幅2.5cmで8本
66	74	3号井戸	琉球	甕	R種	6.5			黄灰	
67	74	666号土坑	中世土器部	小皿	B3-a	7.9	2.0	5.8	灰土	
68	74	31号井戸	中世土器部	中皿	A4	11.5	3.6		黄緑	
69	74	628号土坑	瀬戸・美濃	菓子					才灰	灰胎
70	74	27号井戸	中世土器部	中皿	A2-a	12.9	2.5	5.9	黄緑	
71	74	2号溝	中世土器部	中皿	B3-a	10.4	2.4	6.8	黄緑	
72	74	9号溝	中世土器部	小皿	A2-a	8.2	2.0		才灰	
73	74	11号溝	青磁	甕				13.6	才灰	
74	74	18号溝	中世土器部	小皿	A3-c	8.8	1.6		黄緑	
75	74	18号溝	中世土器部	大皿	B	13.2	2.7	8.7	才灰	
76	74	628号土坑	瓦器	高砂		17.0			黄緑	586号同一
77	74	628号土坑	瀬戸・美濃	四耳甕		11.5			才灰	灰胎
78	74	628号土坑	瀬戸・美濃	四耳甕		12.4			才灰	灰胎
79	74	72-3-4土器	瀬戸・美濃	甕		10.2	2.3	3.8	才灰	灰胎
80	74	72-33-34土器	青磁	甕				13.0	灰白	
81	74	72-33-34土器	中世土器部	中皿	A2-a	12.6	3.3		黄緑	

報告 №	回數 №	出土位置	類別	器種	分期	法量			色調	備考(手透はか)
						口徑	器高	碗徑		
82	74	6D-99-94土層	珠網	片口鉢			11.0		刻目:幅2cm×8本	
83	74	6C-88土層	瓦器	火鉢		10.8			外:才集 内:浅黄 506と同一	
84	75	7C-94	青磁	碗		11.7	3.8	5.8	明緑灰	
85	75	3F-73	青磁	碗		12.4			才灰	
86	75	2H-57	青磁	碗		16.0			灰白	
87	75	8C	青磁	碗		15.0			才黄	
88	75	2J-61	青磁	碗		14.2			明緑灰	
89	75	5C-86	青磁	碗		16.2			緑灰	
90	75	5B-47	青磁	碗		17.0			才灰	
91	75	3J-65	青磁	碗		11.5			明緑灰	
92	75	5B-4	青磁	碗					明緑灰	
93	75	5B-56	青磁	碗					才灰	
94	75	3B-9	青磁	碗					才灰	
95	75	2J-58	青磁	碗				4.6	明緑灰	
96	75	4B-71	青磁	碗				4.8	才灰	
97	75	7D-緑土	青磁	碗		15.1			緑灰	
98	75	4B-6	青磁	碗		14.9			緑灰	
99	75	5B-48	青磁	碗		13.9			明緑灰	
100	75	5B-94, 7C-64	青磁	碗		12.8			才灰	
101	75	1C-87	青磁	碗					明緑灰	
102	75	2J-34	青磁	碗					緑灰	
103	75	5B-26	青磁	碗		16.0			才灰	
104	75	6D-25	青磁	碗		13.4			才灰	
105	75	5B-83-85	青磁	碗				5.4	浅黄	
106	75	8D-11-13	青磁	碗				6.2	才灰	
107	75	4A-90	青磁	碗				5.8	才灰	
108	75	2J-83	青磁	碗				3.2	明緑灰	
109	75	4B-75	青磁	碗				5.0	才灰	
110	75	5F-51-41	青磁	碗				7.9	緑灰	
111	75	5B-3	青磁	碗		14.0			緑灰	
112	75	5A-49-50	青磁	碗		15.0			才灰	
113	75	5A-90	青磁	碗		15.6			才灰	
114	75	5F-12	青磁	碗		13.6			才灰	
115	75	8F-31-33	青磁	碗		17.0			緑灰	
116	75	4B-94	青磁	碗				5.6	才灰	
117	75	5B-61	青磁	碗				6.2	緑灰	
118	75	6C-4	青磁	碗		15.0			才灰	
119	75	5B-73	青磁	碗		13.7	7.3	4.6	灰才	
120	76	2J-84	青磁	碗		22.2	3.8	10.4	緑灰	
121	76	2G-1-11	青磁	碗		22.1			才灰	
122	76	2G-13	青磁	盤		20.6			緑灰	
123	76	2H-23	青磁	盤		18.0			才黄	
124	76	1G-83	青磁	盤		17.0			明緑灰	
125	76	4A-88	青磁	盤		24.0			緑灰	
126	76	1H-72	青磁	盤		18.0			明緑灰	
127	76	1C-69	青磁	盤				13.0	明緑灰	
128	76	5D-72	青磁	盤					才灰	
129	76	2C-1-11	青磁	盤				12.2	緑灰	
130	76	7C	青磁	鉢				12.8	明緑灰	
131	76	4F-87	青磁	鉢				13.2	才灰	
132	76	5B-82	青磁	鉢		14.3			明緑灰	
133	76	不明	青磁	香炉		12.5			明緑灰	
134	76	6D-22-23	青磁	香炉		9.2			明緑灰	
135	76	4F-52	青磁	香炉		7.6			才灰	
136	76	4A-72	青磁	香炉		5.8			赤緑	
137	76	5D-88-90	白磁	瓶		13.0			灰白	
138	76	1H-25	白磁	瓶					明緑灰	
139	76	2C-4	白磁	瓶		13.0			明才灰	
140	76	2J-83	白磁	瓶		12.5			明緑灰	
141	76	6B-22	白磁	杯		11.0			灰白	
142	76	5B-15	白磁	小瓶		9.0			灰白	
143	76	5D-99-100	白磁	瓶		11.0			灰白	
144	76	6B-63	白磁	瓶		15.6			灰白	
145	76	不明	白磁	瓶		15.8			灰白	
146	76	6B-58	白磁	杯		8.0			灰白	
147	76	4B-84	白磁	杯		9.5			灰白	
148	76	2J-44	白磁	碗				5.0	灰白	
149	76	不明	白磁	碗				4.0	灰白	
150	76	不明	白磁	碗				3.5	明緑灰	
151	76	2H-26, 1H-71	青白磁	梅瓶		4.8			明緑灰	
152	76	5D-75-76	青白磁	梅瓶					明緑灰	
153	76	1H-39	青白磁	梅瓶					明緑灰	
154	76	2J-45	青白磁	梅瓶					明緑灰	
155	76	2C-3	青白磁	梅瓶					明緑灰	
156	76	2B-36	青白磁	梅瓶				8.0	明緑灰	
157	76	3C-49, 1H-71	青白磁	梅瓶				11.8	明才灰	
158	76	5A-60	青白磁	薬					明緑灰	
159	76	8C-10	青白磁	合子(赤)		4.0	1.3		明緑灰	
160	76	3J-83	青白磁	合子(赤)		5.0			明緑灰	
161	76	2G-11-12	磁	瓶				12.9	青灰	
162	76	6B-39	磁	瓶		14.0			青灰	

標榜 No.	国取 No.	出土位置	類別	図様	分類	法量			色調	備考(手法ほか)
						口径	胎高	底径		
163	76	5E-03-94	漆付	黒					青灰	
164	76	不明	漆付	黒					赤黒	
165	77	5E-05	瀬戸・美濃	天目茶碗	14.0				黒	鉄物
166	77	2E	瀬戸・美濃	天目茶碗	12.0				黒	鉄物
167	77	6E-50	瀬戸・美濃	天目茶碗	12.4				黒	鉄物
168	77	5E-65-75	瀬戸・美濃	天目茶碗	12.0				黒	鉄物
169	77	6E-22	瀬戸・美濃	天目茶碗	11.5				黒	鉄物
170	77	6E-50	瀬戸・美濃	天目茶碗	11.7				黒	鉄物
171	77	6E-3-14	瀬戸・美濃	天目茶碗	12.0				黒	鉄物
172	77	5A-81	瀬戸・美濃	天目茶碗	12.0	6.6	4.2		黒	鉄物
173	77	4A-100	瀬戸・美濃	天目茶碗	12.5				黒	鉄物
174	77	3E-13	瀬戸・美濃	天目茶碗	10.4				黒	鉄物
175	77	4A-72	瀬戸・美濃	天目茶碗	8.8				黒	鉄物
176	77	7D-43-44	瀬戸・美濃	天目茶碗	11.8	6.2	4.0		黒	鉄物
177	77	5E-49	瀬戸・美濃	天目茶碗			4.6		黒	鉄物
178	77	7D	瀬戸・美濃	天目茶碗			4.4		黒	鉄物
179	77	7D-74	瀬戸・美濃	中輪碗					黒	鉄物
180	77	5E-26-27	瀬戸・美濃	黒	12.8				黒	鉄物
181	77	4A-69	瀬戸・美濃	香印	12.0				黒	鉄物
182	77	5C	瀬戸・美濃	香印	11.0				黒	鉄物
183	77	5A-39	瀬戸・美濃	香印	17.7				黒	鉄物
184	77	7C-61	瀬戸・美濃	茶碗	9.3				黒	鉄物
185	77	4A-89	瀬戸・美濃	平碗	19.2				灰白	鉄物
186	77	5E-53	瀬戸・美濃	平碗	18.0				灰白	鉄物
187	77	5E-53-83	瀬戸・美濃	平碗	16.2				灰青	鉄物
188	77	6E-6	瀬戸・美濃	平碗	18.0				灰白	鉄物
189	77	3E-53	瀬戸・美濃	平碗	19.8				灰青	鉄物
190	77	5E-29-38	瀬戸・美濃	平碗	24.2				灰白	鉄物
191	77	5E-55	瀬戸・美濃	平碗			7.3		灰白	鉄物
192	77	4E-14	瀬戸・美濃	平碗			5.4		灰白	鉄物
193	77	5E-34	瀬戸・美濃	平碗	22.8				灰白	鉄物
194	77	7C-07	瀬戸・美濃	新緑茶碗	41.0				灰青	鉄物
195	77	5E-22	瀬戸・美濃	新緑茶碗	31.0				灰青	鉄物
196	77	5E-41	瀬戸・美濃	新緑茶碗	34.5				灰白	鉄物
197	77	4E-94	瀬戸・美濃	新緑茶碗	23.0				灰青	鉄物
198	77	不明	瀬戸・美濃	新緑茶碗	29.2				灰青	鉄物
199	77	4A-93	瀬戸・美濃	新緑茶碗	22.4				灰青	鉄物
200	77	6C-17	瀬戸・美濃	鉢	24.0				灰青	鉄物
201	78	6C-51	瀬戸・美濃	皿	8.7	1.4	5.3		灰白	鉄物
202	78	8C-34	瀬戸・美濃	皿	10.3	1.7	6.5		灰白	鉄物
203	78	5E-15	瀬戸・美濃	皿	12.9				灰白	鉄物
204	78	5E	瀬戸・美濃	皿	11.5				灰白	鉄物
205	78	5E-60	瀬戸・美濃	皿	5.7				灰白	鉄物
206	78	不明	瀬戸・美濃	皿	11.3				灰白	鉄物
207	78	5C-19	瀬戸・美濃	皿	11.0	3.2	5.4		灰白	鉄物
208	78	7C-9	瀬戸・美濃	皿	12.0				灰白	鉄物
209	78	7C-2	瀬戸・美濃	皿	11.6				浅黄	鉄物
210	78	5E-21-22	瀬戸・美濃	皿	10.4				灰白	鉄物
211	78	不明	瀬戸・美濃	皿	10.6	1.9	6.4		灰白	鉄物
212	78	7C-48	瀬戸・美濃	皿	10.4	2.5			灰白	鉄物
213	78	2E-66-68	瀬戸・美濃	皿	11.0				灰白	鉄物
214	78	5E-44	瀬戸・美濃	脚L皿	11.2				灰白	鉄物
215	78	5A-49	瀬戸・美濃	脚L皿	12.0				灰白	鉄物
216	78	3E-61	瀬戸・美濃	脚L皿	13.5				灰白	鉄物
217	78	5A-70	瀬戸・美濃	脚L皿					灰白	鉄物
218	78	4A-07	瀬戸・美濃	脚L皿	13.4				灰白	鉄物
219	78	5E-41-95	瀬戸・美濃	脚L皿	11.2		7.0		灰白	鉄物
220	78	8C-57-58	瀬戸・美濃	脚L皿			7.0		灰白	鉄物
221	78	5E-78	瀬戸・美濃	四耳鉢					灰白	鉄物
222	78	5E-70	瀬戸・美濃	四耳鉢			9.2		灰白	鉄物
223	78	5A-28	瀬戸・美濃	飯子					灰白	鉄物
224	78	5E-32	瀬戸・美濃	花瓶	3.4				灰白	鉄物
225	78	5A-40	瀬戸・美濃	花瓶	5.4				灰白	鉄物
226	78	5E-32	瀬戸・美濃	花瓶	6.0				灰白	鉄物
227	78	5E-60	瀬戸・美濃	花瓶					灰白	鉄物
228	78	5E-77	瀬戸・美濃	花瓶	7.4				灰白	鉄物
229	78	4E-40	瀬戸・美濃	花瓶	12.4				灰白	鉄物
230	78	4A-98	瀬戸・美濃	花瓶	12.0		7.0		灰白	鉄物
231	78	5A-23-29-38	瀬戸・美濃	香炉	12.9				灰白	鉄物
232	78	6D-28	瀬戸・美濃	香炉			5.8		灰白	鉄物
233	78	5E-45	瀬戸・美濃	香炉	14.0	5.6			灰白	鉄物
234	78	5E-45	瀬戸・美濃	蓋	3.2	0.9			灰白	鉄物
235	78	不明	瀬戸・美濃	蓋	5.3	2.1			灰白	鉄物
236	78	5E-73	朝鮮南部	皿	10.8	3.1	5.0		灰白	鉄物
237	78	5E-73	朝鮮南部	皿	10.8	3.7	4.4		灰	鉄物
238	78	5E-73	朝鮮南部	皿	10.6	2.9	3.8		灰	鉄物
239	78	5E-73	朝鮮南部	皿	11.2	3.2	4.0		灰	鉄物
240	78	5E-73	朝鮮南部	皿	10.1	3.0	3.8		灰	鉄物
241	78	5E-73	朝鮮南部	皿	10.4	2.8	4.0		灰	鉄物
242	78	5E-73	朝鮮南部	皿	10.3	2.9	4.1		灰	鉄物
243	78	5E-73	朝鮮南部	皿	10.8	3.4	4.4		灰	鉄物
244	78	5E-73	朝鮮南部	皿	11.0	3.3	4.2		灰	鉄物

報告 No	國庫 No	取土位置	種別	番種	分類	注量			色調	備考(手法ほか)
						口徑	深	底徑		
245	78	5B-73	朝鮮陶器	甕		10.6	3.1	4.0	灰	
246	78	5B-73	朝鮮陶器	甕		11.1	3.3	5.1	灰	
247	78	5B-73	朝鮮陶器	甕		11.8	3.6	4.3	灰	
248	78	5B-73	朝鮮陶器	甕		10.4	3.4	2.8	灰	
249	79	2J-43	珠洲	甕	R種	12.0			灰	
250	79	7D-53	珠洲	甕	R種				灰	
251	79	2G-11-12	珠洲	甕	R種				灰白	
252	79	不明	珠洲	甕	R種				灰	
253	79	5A-18	珠洲	甕	R種				灰	
254	79	2I-53	珠洲	甕	R種				灰	
255	79	5E-80	珠洲	甕	R種				灰	
256	79	1H-46	珠洲	甕	R種				灰	
257	79	1H-73	珠洲	甕	R種	9.0			灰	
258	79	5E-55	珠洲	甕	R種				灰	
259	79	3J-82	珠洲	甕	R種				灰	
260	79	8D-11	珠洲	甕	R種				灰	
261	79	5P-96	珠洲	甕	R種	9.0	21.2	8.8	灰白	
262	79	不明	珠洲	甕	R種	9.5	19.2	8.3	灰白	
263	79	7-8D	珠洲	甕	R種	10.0	22.2	10.5	灰	
264	79	7D	珠洲	甕	R種			9.5	灰	
265	79	2J-24	珠洲	甕	R種			8.0	灰	
266	79	5B-94	珠洲	甕	R種			9.5	灰	
267	79	2I-54	珠洲	甕	R種			6.8	灰	
268	79	1G-83	珠洲	甕	T種A	15.6			灰	
269	79	6D-4	珠洲	甕	T種A	16.4			灰	
270	79	5B-86	珠洲	甕	T種B	20.0			灰	
271	79	5B-76	珠洲	甕	T種B				灰	
272	79	6D-33-34	珠洲	甕	T種B	17.6			灰	
273	79	5C	珠洲	甕	T種B	18.0			灰	
274	79	1H-93	珠洲	甕	T種B	23.4			灰	
275	79	2C	珠洲	甕	T種C	13.6			灰	
276	79	1H-71	珠洲	甕	T種C	20.0			灰	
277	79	2G-13	珠洲	甕	T種C	18.9			灰	
278	80	1K-67	珠洲	甕	T種D	21.6			灰	
279	80	6B-26	珠洲	甕	T種E	16.6			灰白	
280	80	2J-54	珠洲	甕	T種				灰	
281	80	1H-75	珠洲	甕	T種				灰	
282	80	5C-85	珠洲	甕	T種				灰	
283	80	8D-13-23	珠洲	甕	T種				灰	
284	80	7C-82-95	珠洲	甕	K種	21.8			灰	
285	80	5B-50	珠洲	甕	T種F	17.4			灰白	
286	80	7C-91-92	珠洲	甕	K種				灰白	
287	80	8C-D	珠洲	甕	T種			10.4	灰	
288	80	1G-91	珠洲	甕	T種			12.4	灰白	
289	80	5B-72	珠洲	甕	A	40.8			灰	
290	80	2J-52	珠洲	甕	B	43.0			灰	
291	80	2I-52	珠洲	甕	B	56.0			灰白	
292	81	5D-88	珠洲	甕	B	51.6			灰	
293	81	1H-73-91	珠洲	甕	C	48.4			灰	
294	81	6B-25-26	珠洲	甕	C	50.6			灰	
295	81	4A-93	珠洲	甕	C	38.0			灰	
296	81	5B-55	珠洲	甕	C				灰	
297	81	5B-90	珠洲	甕	C				灰	
298	81	8C-16	珠洲	甕	C				灰白	
299	81	5D-8	珠洲	甕	C				灰	
300	81	5B-44	珠洲	甕	C				灰	
301	81	5E	珠洲	甕	C				灰	
302	81	3C-38	珠洲	甕	D				灰	
303	81	5P-33-73	珠洲	甕	E				灰	
304	81	5P-32	珠洲	甕	E				灰	
305	81	2J-37	珠洲	甕	E				灰白	
306	81	5B-51	珠洲	甕	E				灰	
307	81	7D-71	珠洲	甕	E				灰	
308	81	2I-87-88	珠洲	甕	E				灰白	
309	81	2H-46	珠洲	甕	E				灰	
310	81	2H-75	珠洲	甕	E				灰	
311	81	2J-56-59	珠洲	甕	E				灰	
312	81	7-8C	珠洲	甕	E				灰	
313	81	5B-81	珠洲	甕	E				灰	
314	81	2J-91-92	珠洲	甕	E				灰	
315	81	6E-11-12	珠洲	甕	E			12.7	灰	
316	82	1H-73	珠洲	甕	A	21.1			灰	
317	82	5B-32	珠洲	片口鉢	A	16.7			明子灰	
318	82	7D-33-34	珠洲	片口鉢	A	18.0	7.2	6.8	灰	
319	82	1H-73	珠洲	片口鉢	A	22.3	6.7	5.7	暗緑灰	
320	82	2J-63	珠洲	片口鉢	A	16.1	7.3	8.2	灰	
321	82	2I-90-2I-71	珠洲	片口鉢	A	19.2		9.0	明子灰	
322	82	8C-13	珠洲	片口鉢	C	21.2			灰	
323	82	2I-61-83	珠洲	片口鉢	A	30.0			灰	
324	82	8C-11-12	珠洲	片口鉢				7.4	灰白	
325	82	2J-84	珠洲	片口鉢				8.0	灰	
326	82	2J-91-92	珠洲	片口鉢	B	26.4			灰	

報告 No.	原取 No.	出土位置	類別	部種	分期	法量			色調	備考(平法ほか)
						口径	器高	底径		
327	82	7C-09	珠洲	片口罍	C	25.0			灰	
328	82	2J-82	珠洲	片口罍	C	33.0			灰	跡目：幅1.9cmで12本
329	82	2H-39	珠洲	片口罍	C	25.0			灰白	跡目：幅2.2cmで14本
330	82	3J-41	珠洲	片口罍	C	30.0			灰	跡目：幅2.5cmで9本
331	82	2J-72,83	珠洲	片口罍	C	35.0			灰	跡目：幅2.4cmで14本
332	82	2H-76	珠洲	片口罍	C	33.0			灰	跡目：幅2.7cmで12本
333	82	2J-84	珠洲	片口罍	B	34.0			灰	跡目：幅2.2cmで12本
334	82	6B-15	珠洲	片口罍	C	33.0			灰白	跡目：幅2.3cmで10本
335	82	3J-85	珠洲	片口罍	C	29.0			灰	跡目：幅2.5cmで9本
336	82	7C-01,82	珠洲	片口罍	C	26.0			灰	跡目：幅3.1cmで17本
337	82	6B-11	珠洲	片口罍	C	33.0			灰	跡目：幅2.6cmで11本
338	82	5C-71	珠洲	片口罍	D	26.0			灰	跡目：幅1.5cmで6本
339	82	1G-86	珠洲	片口罍	D	32.5			灰	跡目：幅2.2cmで13本
340	83	5B-25	珠洲	片口罍	D	24.3	9.0	30.0	灰白	
341	83	6B-5	珠洲	片口罍	D	25.6			灰	跡目：幅3.8cmで16本
342	83	5B-41	珠洲	片口罍	E	23.4			灰	跡目：幅3.4cmで15本
343	83	5B-44	珠洲	片口罍	E	32.0			灰白	跡目：幅2.9cmで9本
344	83	6B-25,26	珠洲	片口罍	E	22.4	8.2	10.8	灰白	跡目：幅2.5cmで9本
345	83	5A-40	珠洲	片口罍	E	34.6			灰白	跡目：幅3.2cmで11本
346	83	4B-75	珠洲	片口罍	E	30.0			灰	跡目：幅2.6cmで9本
347	83	5B-15	珠洲	片口罍	E	32.8			灰	跡目：幅1.6cmで9本
348	83	5D-83	珠洲	片口罍	E	32.0			灰	跡目：幅2.2cmで9本
349	83	5A-6	珠洲	片口罍	E	30.0			灰	跡目：幅2.3cmで9本
350	83	4B-62	珠洲	片口罍	E	29.0			灰	跡目：幅3cmで12本
351	83	2J-65	珠洲	片口罍					灰	跡目：幅1.6cmで7本
352	83	2J-37	珠洲	片口罍					灰	
353	83	5B-51	珠洲	片口罍					灰	
354	83	不明	珠洲	片口罍					灰白	跡目：幅2.3cmで12本
355	83	5B-94	珠洲	片口罍					10.6	跡目：幅2.2cmで9本
356	83	5B-62	珠洲	片口罍					12.0	跡目：幅3cmで9本
357	83	2J-15	珠洲	片口罍					11.8	跡目：幅1.5cmで9本
358	83	5B-25	珠洲	片口罍					10.5	灰白
359	83	7D-81	珠洲	片口罍					14.0	灰白
360	83	7D-82	珠洲	片口罍					13.0	灰白
361	83	5B-21	珠洲	片口罍					13.5	灰白
362	83	5B-21	珠洲	片口罍					13.0	灰白
363	83	5B-76	珠洲	片口罍					13.8	灰白
364	84	5B-64, 5D-78 6D-14,23,23	常陸	罍		50.4			灰才	
365	84	5B-47, 6D-25	常陸	罍		50.6			才灰	
366	84	6B-28	常陸	罍		48.0			灰白	
367	84	2H-42	常陸	罍		49.2			才灰	
368	84	不明	常陸	罍					18.8	粉
369	84	5D-69,60	常陸	罍					23.9	塩灰
370	84	5B-85	常陸	罍						土質焼
371	84	6D-63,64	常陸	罍						土質焼
372	84	6D-63,64	常陸	罍						土質焼
373	84	2H-23	常陸	罍						灰白
374	84	2H-23	常陸	罍						土編
375	84	5D-58	常陸	罍						粉
376	84	6D-34 6E-1,2,11,12	常陸	罍						粉
377	85	8C-3	中世土師器	小皿	A2-d	7.8	1.6			土質焼
378	85	2H-75	中世土師器	小皿	A3-d	8.0	2.2			土質焼
379	85	2H-75	中世土師器	小皿	A2-d	7.8	1.8			土質焼
380	85	2H-11	中世土師器	小皿	A2-b	8.1	1.8			橙
381	85	2J-72	中世土師器	小皿	A3-b	7.8	1.8			橙
382	85	5B-83	中世土師器	小皿	A2-b	8.5	1.8			土質焼
383	85	3J-85	中世土師器	小皿	A2-b	8.5	1.8			土質焼
384	85	2J-82	中世土師器	小皿	A2-b	8.4	1.8			土質焼
385	85	2J-71	中世土師器	小皿	A3-b	7.5	1.8			土質焼
386	85	2H-11	中世土師器	小皿	A1	8.2	1.6			橙
387	85	不明	中世土師器	小皿	A2-c	8.0	2.0			土質
388	85	5B-45	中世土師器	小皿	A2-c	8.7	2.1			橙
389	85	1G-82	中世土師器	小皿	A3-d	8.6	2.0			土質焼
390	85	2H-11	中世土師器	小皿	A2-b	7.6	1.9			土質焼
391	85	2J-1	中世土師器	小皿	A2-b	8.0	1.9			土質焼
392	85	2K-10	中世土師器	小皿	A2-b	8.4	1.9			土質焼
393	85	2K-20	中世土師器	小皿	A2-b	8.4	1.8			橙
394	85	2H-11	中世土師器	小皿	A3-b	8.0	1.7			土質焼
395	85	2J-75	中世土師器	小皿	A4	7.6	2.4			土質焼
396	85	不明	中世土師器	小皿	A4	7.9	2.2			土質焼
397	85	2J-75	中世土師器	小皿	A4	7.8	2.2			土質焼
398	85	2H-11	中世土師器	小皿	A2-c	8.0	2.0			土質焼
399	85	1H-76	中世土師器	小皿	A2-a	8.9	2.2			土質焼
400	85	2J-75	中世土師器	小皿	A2-c	8.1	1.9			土質焼
401	85	2H-76	中世土師器	小皿	A2-a	9.6	1.9			橙
402	85	6B-16	中世土師器	小皿	A2-a	9.9	2.2			土質焼
403	85	5B-83	中世土師器	小皿	A2-a	8.6	2.1			浅黄
404	85	2J-75	中世土師器	小皿	A3-a	8.8	1.7			橙
405	85	2J-75	中世土師器	小皿	A3-a	8.9	1.8			橙
406	85	2H-32	中世土師器	小皿	A3-b	8.7	1.9			橙

階号 No	組号 No	出立位置	種別	器種	分類	質量			色調	備考(手法ほか)
						口径	高さ	総重		
407	85	2H-75	中世土師器	小皿	A3-a	8.4	2.1		に黄橙	
408	85	2G-20	中世土師器	小皿	A3-a	8.0	1.6		に黄橙	
409	85	2G-20	中世土師器	小皿	A3-a	8.4	2.0		に黄橙	
409	85	2G-20	中世土師器	小皿	A3-a	8.4	2.0		に黄橙	
410	85	2G-20	中世土師器	小皿	A3-a	8.4	1.8		に黄橙	
411	85	2I-71	中世土師器	小皿	A3-b	8.5	1.9		に黄橙	
412	85	5B-43	中世土師器	小皿	A5	9.1	1.7		に黄橙	
413	85	2I-82	中世土師器	小皿	A3-e	8.4	1.4		灰白	
414	85	2I-82	中世土師器	小皿	A3-e	9.0	1.8		に黄橙	
415	85	3I-85	中世土師器	小皿	A2-c	7.7	1.9		に黄橙	
418	85	2H-75	中世土師器	小皿	A3-e	7.8	1.4		に黄橙	
417	85	6C-3	中世土師器	小皿	A3-e	8.0	1.9		黄青	
418	85	3I-42	中世土師器	中皿	A2-c	11.8	3.1		黄	
419	86	2I-35~45	中世土師器	中皿	A2-c	12.4	2.6		黄青橙	
420	86	2G-25	中世土師器	中皿	A2-c	12.0	3.3		に黄橙	
421	86	5C-74	中世土師器	中皿	A2-c	11.8	3.0		黄	
422	86	不明	中世土師器	中皿	A2-c	10.8	3.0		に黄橙	
423	86	2I-62	中世土師器	中皿	A3-c	12.2	3.0		黄青	
424	86	2I-74	中世土師器	大皿	A3-d	13.4	3.2		黄青	
425	86	2G-20	中世土師器	中皿	A2-c	11.8	3.2		に黄橙	
426	86	不明	中世土師器	中皿	A2-b	12.2	3.1		に黄橙	
427	86	2C	中世土師器	中皿	A2-b	12.0	3.1		に黄橙	
428	86	2H-11	中世土師器	中皿	A3-c	12.5	3.6		に黄橙	
429	86	2G-20	中世土師器	中皿	A2-b	12.4	3.5		に黄橙	
430	86	2I-84	中世土師器	中皿	A2-b	12.0	3.0		に橙	
431	86	3I-85	中世土師器	中皿	A2-a	11.4	2.8		黄青	
432	86	2I-35~45	中世土師器	中皿	A1	12.0	3.1		に黄橙	
433	86	5I-53	中世土師器	中皿	A3-c	12.4	2.9		に黄橙	
434	86	5B-31	中世土師器	中皿	A1	13.2	3.0		に黄橙	
435	86	2G-20	中世土師器	中皿	A3-c	12.1	3.2		黄	
436	86	2H-11	中世土師器	中皿	A3-b	12.2	3.2		に黄橙	
437	86	2C	中世土師器	中皿	A3-a	12.0	3.0		黄	
438	86	2G-20	中世土師器	中皿	A3-b	12.3	3.1		に黄橙	
439	86	2G-1	中世土師器	中皿	A3-b	12.8	2.7		に橙	
440	86	2H-11	中世土師器	中皿	A3-c	12.6	3.6		に黄橙	
441	86	2H-11	中世土師器	中皿	A3-b	12.2	3.1		に黄橙	
442	86	2I	中世土師器	中皿	A4	11.4	3.2		黄	
443	86	2I-80	中世土師器	中皿	A3-d	13.0	3.0		に黄橙	
444	86	5B-47	中世土師器	中皿	A3-d	13.2	3.0		黄青	
445	86	5D-96	中世土師器	中皿	A3-c	12.0	3.5		に黄橙	
446	86	2I-61	中世土師器	中皿	A3-d	13.2	2.9		黄青	
447	86	6D-30	中世土師器	中皿	A4	10.4	3.0		に黄橙	
448	86	2I-36	中世土師器	中皿	A4	9.9	3.4		黄青	
449	86	1G-82	中世土師器	中皿	A4	10.7	3.7		に黄橙	
450	86	5D-75	中世土師器	中皿	A4	10.0	3.1		に黄橙	
451	86	2I	中世土師器	中皿	A4	10.2	3.8		黄青	
452	87	6C-2	瓦器	瓶		9.0			灰	
453	87	5B-43	瓦器	瓶		10.0			灰	
454	87	5B-62	瓦器	瓶		9.8			灰	
455	87	2I-82	瓦器	瓶		10.0			灰	
456	87	6C-96 8C-13-14	瓦器	瓶		9.0			に黄橙	
457	87	5A-81	中世土師器	小皿	B3-a	5.2	1.6	4.0	に黄橙	
458	87	6D-12	中世土師器	小皿	B3-a	6.2	1.9	4.2	に黄橙	
459	87	5P-32	中世土師器	小皿	B3-a	6.8	2.0	4.7	に黄橙	
460	87	4A-98	中世土師器	小皿	B3-a	7.4	1.8	6.2	に黄橙	
461	87	6D-1~11	中世土師器	小皿	B3-a	7.4	2.0	5.4	黄青	
462	87	5D-83	中世土師器	小皿	B3-a	7.6	2.4	5.2	に黄橙	
463	87	5D-50-60	中世土師器	小皿	B3-a	7.4	2.4	5.4	黄青	
464	87	6C-21	中世土師器	小皿	B3-a	8.2	2.4	5.4	に黄橙	
465	87	6D-11	中世土師器	小皿	B3-a	7.6	2.1	5.2	黄青橙	
466	87	6D-43	中世土師器	小皿	B3-a	8.5	2.1	5.6	黄青	
467	87	7B-10	中世土師器	小皿	B3-a	8.6	2.1	5.4	黄青	
468	87	3I-86	中世土師器	小皿	B3-a	7.8	2.2	5.2	黄青橙	
469	87	7D-84	中世土師器	小皿	B3-a	7.2	1.7	4.7	黄青	
470	87	6B-87	中世土師器	小皿	B3-a	7.2	1.8	5.2	黄青橙	
471	87	6D-11	中世土師器	小皿	B3-a	7.6	1.9	5.1	に黄橙	
472	87	6C-30	中世土師器	小皿	B3-a	7.9	1.9	5.4	に黄橙	
473	88	6E-11	中世土師器	小皿	B3-a	8.2	2.1	6.0	に黄橙	
474	88	6E-52	中世土師器	小皿	B3-a	7.6	2.0	4.8	に黄橙	
475	88	5D	中世土師器	小皿	B3-a	7.8	1.9	5.2	に黄橙	
476	88	5B-88	中世土師器	小皿	B3-a	8.0	1.9	5.7	黄青	
477	88	5B-13	中世土師器	小皿	B3-a	7.8	1.9	5.6	に黄橙	
478	88	5B-56	中世土師器	小皿	B3-a	7.8	1.8	5.7	に黄橙	
479	88	5B-58	中世土師器	小皿	B3-a	8.2	2.1	5.5	に黄橙	
480	88	4B-94	中世土師器	小皿	B3-a	7.7	2.1	5.6	に黄橙	
481	88	5B-58	中世土師器	小皿	B3-a	8.0	1.9	5.1	黄青	
482	88	2C-29	中世土師器	小皿	B3-a	9.6	2.5	6.8	に黄橙	
483	88	2C-20	中世土師器	小皿	B2-a	9.0	2.2	6.5	に橙	
484	88	2I-84	中世土師器	小皿	B2-a	9.0	2.0	6.0	に黄橙	
485	88	2I-32	中世土師器	小皿	B2-a	8.6	1.9	5.9	に黄橙	
486	88	2C-20	中世土師器	小皿	B2-a	9.3	2.3	5.4	黄青橙	

種名 No	採集 No	出土位置	種別	器種	分類	法量			色澤	備考(手法ほか)
						口徑	高さ	底径		
487	88	20-20	中世土師器	小皿	B2-a	9.2	2.7	6.0	浅黄緑	
488	88	20-20	中世土師器	小皿	B2-c	9.4	1.8	5.4	黄緑	
489	89	20-20	中世土師器	小皿	B2-a	8.8	1.9	5.7	浅黄緑	
490	89	20	中世土師器	小皿	B2-a	8.4	1.8	6.0	黄	
491	89	20-20	中世土師器	小皿	B2-a	8.8	2.0	6.4	仁黄緑	
492	89	20-20	中世土師器	小皿	B2-c	9.4	1.7	6.2	浅黄緑	
493	89	20-20	中世土師器	小皿	B2-b	9.0	3.0	6.5	黄	
494	89	1C-61	中世土師器	小皿	B2-c	10.4	1.9	6.4	仁黄緑	
495	89	20-20	中世土師器	小皿	B2-a	9.5	2.3	5.7	仁黄緑	
496	89	5B-1	中世土師器	小皿	B1	9.9	2.6	5.1	仁黄緑	
497	89	5B-29	中世土師器	小皿	B2-a	8.0	1.9	5.6	浅黄緑	
498	89	不明	中世土師器	小皿	B3-a	7.6	1.8	5.6	浅黄	
499	89	5B-29	中世土師器	小皿	B3-a	7.6	2.1	5.5	浅黄	
500	89	1C-83	中世土師器	小皿	B2-b	7.6	1.8	5.2	仁黄緑	
501	89	20-20	中世土師器	小皿	B2-b	8.8	2.2	5.9	浅黄	
502	89	20-20	中世土師器	小皿	B2-b	8.8	2.2	6.8	仁黄緑	
503	89	20-20	中世土師器	小皿	B2-b	8.4	1.8	6.3	仁黄緑	
504	89	20	中世土師器	小皿	B2-b	8.3	1.8	5.5	仁黄緑	
505	89	5B-59	中世土師器	小皿	B3-a	8.6	2.1	8.6	浅黄緑	
506	89	7C-54	中世土師器	小皿	B3-b	8.4	2.3	5.8	仁黄緑	
507	90	5B-4	中世土師器	小皿	B3-a	9.0	2.0	5.8	浅黄	
508	90	20-20	中世土師器	小皿	B2-a	8.6	1.7	5.8	浅黄緑	
509	90	20-20	中世土師器	小皿	B2-a	8.8	2.2	6.0	浅黄緑	
510	90	20-20	中世土師器	小皿	B2-a	8.5	2.0	8.9	仁黄	
511	90	2H-23	中世土師器	小皿	B2-a	9.4	2.5	6.2	浅黄	
512	90	20-20	中世土師器	小皿	B2-a	8.9	2.3	5.3	黄	
513	90	20-20	中世土師器	小皿	B2-a	8.9	2.5	6.3	黄	
514	90	20-20	中世土師器	小皿	B2-a	9.4	2.2	5.9	浅黄緑	
515	90	20-20	中世土師器	小皿	B2-a	9.2	2.5	5.9	黄	
516	90	20-20	中世土師器	小皿	B2-a	9.3	2.5	6.0	仁黄緑	
517	90	20	中世土師器	小皿	B2-a	9.6	2.6	6.1	黄	
518	90	20-10	中世土師器	小皿	B2-a	8.9	2.4	6.1	仁黄緑	
519	90	5B-44	中世土師器	中皿	B3-a	10.4	2.8	6.2	浅黄	
520	90	20-20	中世土師器	小皿	B2-a	8.5	2.1	4.9	浅黄緑	
521	90	20-20	中世土師器	小皿	B2-b	8.5	2.5	6.7	仁黄緑	
522	91	4A-03	中世土師器	中皿	B3-a	10.2	2.7	6.0	浅黄	
523	91	7D-52	中世土師器	中皿	B3-a	10.8	2.6	6.6	浅黄	
524	91	5B-34	中世土師器	中皿	B3-a	11.5	2.6	6.6	浅黄緑	
525	91	2I-84	中世土師器	中皿	B3-b	11.7	2.8	7.2	黄	
526	91	20-20	中世土師器	中皿	B2-a	11.9	3.4	6.8	仁黄緑	
527	91	20-20	中世土師器	中皿	B2-a	11.8	3.3	7.4	仁黄緑	
528	91	1C-87	中世土師器	中皿	B3-a	12.8	2.6	4.4	仁黄	
529	91	5B-44	中世土師器	中皿	B3-a	10.4	2.8	6.2	浅黄	
530	91	1C-87	中世土師器	中皿	B3-a	11.7	2.6	8.0	仁黄緑	
531	91	20-20	中世土師器	中皿	B2-a	12.1	3.0	6.9	仁黄緑	
532	91	6B-3	中世土師器	中皿	B3-a	10.8	2.6	6.3	浅黄緑	
533	91	6B-11	中世土師器	中皿	B3-a	10.7	2.6	7.6	浅黄	
534	91	5B-44	中世土師器	中皿	B3-a	10.7	2.8	7.3	浅黄	
535	91	6B-5	中世土師器	中皿	B3-a	10.7	2.6	7.2	浅黄	
536	91	5B-85	中世土師器	中皿	B3-a	10.8	2.6	7.0	浅黄緑	
537	91	5B-69	中世土師器	中皿	B3-a	10.8	2.6	7.1	浅黄	
538	91	5B-57	中世土師器	中皿	B3-a	11.7	2.6	8.1	浅黄	
539	91	5B-62	中世土師器	中皿	B2-a	10.6	2.9	7.1	明黄緑	
540	91	20-20	中世土師器	中皿	B2-a	11.5	3.1	7.5	仁黄緑	
541	92	20-20	中世土師器	中皿	B2-a	12.3	3.3		仁黄緑	
542	92	2I-35-45	中世土師器	中皿	B2-a	11.5	3.0	8.7	仁黄緑	
543	92	2B-23	中世土師器	中皿	B2-b	13.0	2.8	9.0	浅黄	
544	92	7D-32	中世土師器	中皿	B3-b	12.8	2.6	4.8	浅黄	
545	92	5B-60	中世土師器	中皿	B3-b	12.8	3.1	8.6	仁黄緑	
546	92	6D-12	中世土師器	大皿	B3-b	13.0	3.1	7.4	仁黄緑	
547	92	6D-11	中世土師器	大皿	B3-b	13.6	3.5		仁黄緑	
548	92	6D-7	中世土師器	大皿	B3-a	14.6	3.9	7.8	仁黄緑	
549	92	不明	中世土師器	大皿	B3-a	14.2	4.2	7.6	仁黄緑	
550	92	不明	中世土師器	大皿	B3-a	13.0	3.6	6.7	浅黄	
551	92	6D-11	中世土師器	大皿	B3-a	14.1	3.9	7.6	仁黄緑	
552	92	6D-11	中世土師器	大皿	B3-a	13.3	3.1	7.2	浅黄緑	
553	92	6C-20	中世土師器	大皿	B3-b	13.7	3.1	7.2	仁黄緑	
554	92	7D-52	中世土師器	大皿	B3-b	13.9	3.0	7.5	浅黄	
555	92	6D-42	中世土師器	大皿	B3-a	13.1	3.7	7.9	仁黄緑	
556	92	6B-42	中世土師器	大皿	B3-a	14.0	4.4	8.5	仁黄緑	
557	92	6D-21	中世土師器	大皿	B3-b	14.2	4.2	8.1	浅黄	
558	93	6D-11	中世土師器	大皿	B3-a	13.4	3.4	7.0	灰白	
559	93	6D-21	中世土師器	大皿	B3-b	15.2	3.6	8.3	浅黄緑	
560	93	6C-100	中世土師器	大皿	B3-b	13.9	3.0	7.7	浅黄緑	
561	93	6D-11	中世土師器	大皿	B3-b	14.7	3.9	6.4	浅黄緑	
562	93	6D-11	中世土師器	大皿	B3-b	14.9	3.9	7.5	仁黄緑	
563	93	6D-21	中世土師器	大皿	B3-b	13.7	4.0	6.8	仁黄緑	
564	93	6D-22-20	中世土師器	大皿	B3-b	15.0	3.4	7.3	浅黄	
565	93	7C-48	中世土師器	大皿	B3-b	14.6	3.5	7.0	浅黄	
566	93	6C-20	中世土師器	大皿	B3-b	15.4	3.3	8.4	仁黄	
567	93	6C-21	中世土師器	中皿	B3-b	12.8	3.0	8.0	仁黄	
568	93	6C-21	中世土師器	大皿	B3-b	13.0	2.7	8.2	黄	

附号 No.	図号 %	出土位置	種別	器種	分類	度量			色調	備考(手法等小)
						口径	器高	底径		
569	93	不明	中世土師器	大甕	B3-b	16.0	3.1		橙	
570	93	7D-6	中世土師器	大甕	B3-b	16.4	3.5	8.0	淡黄	
571	93	6C-20	中世土師器	大甕	B3-b	15.0	3.0	9.0	仁黄橙	
572	93	不明	中世土師器	大甕	B3-b	15.7	4.9		橙	
573	93	6H-5	中世土師器	大甕	B3-a	19.8	5.0	9.1	橙	
574	94	5,005-56	瓦器	火鉢	A	26.0			灰白	
575	94	5F-21-31	瓦器	火鉢	A	37.0			外:灰 内:仁黄	
576	94		瓦器	火鉢	A					6と同一
577	94	9C-72	瓦器	火鉢	A				外:灰 内:灰白	
578	94	5B-33	瓦器	火鉢	A				外:灰 内:仁黄	
579	94	5A-28-29他	瓦器	火鉢	B	31.6			灰白	
580	94	5B-25	瓦器	火鉢	B	27.6			外:橙 内:仁黄橙	
581	94	4A-78	瓦器	火鉢	B	26.5			外:浅黄橙 内:浅黄	
582	94	7D-74	瓦器	風炉	C	20.4			灰白	
583	94	9C-2	瓦器	火鉢	C				浅黄	
584	94	5B-54	瓦器	火鉢	C				外:灰 内:浅黄	
585	94	3I-85	瓦器	火鉢	D	31.4			外:灰 内:浅黄	
586	158		瓦器	火鉢	E					83と同一
587	158		瓦器	風炉	A					5と同一
588	158		瓦器	風炉	B					75と同一
589	94	5D-69	瓦器	風炉	D	26.3			外:灰 内:浅黄	
590	94	5E-44	瓦器	隴瓦					外:灰 内:浅黄	
591	94	5B-55	瓦器	隴瓦					外:灰 内:灰白	
592	95	5D-84	中世土師器	杯		14.8			浅黄	褐色
593	95	6H-80	中世土師器	杯				9.0	仁黄橙	褐色
594	95	6D-22-23	中世土師器	杯				6.8	仁黄橙	褐色
595	95	5D-54	中世土師器	杯				7.6	浅黄	褐色
596	95	6D-3	中世土師器	杯					仁黄橙	褐色
597	95	6C-100	中世土師器	杯					仁黄橙	褐色
598	95	5H-41	中世土師器	杯				6.8	灰白	褐色
599	95	不明	中世土師器	杯					灰白	褐色
600	95	5E-64-71-84	中世土師器	杯					灰白	褐色

別表4 土製品觀察表

報告 No	國産 No	出土位置	器 種	分 類	長	最大径	孔 径	重 量	備 考
1	97	不明	土罐	扁型	5.0	1.5	0.5	12	
2	97	5B-76	土罐	扁型	5.4	1.9	0.3	17	
3	97	6D-83	土罐	中型	5.2	3.2	1.2	40	
4	97	6D-83	土罐	中型	4.6	3.0	1.3	34	
5	97	5E-52	土罐	中型	4.6	3.2	1.1	42	
6	97	6D-53土罐	土罐	中型	5.3	3.1	1.3	98	
7	97	2D-6	土罐	中型	5.3	3.6	1.5	55	
8	97	5D-55-56	土罐	中型	6.4	3.5	1.4	78	
9	97	5H-35	土罐	中型	6.4	3.6	1.3	82	
10	97	4G-32	土罐	大型	6.4	4.3	1.4	86	
11	97	1L-65	土罐	中型	(5.5)	3.2	1.3	46	
12	97	2J-84	土罐	大型	7.5	4.0	1.1	110	
13	97	8C-25	土罐	大型	8.1	3.8	0.9	63	
14	97	5E-36	土罐	大型	(8.7)	3.9	1.3	(110)	
15	97	5D-4	土罐	大型	(8.4)	3.6	1.4	(98)	
16	97	5E-42-43	土罐	大型	(8.5)	4.1	1.5	(83)	
17	97	5P-36	土罐	大型	(7.0)	3.7	1.2	(69)	
18	97	5D-55-56	土罐	大型	(6.6)	3.8	1.3	(76)	
19	97	2F	土罐	大型	(7.6)	3.5	1.1	(53)	
20	97	4F-68	土罐	大型	7.9	4.3	1.5	(110)	
21	97	1G-56	土罐	中型	4.5	4.0	1.8	53	
22	97	不明	土罐	中型	6.0	4.6	1.3	104	
23	97	2G-4	紡錘車		3.8	4.7	1.4	(92)	土罐転用
24	97	4E-18	紡錘車		3.4	3.1	1.5	(19)	土罐転用
25	97	7D-13	土罐	鈎錐	3.1	3.3	0.9	16	
26	97	不明	土罐	鈎錐	2.5	2.7	0.7	15	
27	97	8C-92	紡錘車		3.2	4.5	0.9	68	
28	97	6G-52	土罐		1.1	3.6		(8)	
29	97	5G-20	不明		3.7	2.6			底質殘灰付製
30	97	5D-41	不明		6.7	4.0	2.6		
					口 径 (最大径)	高	底径		
31	97	4号住居カマド	支脚		5.5	6.2			
32	97	2J-17	支脚		6.2				
33	97	2K-15	支脚		5.8				
34	97	2J-29	支脚		5.2				
35	97	2J-43-44	支脚				7.0		製造土器?
36	97	2J-71	支脚				4.3		製造土器?
37	97	2H-21	支脚		6.1				製造土器?
38	97	2号住居	支脚		6.6				製造土器?
39	97	5B-95	支脚		7.8				
40	97	5D-96	支脚				10.2		
41	97	5F-53	支脚				12.0		
42	97	127号土坑	支脚				12.4		
					底 径	口径			
43	97	5B-78	甕口		(8.3)	8.0	3.0		
44	97	5B-81	甕口		(10.9)	6.4	2.8		
45	97	7C-91-92	甕口		(7.8)	7.5	2.3		
46	97	5B-51	甕口		(6.0)	9.0	2.9		
47	97	5B-85	甕口		(4.6)	7.4	2.8		
			平面形種	長径	短径	厚	重量		
48	98	2J-82	土器片断	円	25.6	25.4	7.5	3.0	土器片断(灰) 西編
49	98	7C-97	土器片断	多角	23.4	15.7	6.8	2.5	土器片断(灰) 西編
50	98	5B-61	土器片断	多角	21.0	18.5	8.6	2.5	土器片断(灰) 西
51	98	5D-4	土器片断	円	22.0	20.7	6.0	2.0	土器片断(灰) 西
52	98	8C-16	土器片断	円	23.0	21.5	6.5	4.5	土器片断(灰) 再生?
53	98	7C-89	土器片断	円	22.8	22.0	6.5	4.0	土器片断(灰) 西編
54	98	2J-53	土器片断	円	23.4	23.2	5.5	3.5	土器片断(口縁) 西編
55	98	5B-75	土器片断	円	24.3	24.7	6.0	4.0	土器片断(口縁) 西編
56	98	5B-53	土器片断	円	24.0	23.0	9.5	5.0	土器片断(口縁) 西
57	98	5B-62	土器片断	円	27.2	24.2	8.2	7.0	土器片断(口縁) 西
58	98	5D-78	土器片断	円	25.1	23.1	7.9	5.0	土器片断(灰) 西編+土
59	98	7C-89	土器片断	円	33.3	31.3	6.0	3.0	土器片断(灰) 西編+土
60	98	5B-95	土器片断	円	28.3	27.4	8.9	8.0	土器片断(灰) 西
61	98	8B-48	土器片断	多角	30.3	28.3	7.8	8.0	土器片断(灰) 西編+土
62	98	66号土坑	土器片断	円	28.3	28.0	8.0	5.0	土器片断(灰) 西編
63	98	8B-43	土器片断	四角	33.0	32.0	7.7	10.0	土器片断(灰) 西編
64	98	8C-53	土器片断	四角	32.0	31.8	6.9	8.0	土器片断(灰) 西編+土
65	98	1G-81	土器片断	多角	42.6	38.4	5.1	10.0	土器片断(灰) 西編
66	98	5C-26	土器片断	多角	17.5	16.0	6.5		土器片断(灰) 西編
67	98	5E	土器片断	四角	20.0	19.0	15.0	8.0	土器片断(灰) 西編+土
68	98	2A-20	土器片断	四角	23.0	19.4	11.0	9.0	土器片断(灰) 西編
69	98	48号土坑	土器片断	円	27.0	26.0	6.1	6.0	土器片断(灰) 西編
70	98	2J-35-45	土器片断	円	26.4	24.0	9.9	9.0	土器片断(灰) 西編
71	98	5A-30	土器片断	多角	23.6	21.9	5.9	9.0	土器片断(灰) 西編
72	98	8B-99	土器片断	四角	24.6	23.0	14.3	13.0	土器片断(灰) 西編
73	98	7C	土器片断	円	22.6	23.0	17.0	17.0	土器片断(灰) 西編
74	98	3J-55	土器片断	円	30.4	30.0	8.0	15.0	土器片断(灰) 西編
75	98	5D-96	土器片断	多角	29.8	26.4	11.8	12.0	土器片断(灰) 西編
76	98	2J-51	土器片断	円	30.0	26.5	17.6	18.0	土器片断(灰) 西編

標榜 №	區域 №	出土位置	器 種	分 類	長	最大径	孔 径	重 量	備 考
77	98	5B-23	土器片羽籠	多角	37.5	30.3	10.5	17.0	須田遺跡(朝) 銅屬
78	98	5B	土器片羽籠	円	19.4	16.3	13.8	7.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬
79	98	632号土坑	土器片羽籠	多角	20.0	18.9	10.2	6.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬
80	98	3G-35	土器片羽籠	多角	20.2	18.5	10.8	6.0	須田遺跡(朝) 銅屬
81	98	6B-3-4	土器片羽籠	円	20.0	16.6	8.1	3.0	須田遺跡(朝) 銅屬
82	98	1H-71	土器片羽籠	円	21.5	19.7	11.0	7.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬
83	98	2J-83	土器片羽籠	円	21.2	20.0	8.6	6.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬
84	98	5E-47	土器片羽籠	円	24.2	20.0	11.8	8.0	珠洲遺跡(朝) 一部遺
85	98	2J-81	土器片羽籠	円	23.0	20.7	12.6	8.0	珠洲遺跡(朝) 一部遺
86	98	5B-15	土器片羽籠	多角	22.0	18.1	8.9	5.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬
87	98	5B-41	土器片羽籠	円	21.8	20.9	9.5	5.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬
88	98	6A-63	土器片羽籠	円	23.0	21.0	11.1	7.5	珠洲遺跡(朝) 銅屬+骨
89	98	6D-53	土器片羽籠	多角	24.1	18.3	10.0	5.0	珠洲河口跡(体) 銅屬
90	98	1B-80	土器片羽籠	円	22.0	23.9	9.9	8.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬+骨
91	98	632号土坑	土器片羽籠	円	23.5	19.3	10.2	6.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬
92	99	3J	土器片羽籠	円	22.1	20.0	10.2	6.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬
93	99	3J-43	土器片羽籠	円	24.0	20.5	11.9	6.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬
94	99	5B-30	土器片羽籠	円	23.6	20.4	8.9	5.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬+骨
95	99	4B-6	土器片羽籠	円	24.6	22.0	9.7	8.0	珠洲遺跡(朝) 一部遺
96	99	5A-28-29	土器片羽籠	円	24.5	22.0	11.0	8.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬
97	99	4B-85	土器片羽籠	円	23.5	13.7	10.2	7.8	珠洲遺跡(朝) 銅屬
98	99	5B	土器片羽籠	円	30.9	27.2	9.9	10.0	珠洲遺跡(朝) 骨
99	99	5B-54	土器片羽籠	円	26.8	25.0	7.4	7.5	珠洲遺跡(朝) 銅屬+骨
100	99	6B-29	土器片羽籠	円	27.5	23.6	13.5	9.0	珠洲遺跡(朝) 骨
101	99	5B-44	土器片羽籠	多角	28.7	24.2	9.4	10.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬
102	99	6D-7	土器片羽籠	円	27.8	24.7	10.8	10.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬
103	99	2J-94	土器片羽籠	円	26.3	24.9	16.5	13.0	珠洲遺跡(朝) 骨?
104	99	2J-55-56	土器片羽籠	円	27.2	26.0	14.5	11.0	珠洲遺跡(朝) 骨
106	99	6B-4-14	土器片羽籠	円	26.6	23.8	12.5	10.0	珠洲遺跡(朝) 骨
106	99	7D-52	土器片羽籠	円	28.9	24.5	9.9	9.0	珠洲遺跡(朝) 一部遺
107	99	6B-18	土器片羽籠	円	24.3	23.4	10.5	8.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬
108	99	2J-85	土器片羽籠	円	26.1	22.5	11.5	9.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬+骨
109	99	5B-53	土器片羽籠	円	26.7	23.2	10.1	7.5	珠洲遺跡(朝) 一部遺
110	99	5A-90	土器片羽籠	円	26.8	24.6	7.6	6.0	珠洲河口跡(体) 骨
111	99	2J-61	土器片羽籠	円	24.1	22.9	8.0	5.0	珠洲河口跡(体) 骨
112	99	2B-22	土器片羽籠	多角	26.7	22.8	8.1	6.5	珠洲河口跡(体) 銅屬
113	99	2G-30	土器片羽籠	西角	24.8	22.0	8.0	5.0	珠洲河口跡(体) 銅屬
114	99	5A-40	土器片羽籠	円	28.8	24.3	9.8	8.0	珠洲遺跡(朝) 骨
115	99	5A-18	土器片羽籠	西角	33.6	29.7	10.0	9.0	珠洲河口跡(体) 銅屬
116	99	8C-3	土器片羽籠	多角	34.6	27.8	12.5	15.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬
117	99	5A-20	土器片羽籠	円	33.0	27.8	14.0	15.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬
118	99	4B-71	土器片羽籠	円	29.6	27.7	11.5	15.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬
119	99	666号土坑	土器片羽籠	円	29.6	27.3	11.6	13.0	珠洲遺跡(朝) 骨
120	99	5F-22	土器片羽籠	円	35.2	29.2	10.5	13.0	珠洲遺跡(朝) 骨
121	99	4A-72	土器片羽籠	円	34.8	30.0	15.8	20.0	珠洲遺跡(朝) 銅屬
122	99	5E-22	土器片羽籠	円	40.2	34.3	12.8	18.0	珠洲河口跡(体) 銅屬
123	99	4A-72	土器片羽籠	多角	33.4	24.3	11.9	12.5	珠洲河口跡(体) 銅屬
124	99	6B-4-14	土器片羽籠	円	32.1	30.5	13.8	17.8	珠洲河口跡(体) 銅屬
126	99	不明	土器片羽籠	円	43.2	40.2	16.5	27.5	珠洲遺跡(朝) 銅屬
126	99	8B-42	土器片羽籠	多角	40.3	38.0	13.0	20.0	珠洲河口跡(体) 骨
127	99	5B-44	土器片羽籠	円	34.9	29.6	14.9	22.5	常陸遺跡(朝) 銅屬
128	99	8D-50-60	土器片羽籠	円	34.3	32.6	8.4	14.5	常陸遺跡(朝) 銅屬
129	99	3B-46	土器片羽籠	円	27.6	27.2	10.2	8.0	瓦形(体) 骨
130	99	5B-44	土器片羽籠	円	28.3	27.2	11.5	10.0	瓦形(体) 骨
131	99	5A-49-50	土器片羽籠	多角	26.0	23.0	8.8	7.5	常陸遺跡(朝) 銅屬
132	99	6B-28	土器片羽籠	円	21.9	17.8	10.9	7.5	常陸遺跡(朝) 銅屬
133	99	1B-79	土器片羽籠	多角	20.6	16.0	10.2	4.5	瓦形(体) 骨?

別表5 石製品総表

報告 No	図版 No	出土位置	器種	長	幅	高	石材	備考
1	100	5B-41	硯		4.6	0.7	粘板岩	
2	100	5A-24	硯		2.5		凝灰岩	表面磨削
3	100	4G-13	硯	13.5	6.6	1.3	泥岩	
4	100	5B-31	硯				泥岩	
5	100	21-41	硯			7.0	粘板岩	
6	100	5B-25	硯				粘板岩	
7	100	7D-83	硯	13.3		1.7	粘板岩	縦面2部
8	100	5D-96	硯				粘板岩	
9	100	3E-37	硯				千枚岩	
10	100	5B-41	漆灰製品	4.2	高	重量	石材	
11	100	1号珠 (6D-16)	佛羅華	3.9		73.0	凝灰岩	
						(23.0)	滑石	
12	100	360号土坑 (6C-2)	硯	硯	高		瓦葺	
13	100	519号土坑 (6H-48)	看孔罐				泥質凝灰岩	
14	100	不明	浮子	5.6	3.0		輝石	
15	100	8号住跡	浮子	5.6	3.0		輝石	
16	100	2H-67	石臼	8.6	6.3		輝石	
17	100	5B-45	石臼				安山岩	
18	100	6C-2	石臼				角閃石安山岩	
19	100	12号土坑 (5B-22)	石臼	37.6	16.0	19.6	凝灰岩	
20	100		石臼			14.3	凝灰岩	
21	100		五輪密			12.0	凝灰岩	空丸地
22	100	6号住跡石籠	五輪密			23.2	凝灰岩	木箱
							凝灰岩	地盤
			現存長	現存幅	現存厚			
23	101	不明	粗用磁石	10.7	7.9	1.1	珠洲焼	
24	101	6C-54	粗用磁石	4.7	3.9	1.3	珠洲焼	
25	101	8C-28-29	粗用磁石	5.7	10.5	1.2	珠洲焼	
26	101	2H-8	粗用磁石	5.4	4.7	0.8	珠洲焼	
27	101	5B-42	粗用磁石	8.5	6.3	1.7	珠洲焼	
28	101	3D-38	粗用磁石	8.0	3.9	2.1	珠洲焼	
29	101	5D-60-70-80	粗用磁石	4.7	3.3	0.6		
30	101	2H-41	磁石	3.9	1.2	1.2	凝灰岩	研削
31	101	2H-30	不明	4.4	1.5	1.2	凝灰岩	舟形又り切刃
32	101	5F-11	磁石	8.0	1.8	1.5	凝灰岩	研削
33	101	4F-84	磁石	8.2	3.3	2.2	凝灰岩	新根様使用切刃
34	101	6C-52	磁石	3.9	2.5	2.6	砂岩	新根様使用
35	101	5B-54	磁石	8.9	2.3	1.6	凝灰岩	研削
36	101	5B-80	磁石	7.2	2.2	1.7	凝灰岩	研削
37	101	5B-94	磁石	9.7	3.0	1.7	粘板岩	研削道具
38	101	652号土坑 (6C-4)	磁石	5.4	3.0	1.5	凝灰岩	新根様
39	101	7C-94	磁石	6.6	3.3	1.3	凝灰岩	研削
40	101	7C-95	磁石	7.2	2.0	1.7	凝灰岩	新根様使用
41	101	8C-16	磁石	7.8	2.2	1.9	凝灰岩	研削
42	101	6D-29	磁石	5.5	2.1	1.9	凝灰岩	研削
43	101	8号住跡	磁石	5.0	4.0	2.2	砂岩	新根様使用
44	101	6C-20-30	磁石	8.8	3.2	2.4	凝灰岩	研削
45	101	6C-20	磁石	11.5	3.6	1.9	凝灰岩	新根様使用
46	101	不明	磁石	10.3	2.2	1.9	凝灰岩	新根様使用
47	101	606号土坑 (5B-41)	磁石	7.9	2.3	2.6	凝灰岩	新根様又り目
48	101	5F-31-41	磁石	9.5	3.0	1.7	凝灰岩	
49	101	4A-100	磁石	7.9	3.0	3.0	凝灰岩	研削
50	101	1C-41	磁石	9.7	4.4	3.5	凝灰岩	新根様表面磨削
51	101	21-19	磁石	15.3	3.2	2.6	凝灰岩	部用で得た石塊状
52	101	5B-82	磁石	7.3	4.2	1.5	凝灰岩	新形下磨状
53	101	5D-55-56	磁石	3.7	3.0	1.6	凝灰岩	研削下磨ノ字無状
54	101	7C-5	磁石	12.2	4.5	1.1	凝灰岩	定形下磨状

別表6 金属製品観察表

報告 No	編 No	出土位置	種類	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重さ (g)	材質	備考
1	102	7D-66	帯金具	1.25	1.95	0.1	1.1	青銅	
2	102	4A-66	帯金具	11.8	100.55	0.1	2.3	青銅	
3	102	6B-49	帯金具	11.7	100.25	0.1	1.6	青銅	
4	102	2I-61	帯金具	12.2	100.3	0.06	1.8	青銅	
5	102	5B-60	帯金具	(1.8)	(1.7)	—	2.1	青銅	鍍金
6	102	7C-90	帯金具	11.06	100.55	0.07	0.7	青銅	
7	102	60号土坑	銅金具	(9.8)	0.6	外側0.45	0.2	青銅	
8	102	5B-33	刀装具	3.7	1.6	—	8.4	青銅	
9	102	5B-61-63	刀装具	11.7×12.8	—	—	3.6	青銅	
10	102	6E-2	刀装具	11.4×2.0	1.0	0.9	4.0	青銅	
11	102	7C-80	刀装具	(2.75)	0.3	0.2	1.6	青銅	
12	102	5F-33	銅金具	(4.3)	2.05	0.65	32.8	青銅	
13	102	6D-22-23	銅金具	(7.2)	2.0	0.1	7.4	青銅	鍍金
14	102	5B-72	銅金具	115.0×4.9	1.5	0.35	4.5	青銅	
15	102	5B-44	銅金具	112.0×1.8	1.0	0.2	1.3	青銅	
16	102	2H-23	銅金具	3.6	0.75	0.45	4.6	青銅	
17	102	6B-90	銅金具	(1.3)	外側(1.9)	0.7	2.8	青銅	
18	102	2H-2	銅金具	(1.7)	0.8	0.15	0.8	青銅	
19	102	6C-34	銅	(1.7)	110.85 110.21	110.25	1.1	青銅	
20	102	2G-5	銅	3.0	110.65 110.35	110.2	2.0	青銅	
21	102	5B-74	銅	(3.7)	111.9 110.25	110.35	2.1	青銅	
22	102	5F-52	不明	(3.56)	0.9	0.5	16.5	青銅	
23	102	4E-80	不明	(5.9)	0.6	0.5	14.4	青銅	鍍金
24	102	6E-23-24	銅金具	4.1	0.55	0.4	1.3	青銅	
25	102	2I-77	銅金具	4.2	2.75	外側1.3	9.9	青銅	
26	102	5D-59-60	銅金具	113.2	110.6	0.18	8.9	青銅	
27	102	6D-1	銅管	6.6	1.2	(0.1)	8.0	青銅	
28	102	1G-99	銅管	4.7	2.25	130.2 外側1.2	12.9	青銅	
29	102	7D-41	銅管	(2.1)	111.4 110.4	—	1.8	青銅	
30	102	5A-80	銅管	(3.3)	1.0	—	5.6	青銅	
31	102	5F-2	銅管	4.56	111.1	111.3	0.1	6.5	青銅
32	102	5F-2	銅管	5.5	110.85	0.04	2.6	青銅	
33	102	4A-95	銅管	5.5	110.8	0.04	4.3	青銅	
34	102	2G-98	銅管	6.05	110.9	0.03	3.8	青銅	
35	102	6D-11	銅管	6.35	110.9	0.05	4.5	青銅	
36	102	4F-80	銅	(4.0)	—	0.1	20.7	青銅	
37	103	不明	剃刀	(24.4)	2.7	0.5	195	鉄	
38	103	2F-74	剃刀	(9.1)	2.5	—	76.0	鉄	
39	103	6D-76	剃刀	(4.2)	2.1	0.3	8.1	鉄	
40	103	8D-2	剃刀	(16.5)	2.6	0.38	65.7	鉄	木柄
41	103	5F-31-41	剃刀	(9.85)	2.0	0.4	29.6	鉄	
42	103	4B-81	剃刀	(16.8)	1.5	0.45	34.8	鉄	
43	103	7C-83	刀子	(11.0)	1.4	0.3	11.8	鉄	
44	103	3号作唐	刀子	(7.3)	1.75	0.25	7.0	鉄	木柄
45	103	4A-89	刀子	(4.2)	1.1	0.25	3.8	鉄	
46	103	8B-44	刀子	(4.5)	1.2	0.5	8.1	鉄	
47	103	9号作唐	刀子	(5.2)	1.3	0.45	7.7	鉄	
48	103	8C-13	鎌	(5.0)	1.25	—	6.7	鉄	
49	103	不明	鎌	(5.6)	1.0	1.1	10.8	鉄	
50	103	2H-24	短刀	(13.0)	2.9	0.2	26.6	鉄	
51	103	8C-6	刀装具	(3.1)	0.9	0.5	2.8	鉄	
52	103	6F-33	不明	(10.0)	2.0	0.25	12.2	鉄	
53	103	6E-28	鑿	(10.05)	2.3	2.2	47.3	鉄	
54	103	4F-65	鑿	6.4	2.5	0.8	26.6	鉄	
55	103	7D-74	鑿	(7.5)	2.3	0.4	12.0	鉄	
56	103	2I-6	鑿	15.0	11.5 手0.4	110.3 手0.8	31.6	鉄	
57	103	2I-6	鑿	11.6	11.6	112.5 111.8	45.4	鉄	
58	103	2H-24	おろし金	(8.7)	(5.8)	—	23.0	鉄	
59	103	6E-94	灰坑L	(13.1)	112.0-0.7	0.3	15.6	鉄	
60	103	1G-86	銅金具	16.7	111.3 110.5	0.45	14.3	鉄	
61	103	7D-4 (土器)	銅	116.4	110.9	0.85	77.1	鉄	
62	103	5B-15	銅	115.1	110.4	0.25	10.5	鉄	
63	103	4A-88	銅	(4.0)	0.65	0.7	5.7	鉄	
64	103	5B-63	銅	(4.0)	0.6	0.7	6.1	鉄	
65	104	6D	引手金具	10.4	0.8	0.55	16.7	鉄	
66	104	5B-66	引手金具	7.4	外側1.4	0.8	15.0	鉄	
67	104	3I-61	轆轤	8.3	0.9	0.8	38.6	鉄	
68	104	6C-52	轆轤	8.9	1.0	0.9	26.6	鉄	
69	104	2I-55	轆轤	(5.3)	1.2	0.45	9.7	鉄	
70	104	5B-68	轆轤	(3.4)	外側1.8	110.8 111.0	7.9	鉄	
71	104	2F-55	轆轤	(6.9)	1.3	1.2	18.2	鉄	
72	104	6E-15	轆轤	8.4	1.2	110.85	39.6	鉄	
73	104	6B-71-86	轆轤	8.9	0.65	0.66	27.0	鉄	
74	104	7D-85	釘	(4.66)	110.7 110.6	110.7 110.5	4.5	鉄	
75	104	6B-12	釘	5.0	110.5	110.6	7.2	鉄	
76	104	6B-1-2	釘	4.95	0.9	110.5	11.7	鉄	
77	104	8C-74	釘	5.4	110.8 110.5	110.85 110.4	4.6	鉄	
78	104	6E-1	釘	5.6	111.3 110.7	110.9 110.6	5.2	鉄	
79	104	6E-8	釘	4.8	110.9	110.9	9.9	鉄	
80	104	6E-20	釘	(6.8)	111.0 110.45	0.8	8.5	鉄	
81	104	6E-9	釘	6.9	111.4 110.8	111.1 110.7	17.6	鉄	

標榜 No	調査 No	出土位置	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	高さ (g)	材質	備考
82	104	3号住跡	釘	7.6	体1.0	体0.9	24.9	鉄	
83	104	6B-20	釘	8.8	1.4	0.6	44.9	鉄	
84	104	5B-52	釘	10.5	1.0	体0.6	27.1	鉄	
85	104	6B-5	釘	10.5	体0.8	体0.5	15.9	鉄	
86	104	1G-75	釘	(7.3)	体1.6 体0.7	体0.7	22.1	鉄	
87	104	6B-28	釘	7.7	体0.65	体0.8	8.9	鉄	
88	104	8D-1	釘	(15.3)	体1.2 体1.0	体1.4 体0.9	56.5	鉄	
89	104	2J-3-4	釘	17.9	体2.7 体1.9	体1.6 体1.0	63.9	鉄	
90	104	6B-17	小孔	6.55	2.5	0.25	10.8	鉄	
91	104	5B-52	螺絲7	(4.6)	—	—	10.9	鉄	
92	104	66号土坑	不明	(3.0)	0.8	0.7	4.5	鉄	
93	104	7J-44	不明	(2.60)	1.05	0.3	3.9	鉄	
94	104	6B-4	螺絲釘	2.1	2.1	0.4	3.2	鉄	
95	104	不明	火打鎌	(4.0)	2.35	0.4	9.6	鉄・青銅	
96	104	7C-9	鎌金具	体1.6	体0.2	1.0	2.3	鉄	
97	104	4A-98	鎌金具	径2.1×1.2	体0.2	1.1	2.0	鉄	
98	104	5B-31-41	鉄	径3.3×1.6(2.1)	体0.5	0.5	6.7	鉄	
99	104	7D-84	釘	径3.7×2.8	—	—	14.4	鉄	

別表7 鏡貨観察表

番号	國號	出土位置	鏡名	初録年	西暦	外径 (cm)	内径 (cm)	重量 (g)	備考
100	105		和銅同軌	和銅元年	708		2.16	1.88	4割
101	106	58-35	五銖錢	漢 光武5年	611B	2.58	2.36	2.55	
102	105	58-74	開元通寶	唐 武德4年	621	2.34	1.98	2.50	
103	105	24-19	開元通寶	唐 武德4年	621	2.30	2.16	1.80	
104	105	28-41	聖德元寶	北宋 建隆元年	960	2.40	1.89	2.30	
105	105	58-31	太平通寶	北宋 太平興國元年	976	2.46	2.12	2.05	
106	105	70-85	淳化通寶	北宋 淳化元年	990	2.48	1.84	2.03	
107	105	68-9	天聖元寶 (鏡)	北宋 天聖元年	995	2.48	1.86	2.34	
108	105	58-68	聖道元寶 (行)	北宋 聖道元年	995	2.41	1.70	2.30	鑄切
109	105	33-45	咸平元寶	北宋 咸平元年	998	2.44	1.88	3.34	
100	105	58-73	景德元寶	北宋 景德元年	1044	2.50	1.94	2.88	
111	105	111-73	祥符元寶	北宋 祥符元年	1044	2.15	1.92	1.60	
112	105	80-9	神符元寶	北宋 大中祥符元年	1008	2.49	1.92	3.37	
113	105	58-22	神符通寶	北宋 大中祥符2年	1009	2.48	1.96	2.85	
114	105	34-49	天禧通寶	北宋 天禧元年	1017	2.54	2.30	2.10	
115	105	37-42	天聖元寶	北宋 天聖元年	1023	2.54	2.30	3.35	
116	105	44-89	天聖元寶 (鏡)	北宋 天聖元年	1023	2.50	2.05	2.07	
117	105	21-43	明道元寶 (鏡)	北宋 明道元年	1029	2.55	2.12	3.35	
118	105	58-74	景祐元寶 (鏡)	北宋 景祐元年	1034	2.54	1.97	3.60	
119	105	58-62	皇祐通寶 (鏡)	北宋 皇祐2年	1039	2.44	1.88	2.80	
120	105	58-74	皇祐通寶	北宋 皇祐2年	1039	2.57	1.90	3.85	
121	105	58-87	皇祐通寶 (鑿)	北宋 皇祐2年	1039	2.48	1.99	4.45	
122	105	80-10	聖和元寶 (鏡)	北宋 聖和元年	1054	2.42	1.88	3.00	
123	105	70-83	聖和元寶 (鑿)	北宋 聖和元年	1054	2.50	1.91	2.60	
124	105	58-85	嘉祐元寶	北宋 嘉祐元年	1056	2.54	1.72	2.95	
125	105	211-44	嘉祐通寶	北宋 嘉祐元年	1056	2.36	1.98	3.38	
126	105	22-14	治平元寶	北宋 治平元年	1064	2.40	1.70	2.70	
127	105	68-80	治平元寶	北宋 治平元年	1064	2.30	1.90	2.20	鑄切
128	105	20-57	熙寧元寶	北宋 熙寧元年	1068	2.53	1.98	3.15	
129	105	35-43	熙寧元寶 (鑿)	北宋 熙寧元年	1068	2.40	1.67	3.25	
130	105	50-60	熙寧元寶 (鑿)	北宋 熙寧元年	1068	2.46	1.98	2.70	
131	105	221-44	熙寧元寶 (鑿)	北宋 熙寧元年	1068	2.46	2.02	3.30	
132	105	58-4	熙寧元寶 (鑿)	北宋 熙寧元年	1068	2.39	1.92	3.00	
133	105	58-47	元豐通寶	北宋 元豐元年	1078	2.41	1.83	2.20	
134	105	58-75	元豐通寶 (鏡)	北宋 元豐元年	1078	2.54	2.05	4.30	
135	105	58-52	元豐通寶 (鑿)	北宋 元豐元年	1078	2.39	1.87	3.07	
136	105	43	元祐通寶	北宋 元祐元年	1086	2.44	1.93	3.27	
137	105	70-84	元祐通寶 (鑿)	北宋 元祐元年	1086	2.45	2.04	3.30	
138	105	37-85	紹聖元寶	北宋 紹聖元年	1094	2.49	1.83	3.00	
139	105	54-50	紹聖元寶 (鑿)	北宋 紹聖元年	1094	2.47	1.93	3.20	
140	105	70-61-63	元符通寶	北宋 元符元年	1098	2.45	1.95	3.58	
141	105	211-44	聖宗元寶	北宋 建中靖國元年	1101	2.49	1.89	3.15	
142	105	68-48	聖宗元寶	北宋 建中靖國元年	1101	2.44	1.98	3.40	
143	105	不明	聖宗元寶 (鑿)	北宋 建中靖國元年	1101	2.50	1.88	2.55	3割
144	105	78-28	大觀通寶	北宋 大觀元年	1107	2.44	2.17	2.30	
145	105	58-73	政和通寶	北宋 政和元年	1111	2.39	1.90	2.25	
146	105	58-64	政和通寶	北宋 政和元年	1111	2.52	1.95	3.35	
147	105	不明	政和通寶 (鏡)	北宋 政和元年	1111	2.44	2.05	2.55	
148	105	70-95	宣和通寶 (鑿)	北宋 宣和元年	1119	2.45	2.00	2.70	
149	105	58-74	淳化通寶	南宋 淳化元年	1174	2.53	1.92	3.10	背文「十二」
150	105	70-73-75	紹興元寶	南宋 紹興元年	1180	2.45	1.95	3.23	
151	105	21	慶元通寶	南宋 慶元元年	1196	2.47	1.91	3.15	
152	105	20-5	嘉泰通寶	南宋 嘉泰元年	1201	2.51	2.05	2.15	
153	105	60-60	咸淳元寶	南宋 咸淳元年	2696	2.34	1.94	2.38	
154	105	70-24	洪武通寶	明 洪武元年	1368	2.29	1.80	3.50	
155	105	不明	永樂通寶	明 永樂元年	1408	2.50	2.08	3.18	
156	105	60-28	永樂通寶	明 永樂元年	1408	2.82	2.03	3.60	
157	105	58-27	永樂通寶	明 永樂元年	1408	2.52	2.10	3.80	
158	105	58-30-40	無文錢					1.66	
159	105	58-63	無文錢					1.95	2割
160	105	20-57	無文錢					1.80	
161	105	20-12	宣和通寶					2.43	1.95
162	105	43-18	宣和通寶					2.28	1.78
163	105	43-27	宣和通寶					2.52	1.96
164	105	53	宣和通寶					2.51	1.95
165	105	60-40	宣和通寶					2.83	2.09

別表8 木製品観察表

順号 No	図版 No	出土位置	器 種	現存長・高	現存幅・径	現存厚	木取号	備 考
1	106	1号井戸	漆喰木製品	20.0	0.7	0.6		
2	106	1号井戸	漆喰木製品	11.8	0.7	0.5		
3	106	1号井戸	漆喰木製品	18.9	0.9	0.4		
4	106	1号井戸	漆喰木製品	24.9	0.8	0.7		
5	106	666号土坑	漆喰木製品	16.7	0.5	0.5		
6	106	666号土坑	漆喰木製品	15.0	0.8	0.5		
7	106	666号土坑	漆喰木製品	17.8	0.6	0.4		
8	106	666号土坑	漆喰木製品	18.8	0.6	0.5		
9	106	不明	漆喰木製品	19.4	0.6	0.5		
10	106	1号井戸	漆喰木製品	20.4	1.4	0.8		
11	106	3号井戸	漆喰木製品	73.2	2.7	1.4		
12	106	1号井戸	不明	25.8	8.1	0.8		破目
13	106	不明	板状	54.0	3.0	0.6		
14	106	1号井戸	竹製品	12.2	21.0	11.0		
15	106	50-74	縄	2.8	1.3	0.7		
16	106	1号井戸	釣り	22.5	5.5	0.4		破目
17	106	1号井戸	釣り	21.6	5.4	0.5		破目
18	106	2号井戸	曲物(板)		(23.4)	0.8		破目
19	106	1号井戸	曲物(板)		(17.0)	0.9		破目
20	106	1号井戸	曲物(板)		20.0	1.4		破目
21	106	66-15-15	木片	27.5	35.0			
22	107	1号井戸	井戸枠(横)	70.8	6.0	4.0		破目
23	107	1号井戸	井戸枠(横)	66.6	5.8	4.0		破目
24	107	1号井戸	井戸枠(横)	69.3	6.0	4.0		破目
25	107	1号井戸	井戸枠(横)	78.0	3.2	4.7		破目
26	107	1号井戸	井戸枠(横)	66.2	7.2	4.0		破目
27	107	1号井戸	井戸枠(横)	27.2	1.8	1.6		破目
28	107	1号井戸	井戸枠(横)	26.0	4.0	3.6		破目
29	107	1号井戸	井戸枠(横)	38.8	8.0	1.0		破目
30	107	1号井戸	井戸枠(板)	52.0	2.6	2.4		破目
31	107	1号井戸	井戸枠(板)	48.6	34.0	3.2		破目
32	107	1号井戸	井戸枠(板)	30.9	26.6	2.4		破目
33	107	1号井戸	井戸枠(板)	30.0	8.0	1.6		破目
34	107	1号井戸	井戸枠(板)	41.3	1.1	2.6		破目
35	107	1号井戸	井戸枠(板)	42.0	21.8	1.8		破目
36	107	1号井戸	井戸枠(板)	48.0	32.0	2.6		破目
37	107	1号井戸	井戸枠(板)	32.8	25.4	2.6		破目
38	107	1号井戸	井戸枠(板)	33.8	48.0	2.4		破目
39	107	1号井戸	漆喰	20.0	52.8			
40	108	2号井戸	井戸枠(横)	99.4	8.6	4.4		破目
41	108	2号井戸	井戸枠(横)	97.2	9.5	6.0		破目
42	108	2号井戸	井戸枠(横)	89.2	3.0	5.6		破目
43	108	2号井戸	井戸枠(横)	99.4	8.0	4.4		破目
44	108	2号井戸	井戸枠(横)	33.4	6.5			不詳
45	108	2号井戸	井戸枠(横)	21.8	8.4			
46	108	2号井戸	井戸枠(横)	50.0	3.0			
47	108	2号井戸	井戸枠(横)	26.8	4.6			不詳
48	108	2号井戸	井戸枠(板)	48.4	21.4	2.8		破目
49	108	2号井戸	井戸枠(板)	44.0	18.8	2.0		破目
50	108	2号井戸	井戸枠(板)	48.8	19.6	4.0		破目
51	108	2号井戸	井戸枠(板)	50.0	34.5	2.6		破目
52	108	2号井戸	井戸枠(板)	67.2	29.0	2.0		破目
53	108	2号井戸	井戸枠(板)	31.2	29.8	2.2		破目
54	108	2号井戸	井戸枠(板)	50.4	33.0	2.3		破目
55	108	2号井戸	井戸枠(板)	35.5	28.3	2.3		破目
56	108	2号井戸	井戸枠(板)	47.2	27.6	2.3		破目
57	108	2号井戸	井戸枠(板)	44.0	30.8	2.3		破目
58	108	2号井戸	井戸枠(板)	48.0	29.0	2.1		破目
59	108	2号井戸	井戸枠(板)	38.0	32.8	2.6		破目
60	108	2号井戸	井戸枠(板)	50.6	36.0	3.2		破目
61	109	3号井戸	井戸枠(横)	70.0	3.0	3.0		破目
62	109	3号井戸	井戸枠(横)	64.4	5.4	2.5		破目
63	109	3号井戸	井戸枠(横)	71.0	6.0	2.2		破目
64	109	3号井戸	井戸枠(横)	67.4	6.4	4.0		破目
65	109	3号井戸	井戸枠(板)	30.6	27.4	4.0		破目
66	109	3号井戸	井戸枠(板)	27.6	18.0	4.8		破目
67	109	3号井戸	井戸枠(板)	20.6	28.8	4.0		破目
68	109	3号井戸	井戸枠(板)	39.0	60.0	3.2		破目
69	109	7号井戸	井戸枠(板)	76.0	9.7	2.2		破目
70	109	7号井戸	井戸枠(板)	69.8	12.0	3.0		破目
71	109	7号井戸	井戸枠(横)	76.7	9.5	2.0		破目
72	109	7号井戸	井戸枠(横)	84.6	10.2	2.4		破目
73	109	4号井戸	井戸枠(横)	54.5	4.5	2.3		破目
74	109	4号井戸	井戸枠(横)	74.0	5.8	2.7		破目
75	109	4号井戸	井戸枠(横)	69.6	4.6	3.6		破目
76	109	4号井戸	井戸枠(横)	68.4	4.3	3.6		破目
77	109	4号井戸	井戸枠(板)	68.0	4.2	2.5		破目
78	109	4号井戸	井戸枠(板)	39.0	24.0	2.2		破目
79	109	4号井戸	井戸枠(板)	42.0	36.0	1.4		破目
80	109	4号井戸	井戸枠(板)	41.0	22.0	2.4		破目
81	109	4号井戸	井戸枠(板)	41.8	16.8	1.4		破目

番号 No.	図面 No.	出土位置	形状	残存長・高	残存幅・径	残存厚	水取り	備考
82	100	4号井戸	井戸枠 (縦板)	41.6	18.4	1.6	板目	
83	100	4号井戸	井戸枠 (縦板)	80.0	13.6	1.6	板目	
84	100	4号井戸	曲物	11.0	45.0	0.4		
85	100	4号井戸	曲物	8.4	49.6	0.4		
86	110	8号井戸	井戸枠	78.0	86.5	4.5	板目目	丸木身材板用
87	110	8号井戸	井戸枠 (縦板)	65.4	22.0	2.4	板目目	
88	110	8号井戸	井戸枠 (縦板)	65.8	24.8	2.4	板目目	
89	110	8号井戸	井戸枠	74.4	43.6	6.3	板目目	丸木身材板用
90	110	8号井戸	井戸枠	73.8	48.0	7.4	板目目	丸木身材板用
91	110	8号井戸	井戸枠	82.2	59.0	8.6	板目目	丸木身材板用
92	111	9号井戸	井戸枠 (横板)	97.4	13.9	10.8	芯材	
93	111	9号井戸	井戸枠 (横板)	78.5	17.7	17.1	芯材	
94	111	9号井戸	井戸枠 (横板)	89.5	11.1	9.5	芯材	
95	111	9号井戸	井戸枠 (横板)	91.2	13.4	7.9	板目	
96	111	9号井戸	井戸枠 (横板)	80.5	12.5	6.3	板目	
97	111	9号井戸	井戸枠 (横板)	92.4	10.7	5.0	板目目	
98	111	9号井戸	井戸枠 (縦板)	61.9	12.6	0.7	板目目	
99	111	9号井戸	井戸枠 (縦板)	73.3	15.3	3.9	板目目	
100	111	9号井戸	井戸枠 (縦板)	81.0	42.6	3.2	板目	
101	111	9号井戸	井戸枠 (縦板)	84.1	47.2	3.6	板目	
102	111	9号井戸	井戸枠 (縦板)	79.1	51.4	4.3	板目	
103	111	9号井戸	井戸枠 (縦板)	76.7	36.5	3.1	板目	
104	112	9号井戸	井戸枠 (縦板)	79.6	33.5	3.9	板目目	
105	112	9号井戸	井戸枠 (縦板)	79.3	32.5	2.4	板目	
106	112	9号井戸	井戸枠 (縦板)	92.7	38.0	3.3	板目目	
107	112	9号井戸	井戸枠 (縦板)	80.2	27.0	3.0	板目	
108	112	9号井戸	井戸枠 (縦板)	82.0	34.9	2.5	板目目	
109	112	9号井戸	井戸枠 (縦板)	65.7	26.8	3.1	板目	
110	112	9号井戸	井戸枠 (縦板)	42.3	27.1	3.1	板目目	
111	112	9号井戸	井戸枠 (縦板)	62.5	30.8	4.0	板目	
112	112	10号井戸	井戸枠 (縦板)	77.9	11.5	3.5	板目	
113	112	10号井戸	井戸枠 (横板)	76.3	10.3	2.8	板目	
114	112	10号井戸	井戸枠 (横板)	72.6	12.2	3.0	板目	
115	112	10号井戸	井戸枠 (縦板)	23.6	23.2	2.2	板目目	
116	112	10号井戸	井戸枠 (縦板)	28.5	13.0	2.3	板目目	
117	112	10号井戸	井戸枠 (縦板)	23.8	39.9	2.5	板目目	
118	112	10号井戸	井戸枠 (縦板)	56.3	12.8	1.9	板目	

図 版

凡 例

- 1 遺物は、時代、器種毎の通し番号とした。
写真図版の個々番号はこれに一致する。
- 2 遺物の内、土器の須恵器・珠洲焼・常滑焼の断面は黒塗り潰しとした。また、土器器面赤彩・黒色・炭化物付着部分・砥石等磨面は、それぞれ以下のトーンで表わした。

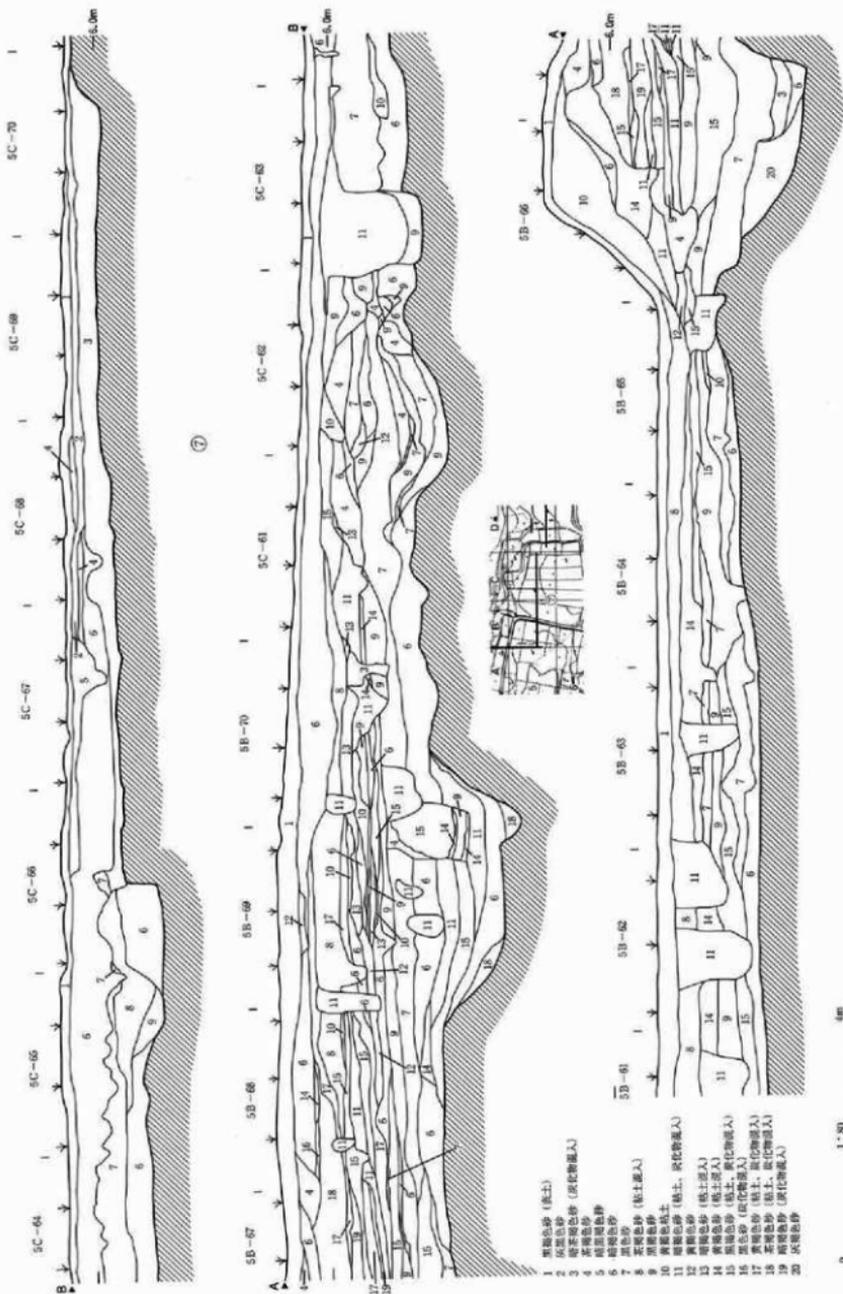
赤彩：

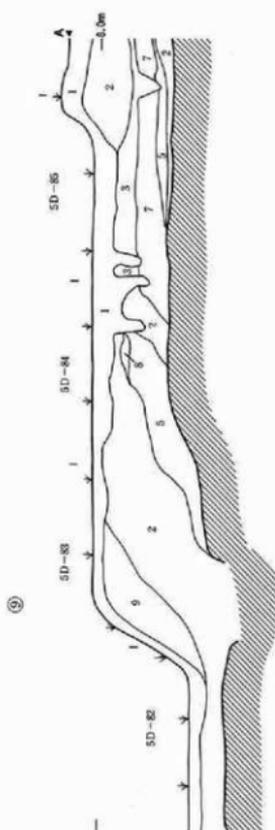
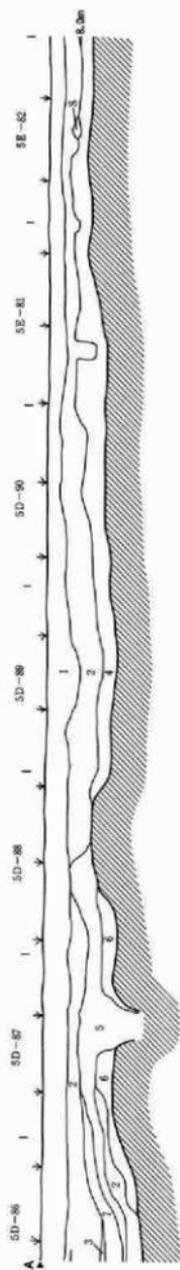
黒色：

炭化物付着：

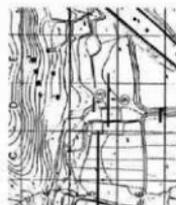
磨面：







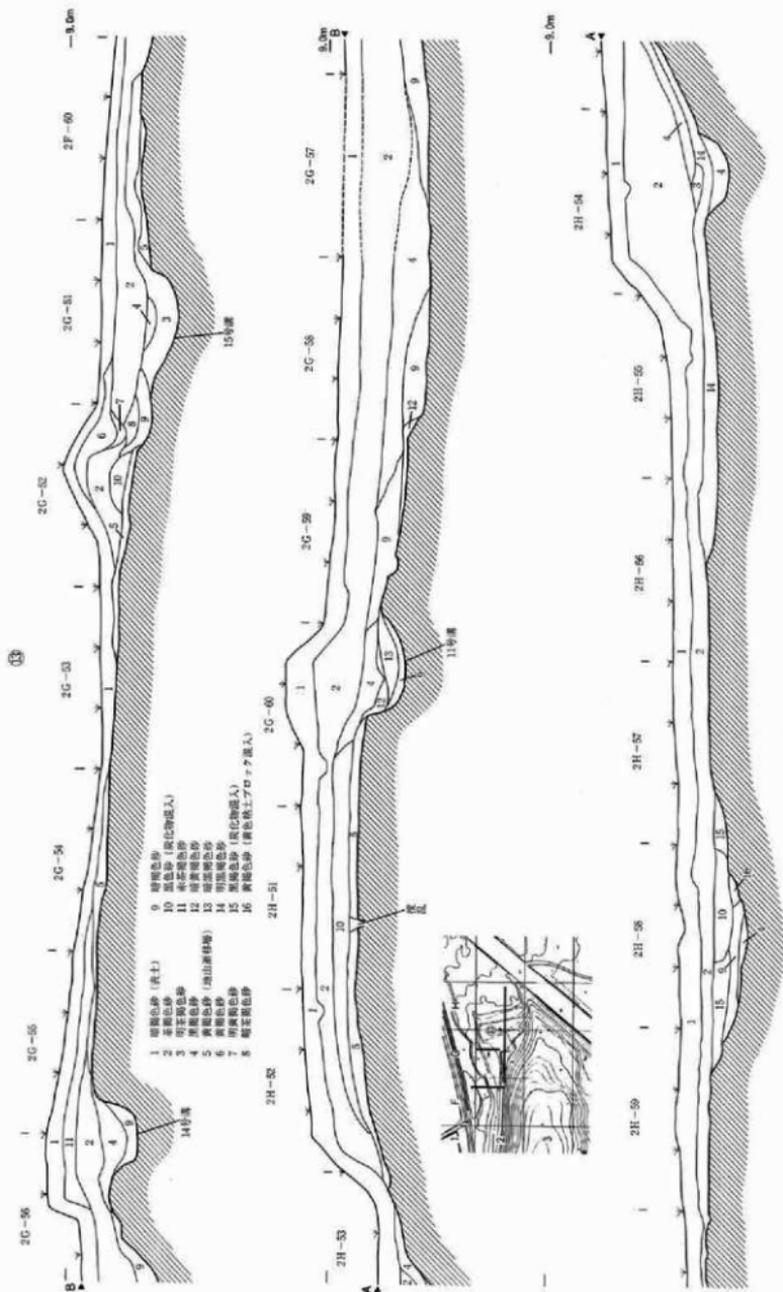
- 1 暗褐色砂 (黄土)
- 2 黄褐色砂
- 3 灰褐色砂
- 4 灰褐色砂
- 5 灰褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 黑色砂 (70%)
- 8 暗褐色砂
- 9 暗褐色砂

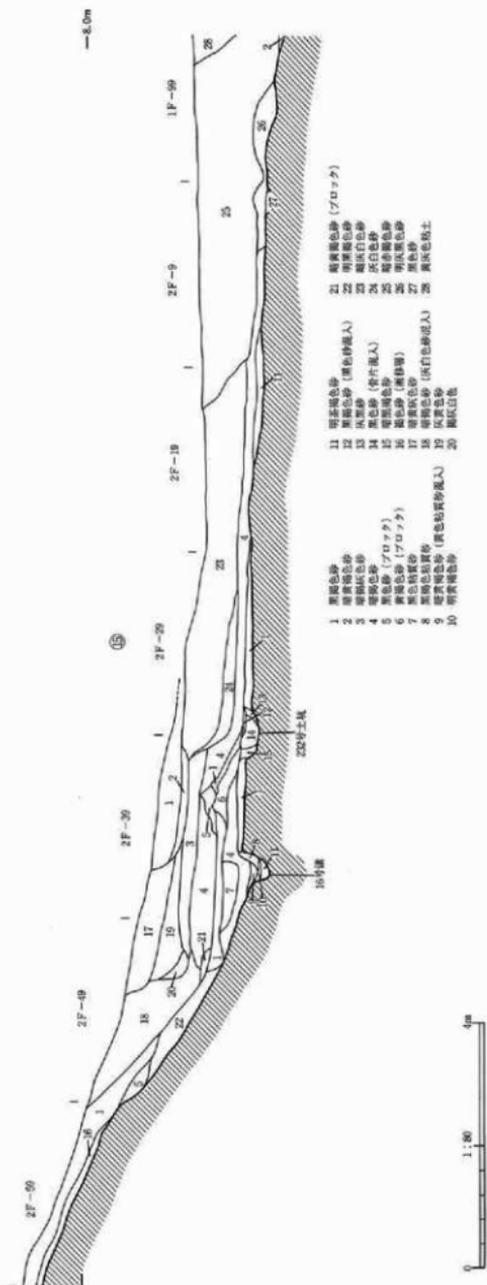
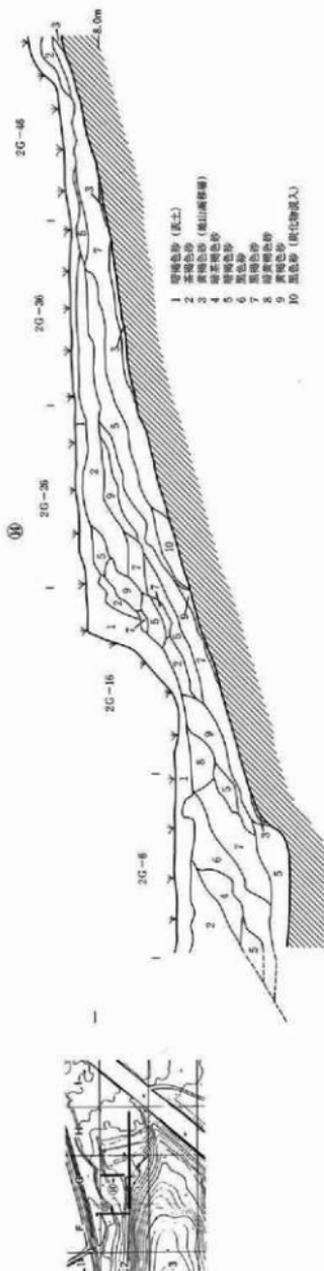


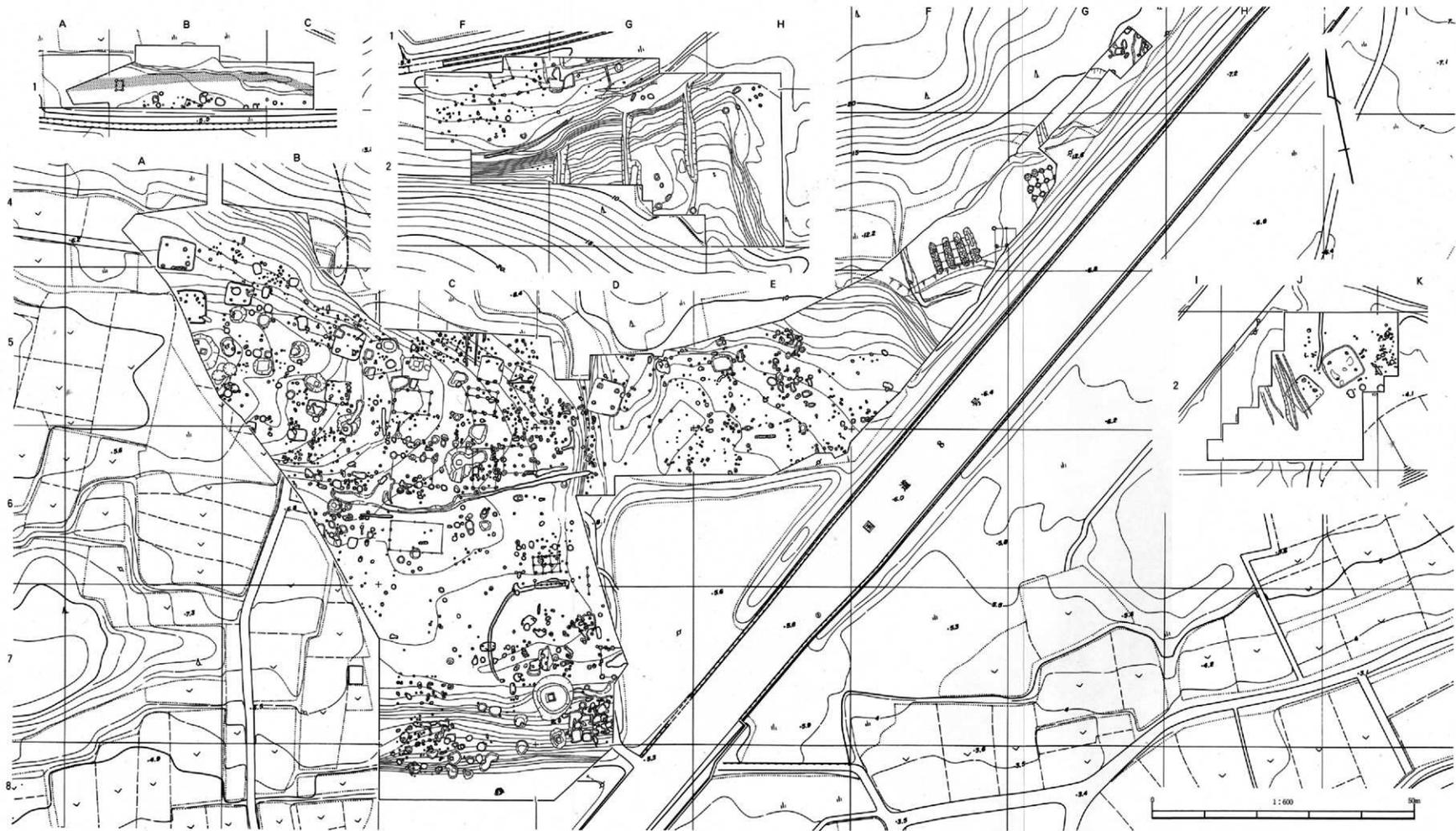
- 1 暗褐色砂 (黄土)
- 2 黄褐色砂 (Lより少L)
- 3 暗褐色砂
- 4 暗褐色砂
- 5 暗褐色砂 (Lより少L)
- 6 暗褐色砂
- 7 暗褐色砂 (Lより少L)
- 8 暗褐色砂
- 9 暗褐色砂
- 10 暗褐色砂
- 11 黄褐色砂 (城山南側(南側))
- 12 暗褐色砂 (Lより少L)
- 13 暗褐色砂 (Lより少L)
- 14 暗褐色砂 (Lより少L)
- 15 暗褐色砂 (城山南側)

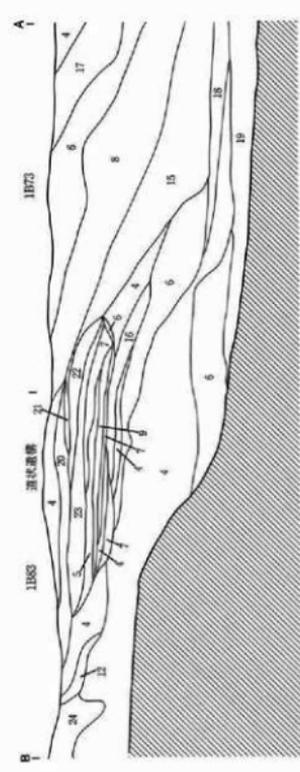
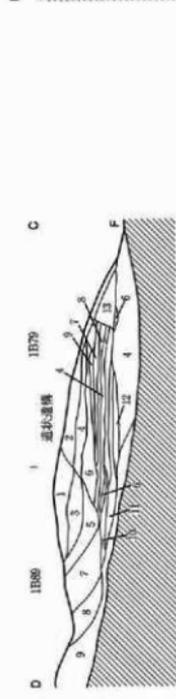
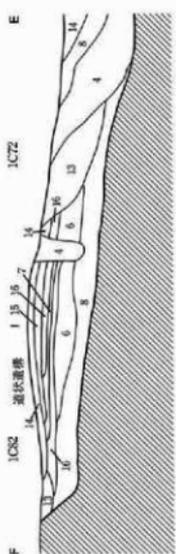
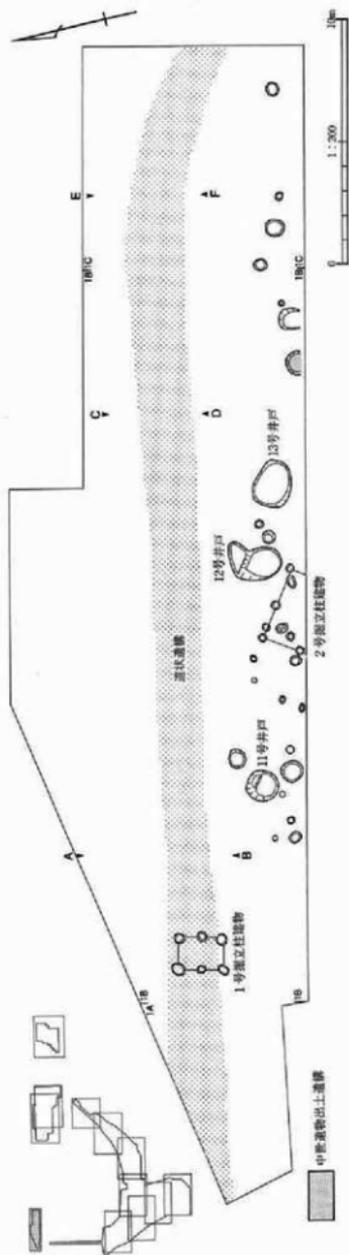




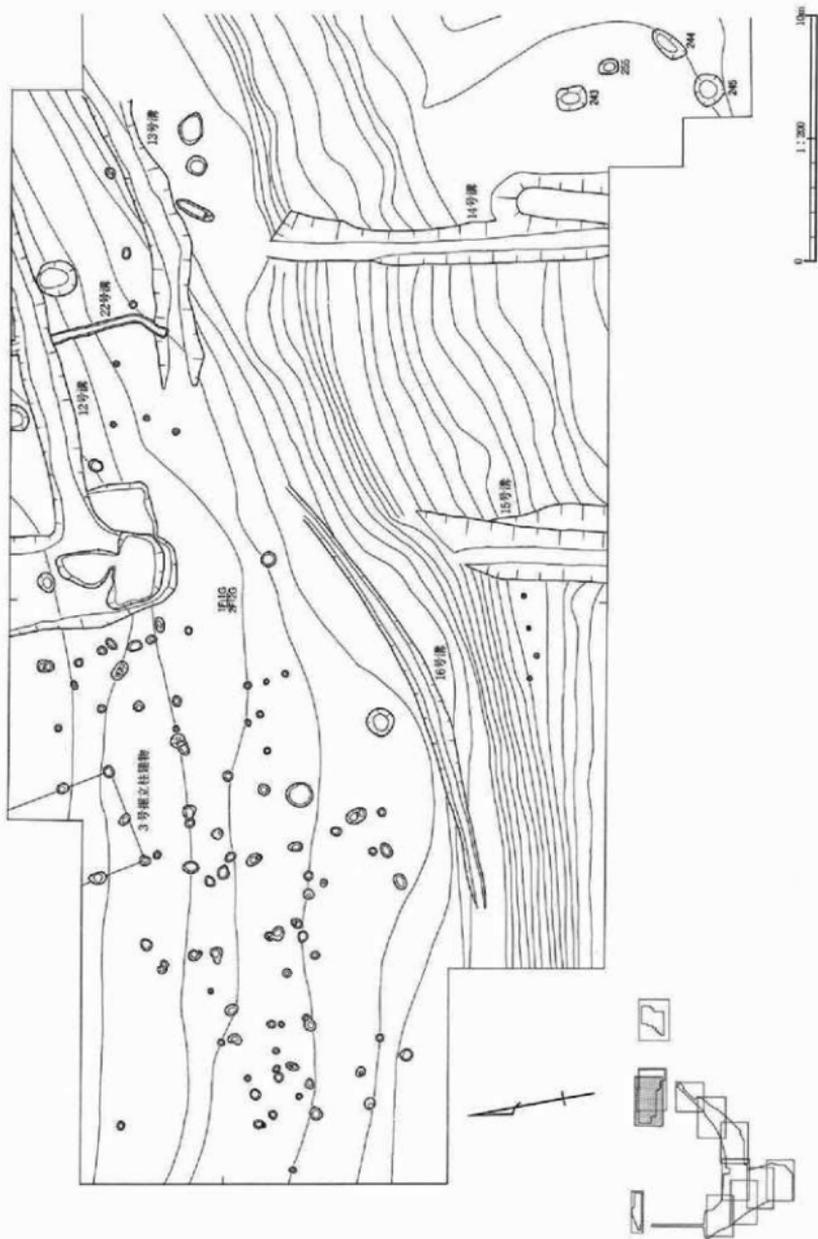


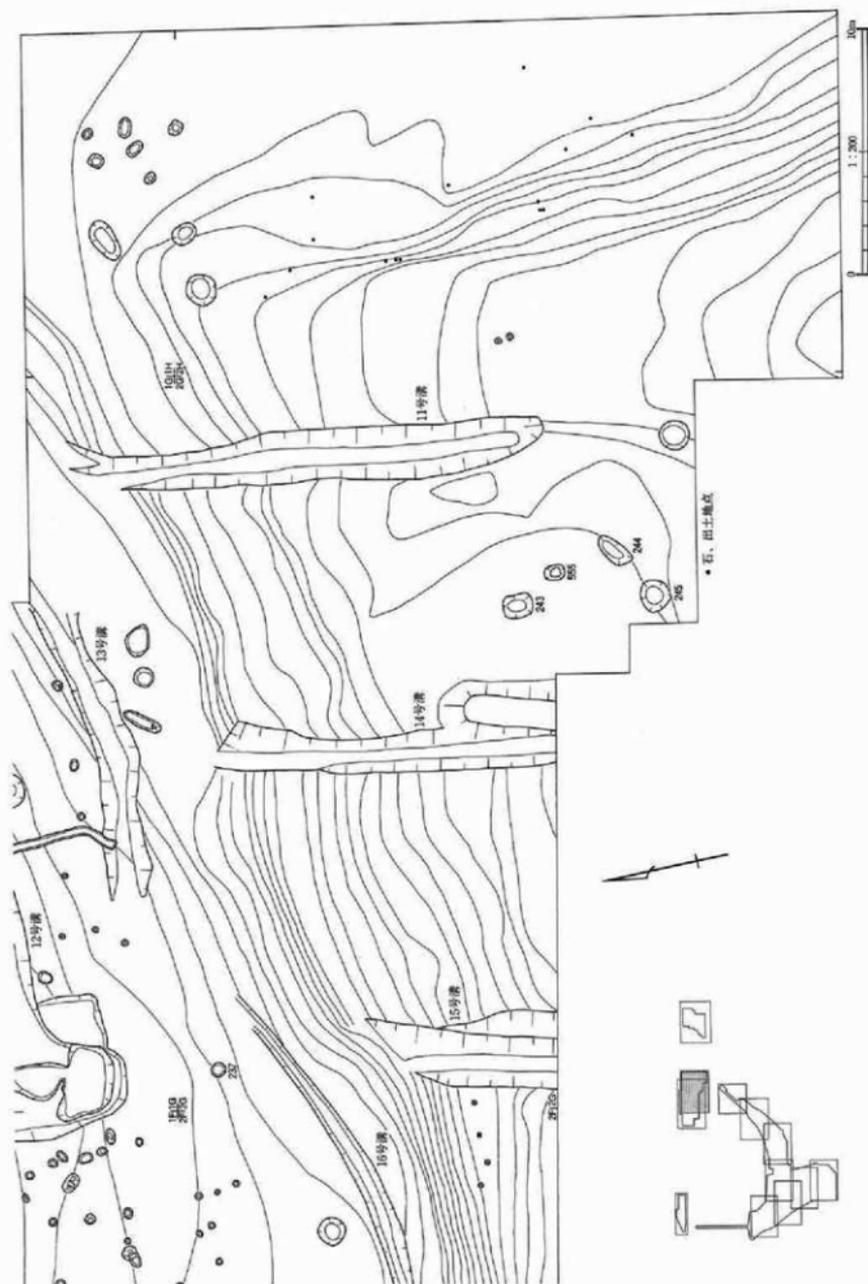


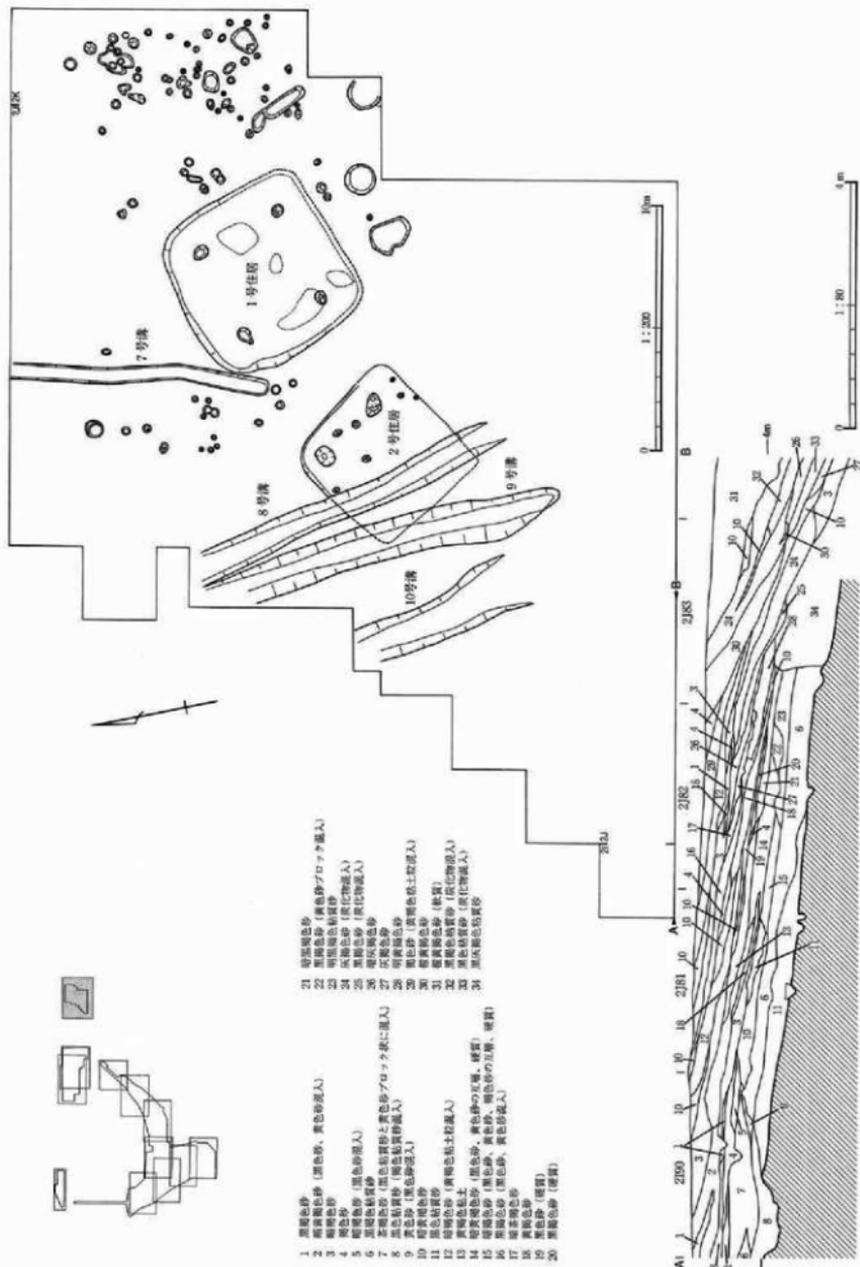


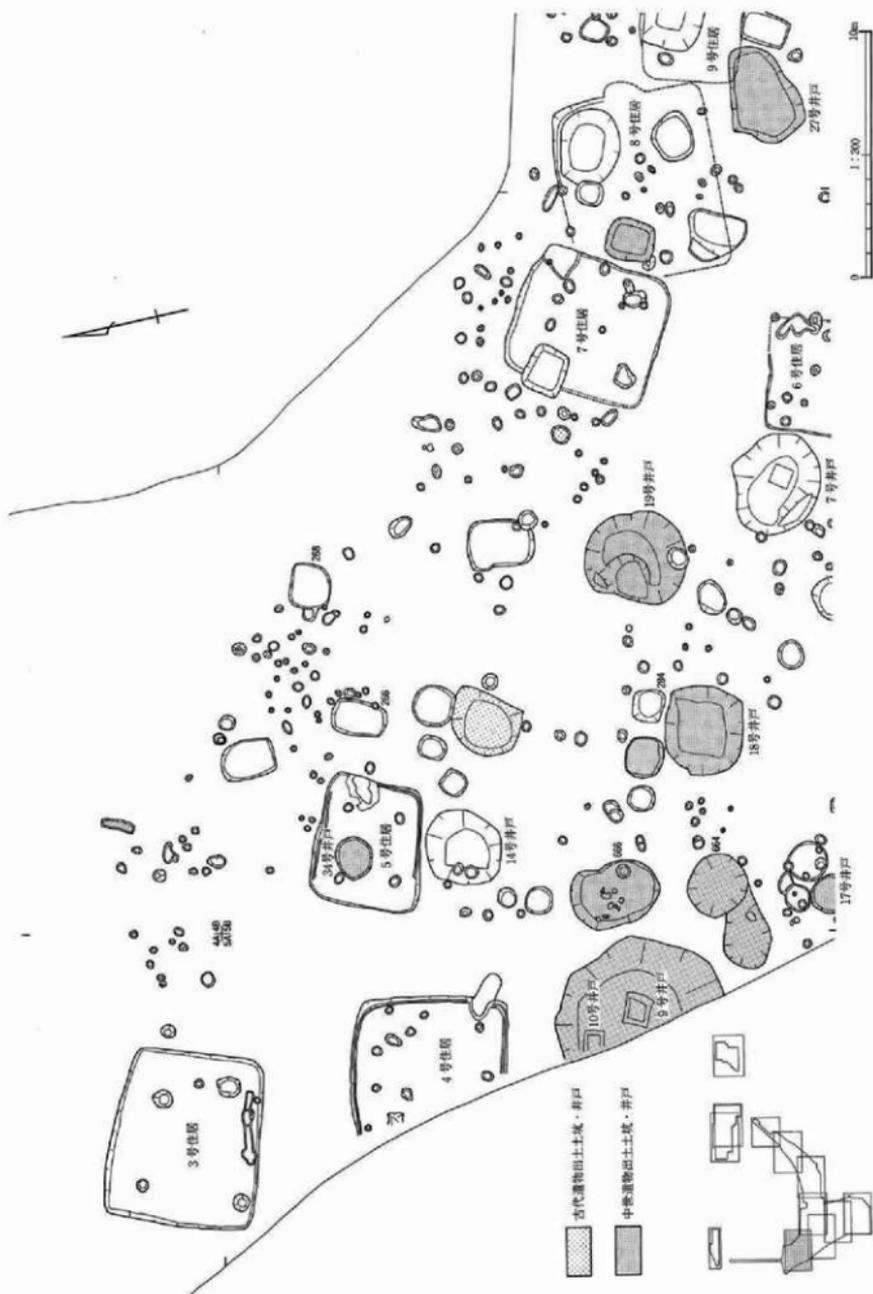


- 1 暗褐色砂
- 2 暗褐色砂
- 3 暗褐色砂
- 4 暗褐色砂
- 5 暗褐色砂
- 6 暗褐色砂
- 7 暗褐色砂
- 8 暗褐色砂
- 9 灰土層
- 10 黄褐色砂 (粘土層入)
- 11 灰褐色砂
- 12 茶褐色砂
- 13 暗褐色砂 (粘土層入)
- 14 灰褐色砂
- 15 暗褐色砂
- 16 暗褐色砂 (黄褐色粘土層入)
- 17 暗褐色砂 (灰化物質入)
- 18 黄褐色粘土
- 19 暗褐色砂
- 20 暗褐色砂
- 21 暗褐色砂 (粘土層入)
- 22 暗褐色砂 (粘土層入)
- 23 暗褐色砂
- 24 暗褐色砂

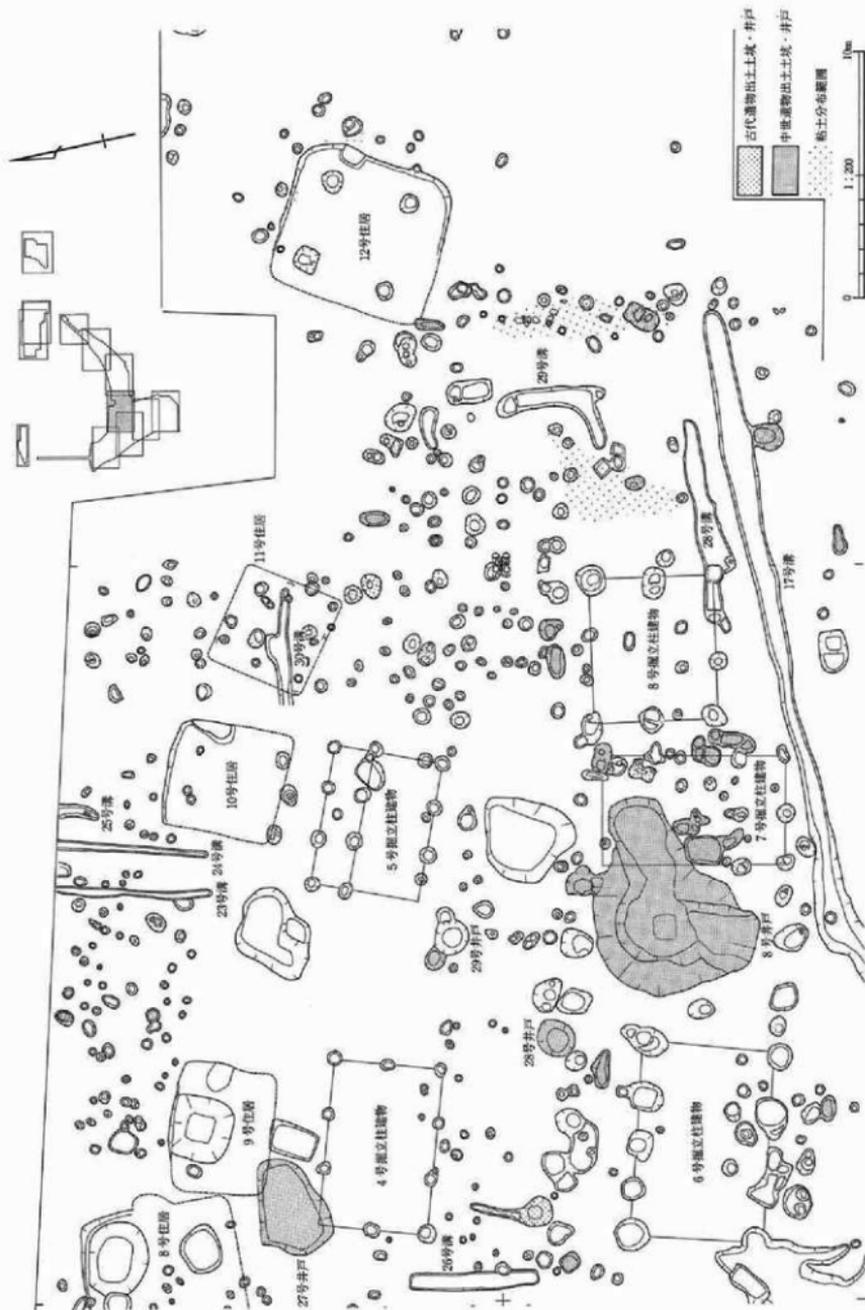




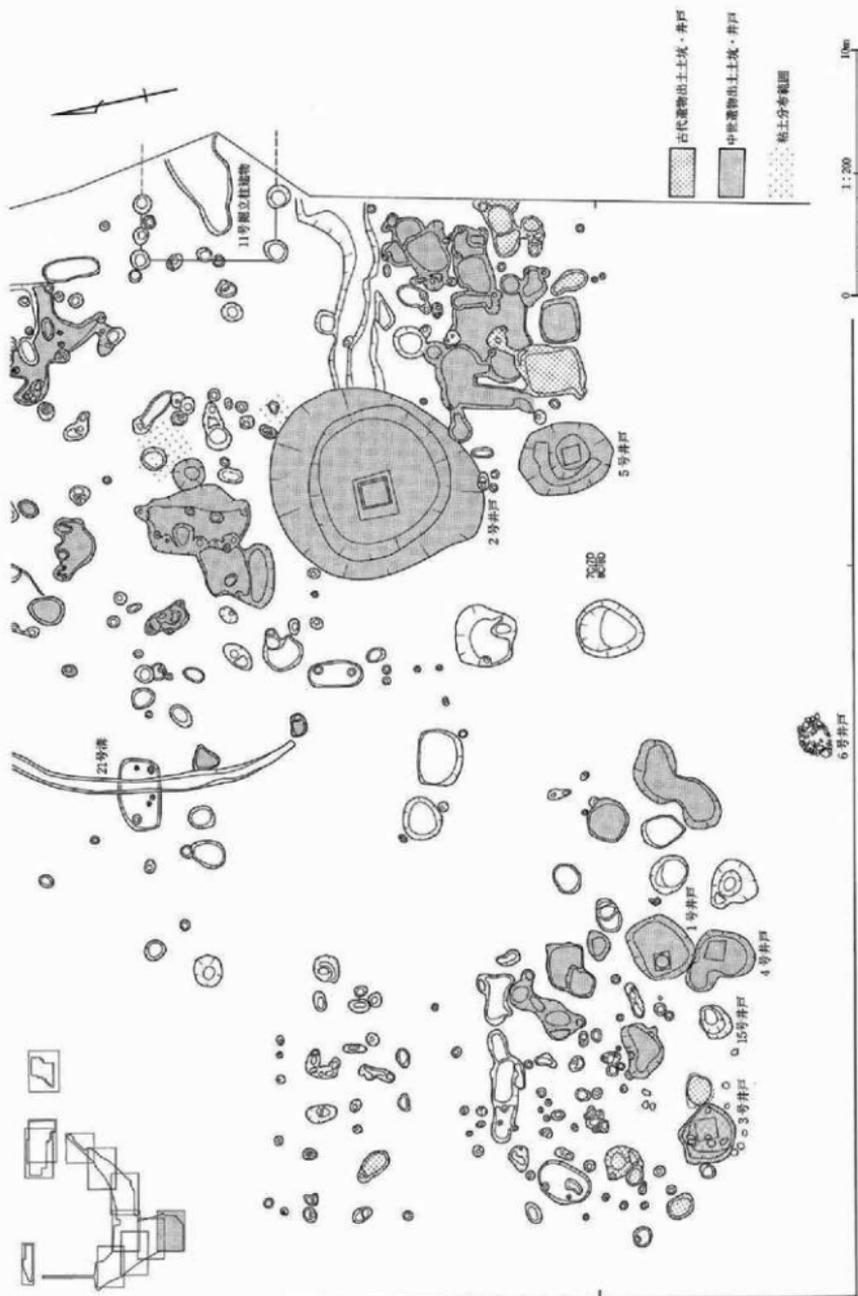


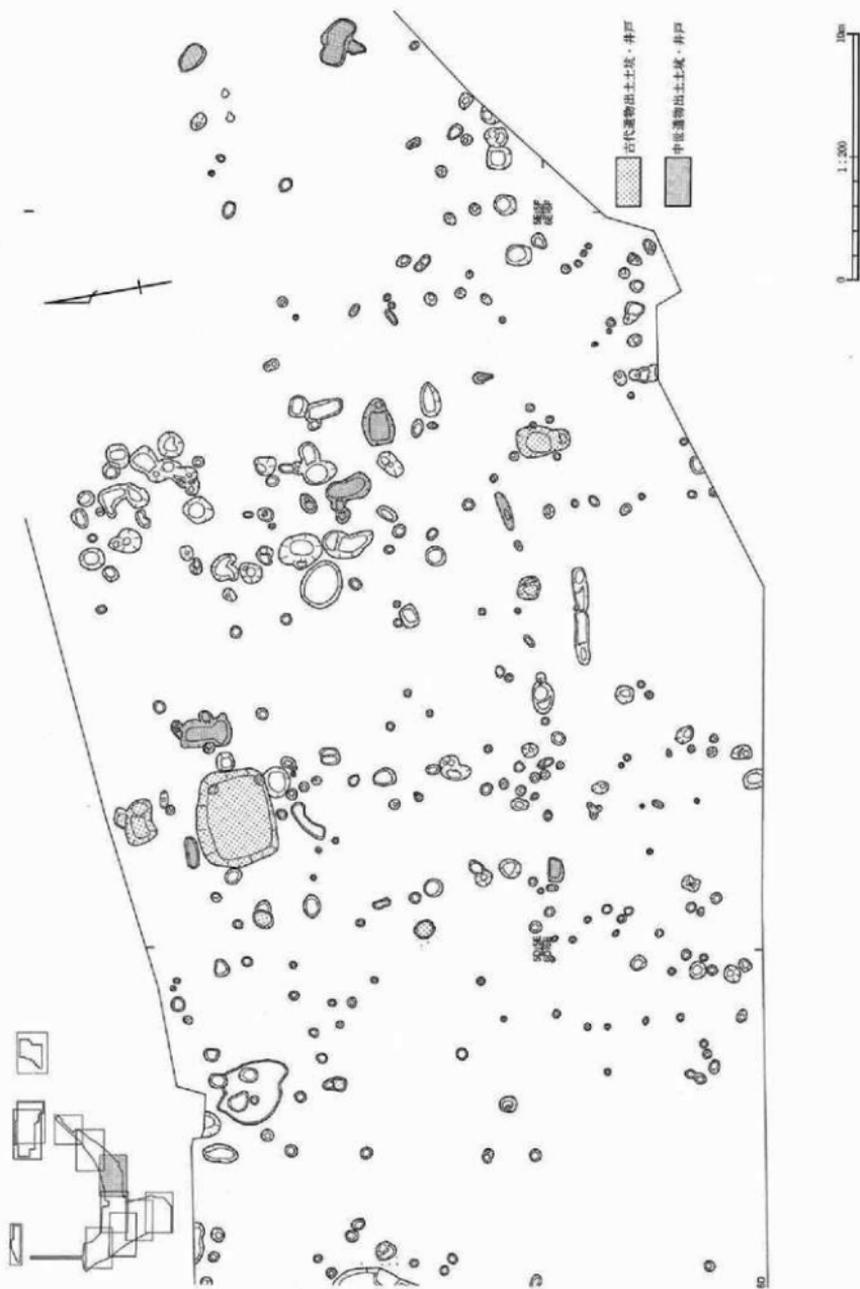


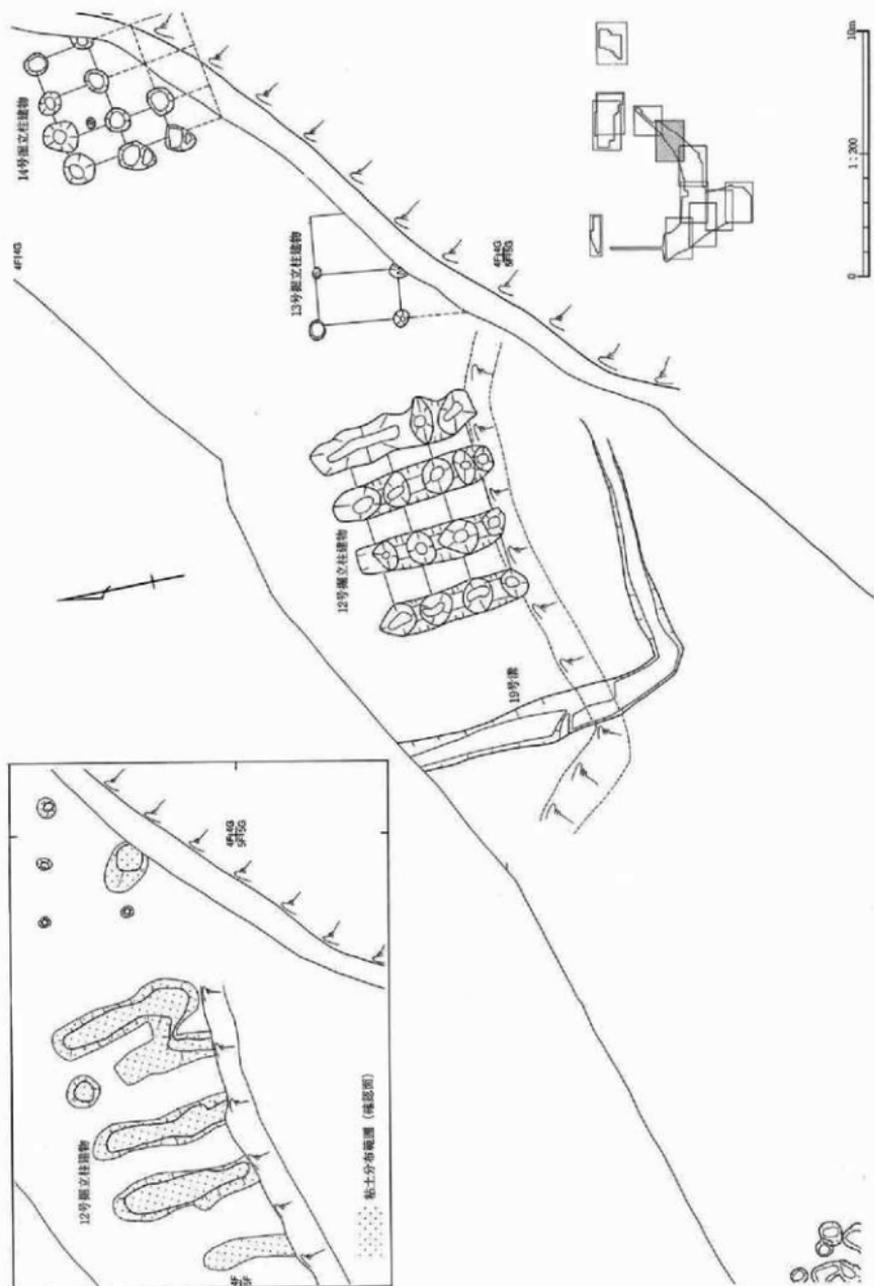


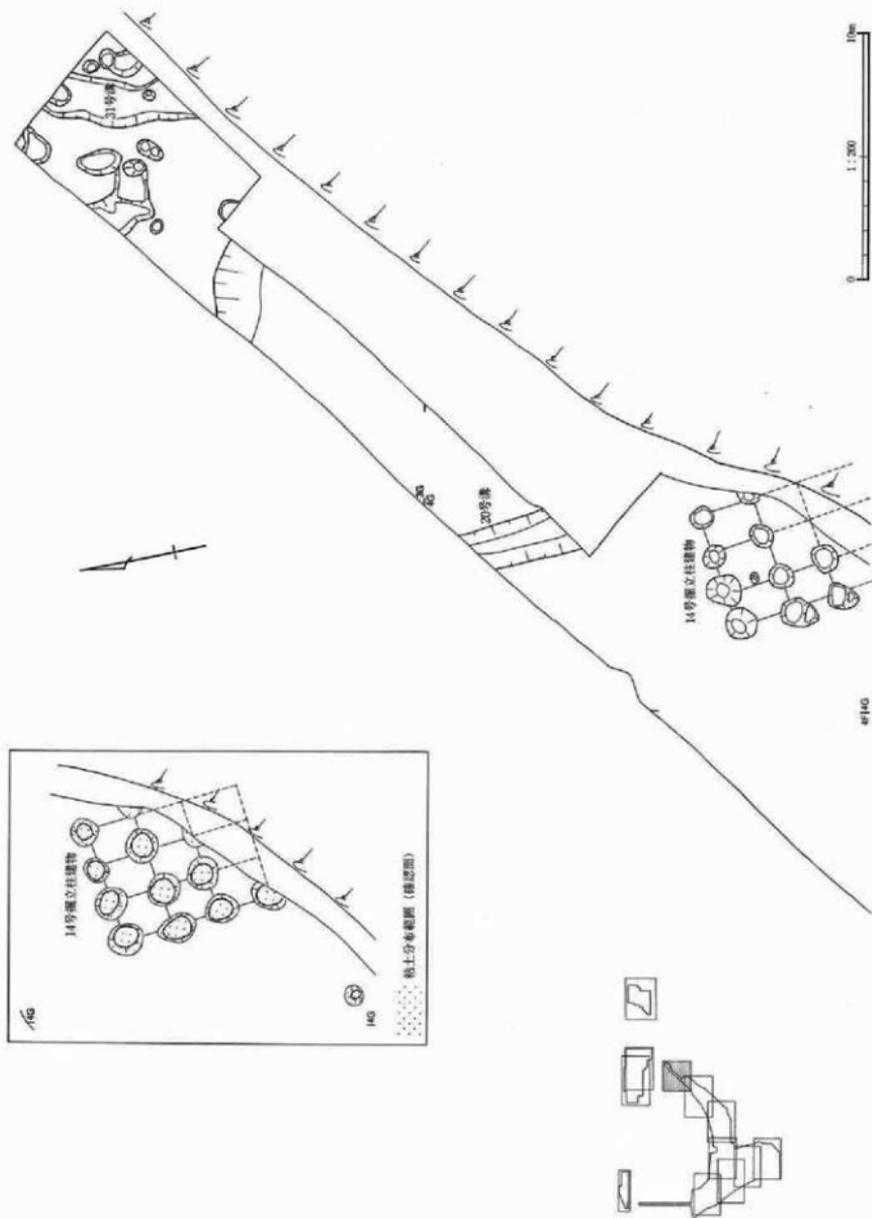


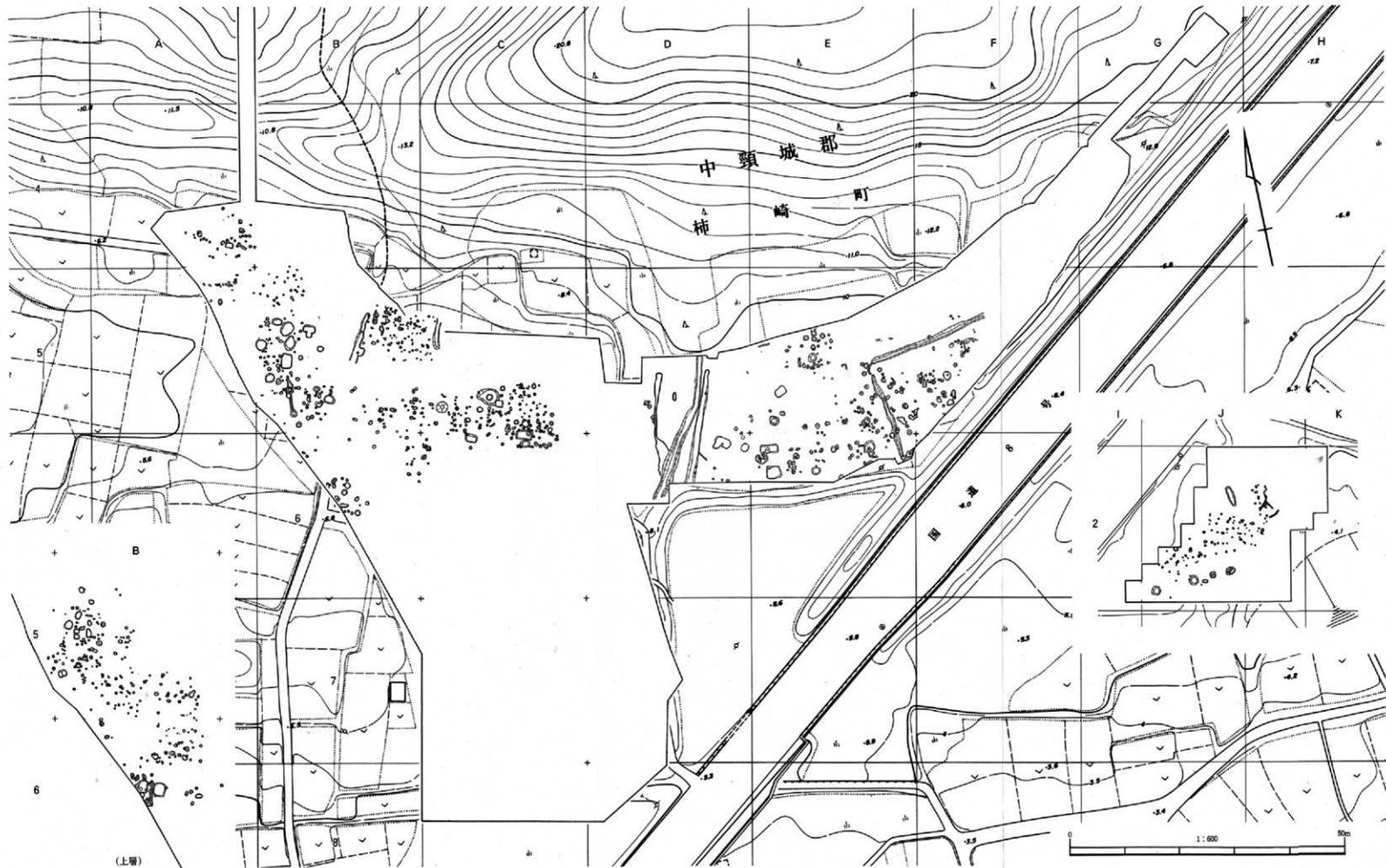




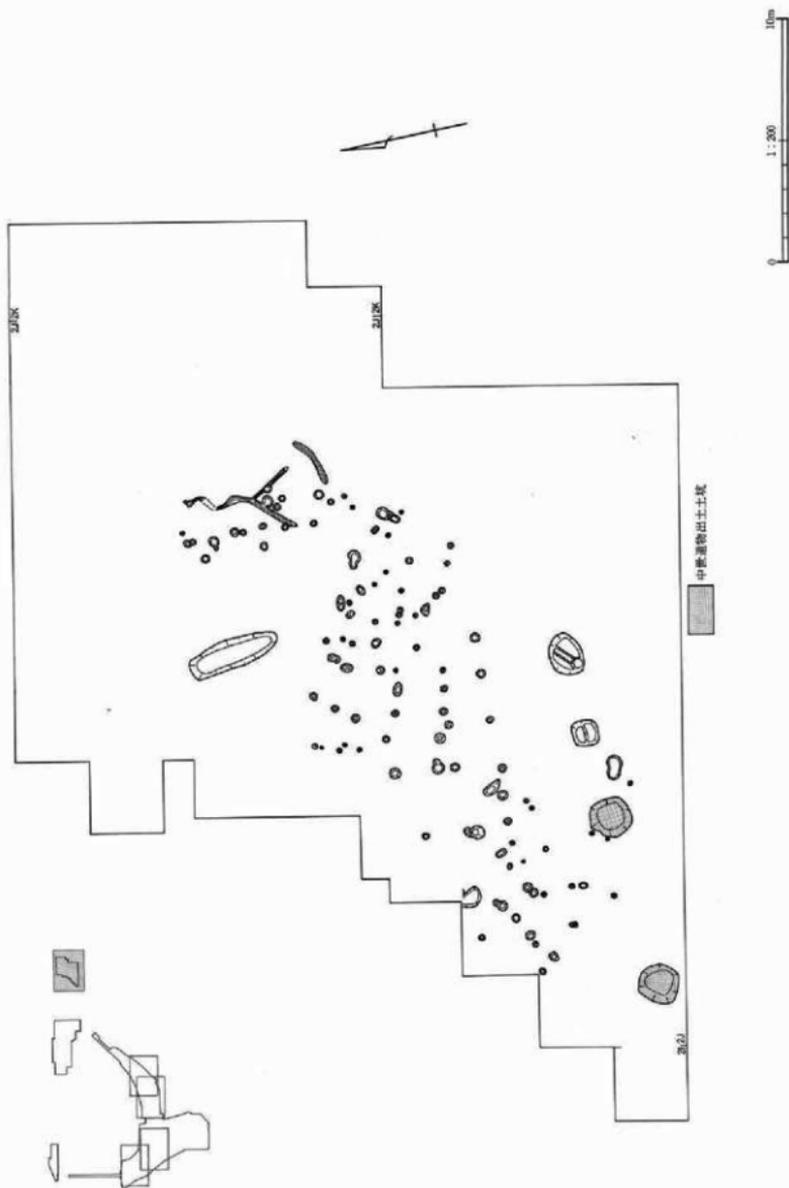


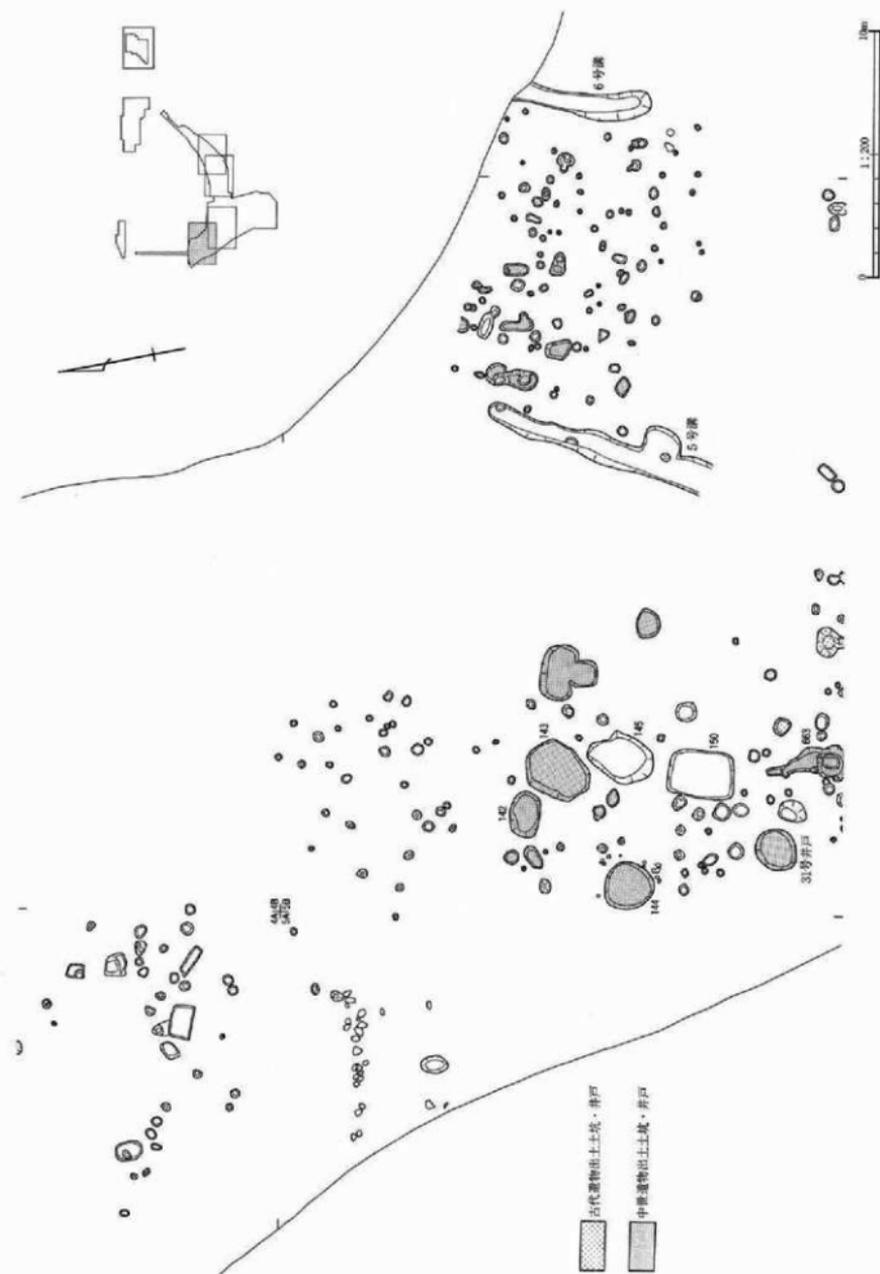


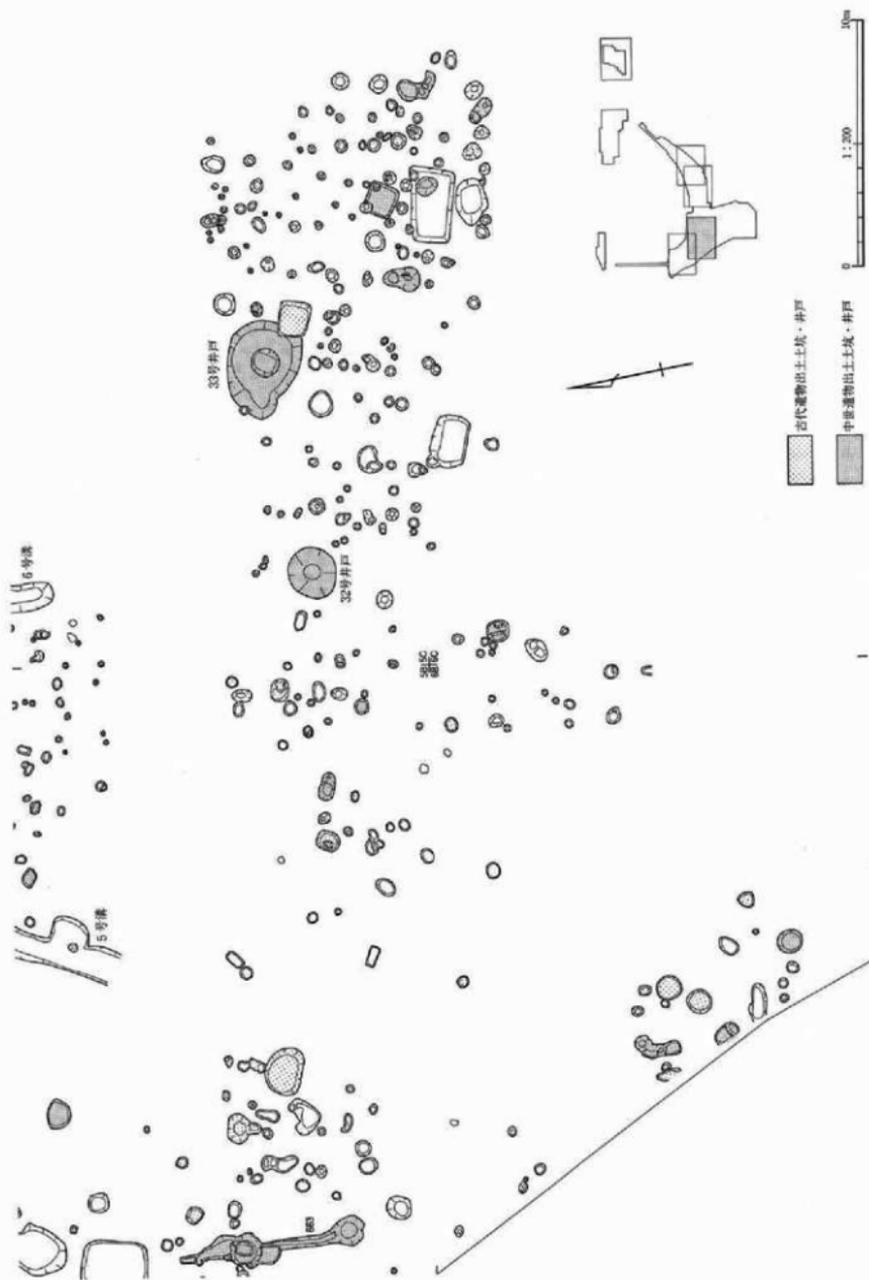


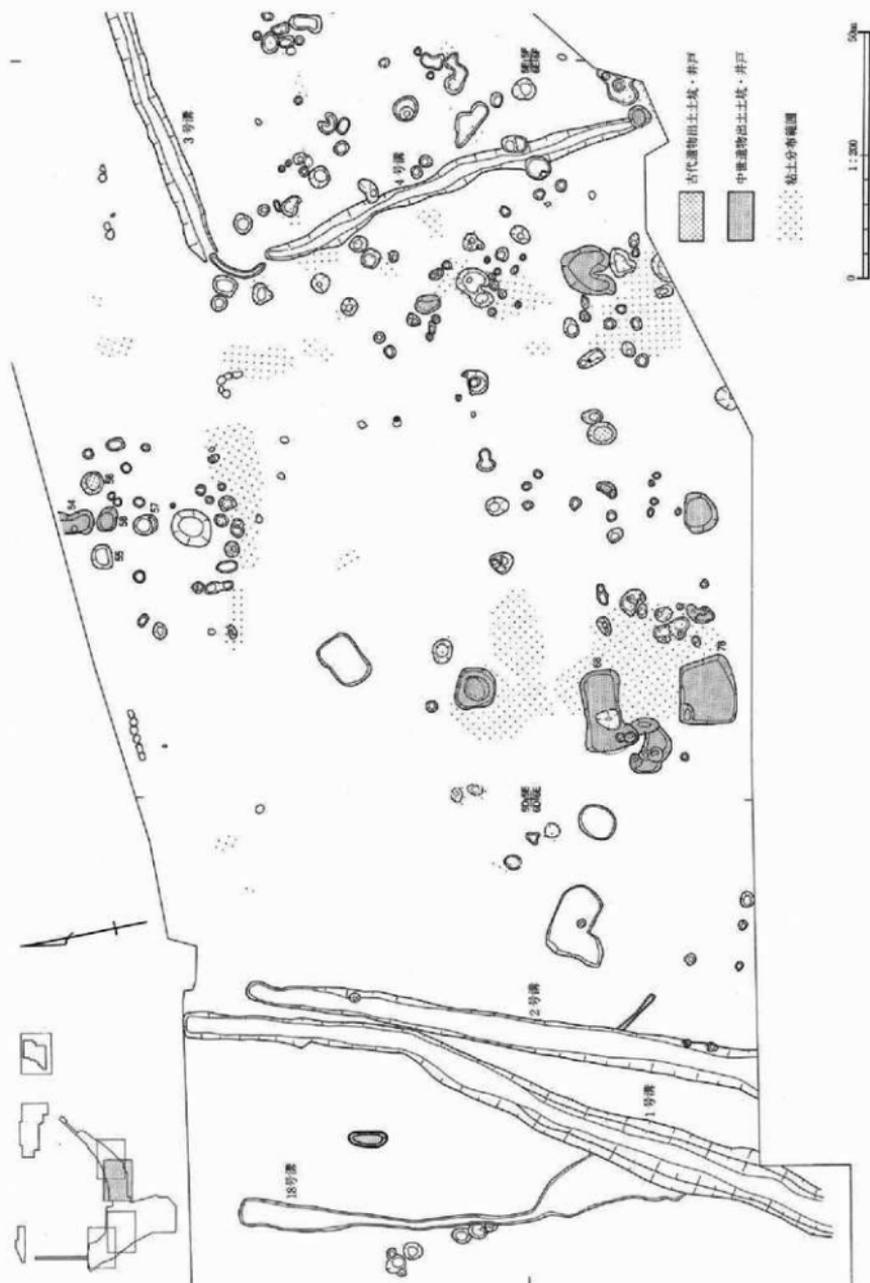


(上層)

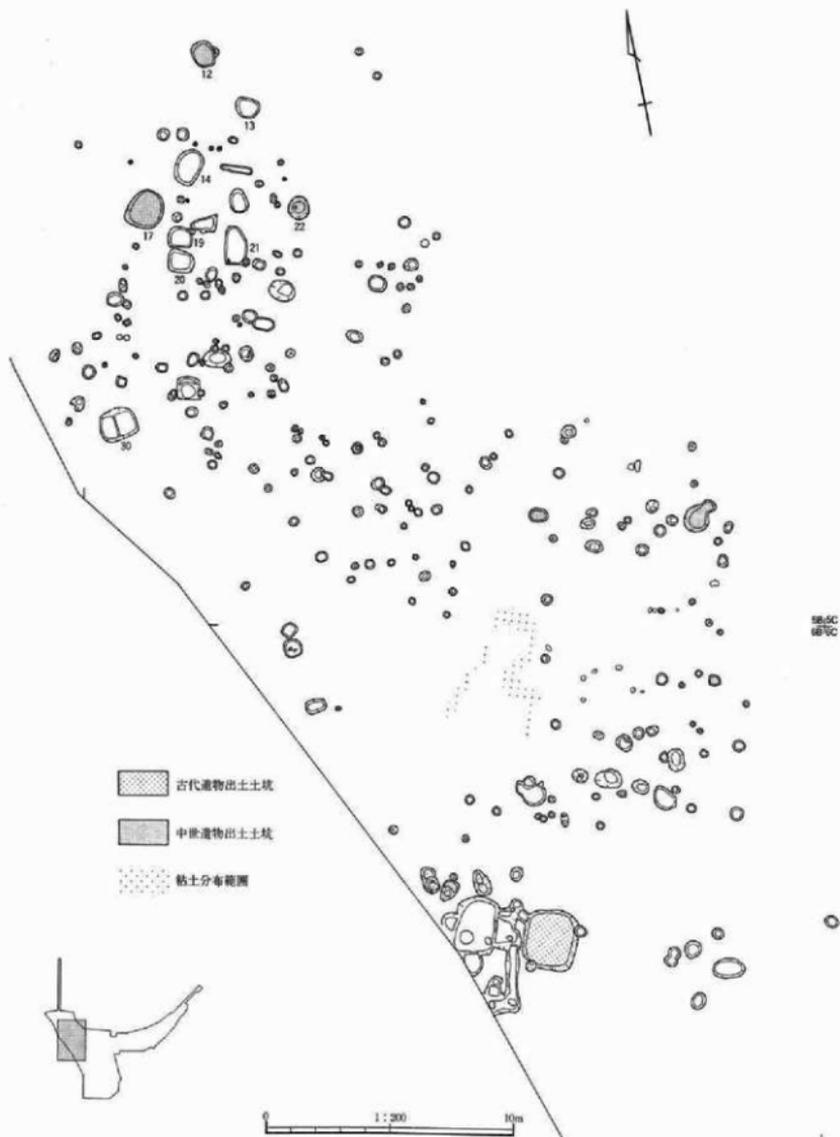


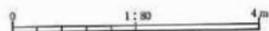
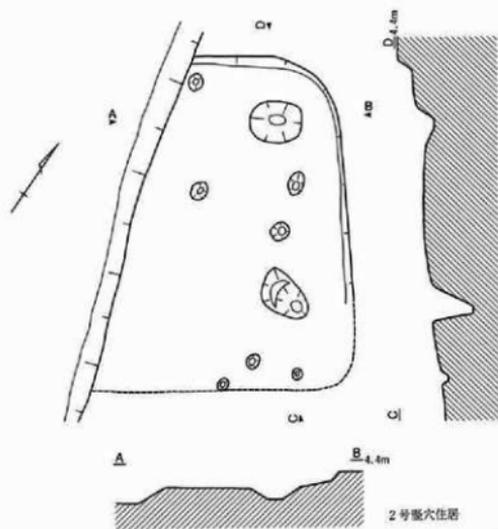
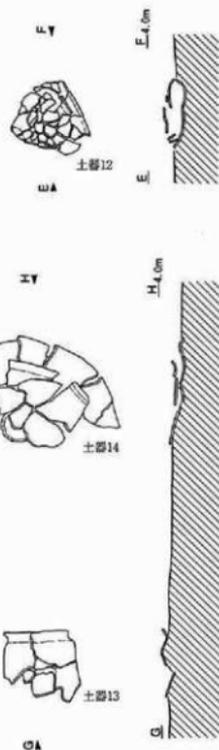
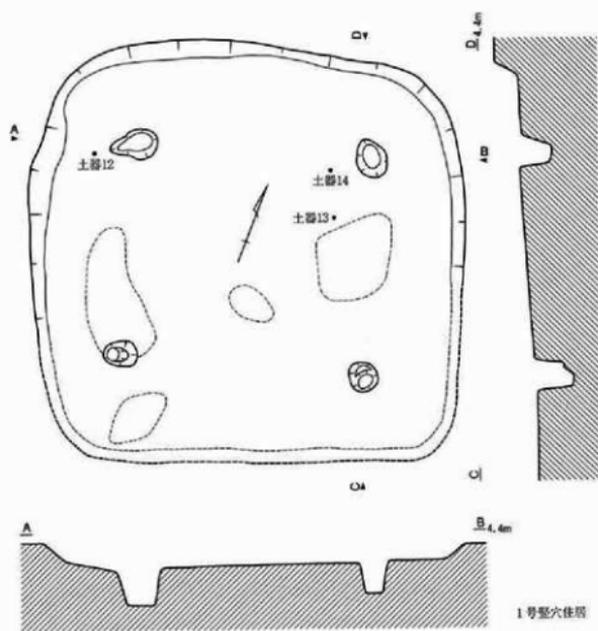


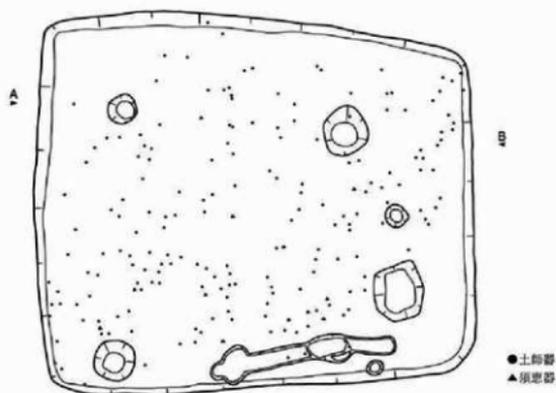




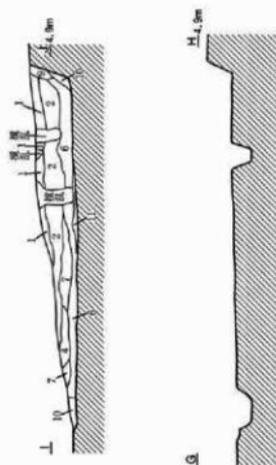
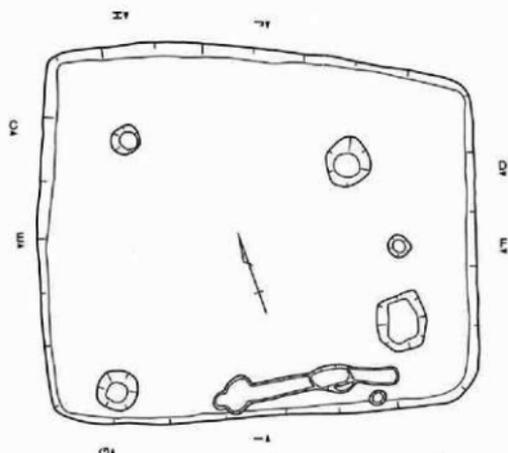


44.00
54.5044.40
54.50



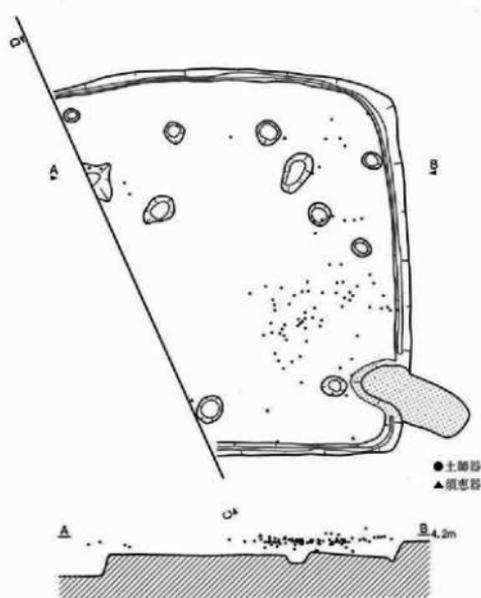


3号竖穴住居

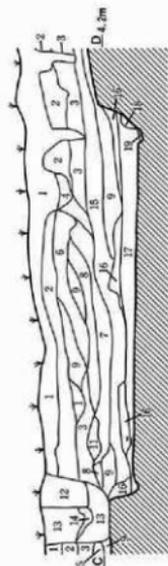


- 1 暗褐色砂
- 2 茶褐色砂
- 3 黑色砂 (炭化物混入)
- 4 黑色砂 (炭化物混入)
- 5 淡褐色砂
- 6 赤茶褐色砂
- 7 暗赤茶褐色砂
- 8 黑色砂 (炭化物大粒多量混入)
- 9 黄褐色砂 (壁崩壊跡)
- 10 暗褐色砂 (壁崩壊跡)
- 11 暗褐色砂 (地山崩移層)
- 12 黄褐色粘土

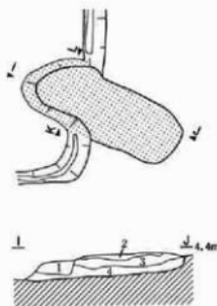
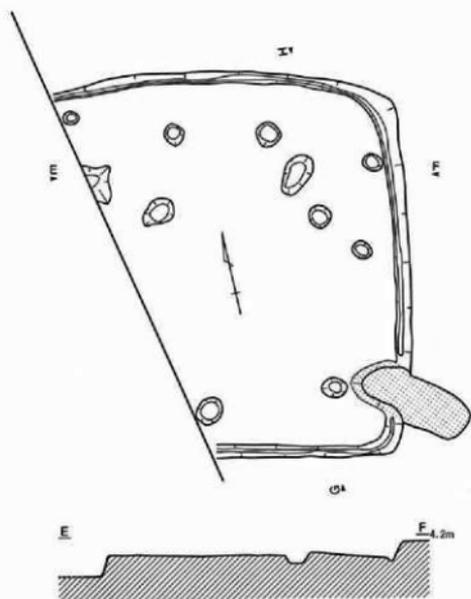
0 1:80 4m



4号壑穴住居



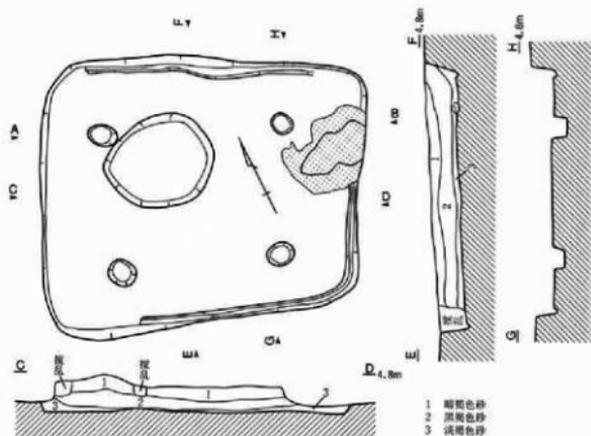
- 11 赤褐色砂 (粘土混入)
- 12 褐色砂
- 13 明褐色砂
- 14 白灰砂
- 15 黄褐色砂
- 16 黄褐色砂 (灰化物混入)
- 17 赤褐色砂
- 18 赤褐色砂
- 19 赤褐色砂
- 20 赤褐色砂
- 1 黄褐色砂 (表土)
- 2 明褐色砂 (褐色粘土混入)
- 3 暗褐色砂
- 4 暗褐色砂
- 5 灰褐色砂
- 6 灰褐色砂
- 7 明褐色砂
- 8 灰褐色砂
- 9 暗褐色砂
- 10 黄褐色砂



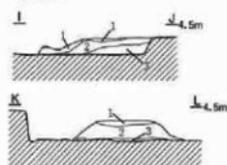
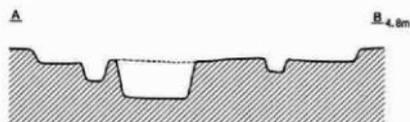
- 1 赤褐色砂 (砂)
- 2 灰褐色砂 (灰化物混入)
- 3 灰褐色砂
- 4 暗褐色砂

0 1:40 2m
(ナマ)

0 1:80 4m

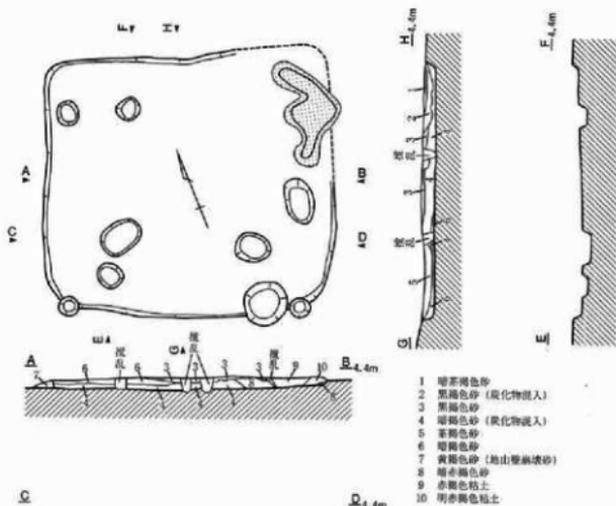


5号壑穴住居



- 1 細黄色土
- 2 赤褐色砂
- 3 赤褐色+黄白色砂

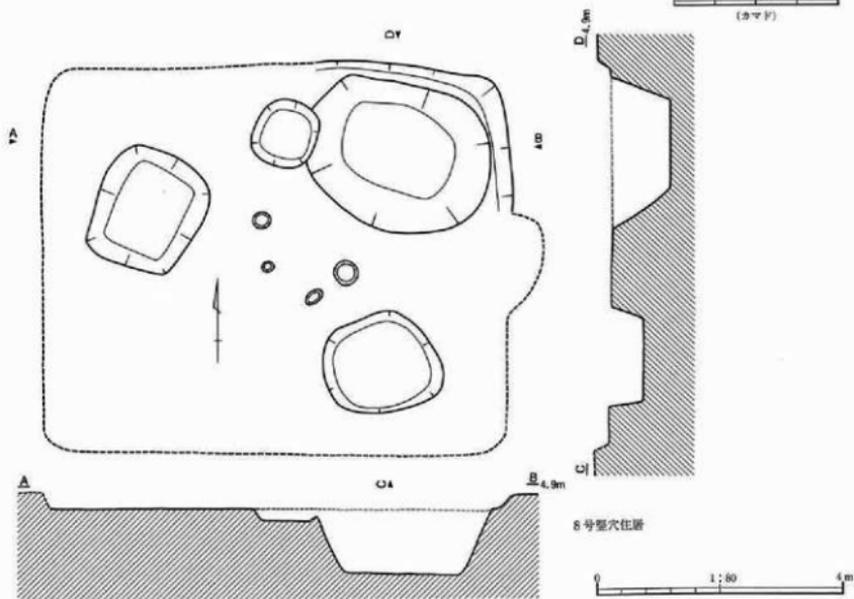
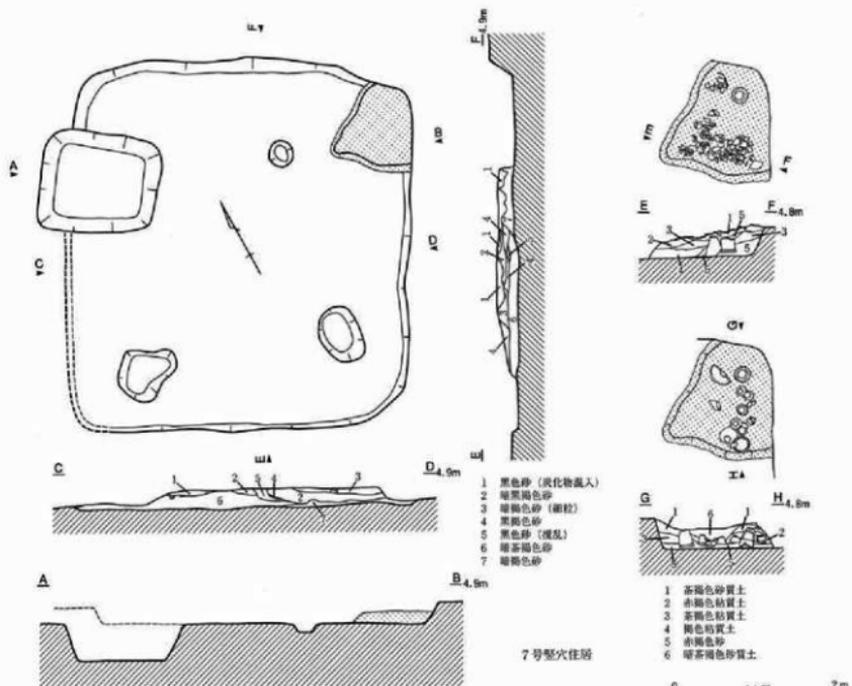
0 1:60 2m
(カマド・カマド間道)

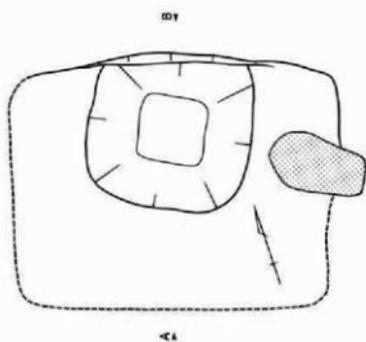


6号壑穴住居

0 1:60 2m
(カマド)

0 1:80 4m

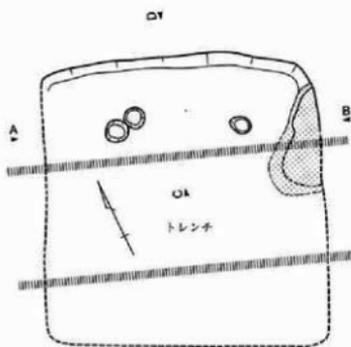
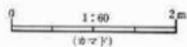
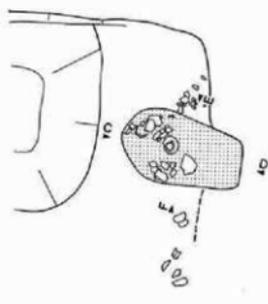




9号壑穴住居

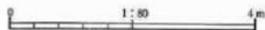
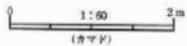
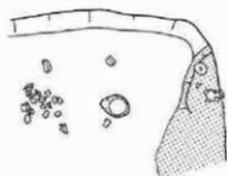


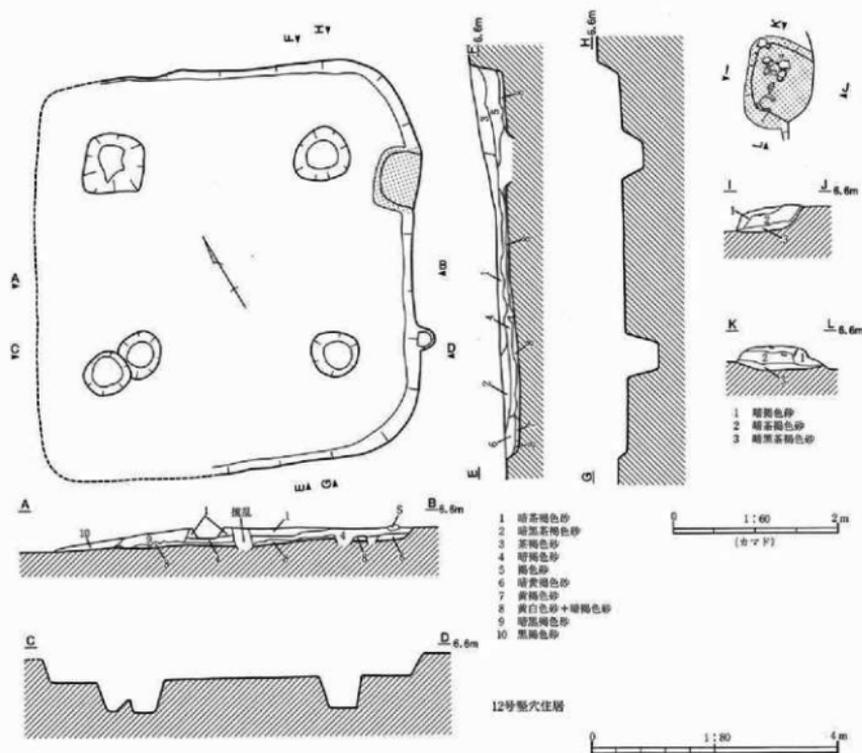
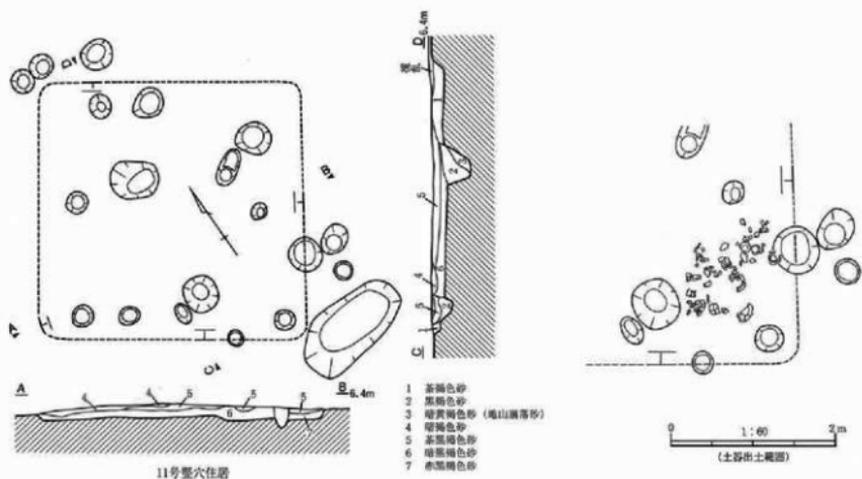
- 1 淡赤褐色砂 (カマド裏積砂)
- 2 黄褐色砂
- 3 赤褐色砂 (粘土混入)
- 4 黒褐色砂
- 5 黒褐色砂
- 6 淡褐色砂

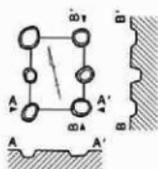


- 1 暗褐色砂 (灰化物混入)
- 2 黒褐色砂 (灰化物混入)
- 3 暗赤褐色砂 (粘質なし)
- 4 暗褐色砂
- 5 暗褐色砂

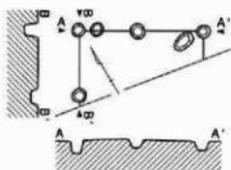
10号壑穴住居



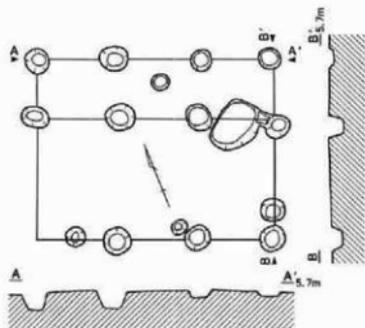




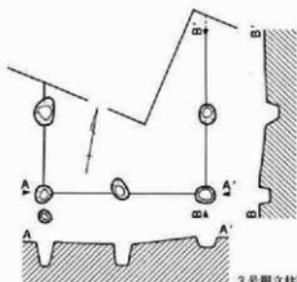
1号掘立柱建物



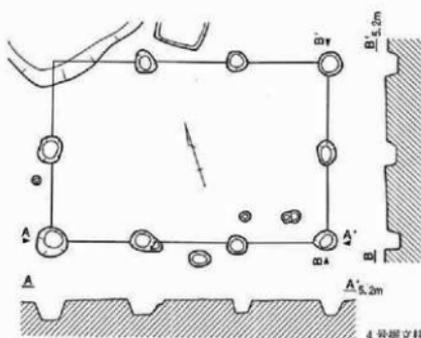
2号掘立柱建物



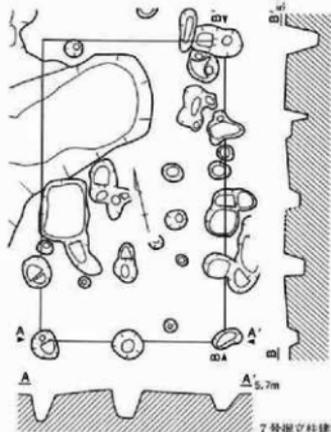
5号掘立柱建物



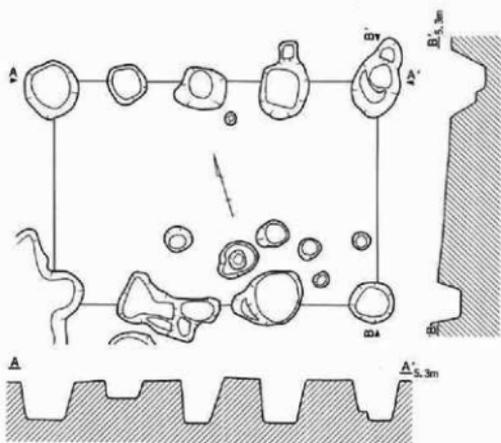
3号掘立柱建物



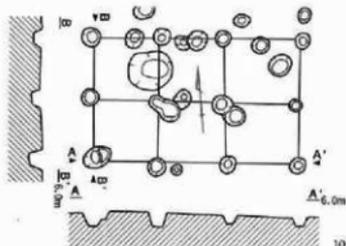
4号掘立柱建物



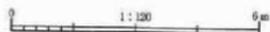
7号掘立柱建物

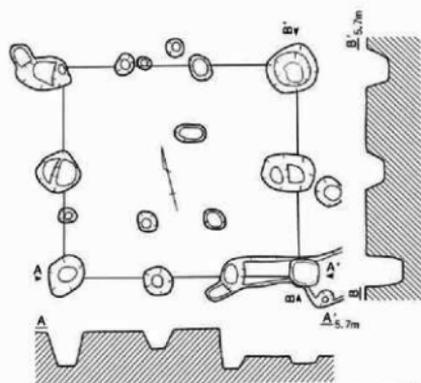


6号掘立柱建物

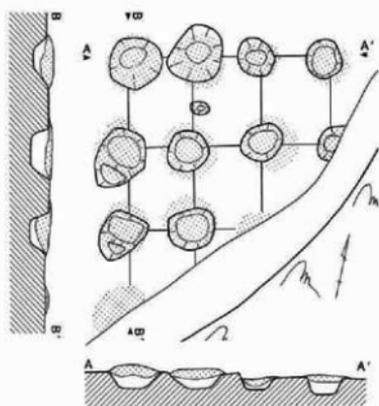


10号掘立柱建物

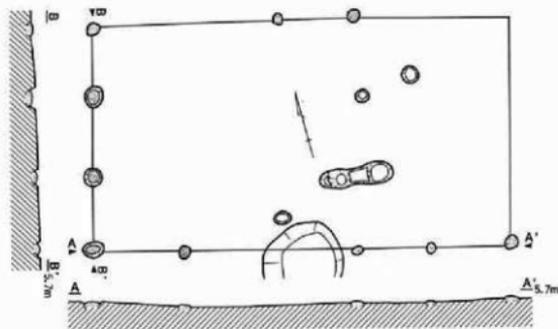




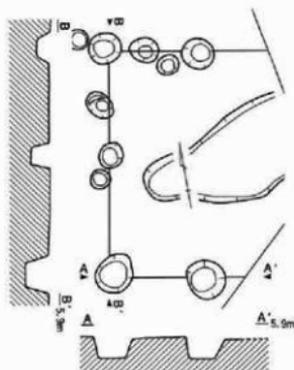
8号掘立柱建物



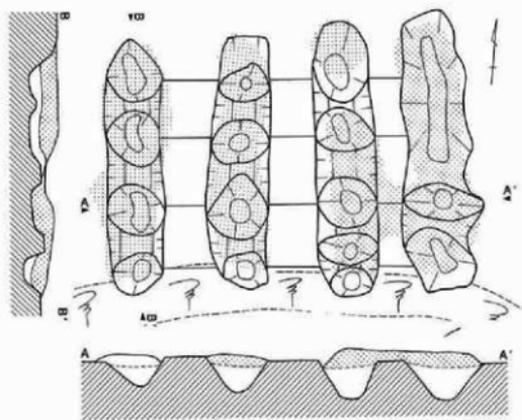
14号掘立柱建物



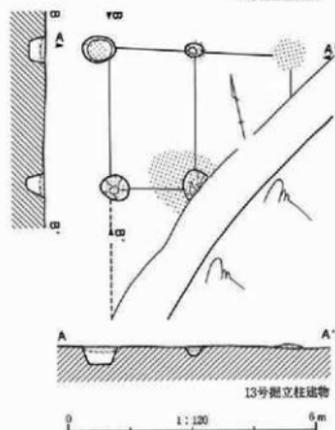
9号掘立柱建物



11号掘立柱建物

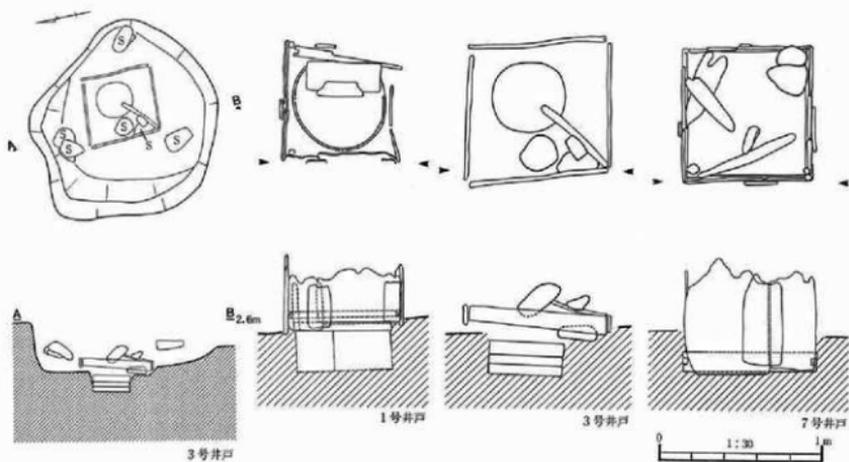
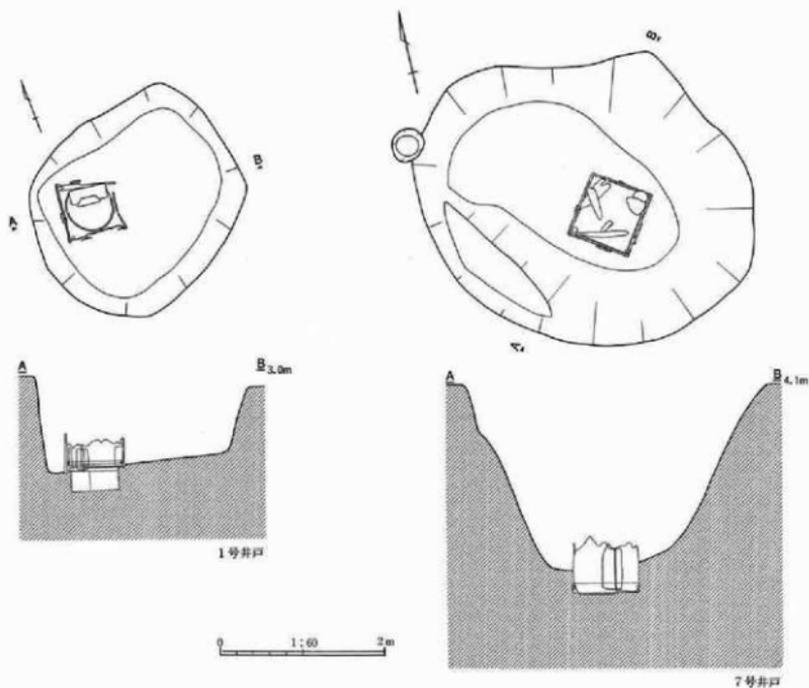


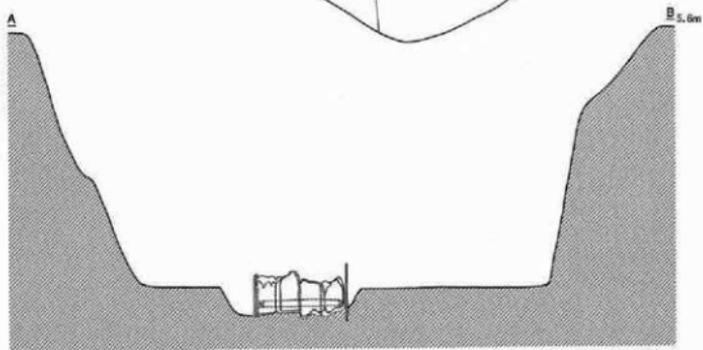
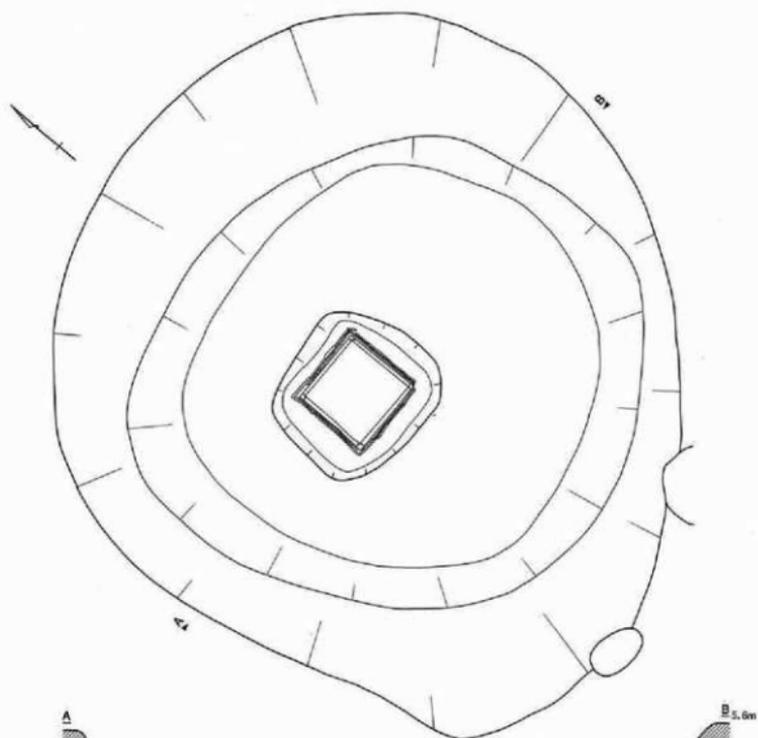
12号掘立柱建物



13号掘立柱建物

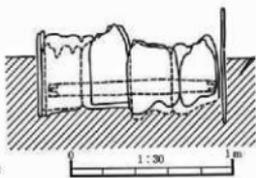
0 1:120 6m



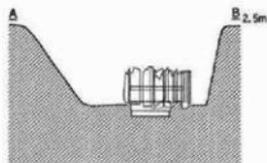
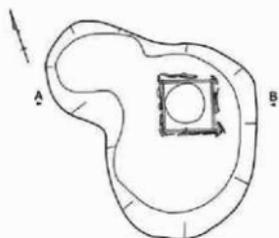


2号井戸

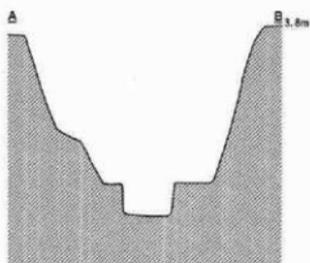
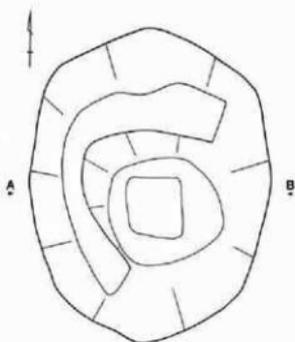
0 1:60 2m



0 1:30 1m



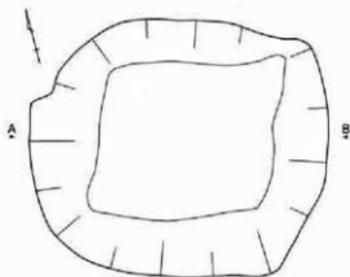
4号井戸



5号井戸



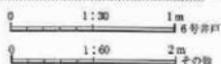
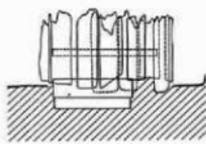
6号井戸

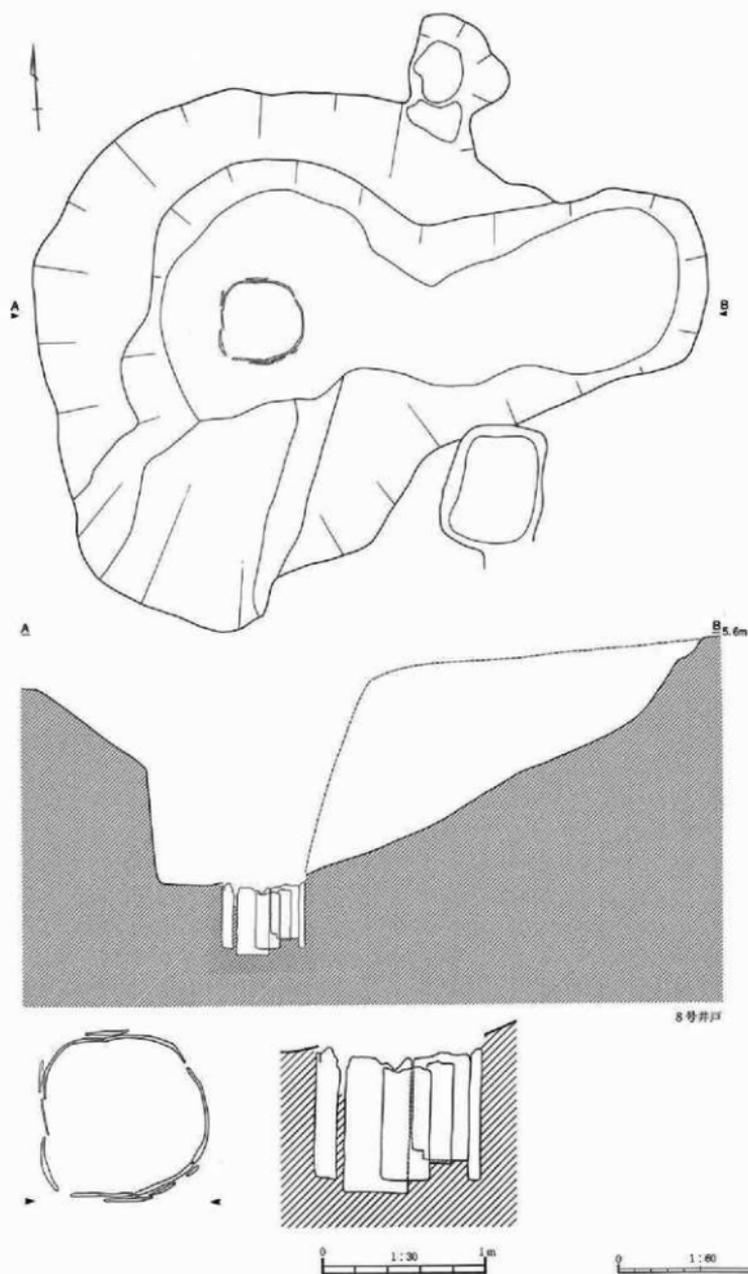


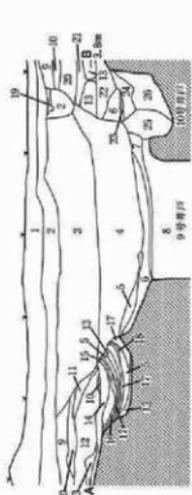
18号井戸



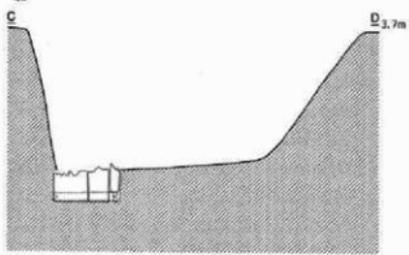
4号井戸枠



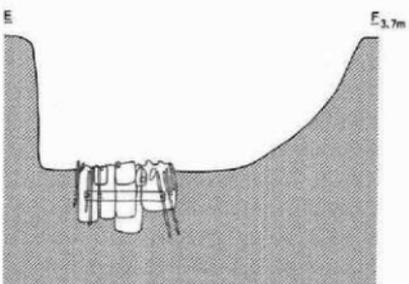




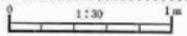
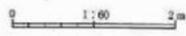
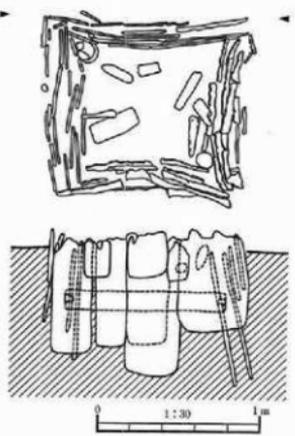
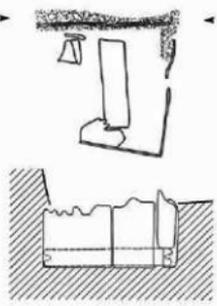
- | | | |
|--------------|----------------|----------------|
| 1 黒褐色 (粘土) | 11 赤褐色 (赤褐色土層) | 21 黒色砂 (砂層) |
| 2 黒褐色 (赤褐色) | 12 赤褐色 (赤褐色土層) | 22 赤褐色 (赤褐色土層) |
| 3 赤褐色 (赤褐色) | 13 赤褐色 (赤褐色土層) | 23 赤褐色 (赤褐色土層) |
| 4 赤褐色 (赤褐色) | 14 赤褐色 (赤褐色土層) | 24 赤褐色 (赤褐色土層) |
| 5 赤褐色 (赤褐色) | 15 赤褐色 (赤褐色土層) | 25 赤褐色 (赤褐色土層) |
| 6 赤褐色 (赤褐色) | 16 赤褐色 (赤褐色土層) | 26 赤褐色 (赤褐色土層) |
| 7 赤褐色 (赤褐色) | 17 赤褐色 (赤褐色土層) | 27 赤褐色 (赤褐色土層) |
| 8 赤褐色 (赤褐色) | 18 赤褐色 (赤褐色土層) | 28 赤褐色 (赤褐色土層) |
| 9 赤褐色 (赤褐色) | 19 赤褐色 (赤褐色土層) | 29 赤褐色 (赤褐色土層) |
| 10 赤褐色 (赤褐色) | 20 赤褐色 (赤褐色土層) | 30 赤褐色 (赤褐色土層) |
| 11 赤褐色 (赤褐色) | 21 赤褐色 (赤褐色土層) | 31 赤褐色 (赤褐色土層) |
| 12 赤褐色 (赤褐色) | 22 赤褐色 (赤褐色土層) | 32 赤褐色 (赤褐色土層) |
| 13 赤褐色 (赤褐色) | 23 赤褐色 (赤褐色土層) | 33 赤褐色 (赤褐色土層) |
| 14 赤褐色 (赤褐色) | 24 赤褐色 (赤褐色土層) | 34 赤褐色 (赤褐色土層) |
| 15 赤褐色 (赤褐色) | 25 赤褐色 (赤褐色土層) | 35 赤褐色 (赤褐色土層) |
| 16 赤褐色 (赤褐色) | 26 赤褐色 (赤褐色土層) | 36 赤褐色 (赤褐色土層) |

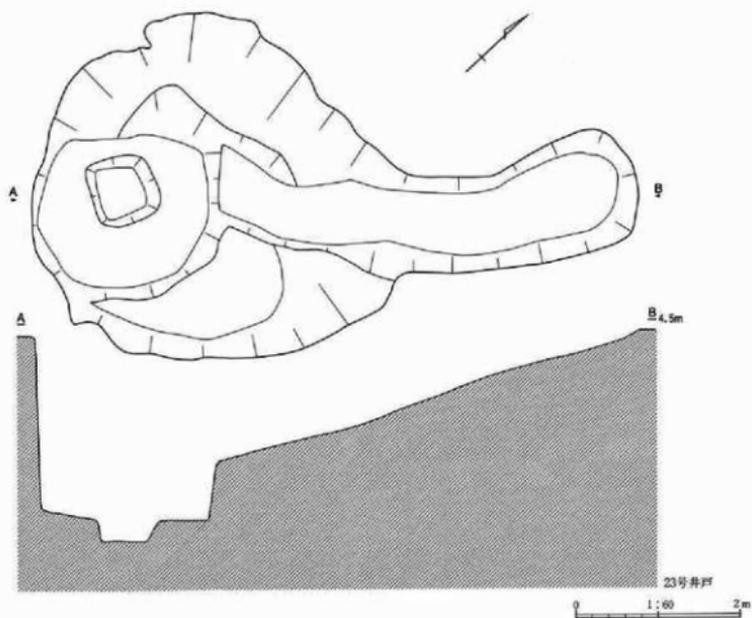
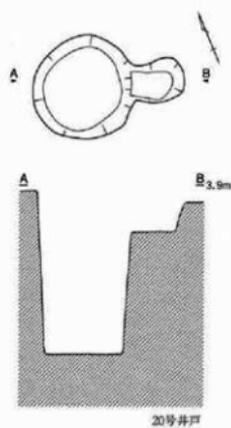
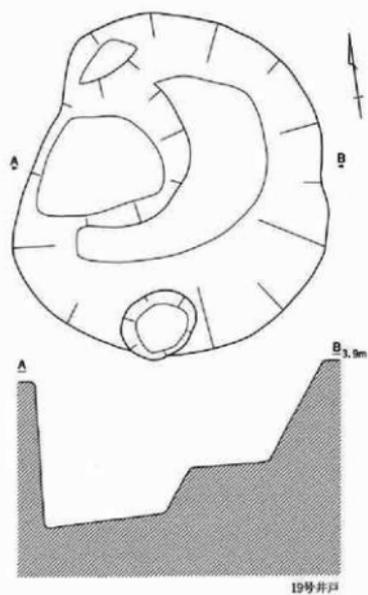


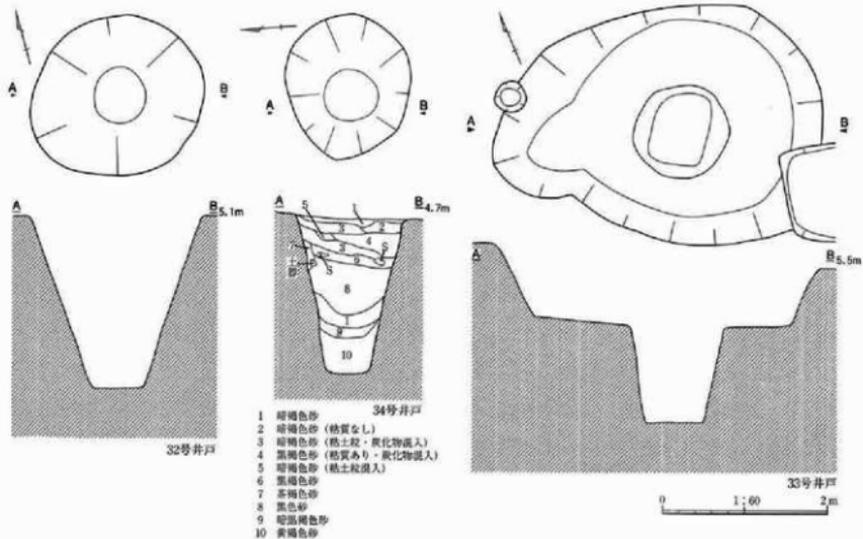
10号井戸



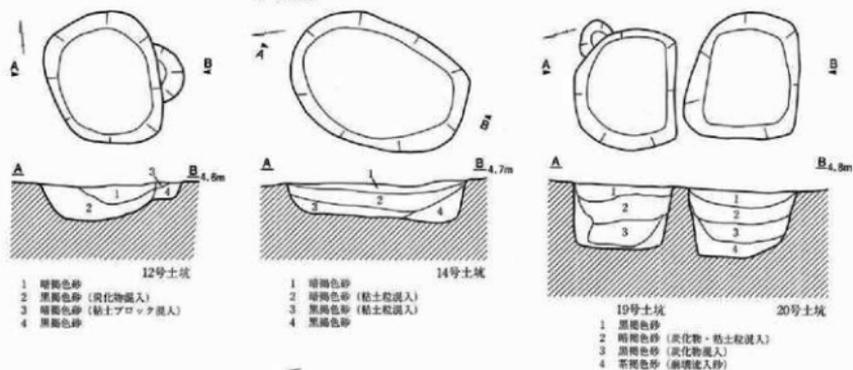
9号井戸







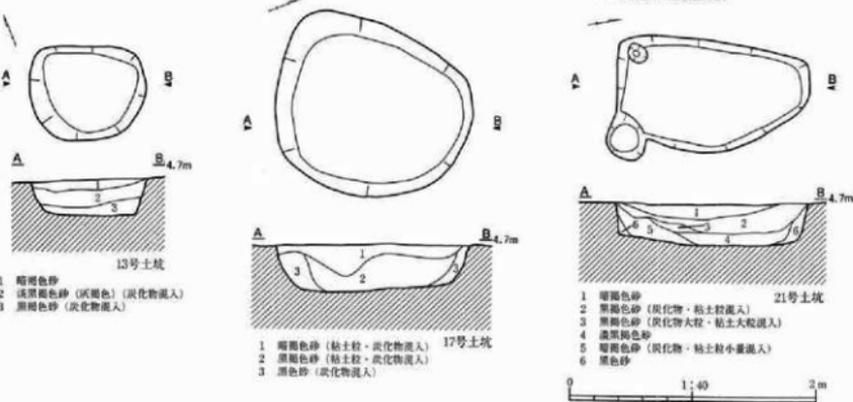
- 1 暗褐色砂
- 2 暗褐色砂 (粘質をL)
- 3 暗褐色砂 (粘土粒・炭化物混入)
- 4 黒褐色砂 (粘質をL)・炭化物混入)
- 5 暗褐色砂 (粘土粒混入)
- 6 黒褐色砂
- 7 茶褐色砂
- 8 黒色砂
- 9 暗褐色砂
- 10 黒褐色砂



- 1 暗褐色砂
- 2 黒褐色砂 (炭化物混入)
- 3 暗褐色砂 (粘土ブロック混入)
- 4 黒褐色砂

- 1 暗褐色砂
- 2 暗褐色砂 (粘土粒混入)
- 3 黒褐色砂 (粘土粒混入)
- 4 黒褐色砂

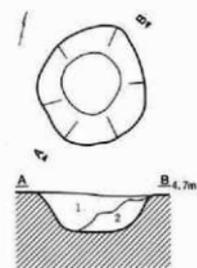
- 1 黒褐色砂
- 2 暗褐色砂 (炭化物・粘土粒混入)
- 3 暗褐色砂 (炭化物混入)
- 4 茶褐色砂 (崩壊混入砂)



- 1 暗褐色砂
- 2 淡黒褐色砂 (炭褐色) (炭化物混入)
- 3 黒褐色砂 (炭化物混入)

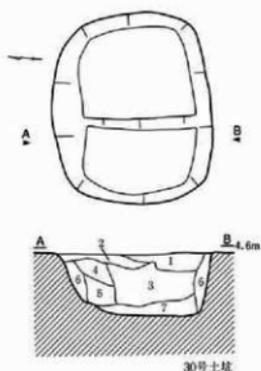
- 1 暗褐色砂 (粘土粒・炭化物混入)
- 2 黒褐色砂 (粘土粒・炭化物混入)
- 3 黒色砂 (炭化物混入)

- 1 暗褐色砂
- 2 黒褐色砂 (炭化物・粘土粒混入)
- 3 黒褐色砂 (炭化物大粒・粘土大粒混入)
- 4 濃黒褐色砂
- 5 暗褐色砂 (炭化物・粘土粒少量混入)
- 6 黒色砂



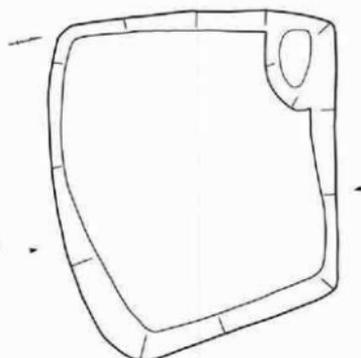
22号土坑

- 1 灰黑色砂 (炭化物・粘土粒混入)
- 2 黒色砂 (粘土粒混入)



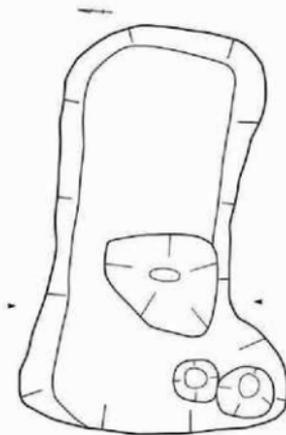
30号土坑

- 1 暗褐色砂 (炭化物混入)
- 2 暗褐色砂 (炭化物混入)
- 3 暗褐色砂 (粘土粒・炭化物混入)
- 4 黒褐色砂
- 5 茶褐色砂
- 6 暗褐色砂 (炭化物混入)
- 7 黒褐色砂 (炭化物混入)



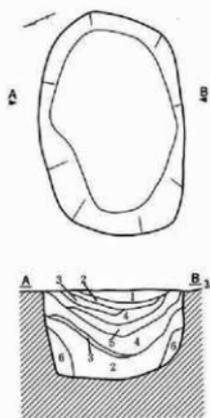
78号土坑

- 1 暗褐色砂



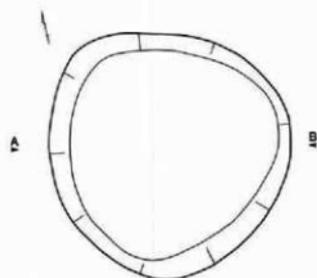
68号土坑

- 1 暗褐色砂
- 2 褐色砂
- 3 白色砂
- 4 暗白色砂
- 5 白色砂



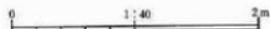
142号土坑

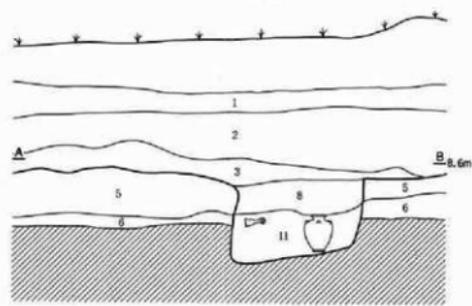
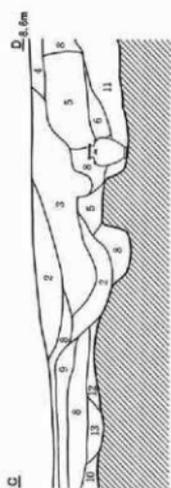
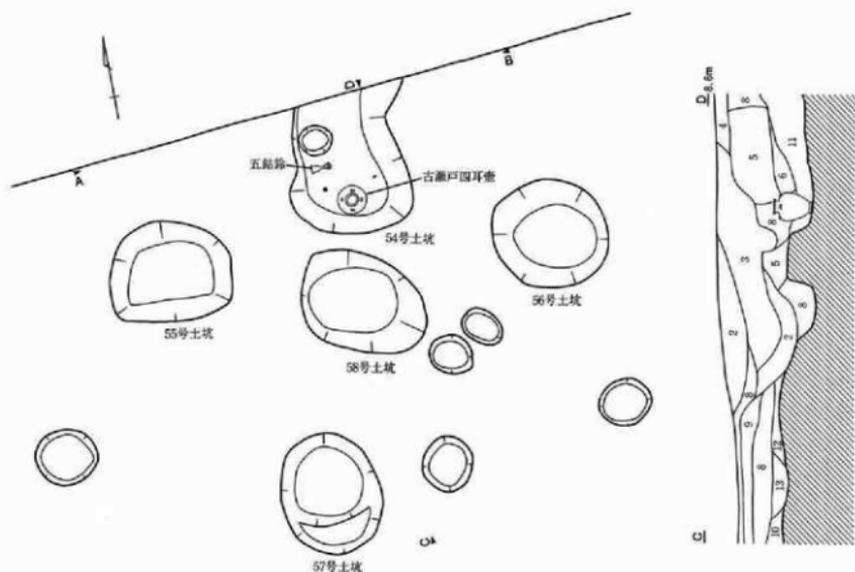
- 1 暗褐色砂 (炭化物混入)
- 2 暗褐色砂 (炭化物混入)
- 3 黒色砂 (炭化物混入)
- 4 暗褐色砂
- 5 茶褐色砂
- 6 黄色砂 (空堀砂)



144号土坑

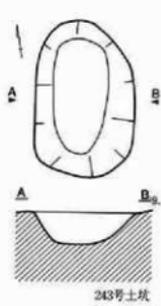
- 1 灰黑色砂 (粘土粒混入)
- 2 暗褐色砂
- 3 暗褐色砂 (粘土粒混入)
- 4 黄褐色土
- 5 原褐色砂
- 6 黒褐色砂 (炭化物混入)
- 7 茶褐色砂
- 8 暗茶褐色砂 (粘質あり)



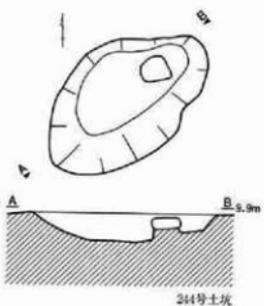


- 1 暗褐色砂 (表土)
- 2 栗褐色砂
- 3 茶色砂 (斑点状に暗褐色砂ブロッカあり)
- 4 黄砂
- 5 黒色砂
- 6 黄褐色砂 (地山崩落層)
- 7 黄褐色砂 (地山)
- 8 暗褐色砂
- 9 茶褐色砂 (炭化物混入)
- 10 暗褐色砂
- 11 灰黄褐色砂
- 12 暗黒褐色砂
- 13 暗茶褐色砂

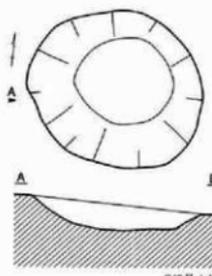
54号土坑



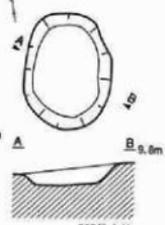
243号土坑



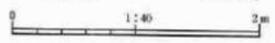
244号土坑

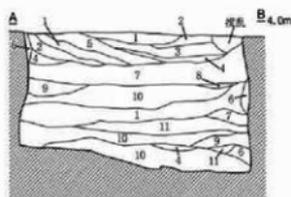
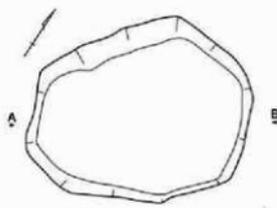


245号土坑



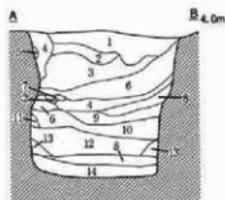
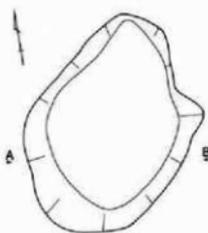
555号土坑





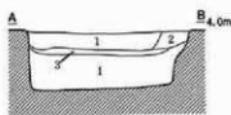
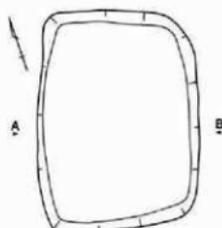
143号土坑

- 1 黒褐色砂 (灰化物混入)
- 2 暗褐色砂
- 3 暗黒褐色砂
- 4 茶色砂
- 5 暗褐色砂 (粘土粒混入)
- 6 灰色砂 (壁面硬砂)
- 7 黒褐色砂 (灰化物混入)
- 8 黄色砂
- 9 灰青色砂
- 10 暗褐色砂 (灰化物・黄色砂・黒褐色砂各ブロック状混入)
- 11 暗茶褐色砂



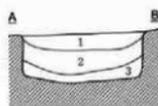
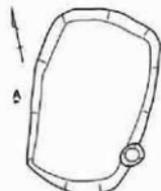
145号土坑

- 1 暗褐色砂 (灰化物混入)
- 2 茶褐色砂
- 3 暗褐色砂
- 4 黒褐色砂
- 5 黄褐色砂 (壁面硬砂)
- 6 茶褐色砂 (粘質あり)
- 7 暗褐色砂 (粘質あり)
- 8 褐色砂 (粘土は粘質なし)
- 9 黒色砂 (しま状に黄色砂混入)
- 10 茶褐色砂 (しま状に黄色砂混入)
- 11 暗褐色砂 (壁面硬砂)
- 12 灰青色砂 (しま状に黄色砂混入)
- 13 黒褐色砂 (粘質あり)
- 14 灰褐色砂 (粘質あり)



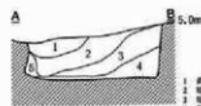
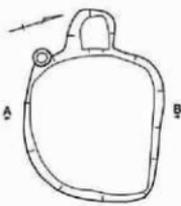
150号土坑

- 1 暗褐色砂 (粘土粒・灰化物混入)
- 2 暗褐色砂
- 3 黒褐色砂 (白色有機物のしま文様あり)



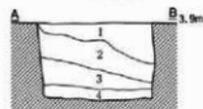
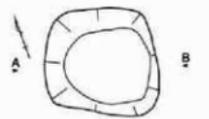
266号土坑

- 1 暗褐色砂
- 2 灰褐色砂
- 3 茶褐色砂



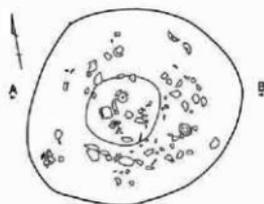
268号土坑

- 1 暗褐色砂 (白色有機物のしま文様あり)
- 2 暗褐色砂 (灰化物混入)
- 3 茶褐色砂 (灰化物・黄色砂・黒褐色砂各ブロック状混入)
- 4 暗褐色砂
- 5 黒褐色砂 (黄色砂混入)

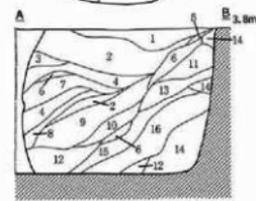
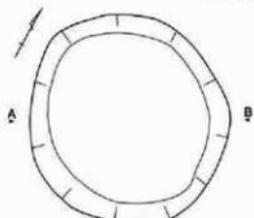


284号土坑

- 1 黒褐色砂 (灰化物混入)
- 2 暗褐色砂 (灰化物混入)
- 3 黄褐色砂
- 4 暗褐色砂



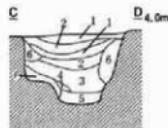
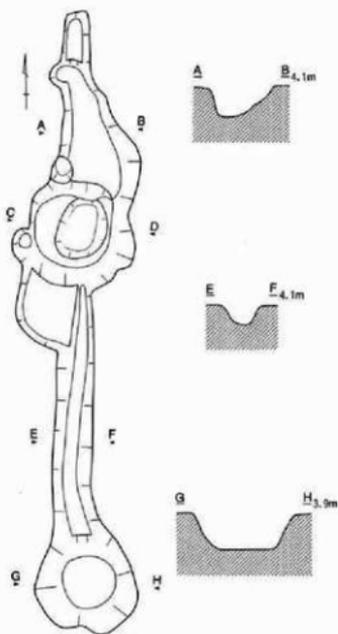
519号土坑



664号土坑

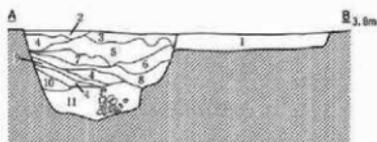
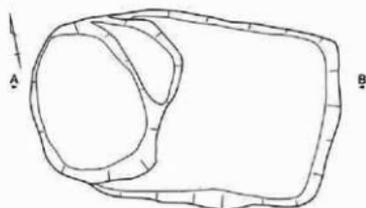
- 1 暗褐色砂 (灰化物混入)
- 2 暗褐色砂 (灰化物混入)
- 3 暗褐色砂 (灰化物・黄色砂・黒褐色砂各ブロック状混入)
- 4 暗褐色砂 (壁面硬砂)
- 5 暗褐色砂 (粘質あり・灰色砂のしま文様あり)
- 6 暗褐色砂 (灰質あり・茶褐色砂のしま文様あり)
- 7 暗褐色砂 (灰質あり・茶褐色砂のしま文様あり)
- 8 暗褐色砂 (灰質あり・茶褐色砂のしま文様あり)
- 9 暗褐色砂 (灰質あり・茶褐色砂のしま文様あり)
- 10 暗褐色砂 (灰質あり・茶褐色砂のしま文様あり)
- 11 暗褐色砂 (灰質あり・茶褐色砂のしま文様あり)
- 12 暗褐色砂 (灰質あり・茶褐色砂のしま文様あり)
- 13 暗褐色砂 (灰質あり・茶褐色砂のしま文様あり)
- 14 暗褐色砂 (灰質あり・茶褐色砂のしま文様あり)
- 15 暗褐色砂 (灰質あり・茶褐色砂のしま文様あり)
- 16 暗褐色砂 (灰質あり・茶褐色砂のしま文様あり)

0 1:60 2m



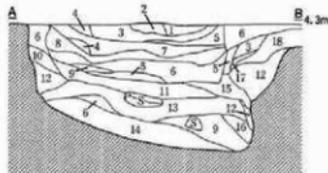
663号土坑

- 1 黒褐色砂 (炭化物混入)
- 2 黒色砂 (炭化物混入)
- 3 暗褐色砂 (炭化物混入、黒色しま文様あり)
- 4 暗褐色砂 (粒子大、壘層積砂)
- 5 赤褐色砂 (炭化物・焼砂混入)
- 6 灰褐色 (壘層積砂)



665号土坑

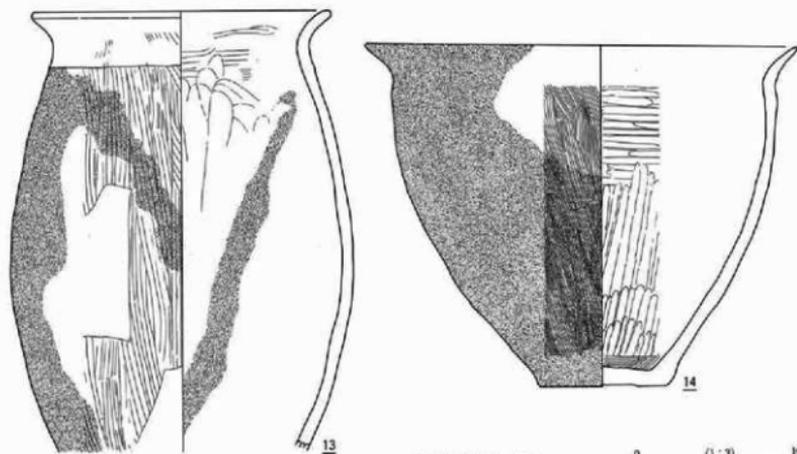
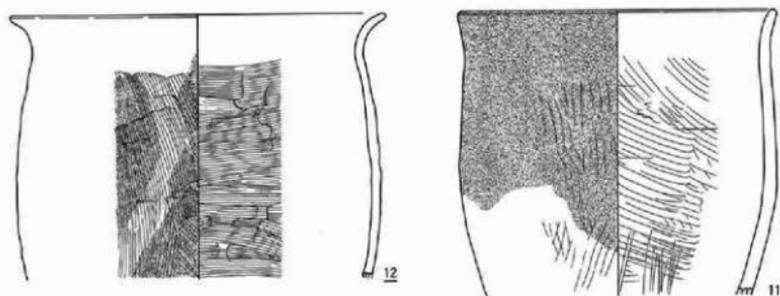
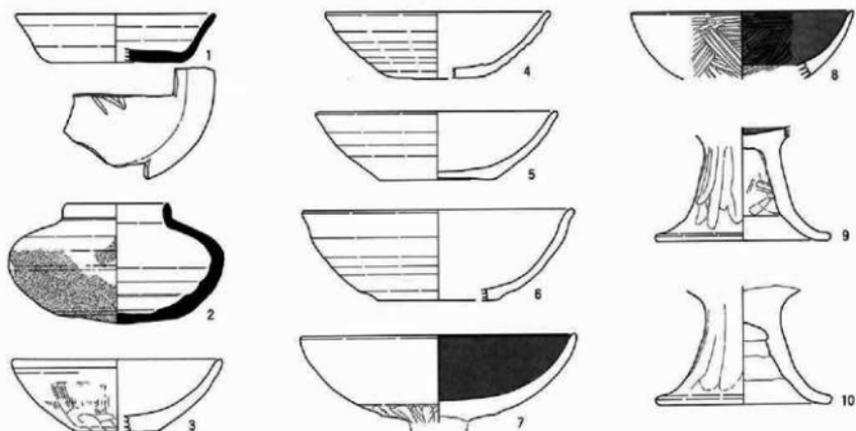
- 1 暗茶褐色砂 (粘質なし、炭化物混入)
- 2 暗茶褐色砂
- 3 茶褐色砂
- 4 暗褐色砂
- 5 黒褐色砂 (炭化物混入)
- 6 青黒色砂 (炭化物混入)
- 7 黒色砂
- 8 黒色砂 (炭化物混入)
- 9 黒色砂
- 10 黄褐色砂 (壘層積砂)
- 11 茶褐色砂 (粘質あり)



666号土坑

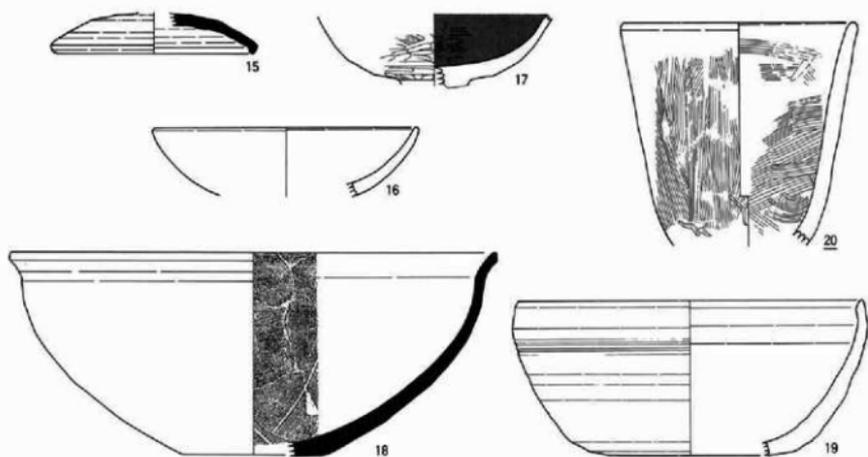
- 1 黄色砂
- 2 黄褐色砂
- 3 黄褐色砂
- 4 黒色砂 (炭化物混入)
- 5 暗褐色砂
- 6 灰褐色砂
- 7 黒褐色砂 (黄白色粘土ブロッコ混入)
- 8 乳白色砂 (黄白色粘土粒混入)
- 9 灰褐色砂 (炭化物混入)
- 10 灰褐色砂 (黄白色粘土粒混入)
- 11 灰褐色砂 (炭化物・黄白色粘土粒混入)
- 12 茶褐色砂
- 13 茶褐色砂 (炭化物しま文様あり)
- 14 暗灰褐色砂
- 15 灰褐色砂 (炭化物微粒混入)
- 16 灰褐色砂
- 17 暗茶褐色砂
- 18 黒色砂



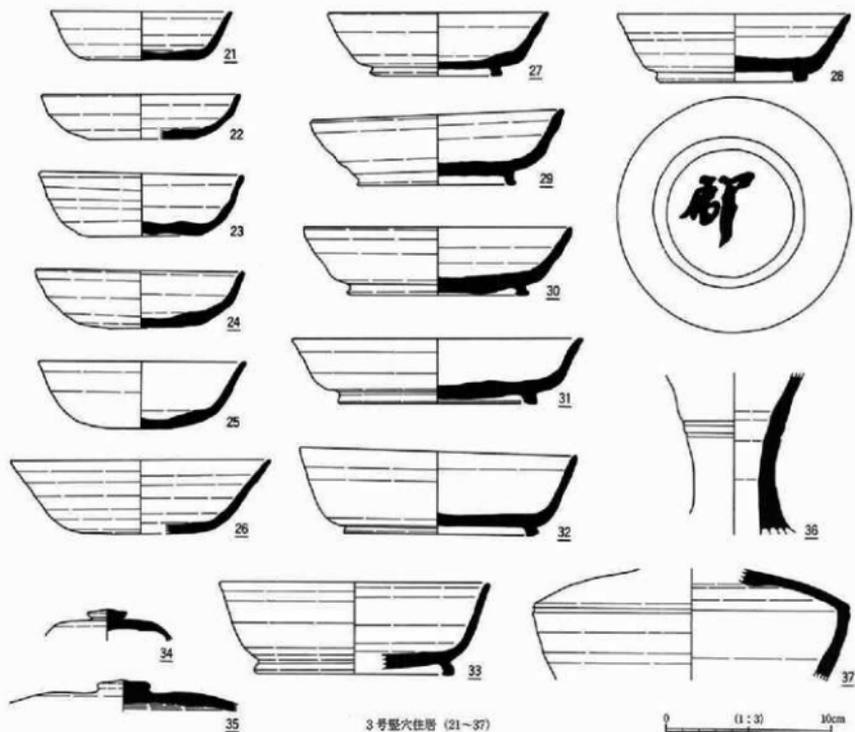


1号竖穴住居 (1~14)

0 1:3 10cm

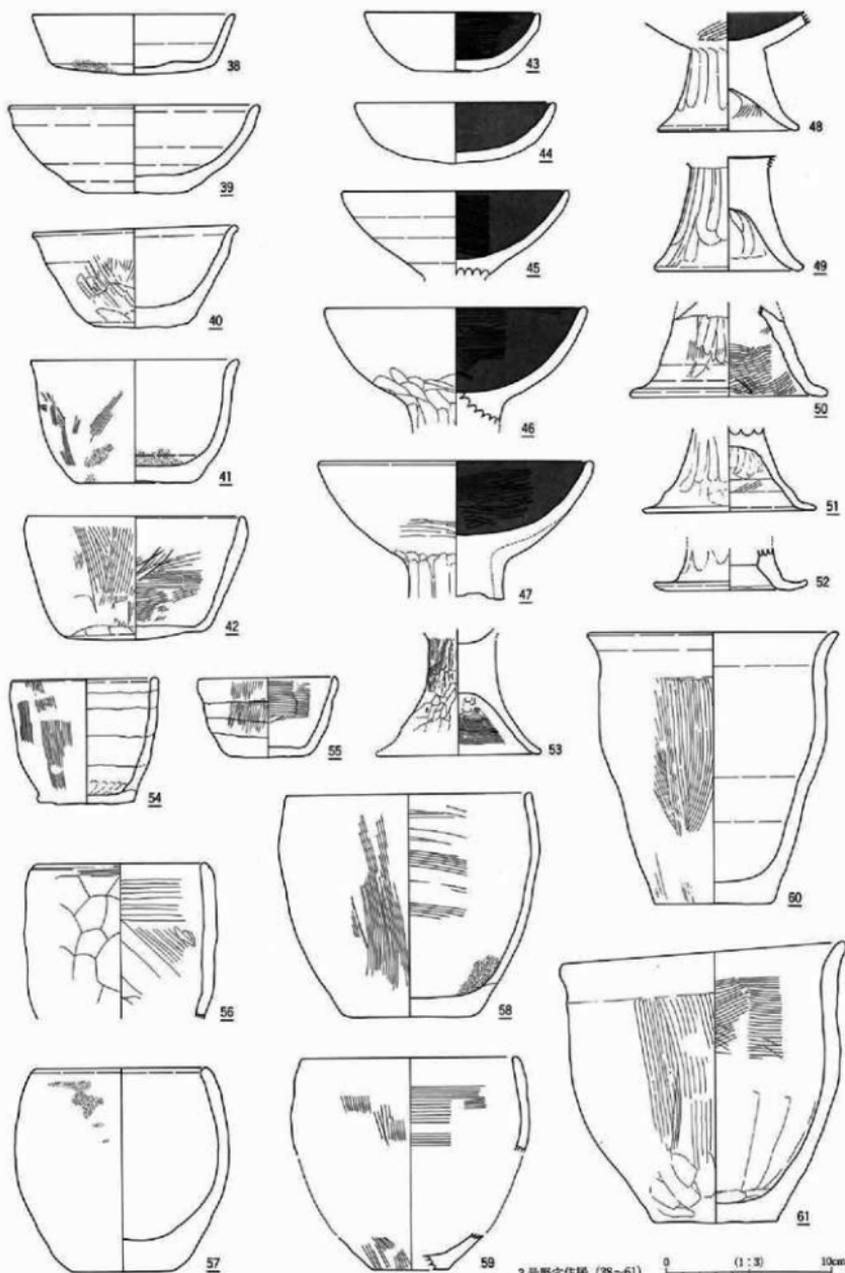


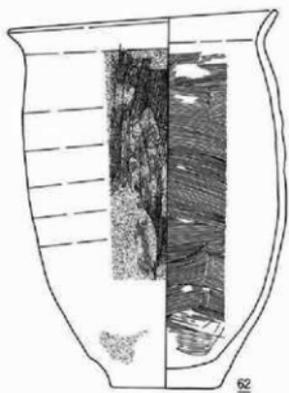
2号竖穴住居 (15~20)



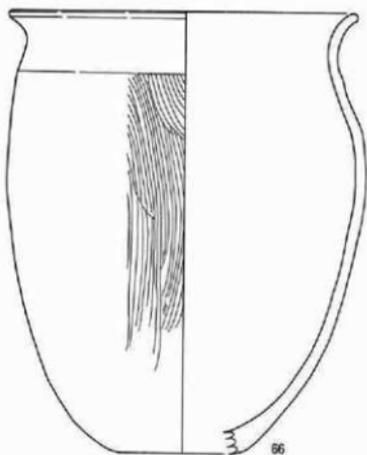
3号竖穴住居 (21~37)

0 (1:3) 10cm

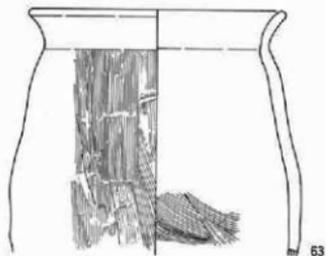




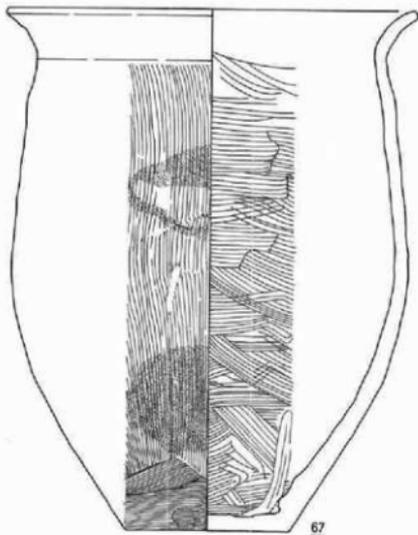
62



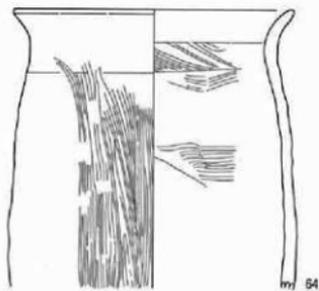
66



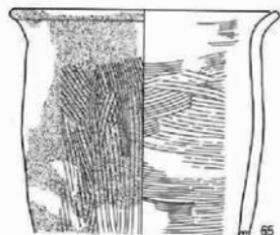
63



67



64



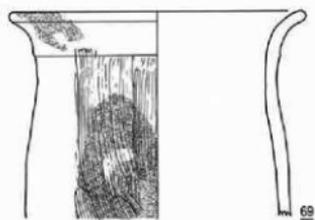
65



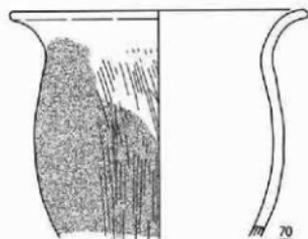
68

3号竖穴住居 (62~68)

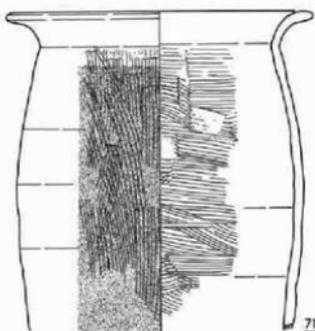
0 (1:3) 10cm



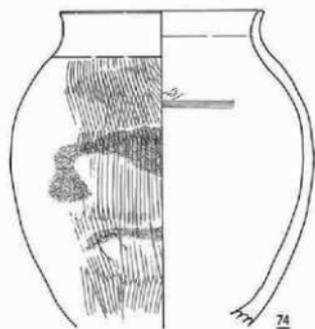
69



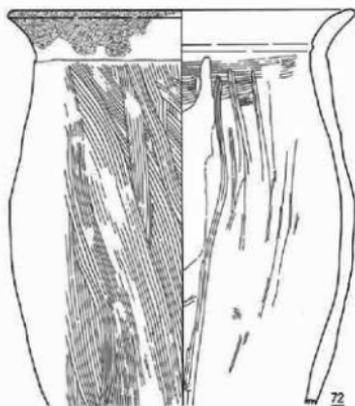
70



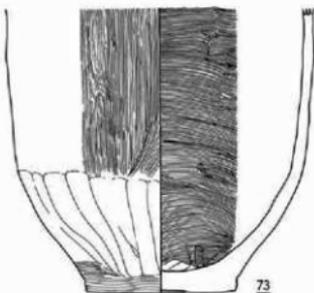
71



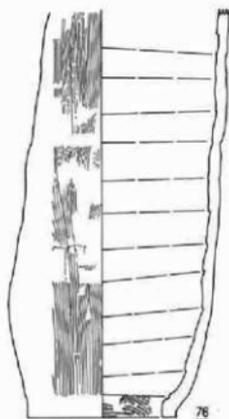
74



72



73

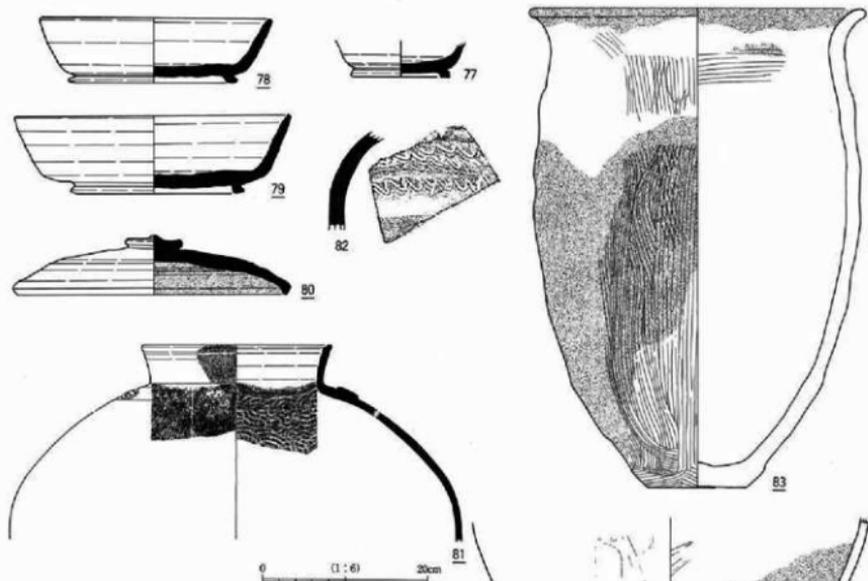


76



75

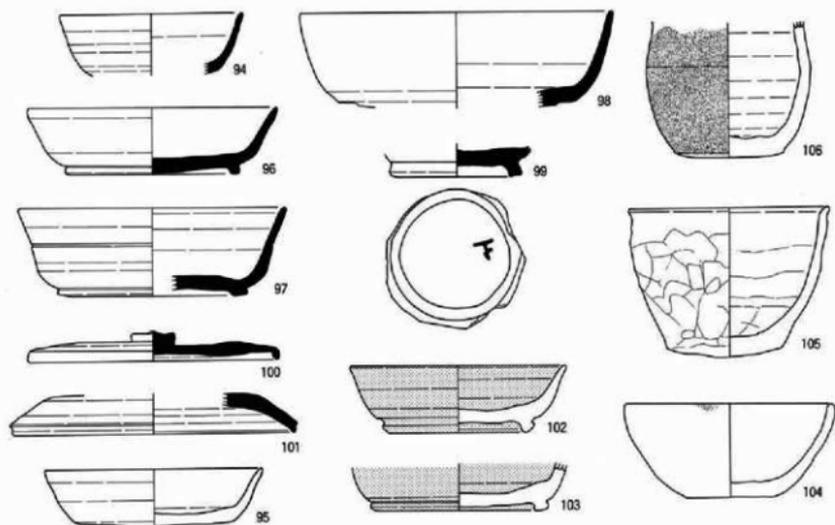
0 (1:3) 10cm



4号墓穴住居 (77~84)

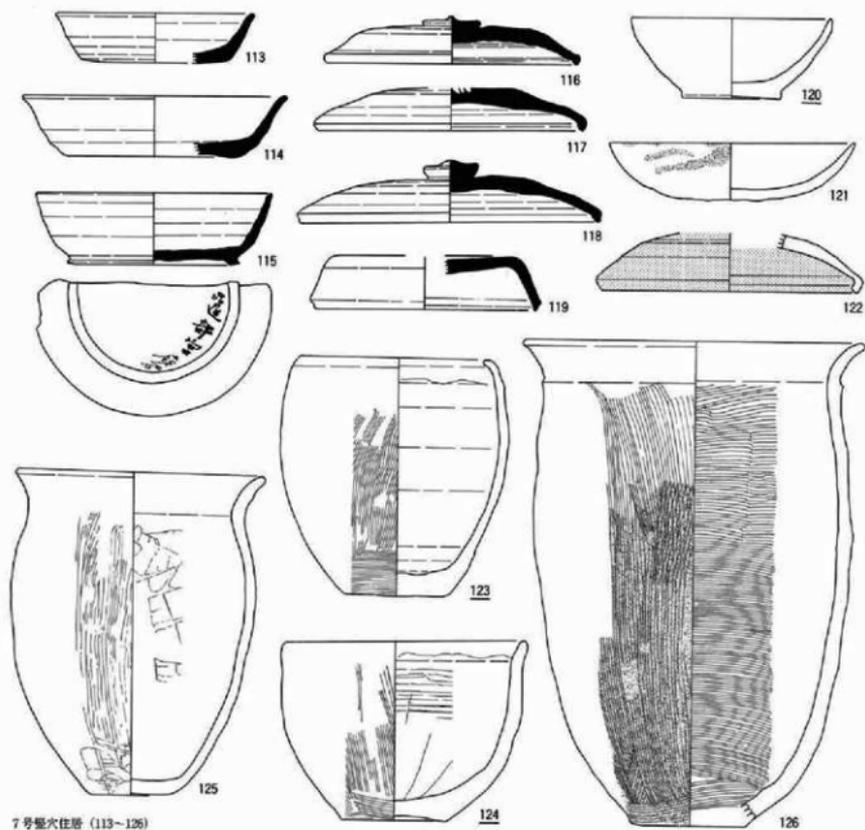


5号墓穴住居 (85~93)



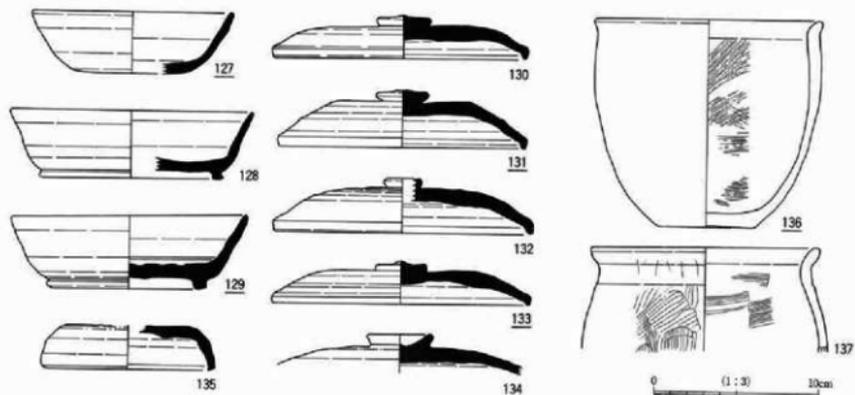
6号窑穴住居 (94~112)

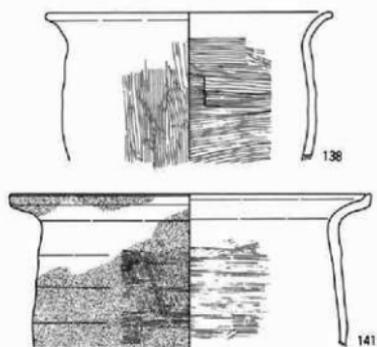
0 (1:3) 10cm



7号竖穴住居 (113~126)

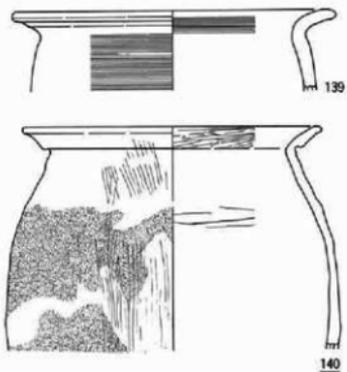
8号竖穴住居 (127~137)





138

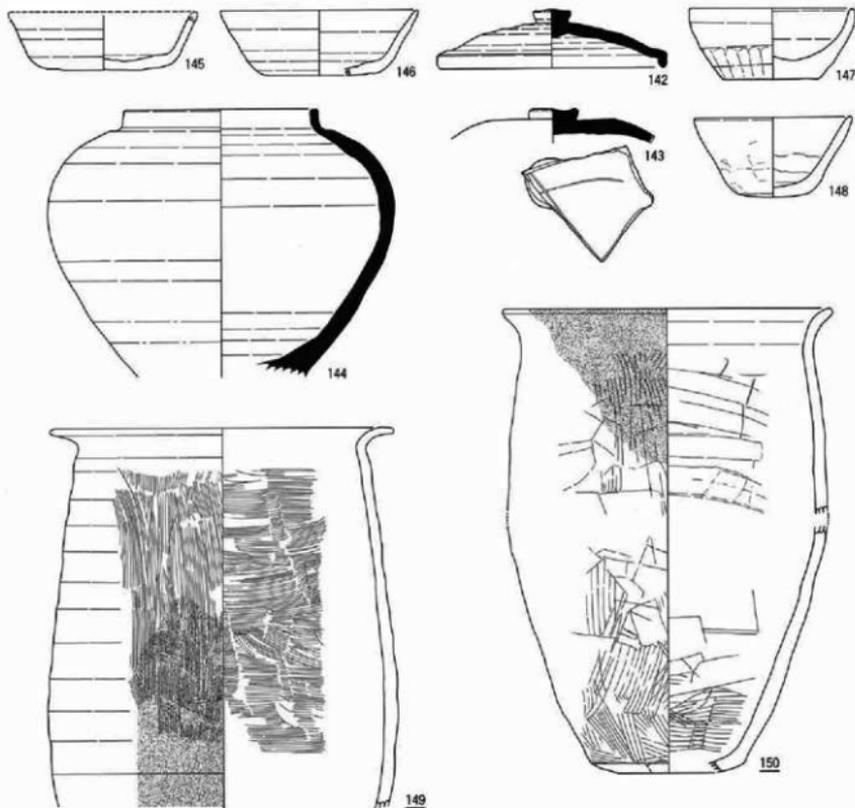
141



139

140

8号竖穴住居 (138~141)



145

146

142

147

143

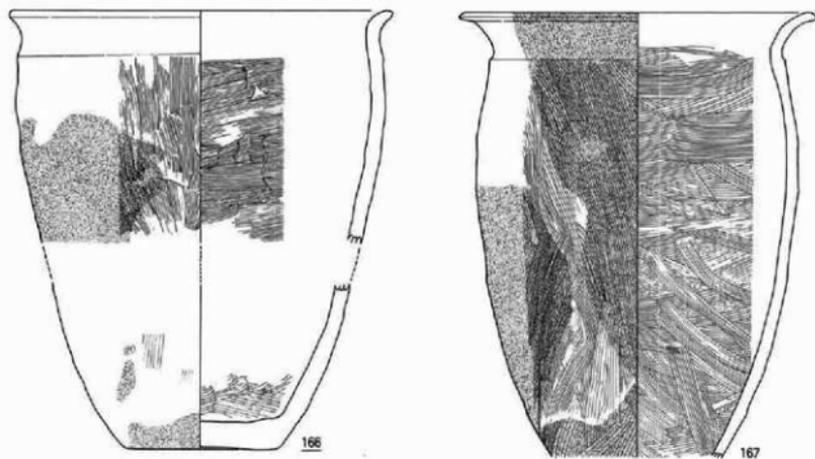
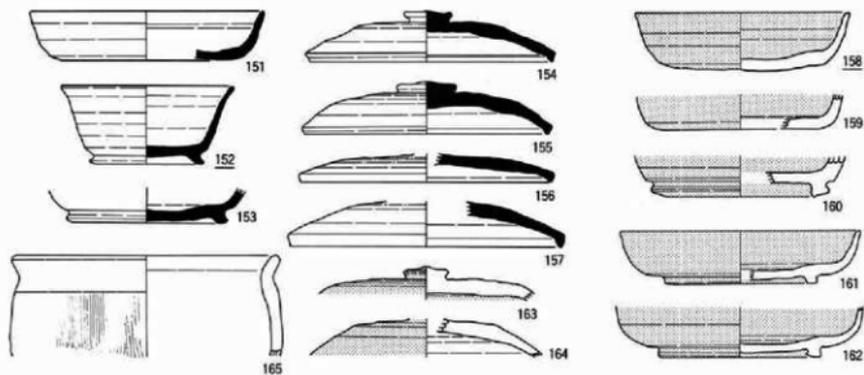
148

144

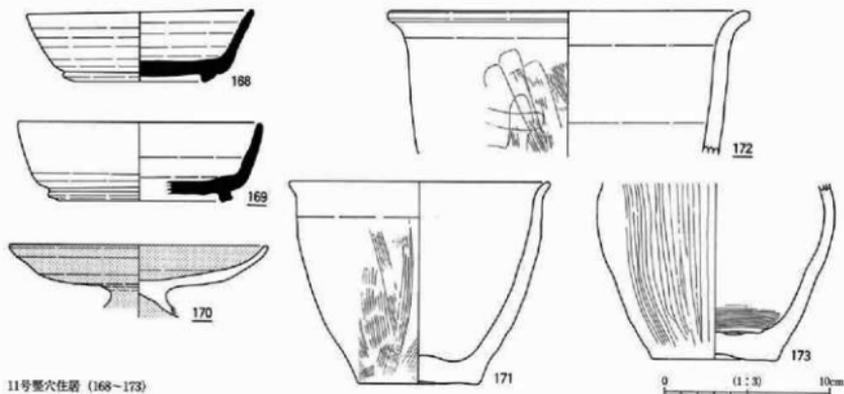
149

9号竖穴住居 (142~150)

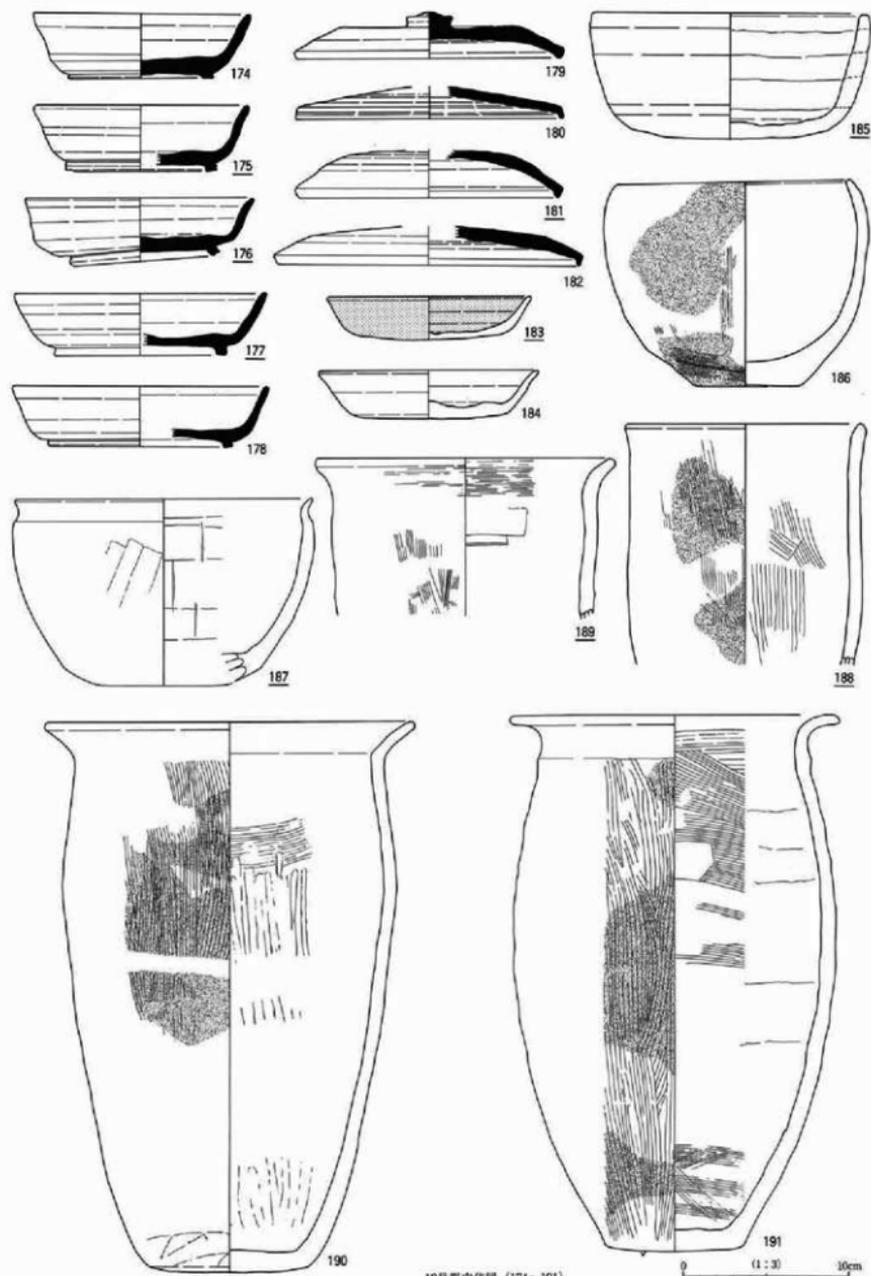
0 (1:3) 10cm



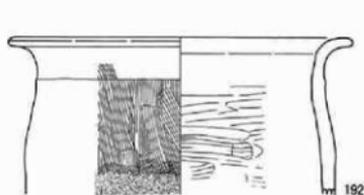
10号竖穴住居 (151~167)



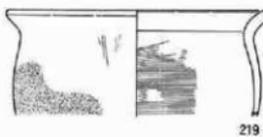
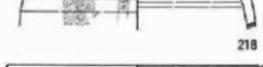
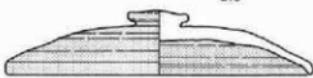
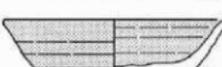
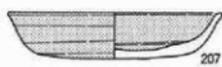
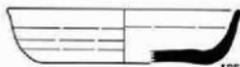
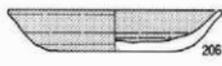
11号竖穴住居 (168~173)



12号墓穴住居 (174~191)



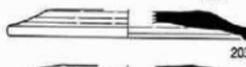
12号竖穴住居 (192 - 193)



201



202



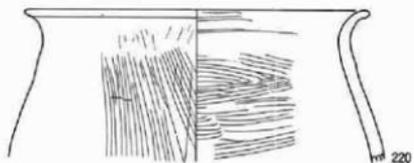
203



204



205

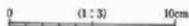


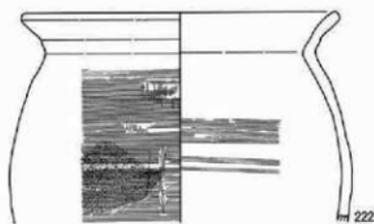
220



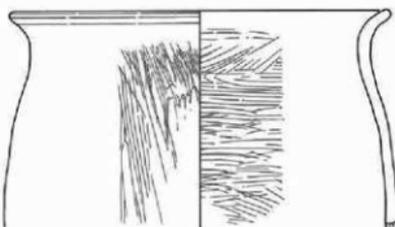
221

519号土坑 (194 ~ 221)

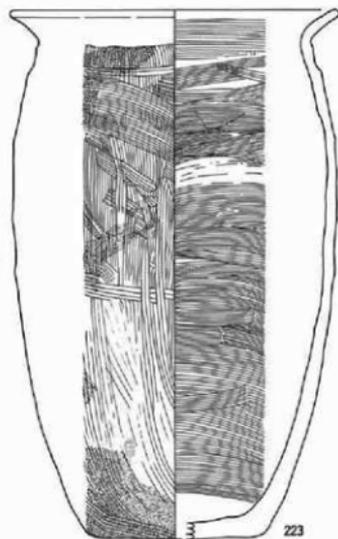




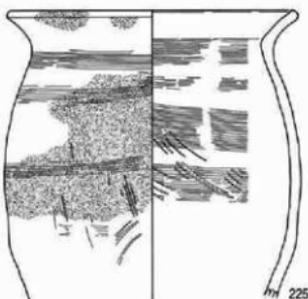
222



224



223



225



226

519号土坑 (222~226)

19号井戸



227

343号土坑



228

78号土坑



229

34号井戸



230

17号溝



231

330号土坑



234



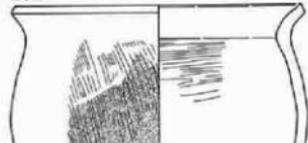
232

537号土坑



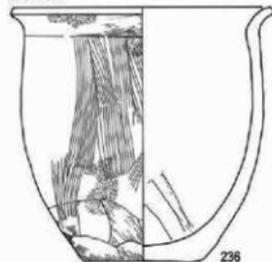
233

18号溝



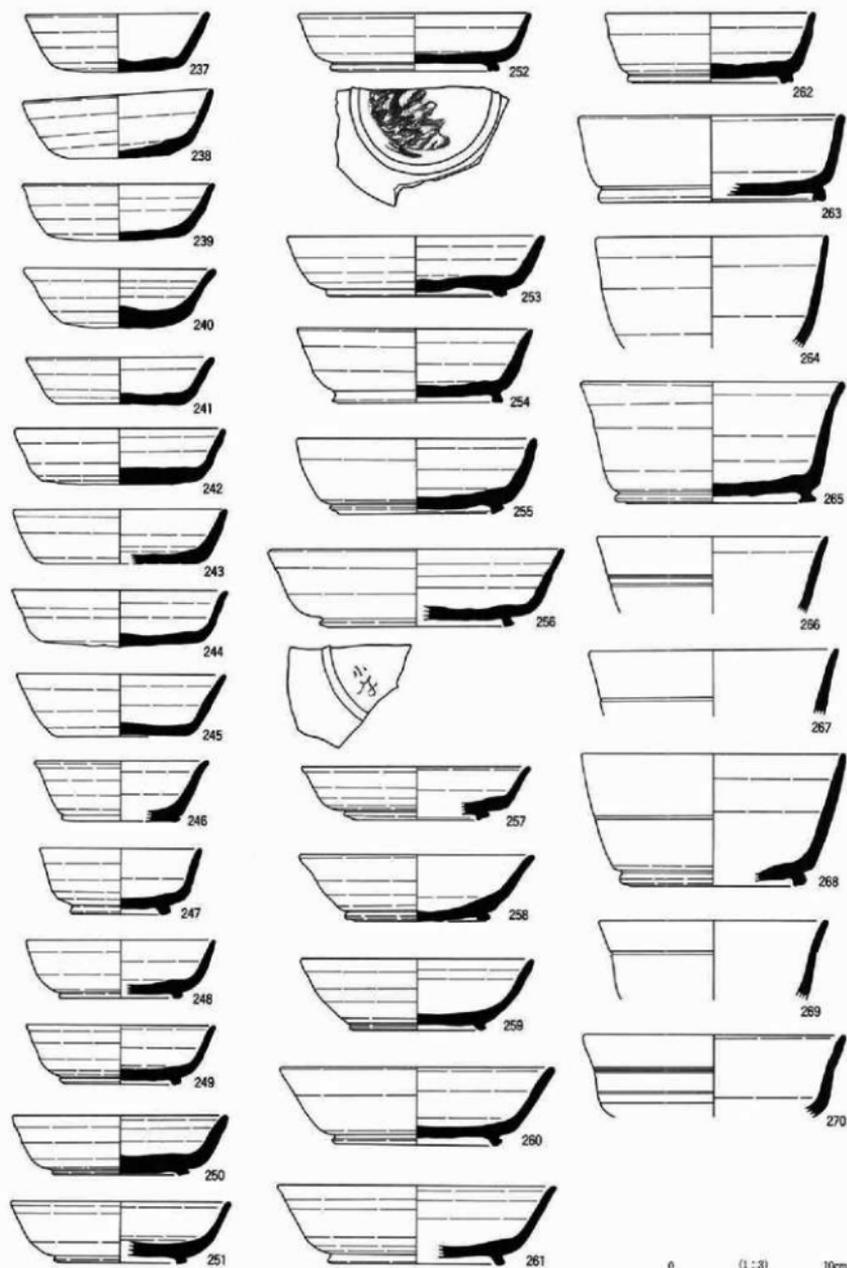
235

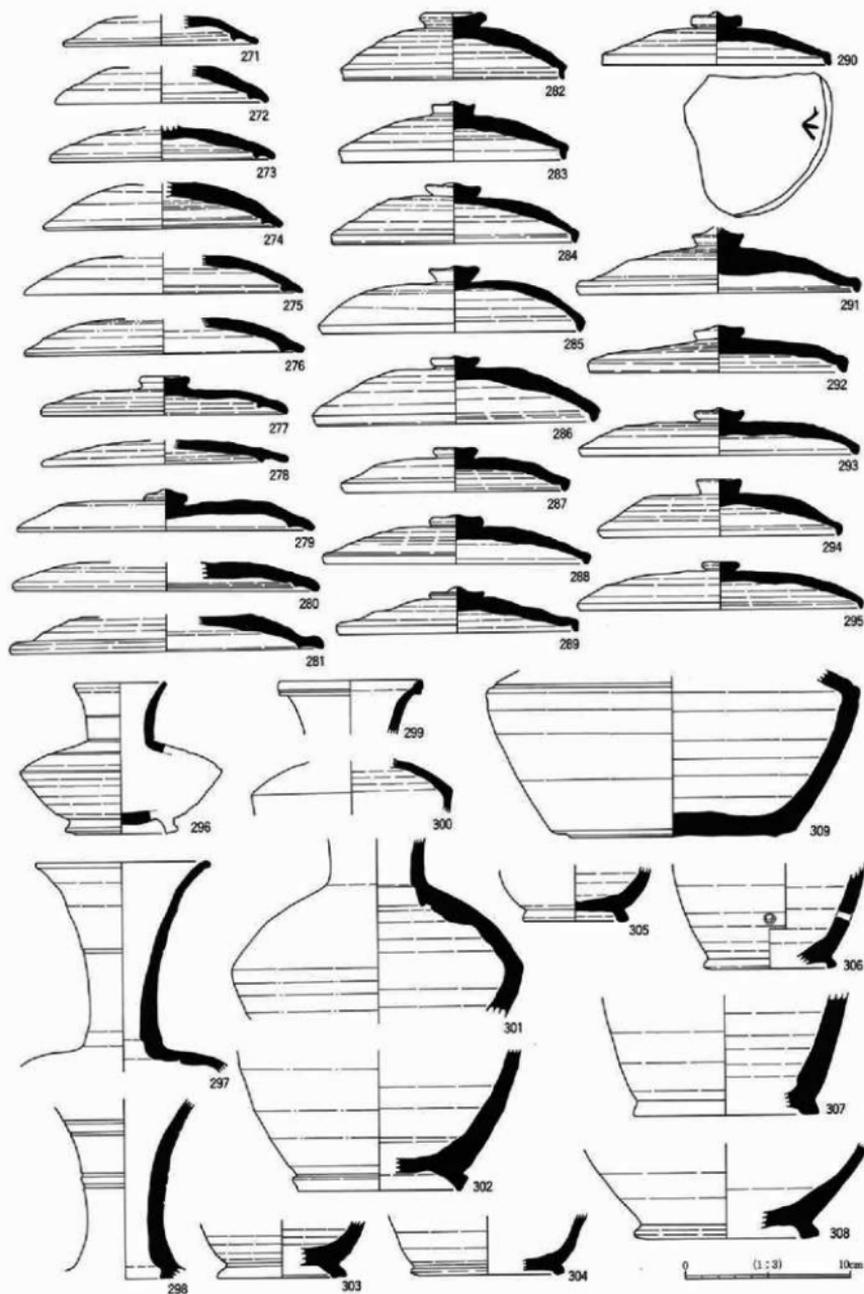
162号土坑

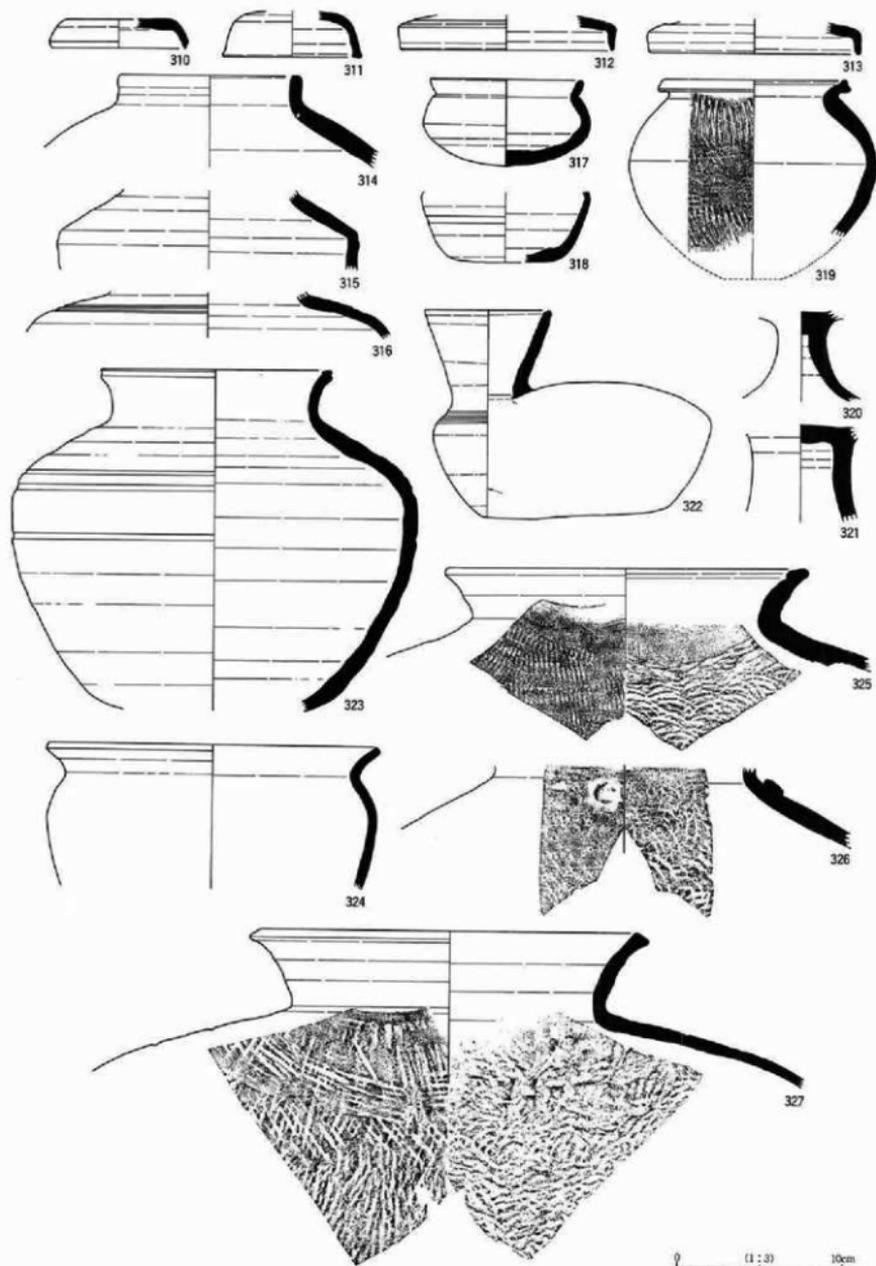


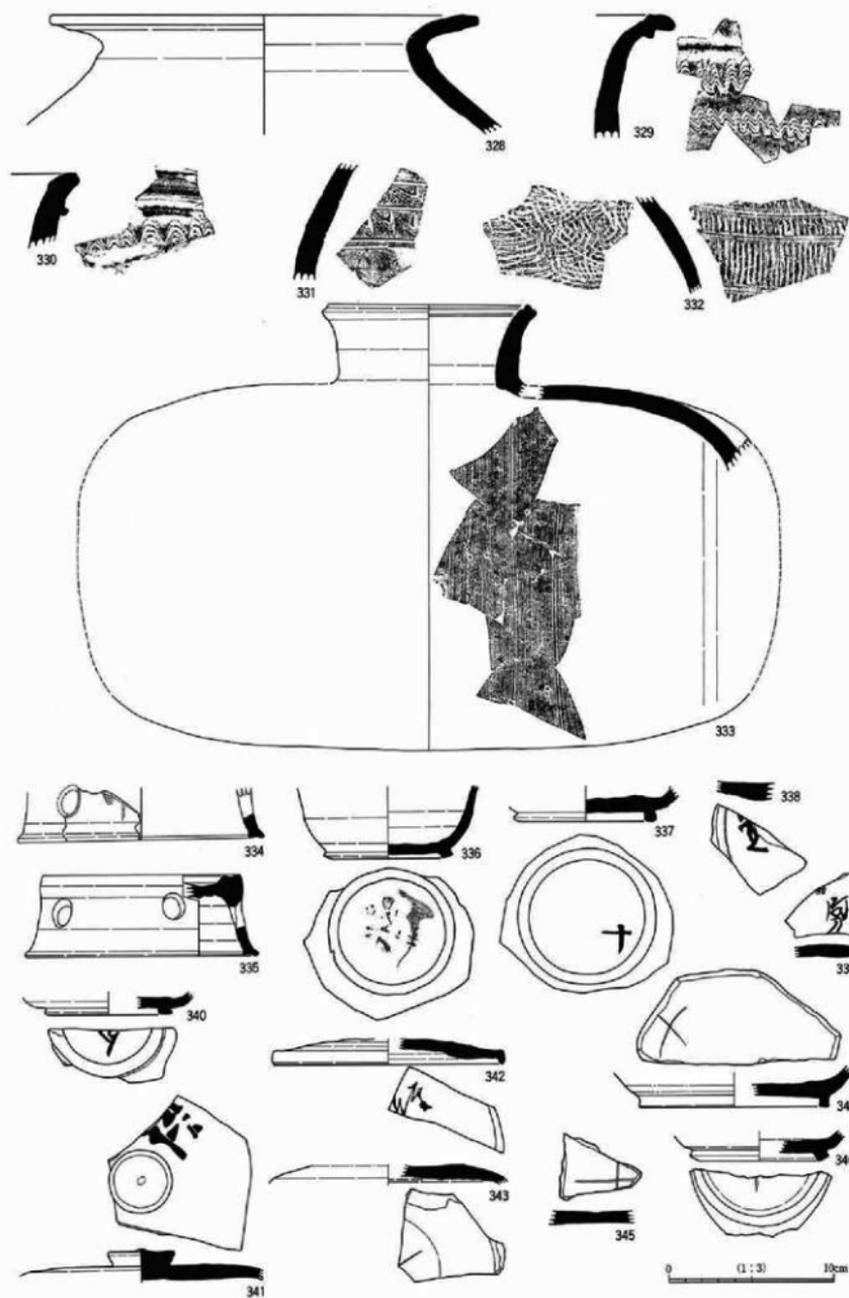
236

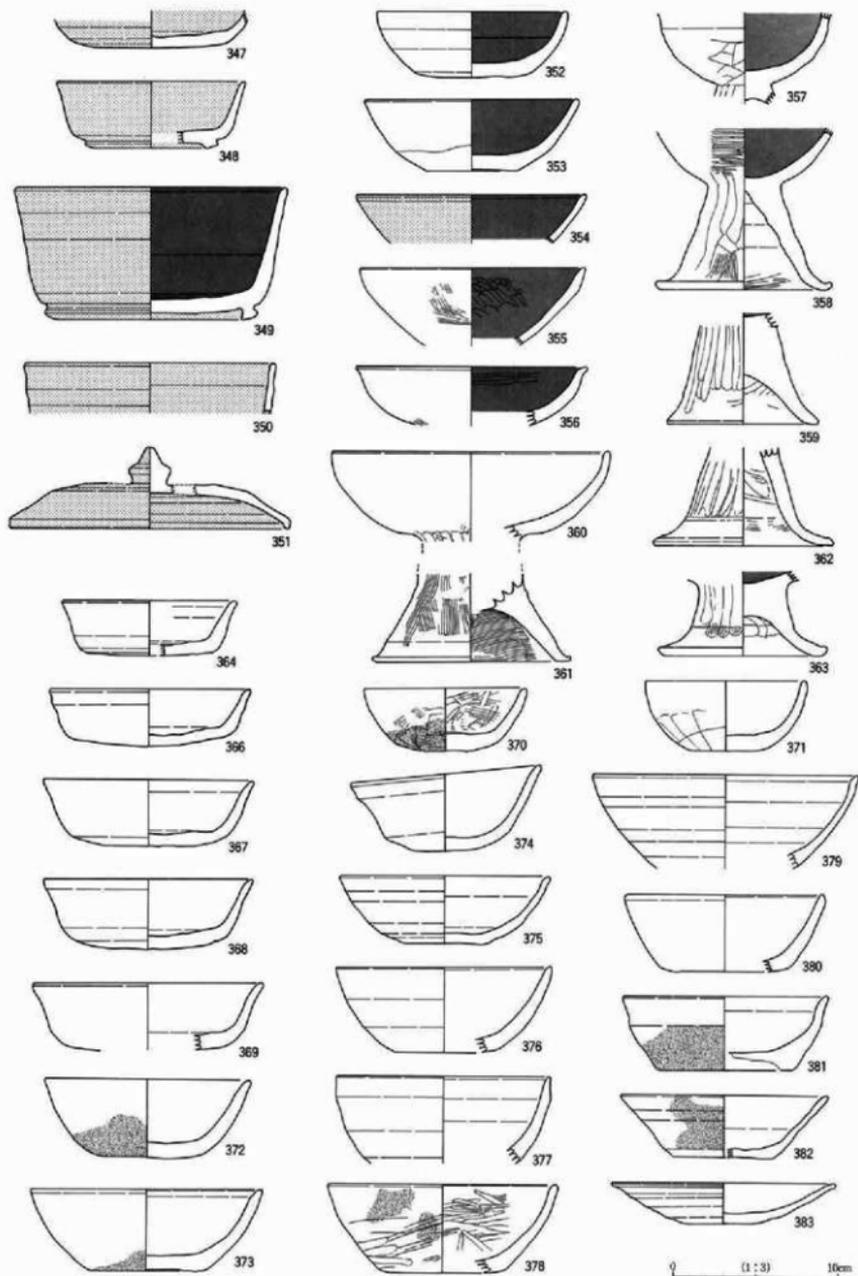
0 (1:3) 10cm

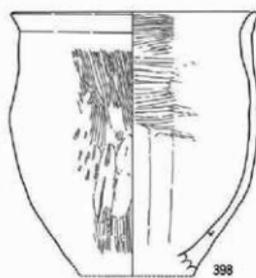
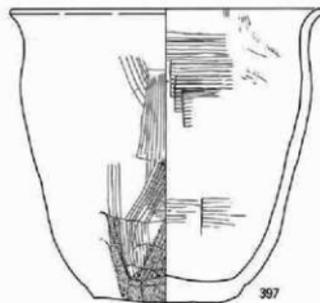
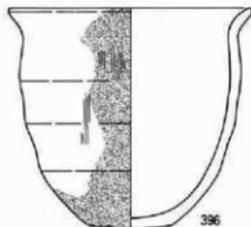
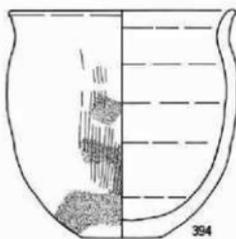
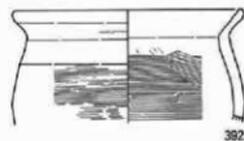
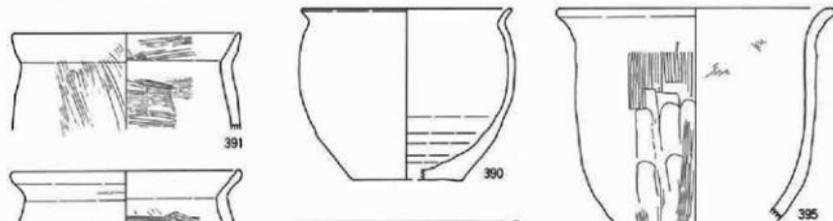
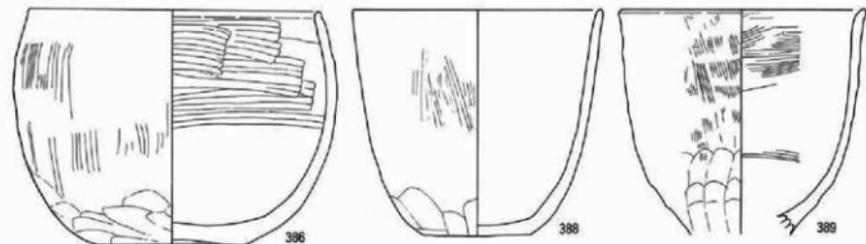
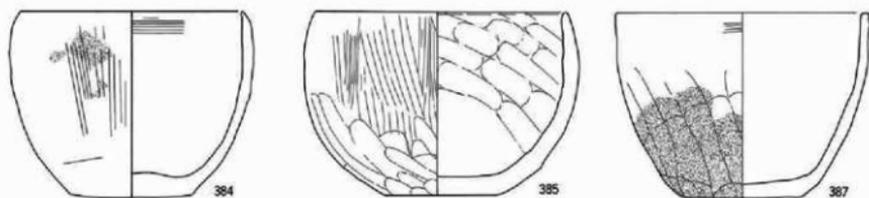




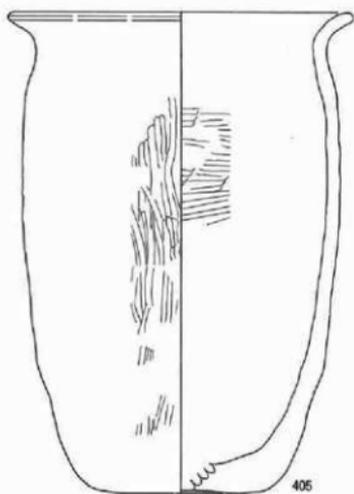
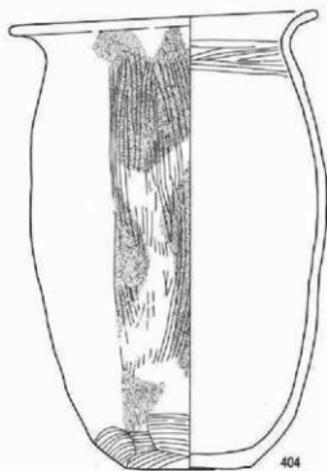
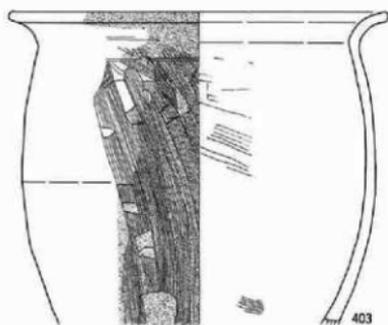
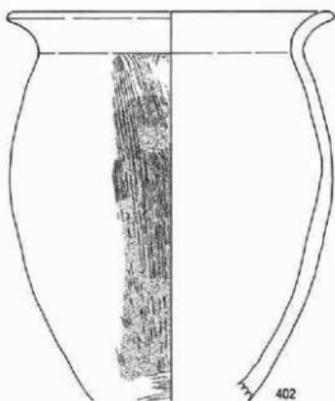
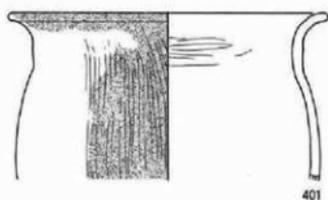
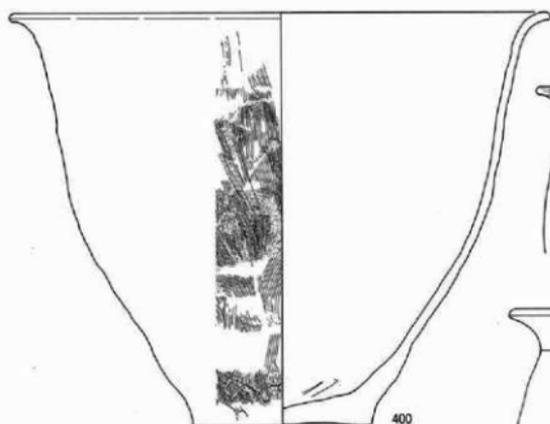


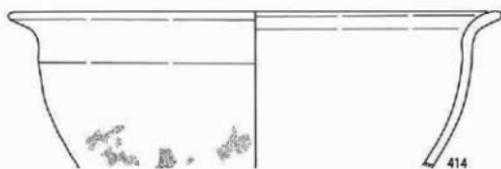
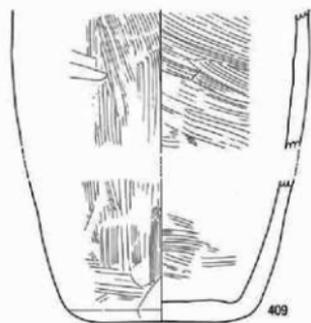
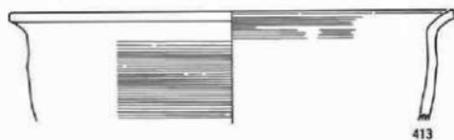
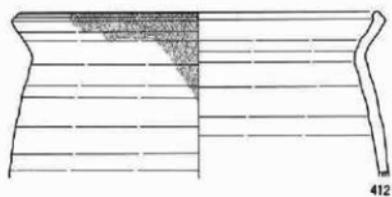
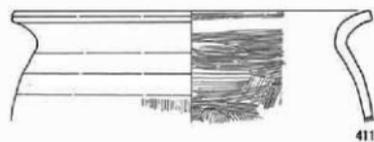
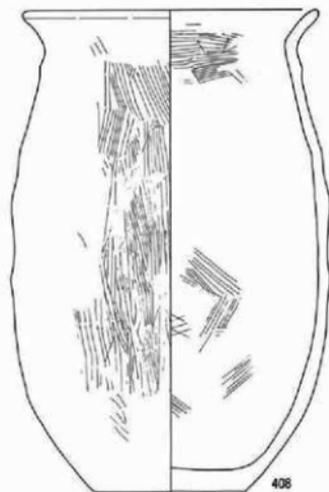
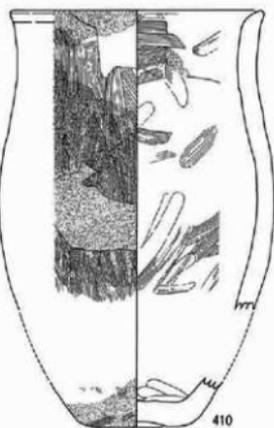
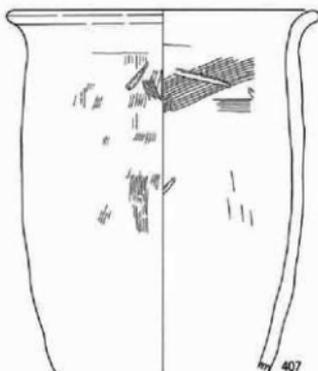
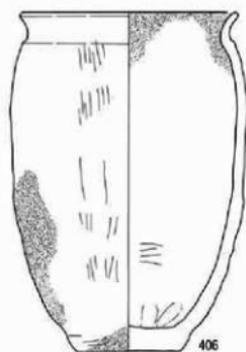






0 (1:3) 10cm







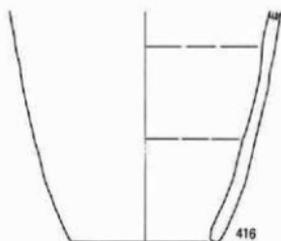
415



417



418



416



419



421



423



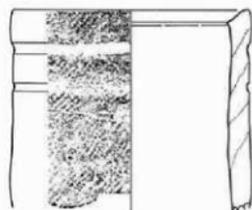
420



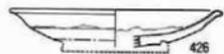
422



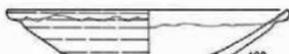
424



425



426

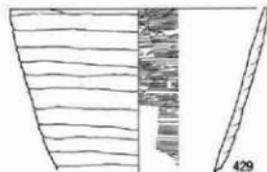


428



427

0 (1:3) 10cm



429



430



438



439



432



436



440



433



437



441



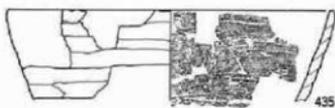
434



442



445



435



443



446

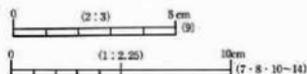
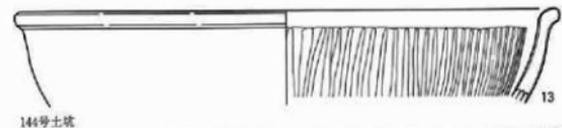
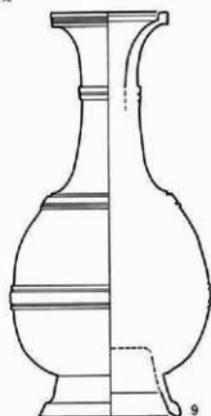
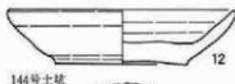
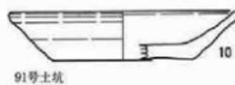
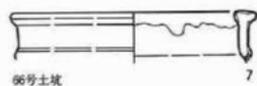
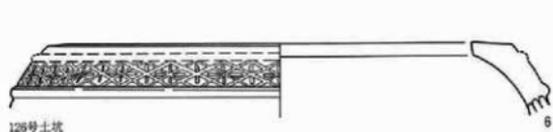
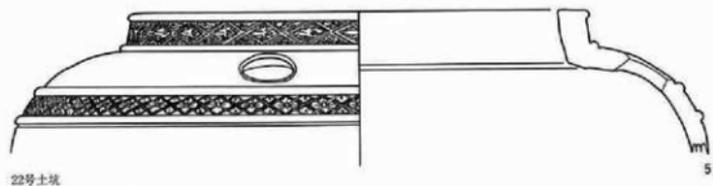
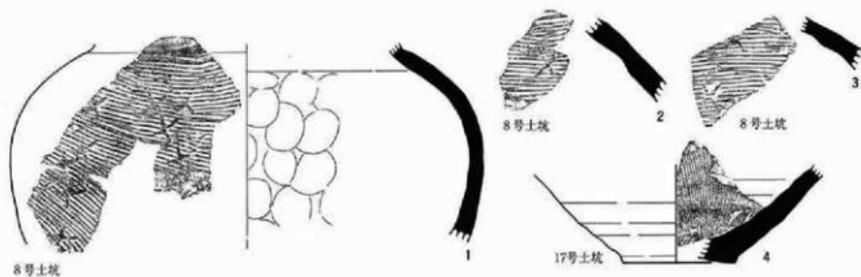


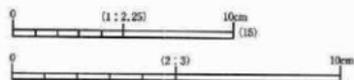
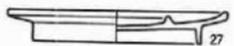
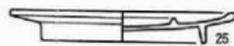
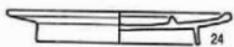
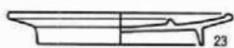
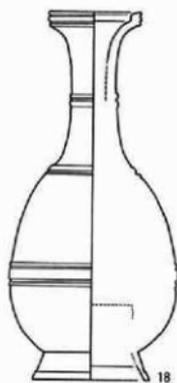
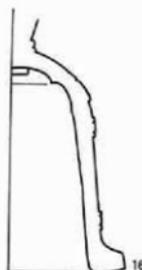
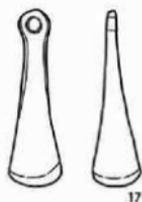
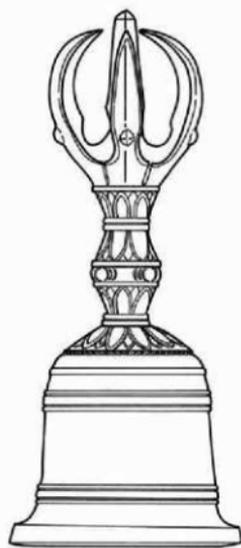
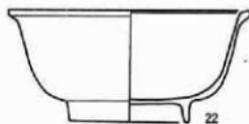
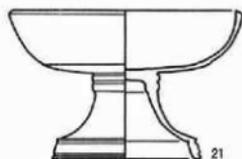
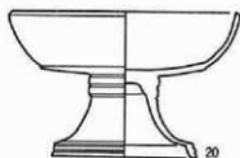
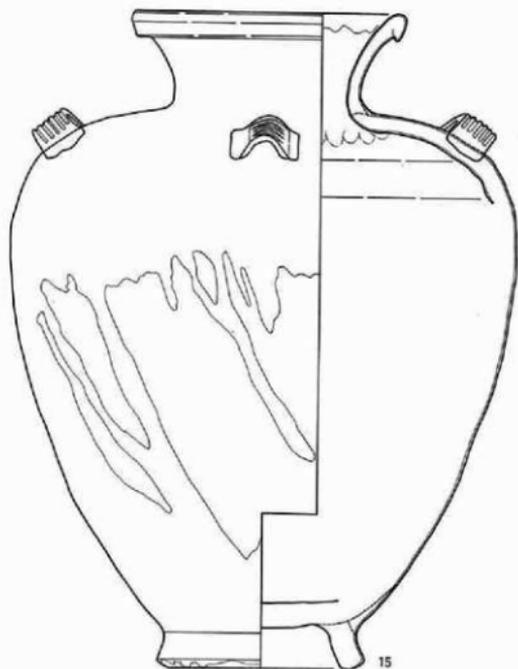
444

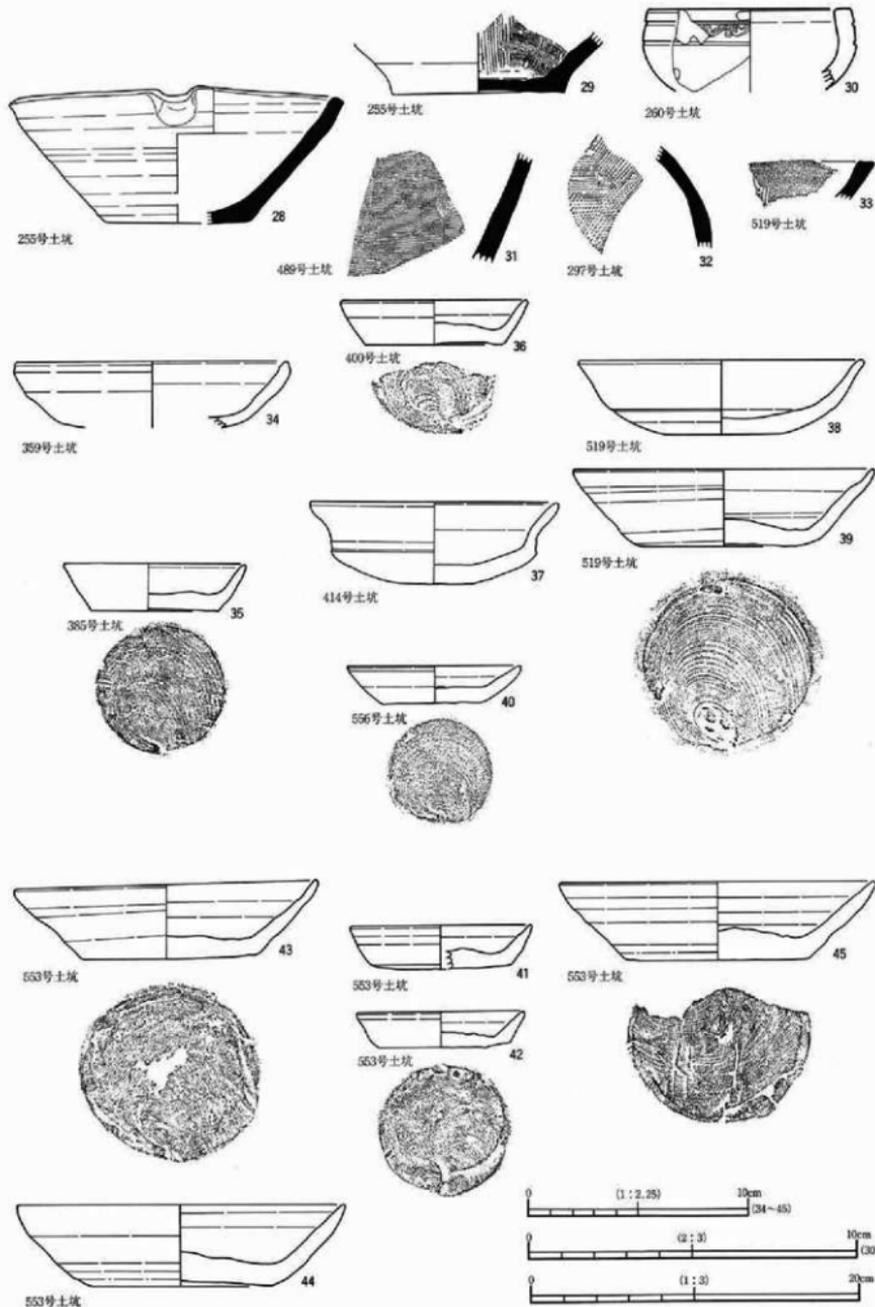


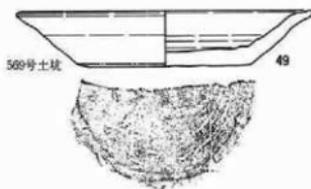
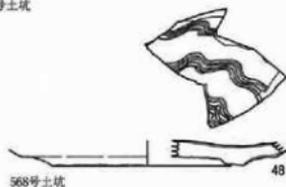
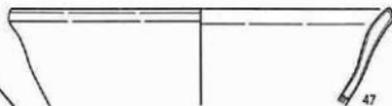
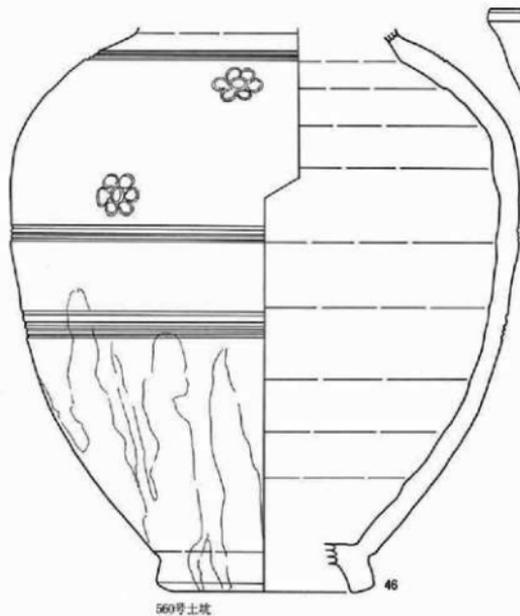
447

0 (1:6) 20cm

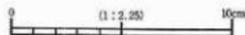
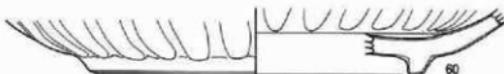
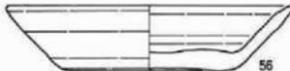
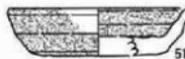
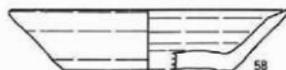
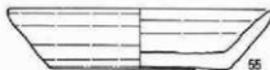
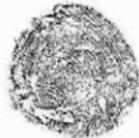
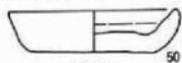


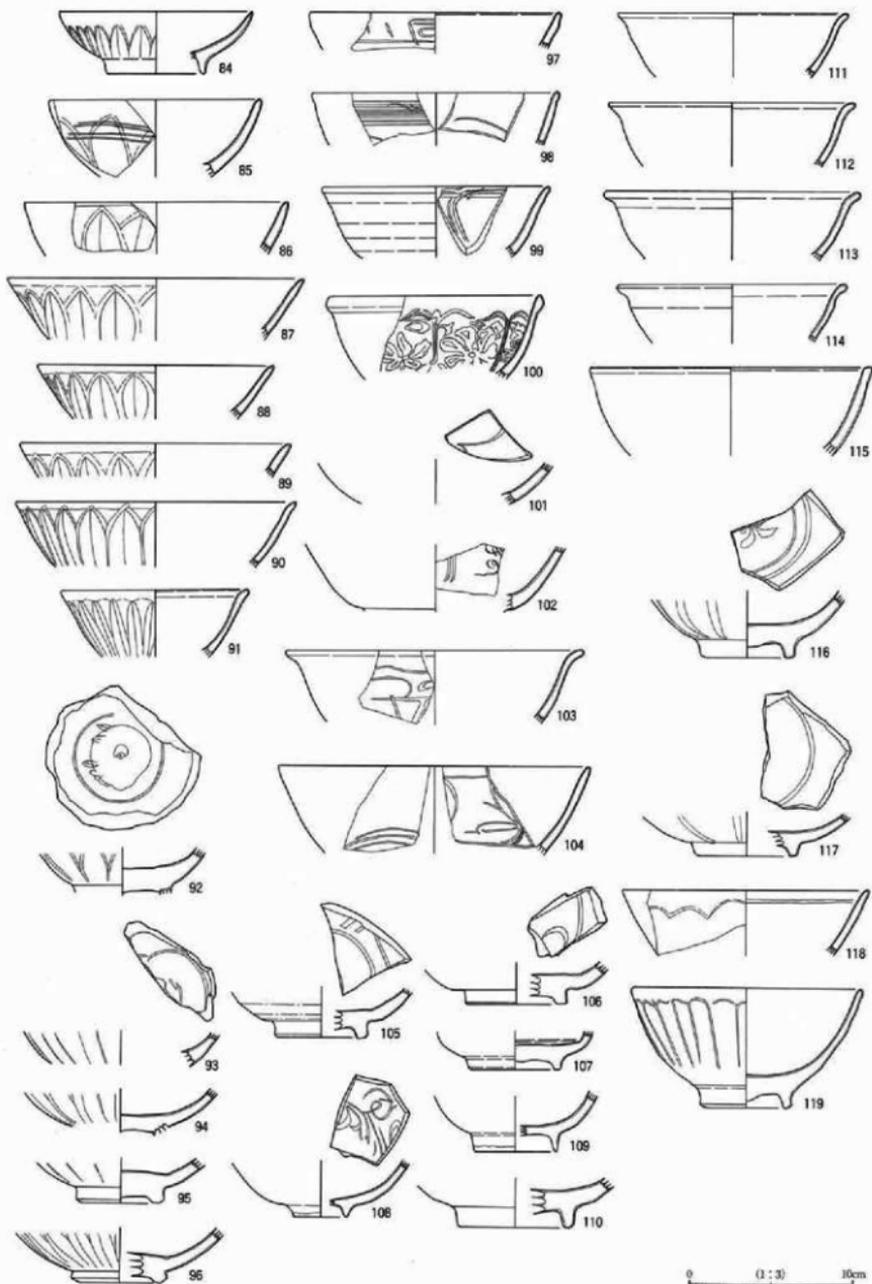


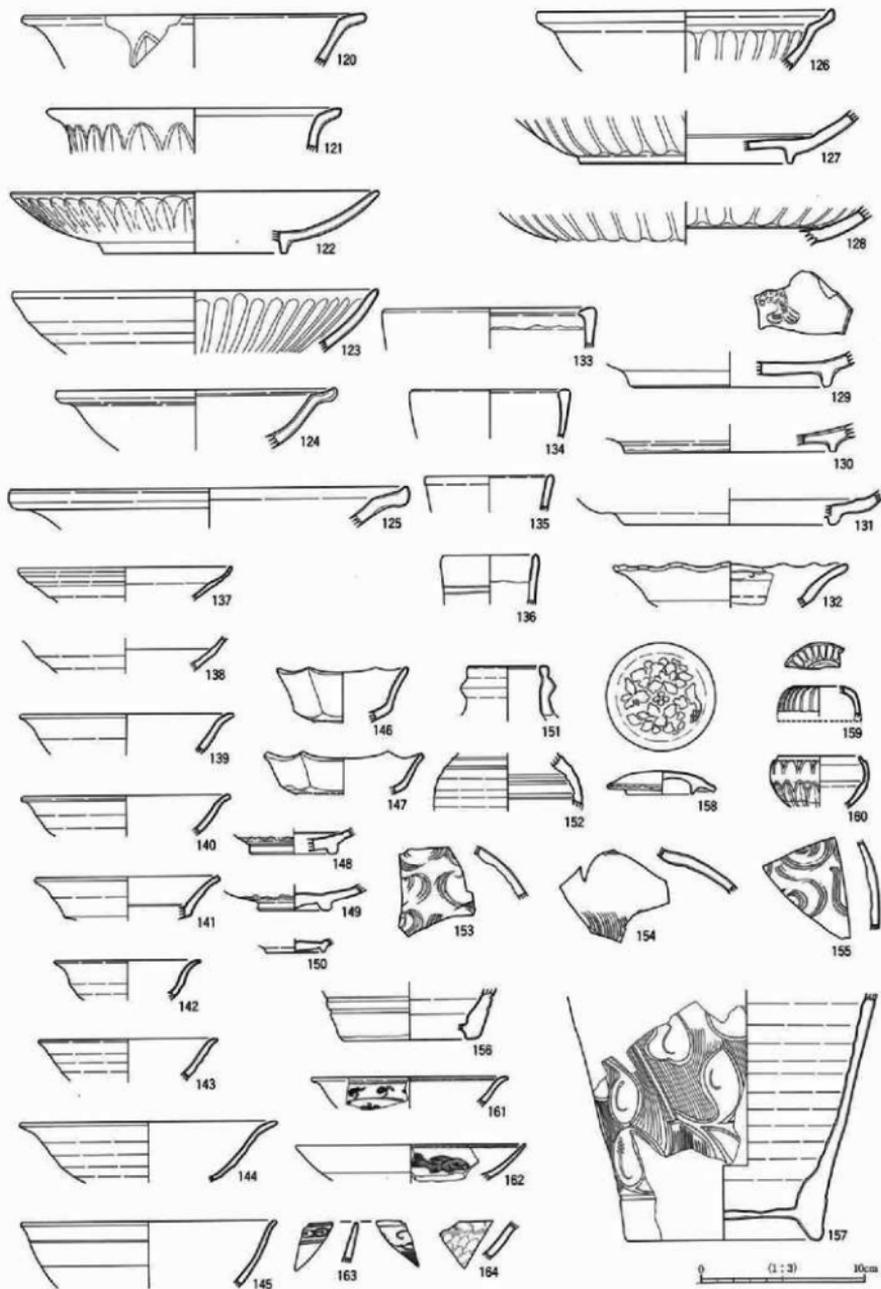


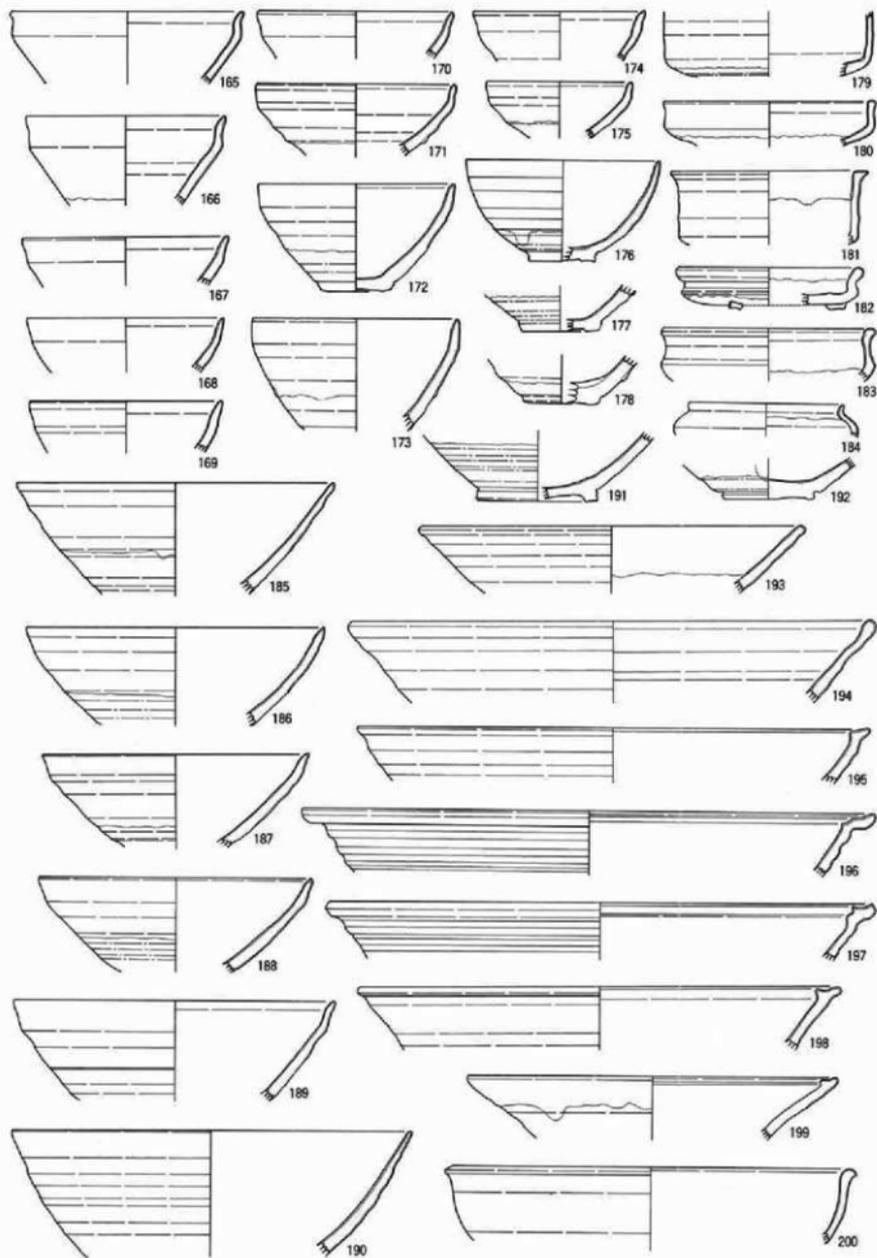


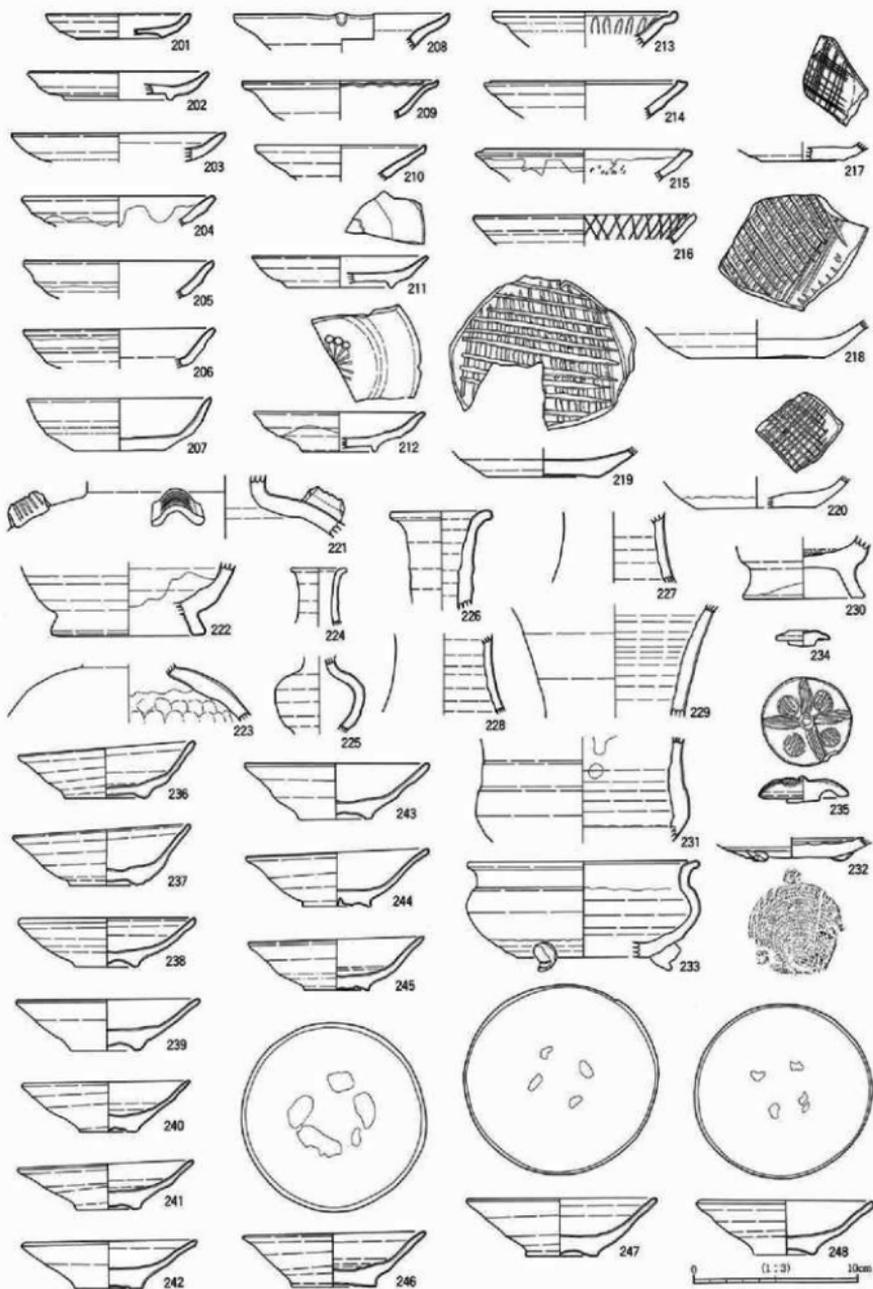
572号土坑 (50~60)

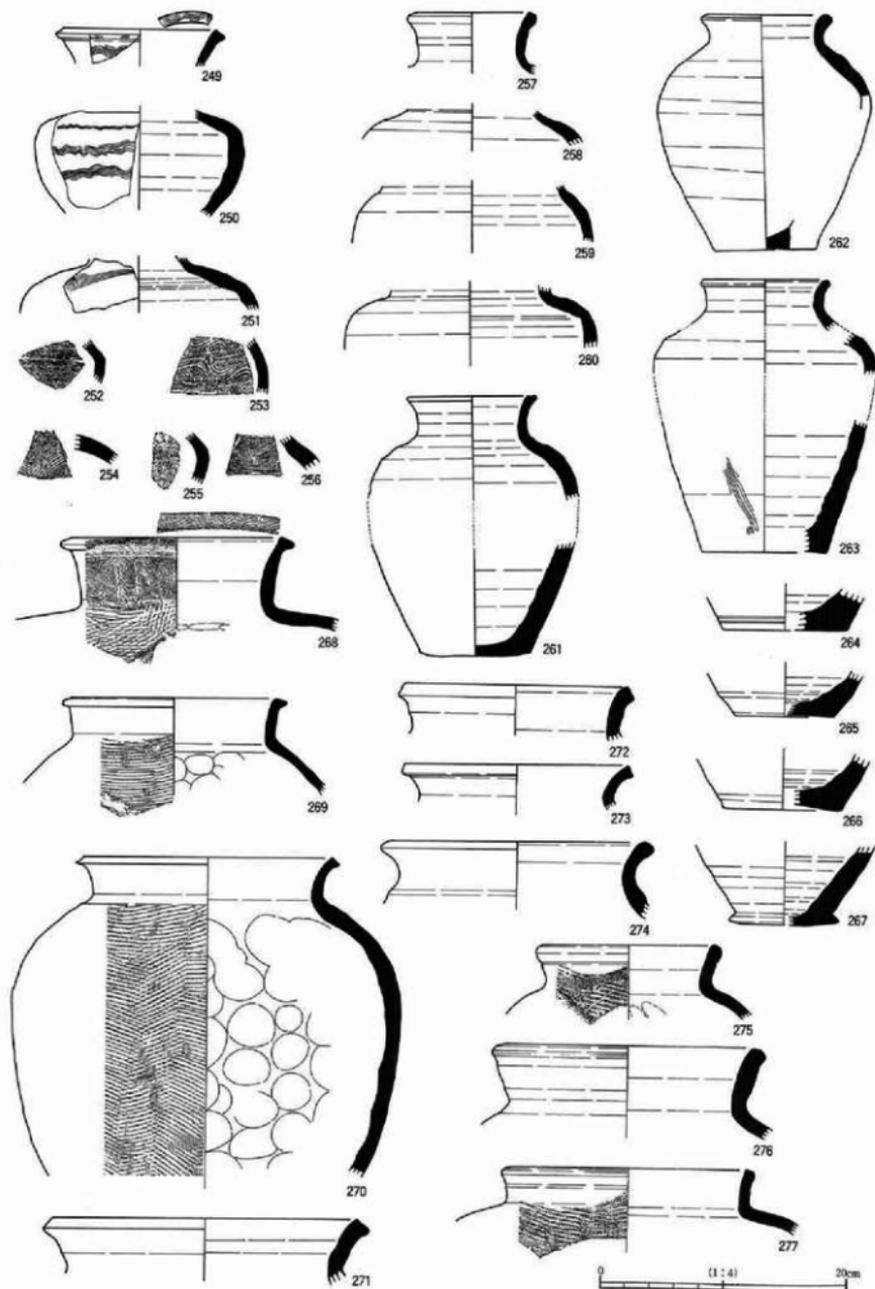


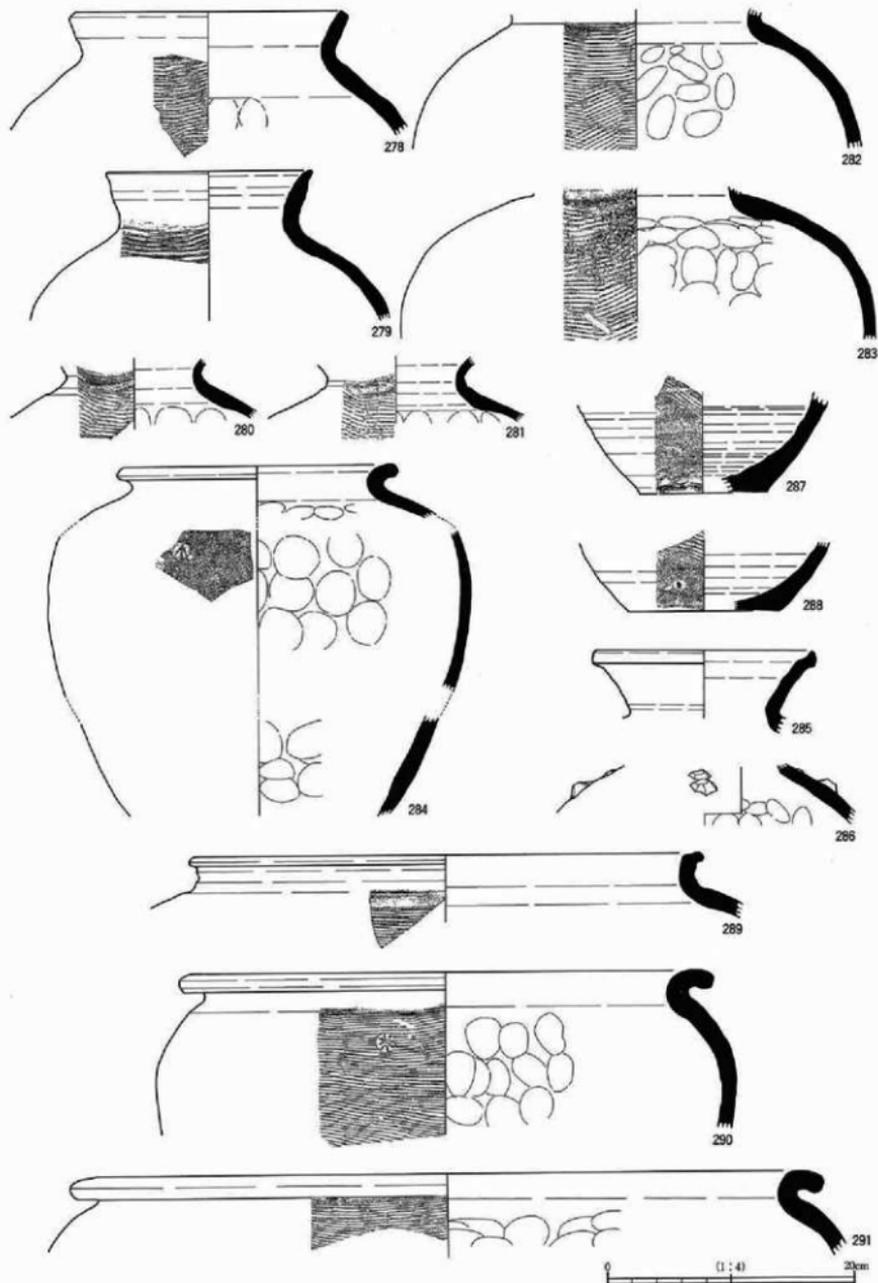


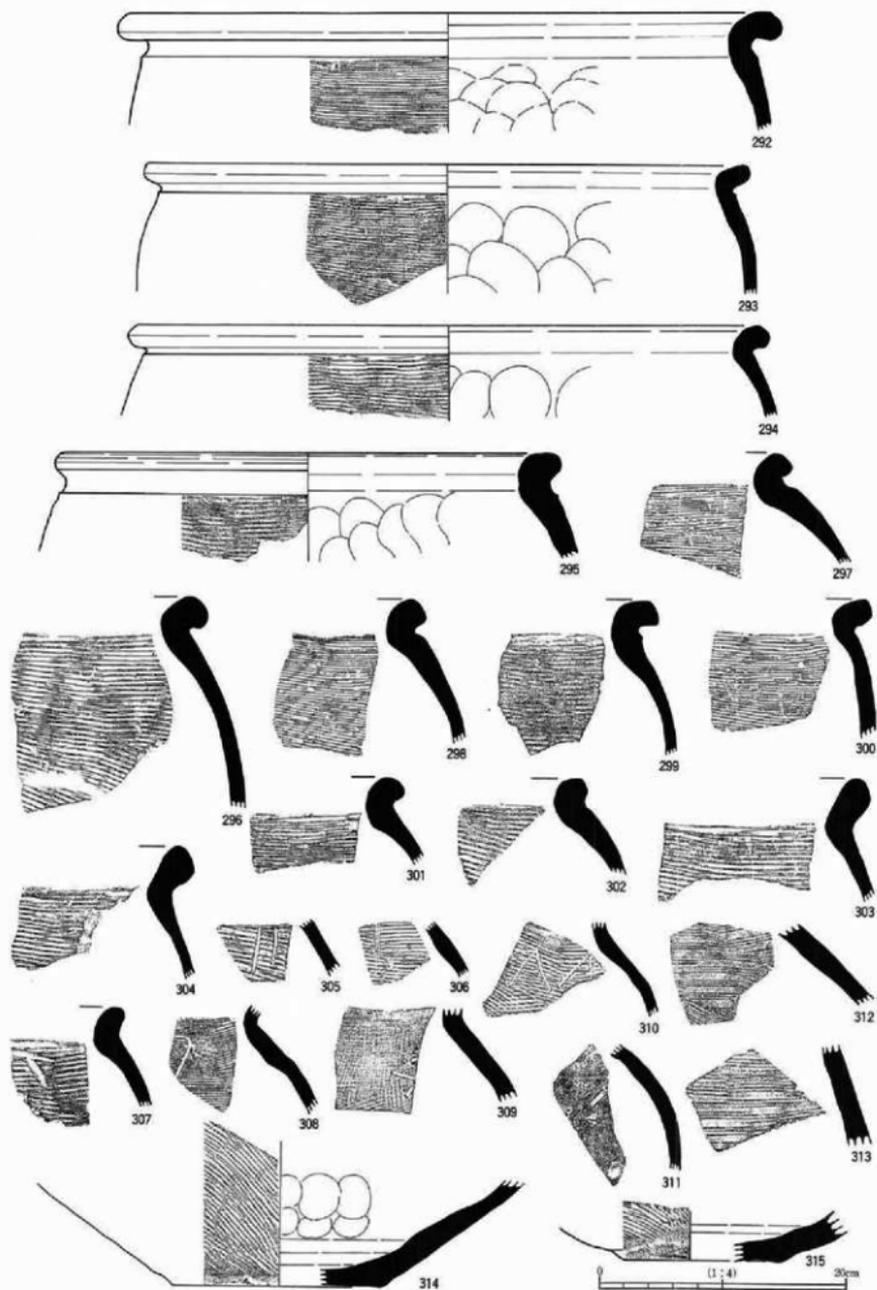


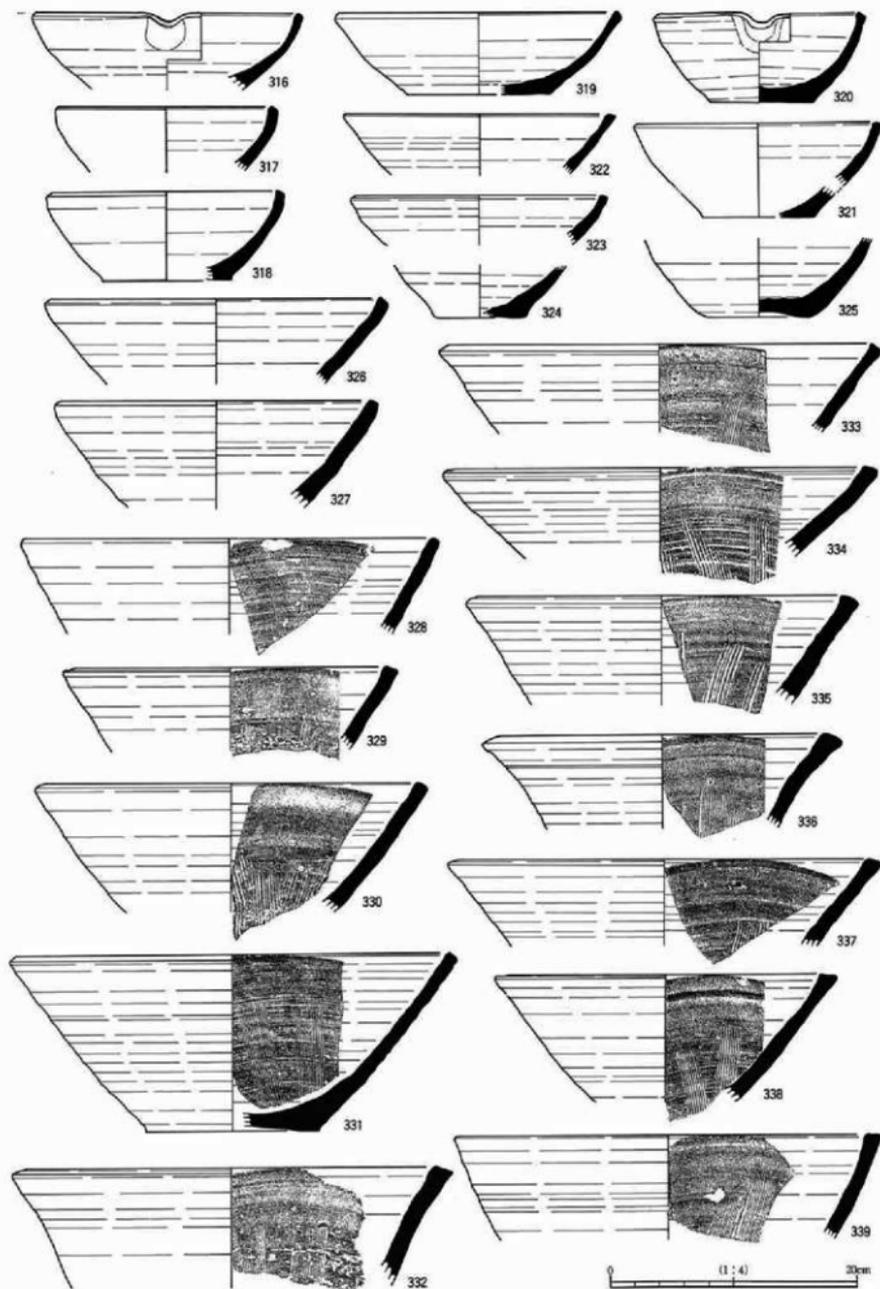


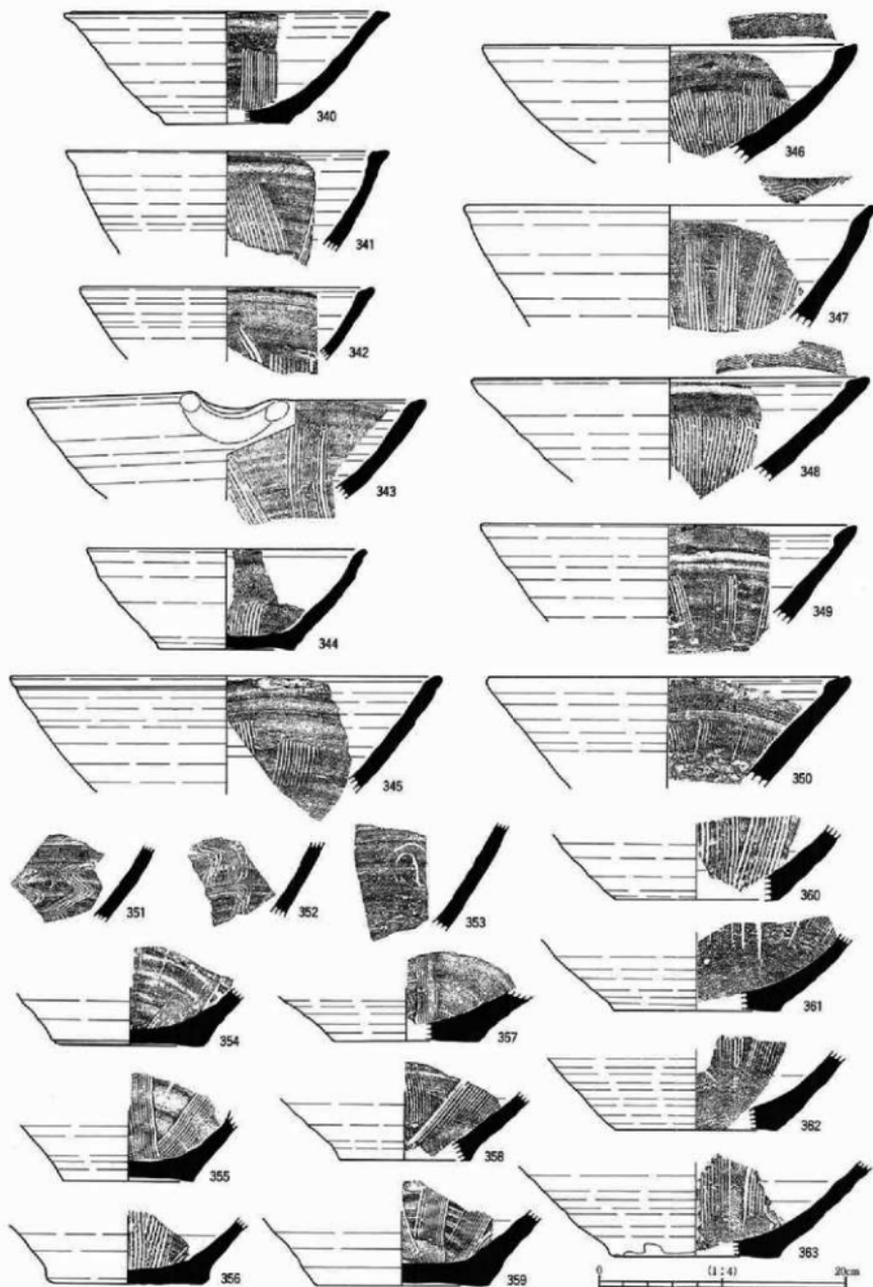


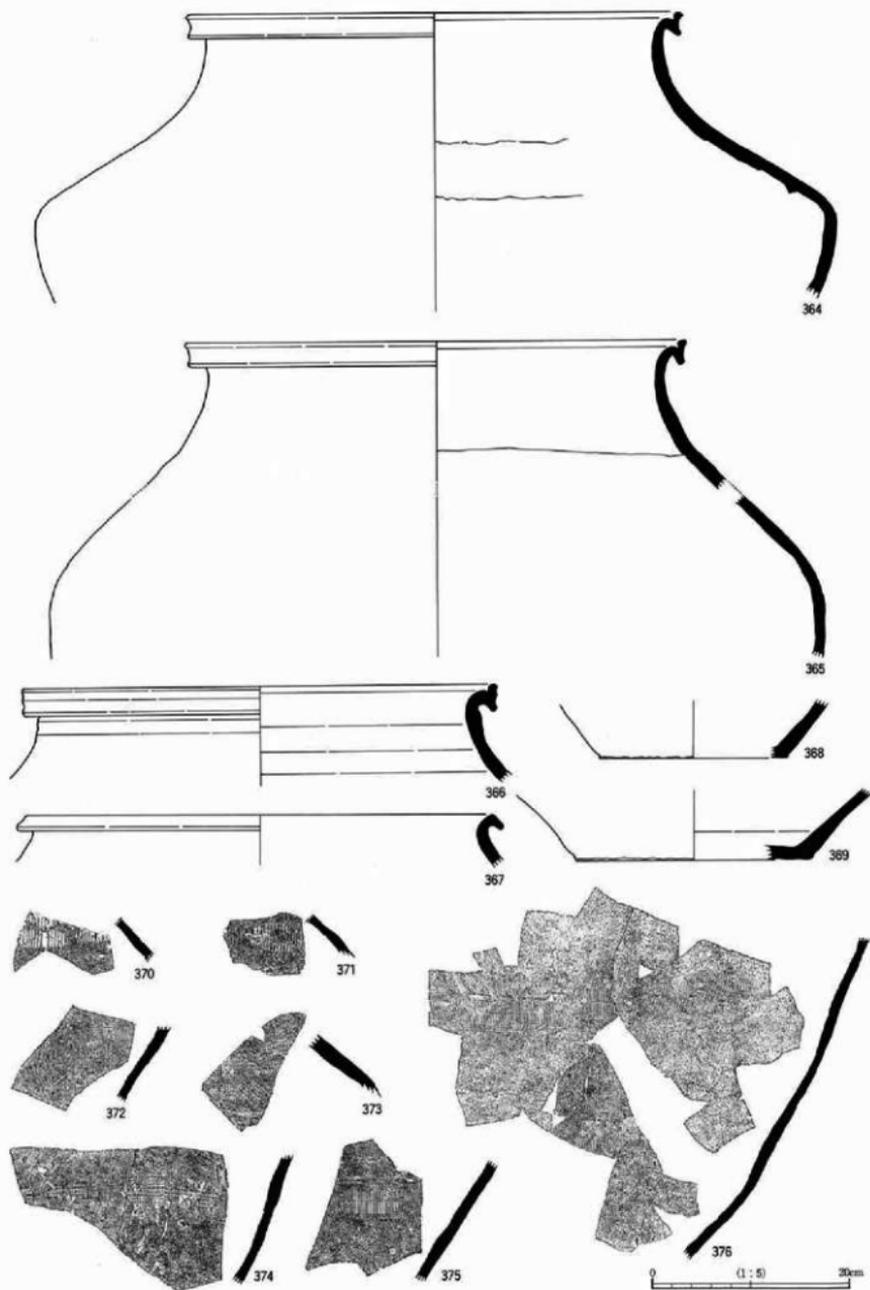


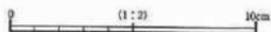
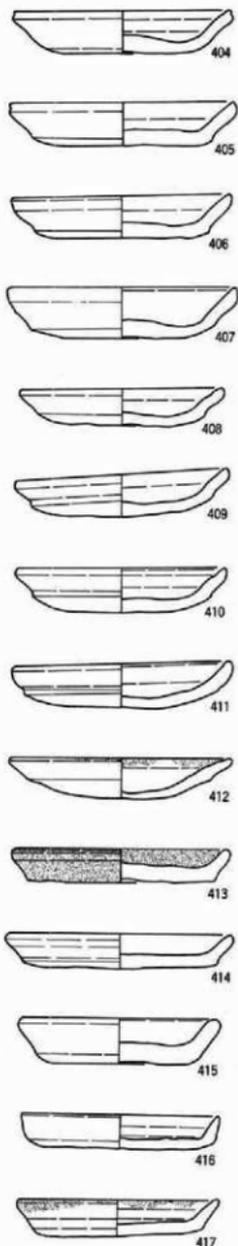
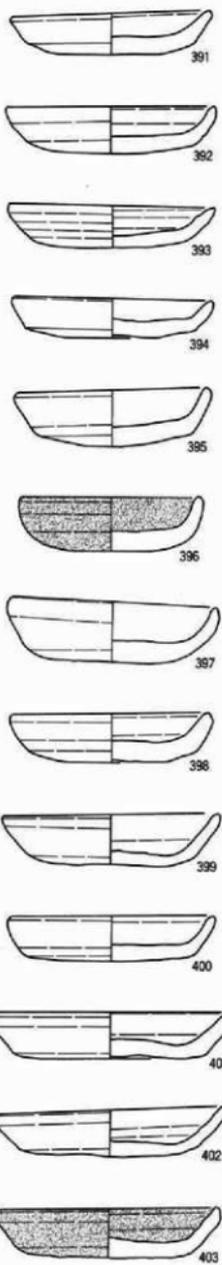
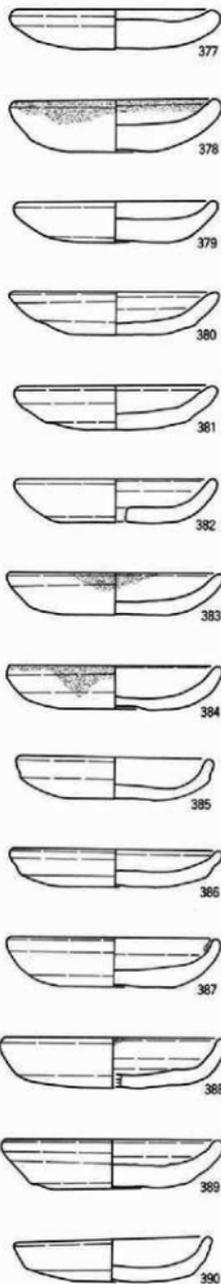


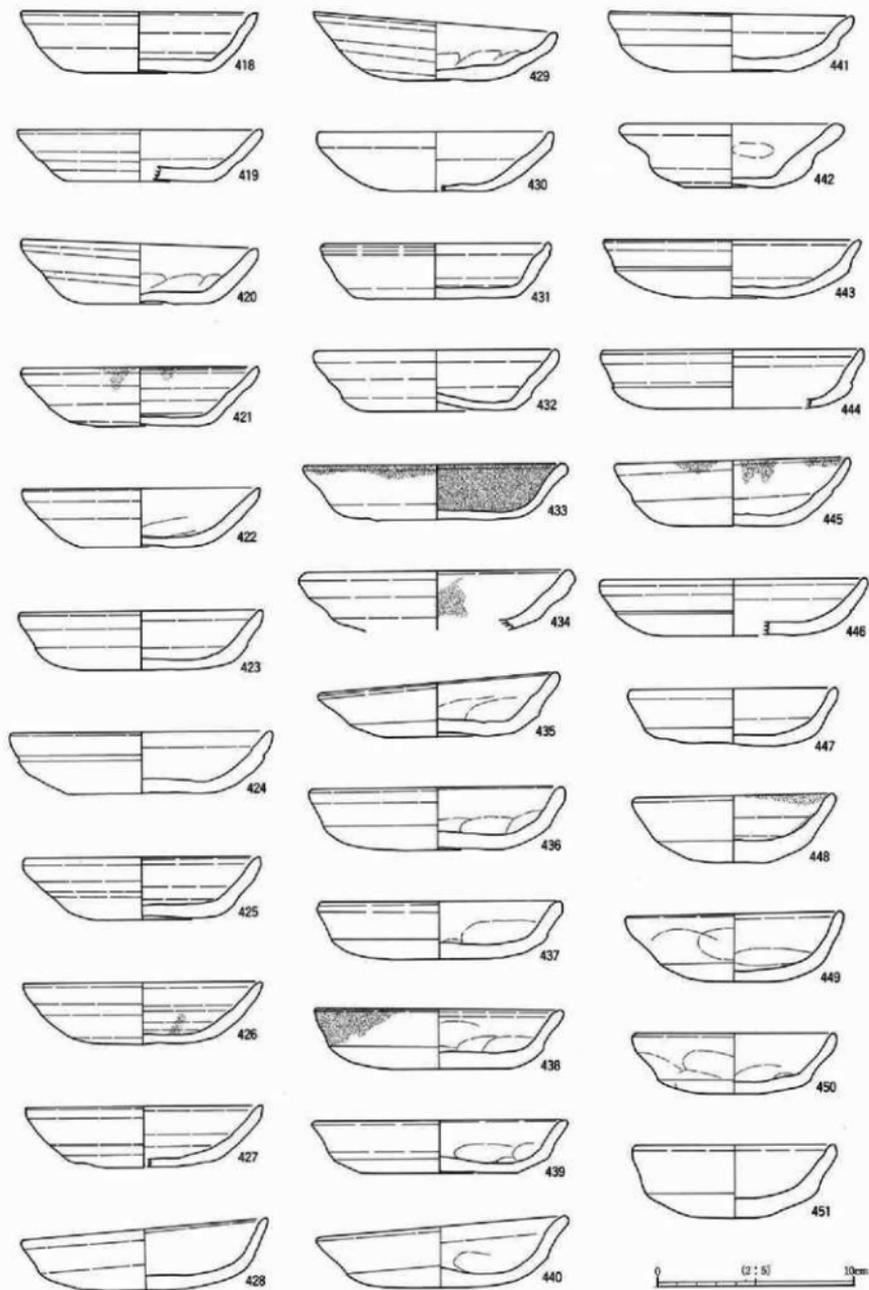




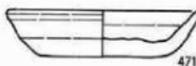
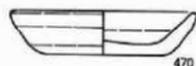
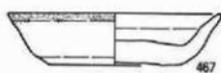
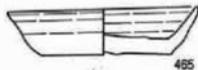
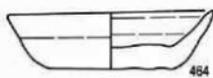
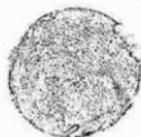
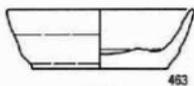
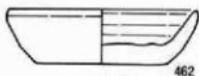
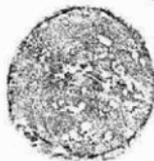
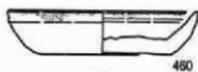
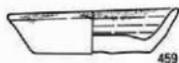
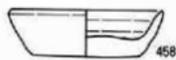
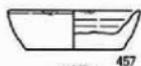
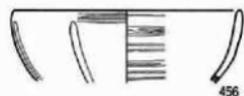
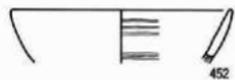




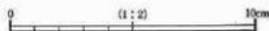
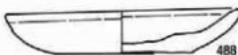
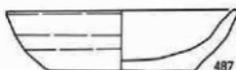
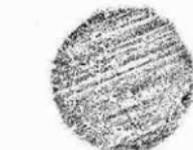
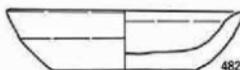
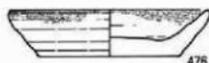
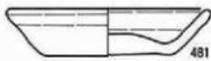
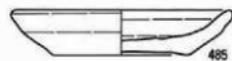
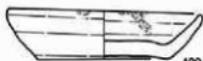
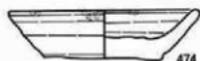
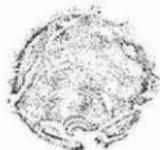
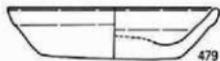




0 (2:5) 10cm

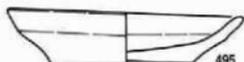


0 (1:2) 10cm





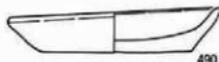
489



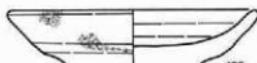
495



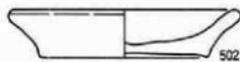
501



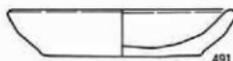
490



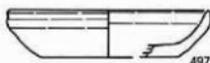
496



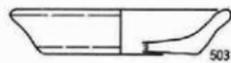
502



491



497



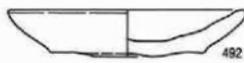
503



498



504



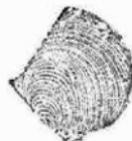
492



499



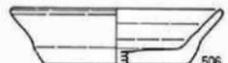
505



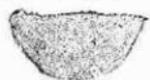
493



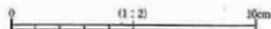
500

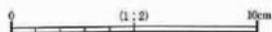
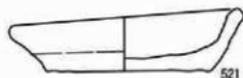
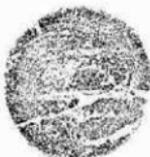
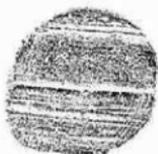
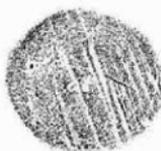
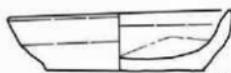
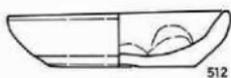
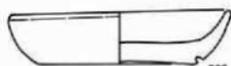
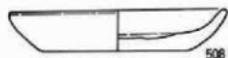
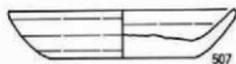


506



494



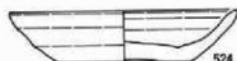




522



523



524



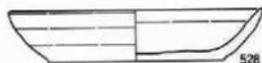
525



526



527



528



529



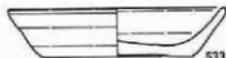
530



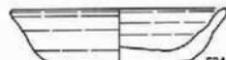
531



532



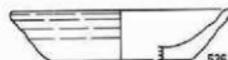
533



534



535



536



537



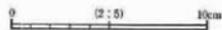
538

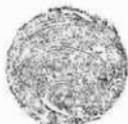
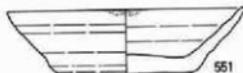
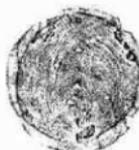
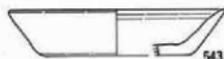
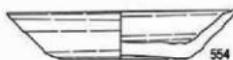
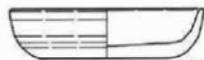
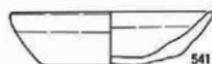


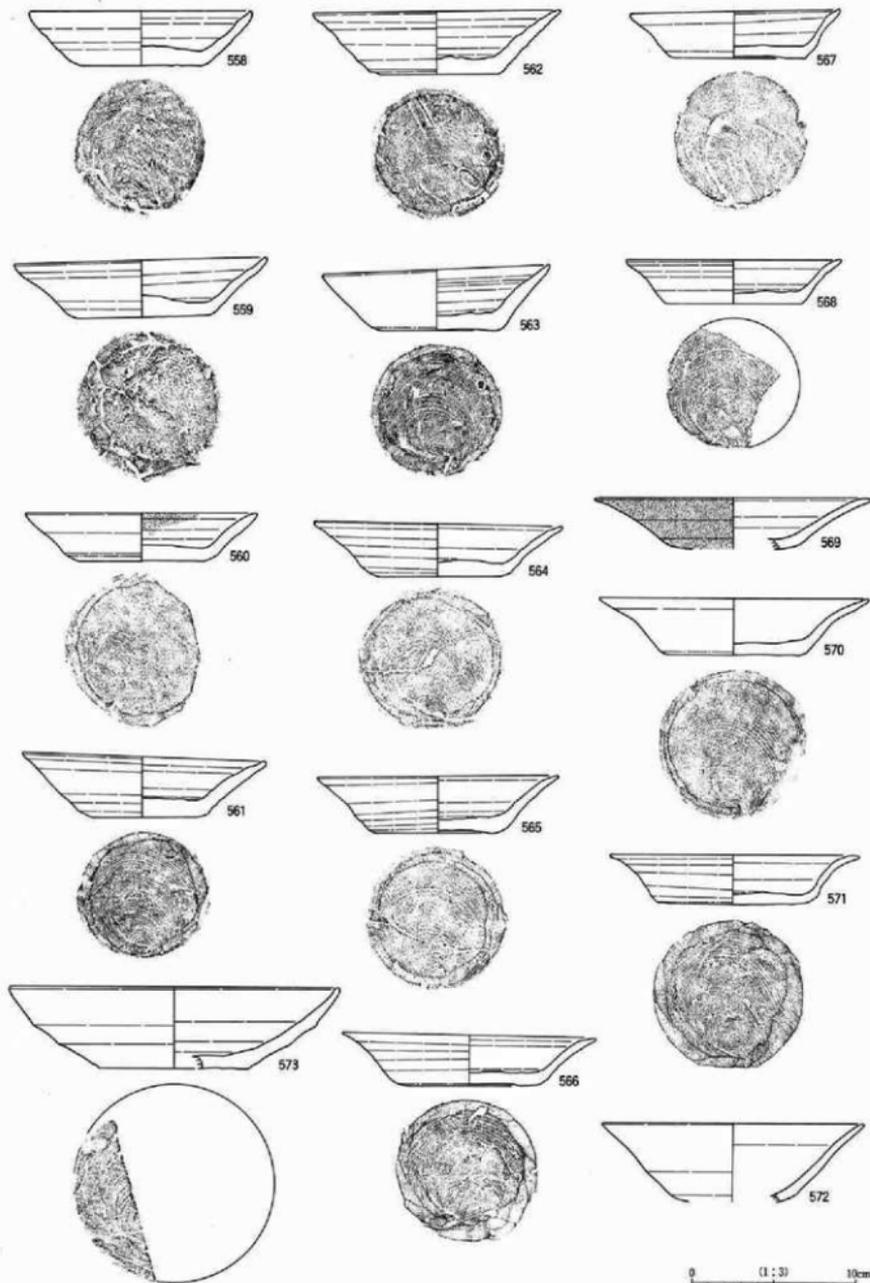
539

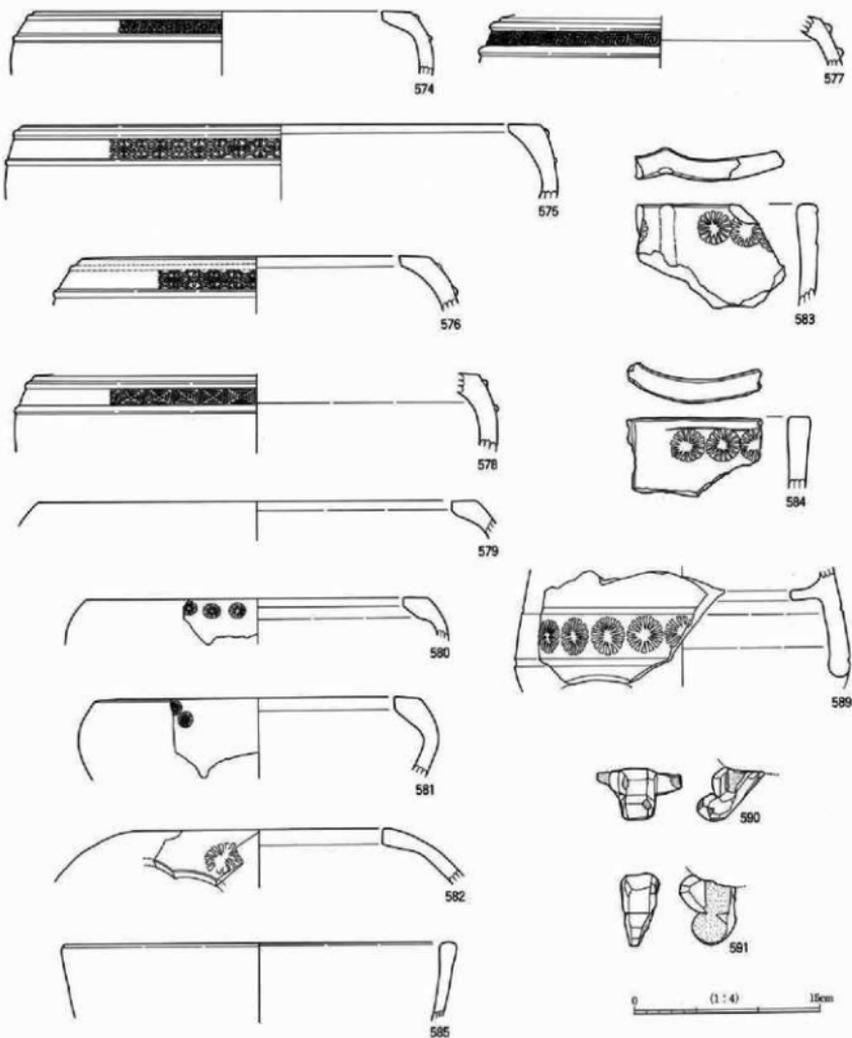


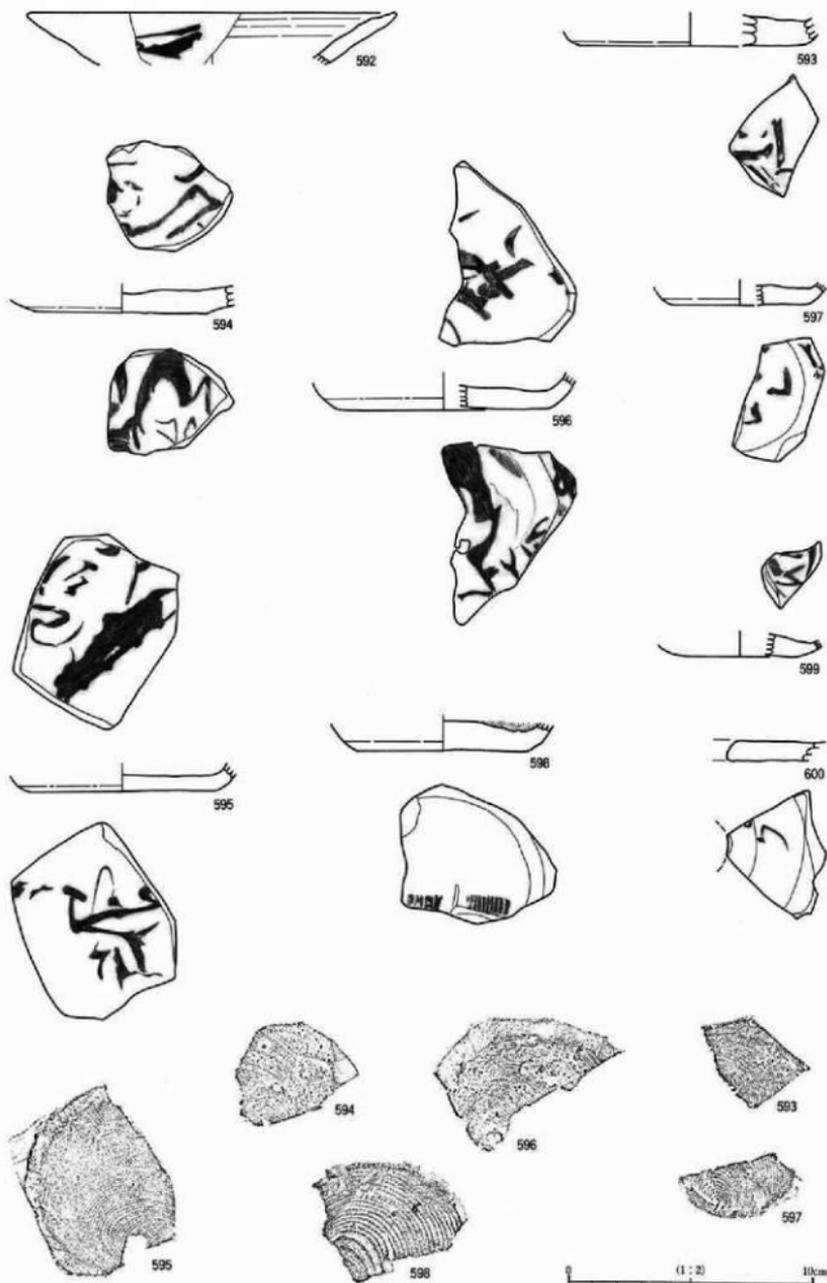
540

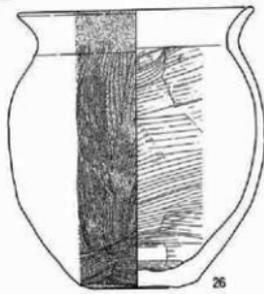
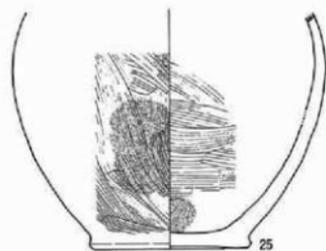
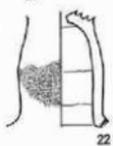
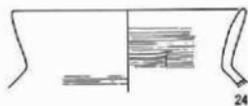
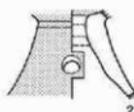
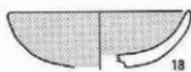
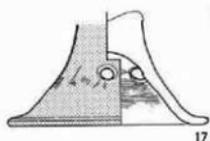
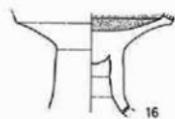
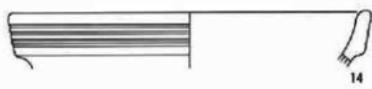
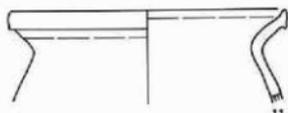
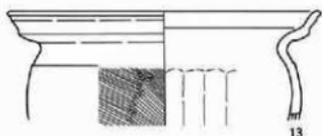
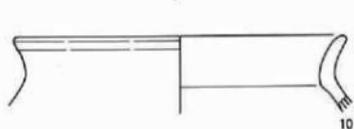
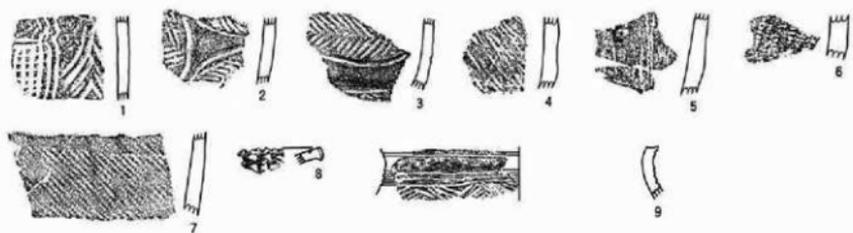


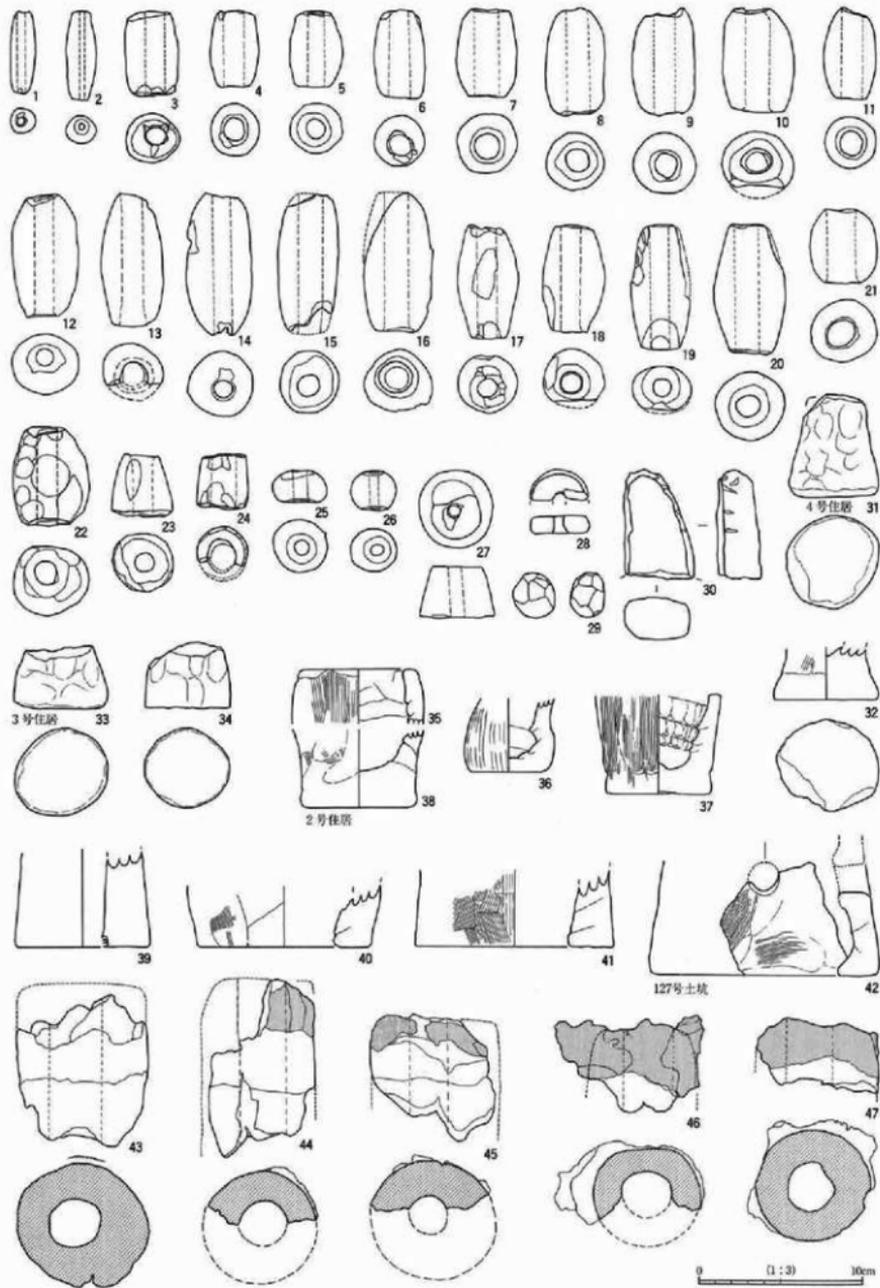


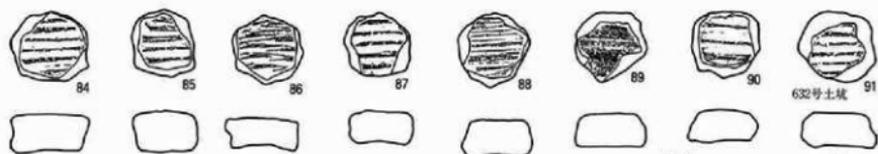
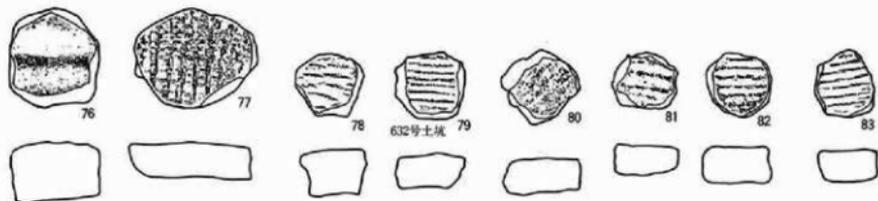
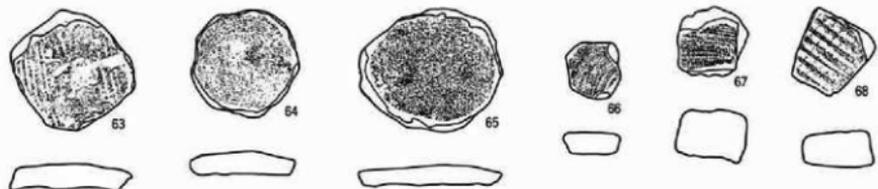


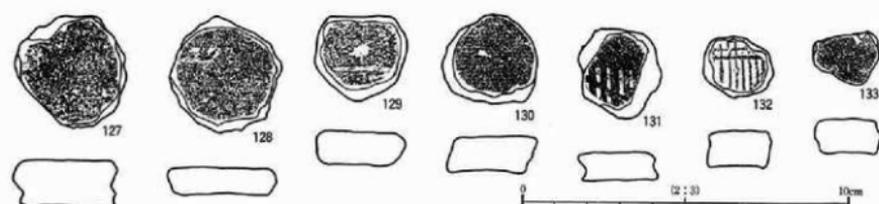
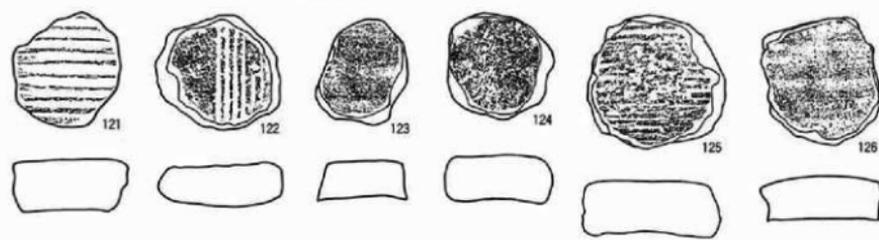
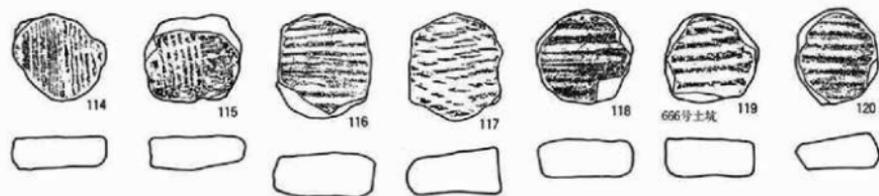
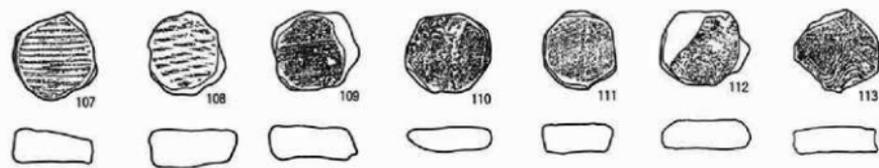
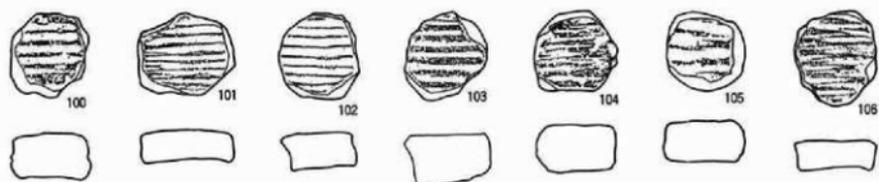
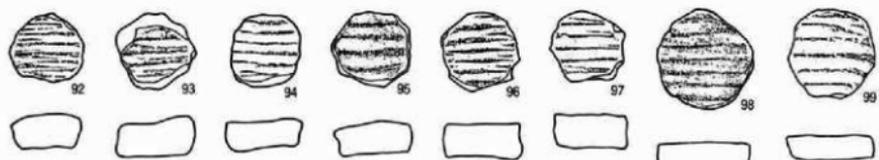


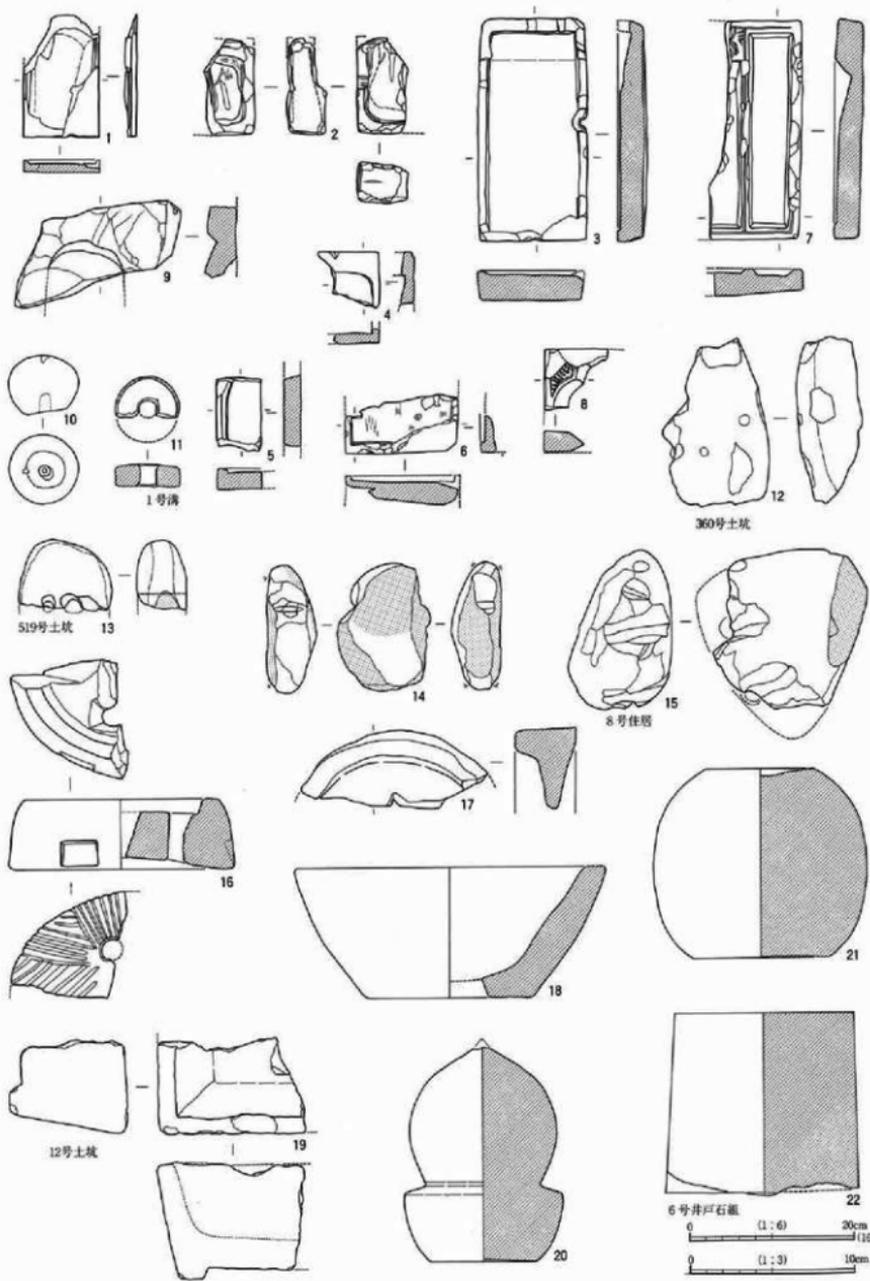




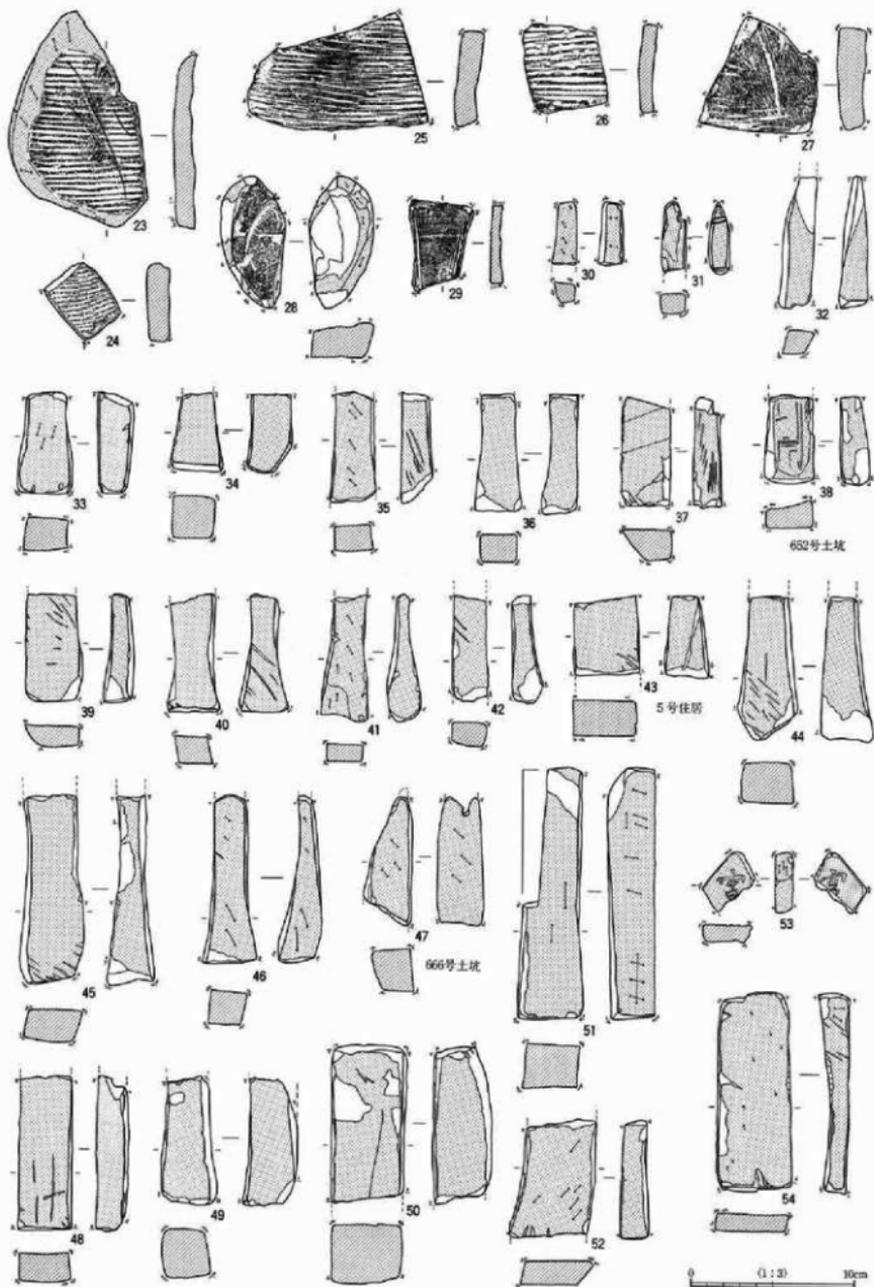


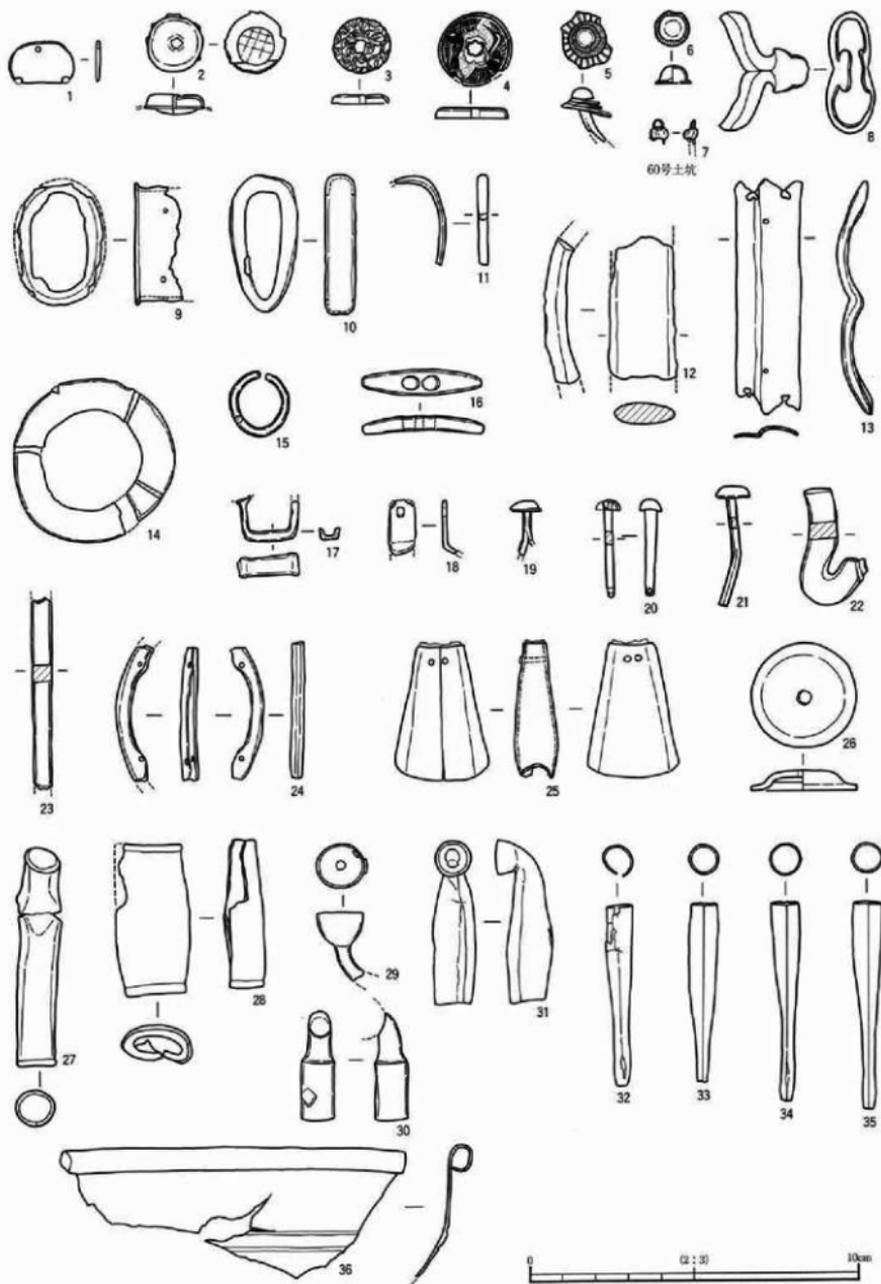


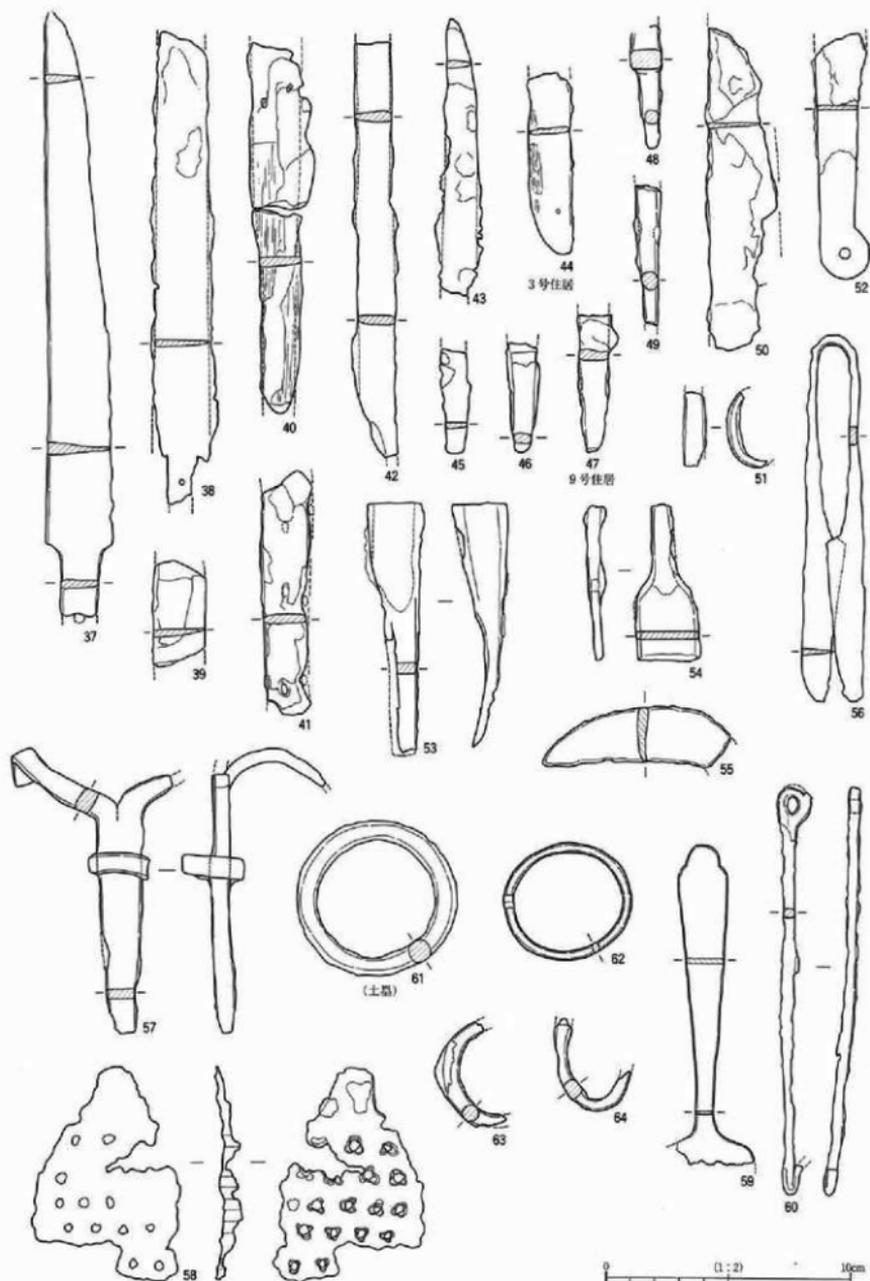


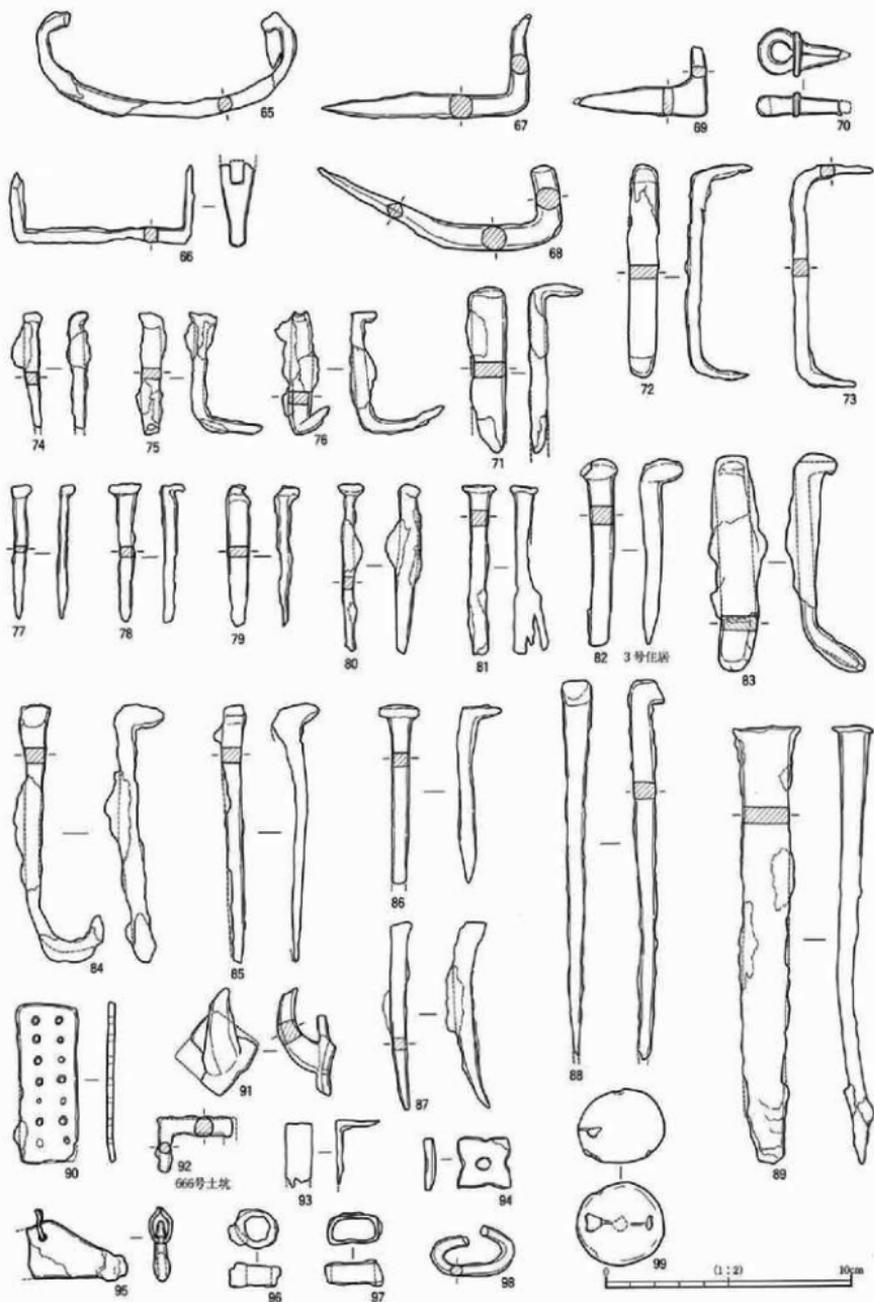


0 20cm (1:6)
0 10cm (1:3)











100 和同開珎



101 五銖



102 開元通寶



103 開元通寶



104 宋通元寶



105 太平通寶



106 淳化元寶



107 至道元寶(真)



108 至道元寶(行)



109 咸平元寶



110 景德元寶



111 景德元寶



112 祥符元寶



113 祥符通寶



114 天禧通寶



115 天聖元寶



116 天聖元寶(篆)



117 明道元寶(篆)



118 景祐元寶



119 皇宋通寶



120 皇宋通寶



121 皇宋通寶(篆)



122 至和元寶



123 至和元寶(篆)



124 嘉祐元寶



125 嘉祐通寶



126 治平元寶



127 治平元寶



128 熙寧元寶



129 熙寧元寶(篆)



130 熙寧元寶(篆)



131 熙寧元寶(篆)



132 熙寧元寶(篆)



133 元豐通寶



134 元豐通寶(真)



135 元豐通寶(篆)



136 元祐通寶



137 元祐通寶(篆)



138 紹聖元寶



139 紹聖元寶(篆)



140 元符通寶



141 聖宋元寶



142 聖宋元寶



143 聖宋元寶(篆)



144 大觀通寶



145 政和通寶



146 政和通寶



147 政和通寶(篆)



148 宣和通寶(篆)



149 淳熙元寶



十二(真)



150 紹熙元寶



151 慶元通寶



152 嘉泰通寶



153 咸淳元寶



154 洪武通寶



155 永樂通寶



156 永樂通寶



157 永樂通寶



158 無文錢



159 無文錢



160 無文錢



161 寬永通寶



162 寬永通寶



元(真)



163 寬永通寶



文(真)



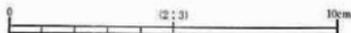
164 寬永通寶

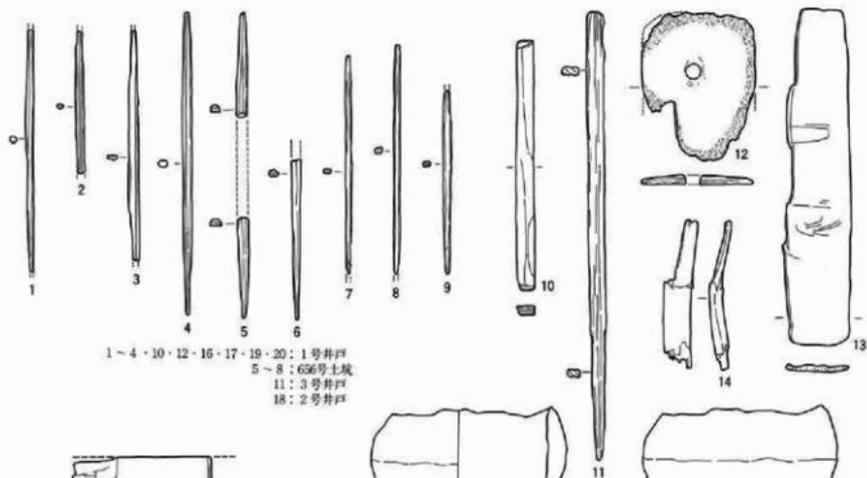


佐(真)

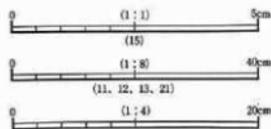
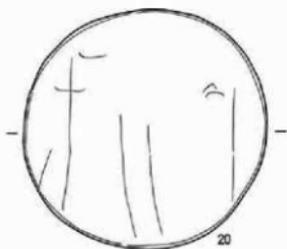
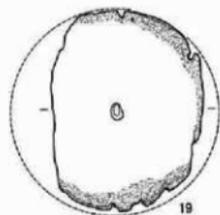
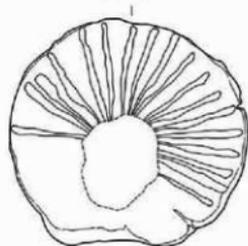
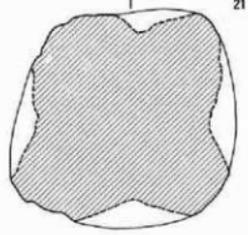
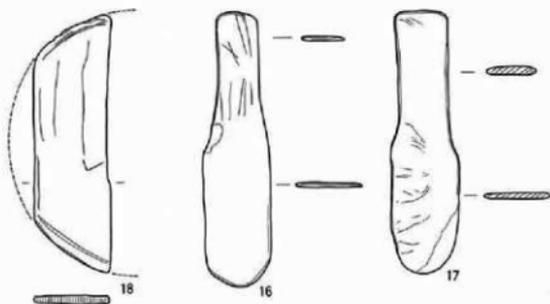
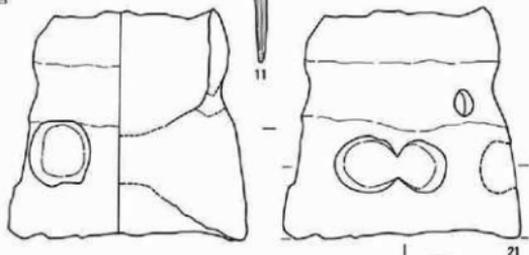
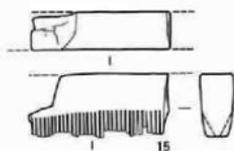


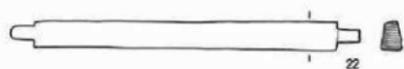
165 寬永通寶





1~4・10・12・16・17・19・20: 1号井戸
 5~8: 656号土坑
 11: 3号井戸
 18: 2号井戸





22



23



24



25



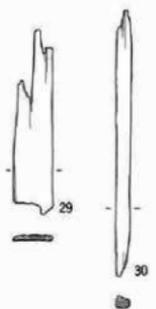
26



27



28



29



30



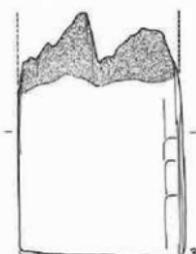
33



34



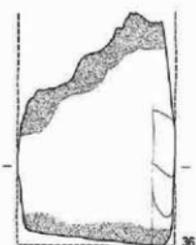
35



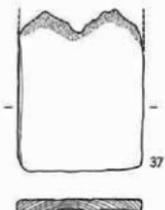
31



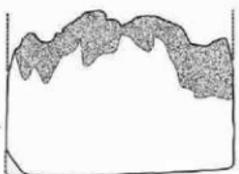
32



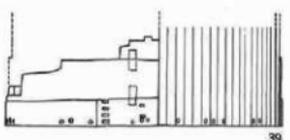
36



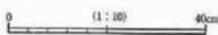
37

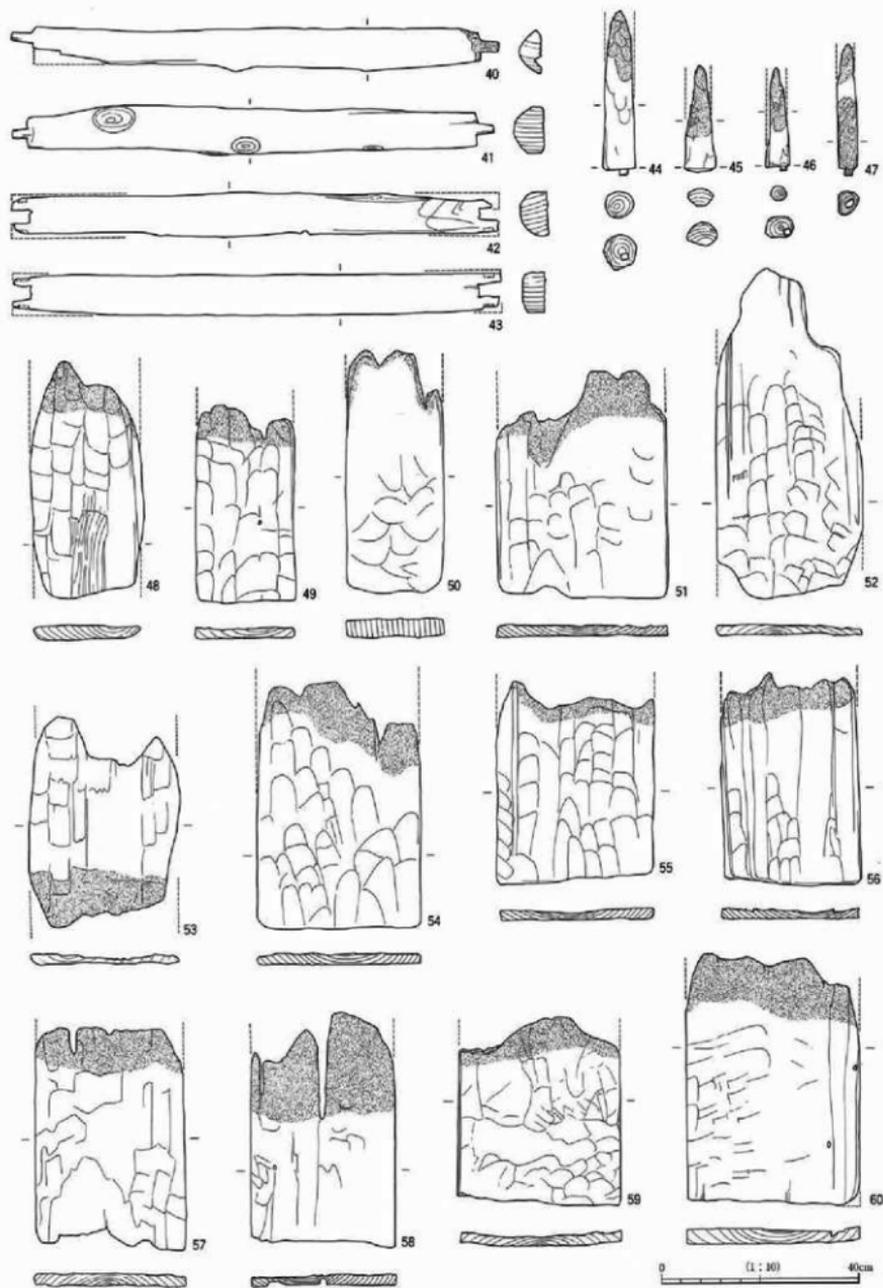


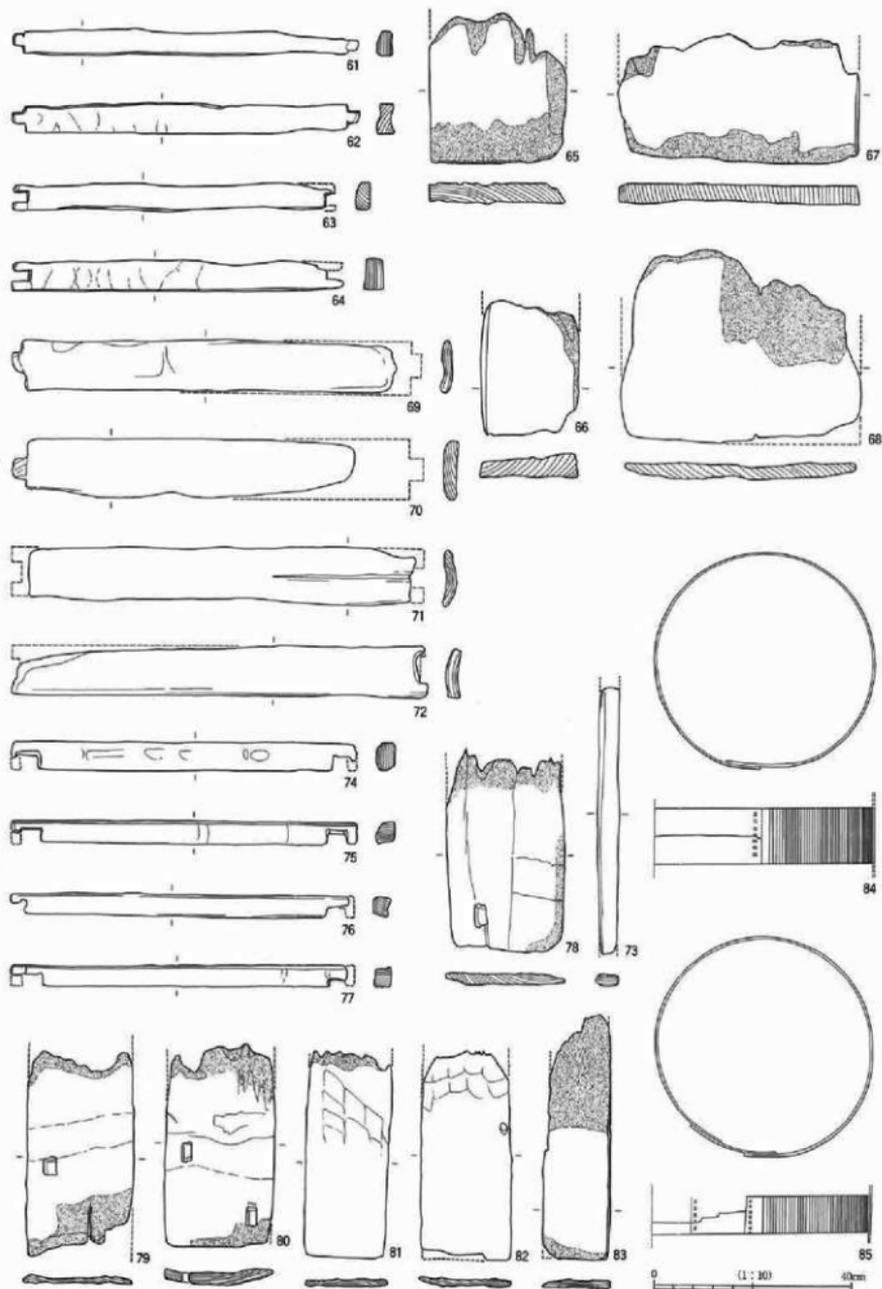
38

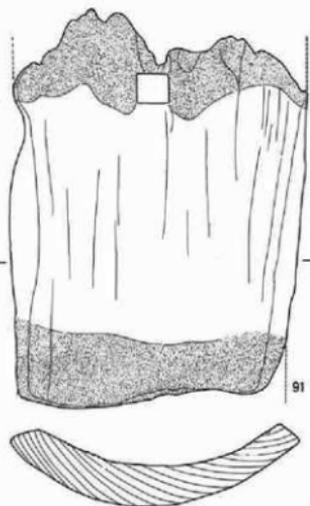
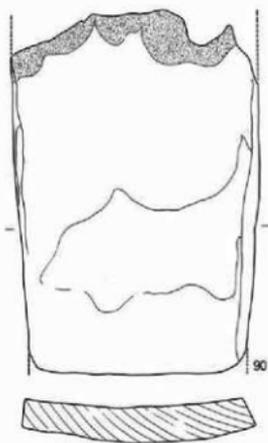
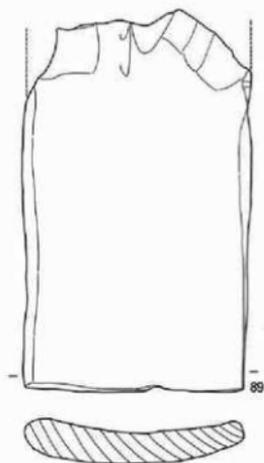
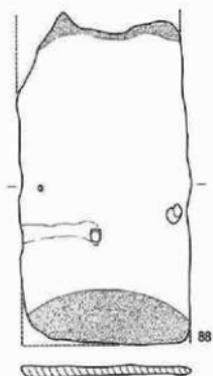
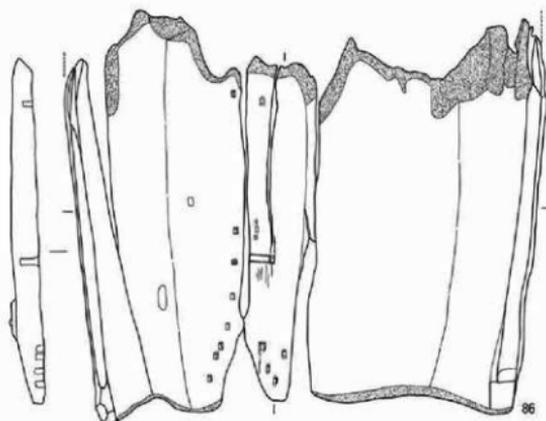
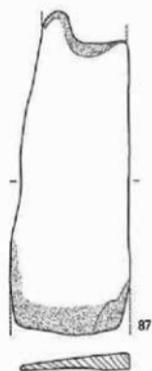


39

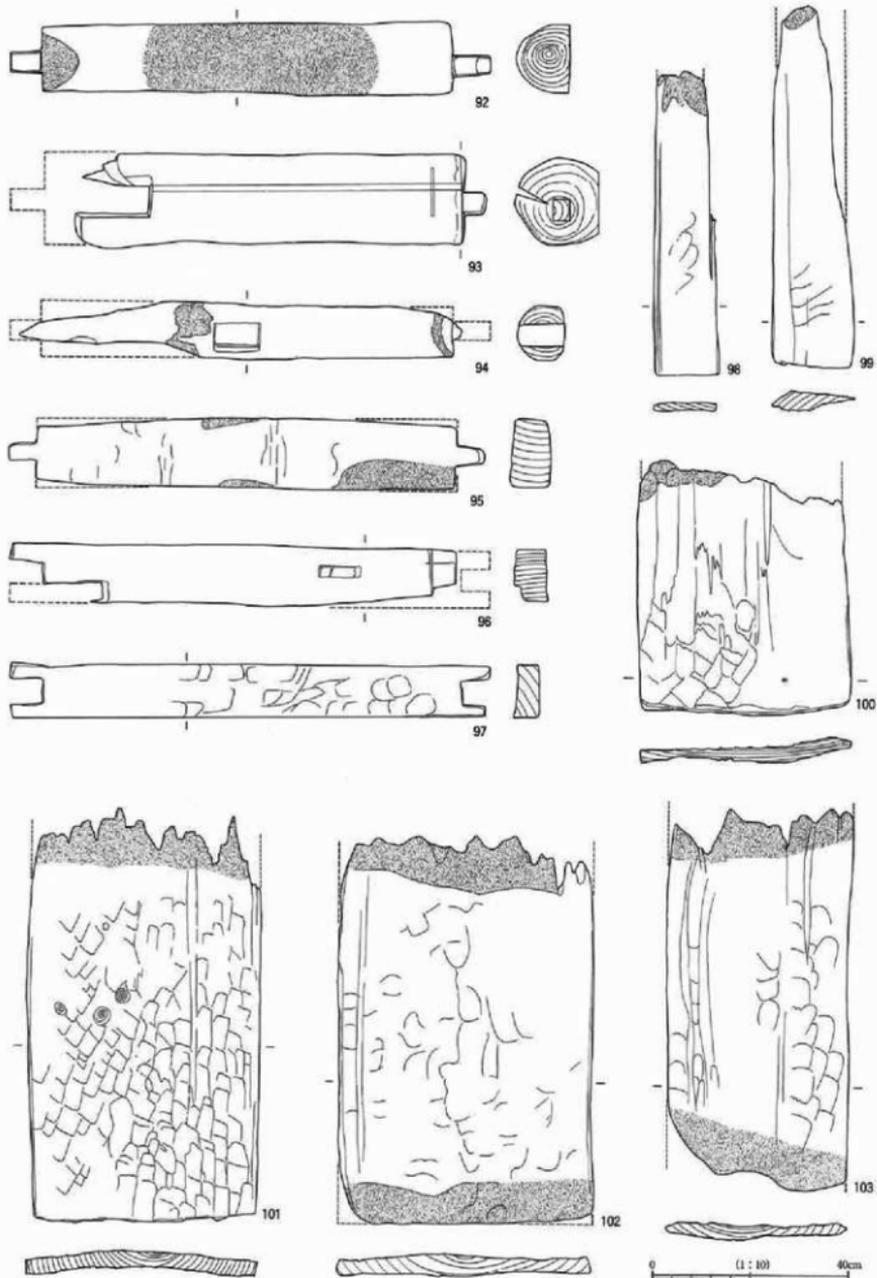


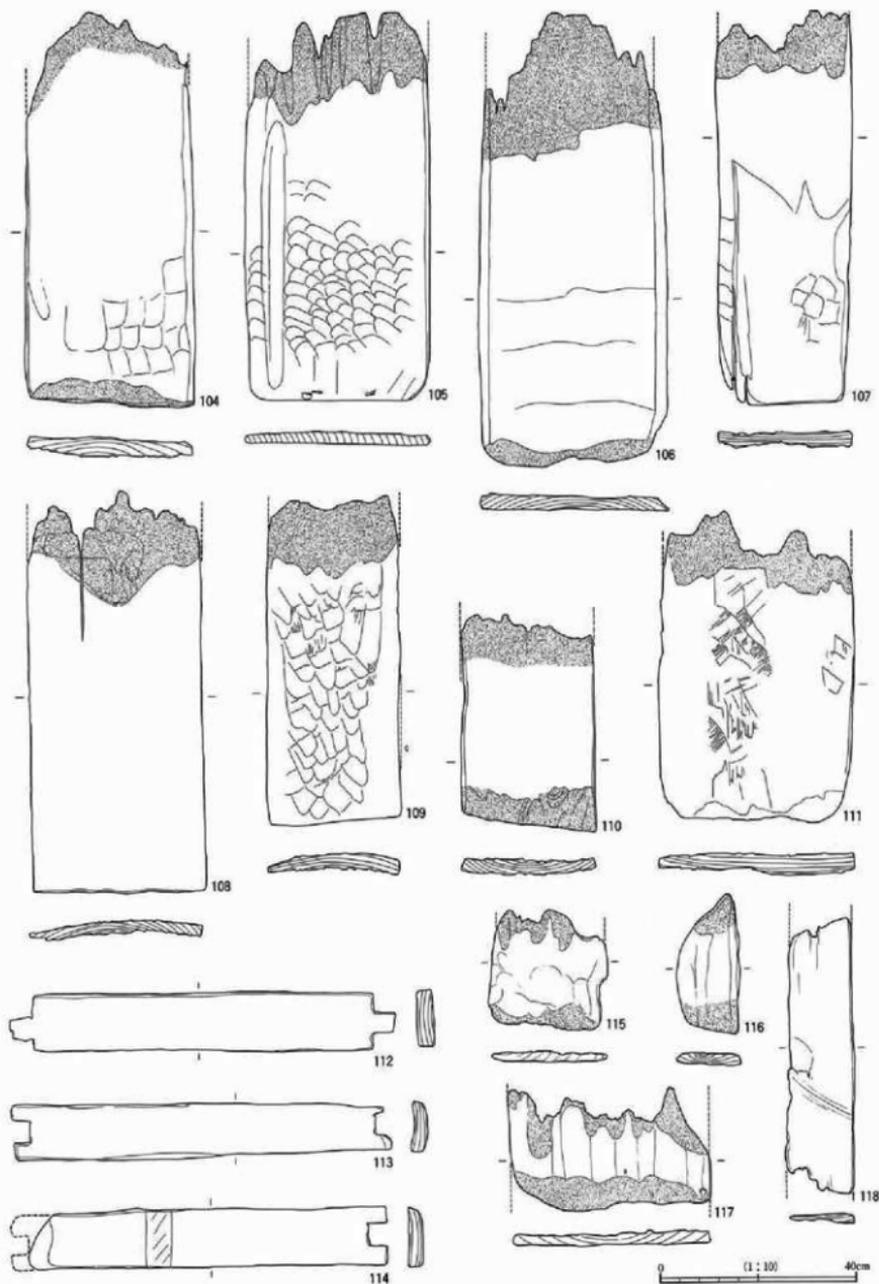






0 (1:10) 40cm









1. 遺跡遠景 (1979年) (南東から)



2. 遺跡遠景 (1979年) (南から)



3. 遺跡遠景 (1967年) (北から)





1. 5B～5C 区付近 (1979年) (北西から)



2. 5・6A～C 区付近 (1979年)
(南東から)



3. 5・6B～D 区付近 (1979年)
(南西から)



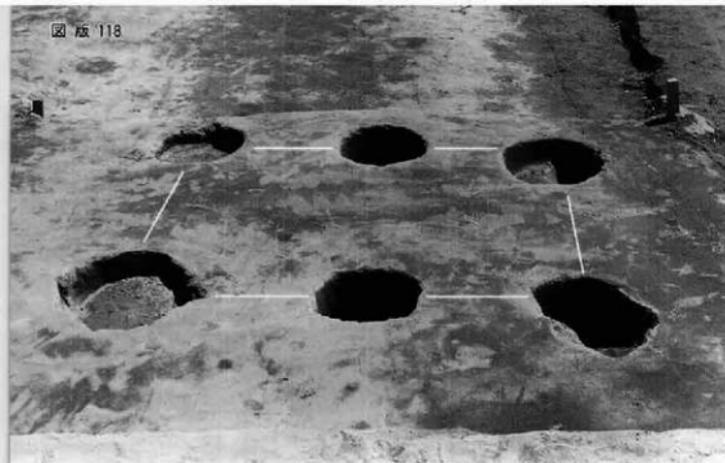
1. 1B・1C区付近 (1980年) (東から)



2. 1B・1C区付近 (1980年) (西から)



3. 1C区付近 (1980年) (南西から)



1. 1号掘立柱建物完掘 (西から)



2. 2号掘立柱建物 12号井戸完掘 (東から)



3. 4. 溝状遺構断面



5. 6. 溝状遺構断面



1. 21区付近 (南から)



2. 26~H区付近 (北東から)



3. 21区配石 (北から)



1. 5・6B・C付近 (北西から)



2. 5C・D付近 (南東から)



3. 5C付近 (南から)



1. 5・6C付近(北東から)



2. 7C付近(北西から)



3. 5E・F付近(南西から)



1. 5D・E付近(北西から)



2. 5D・E付近(西から)



3. 5D・E付近(北から)



1. 2J区付近（南東から）



2. 1号竪穴住居完掘（南東から）



3. 2号竪穴住居（南東から）



1. 3号竪穴住居土器出土状況(南から)



2. 3号竪穴住居完備(北から)



3. 土器出土状況
4. 土器出土状況
5. 土器出土状況
6. 土器出土状況



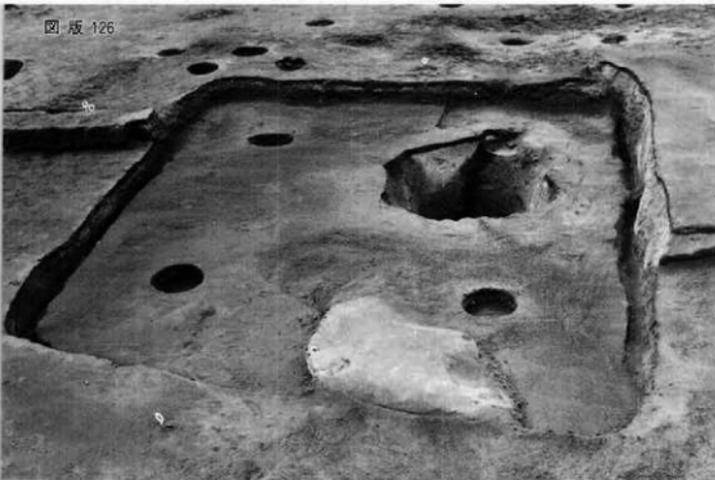
1. 4号竪穴住居 土器・炭化材出土状況
(南西から)



2. 4号竪穴住居完掘 (南西から)



3. 炭化材・土器出土状況
4. 炭化材出土状況
5. 炭化材・土器出土状況
6. カマ下付近土器出土状況



1. 5号壺穴住居完掘（南東から）



2. 5号壺穴住居完掘（北西から）



3. カマド



4. カマド付近土器出土状況



5. 南側周溝



1. 6号竪穴住居実測 (西から)



2. 6号竪穴住居実測 (東から)



3. 7号竪穴住居実測 (北東から)



1. 7号竪穴住居発掘面（北西から）



2. カマド付近土器出土状況
3. カマド付近土器出土状況



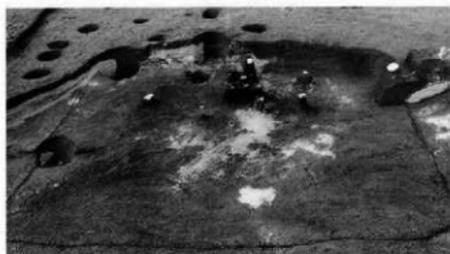
4. 8号竪穴住居発掘面（北東から）



5. 9号住居カマド
6. 9号住居カマド



1. 10号竪穴住居完掘 (南西から)



2. 土器出土状況 (西から)
3. 土器出土状況



4. 11号竪穴住居完掘 (南西から)



5. 土器出土状況
6. 土器出土状況





1. 12号竪穴住居土器出土状況
(南西から)



2. 12号竪穴住居土器出土状況
(北西から)



3～6. カマド付近土器出土状況



1. 12号掘立柱建物確認状況（南から）



2. 12号掘立柱建物完照（南から）



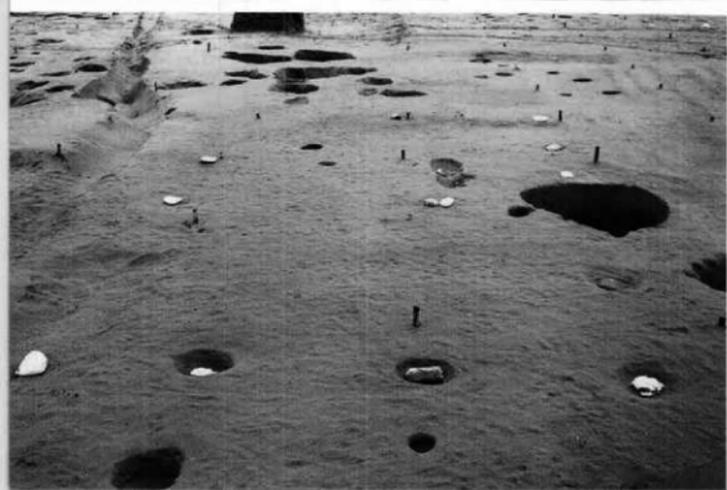
3. 14号掘立柱建物完照（北東から）



1. 6・7号掘立柱建物完掘 (北東から)



2. 6・7号掘立柱建物完掘 (南西から)



3. 9号掘立柱建物完掘 (南西から)



1. 土塁状高まり (58) (北東から)



2. 土塁状高まり断面 (5867) (北東から)



3. 土塁状高まり (6D94) (南から)



1. 1号井戸完掘 (南から)



2. 2号井戸完掘 (南から)



3. 2号井戸井戸枠 (南から)

1. 3号井戸実掘 (南西から)



2. 4号井戸実掘 (南から)



3. 4号井戸井戸枠 (南から)





1. 5号井戸完掘(北から)



2. 6号井戸完掘(南から)



3. 7号井戸完掘(北東から)



1. 7号井戸井戸枠 (北東から)



2. 8号井戸実掘 (東から)



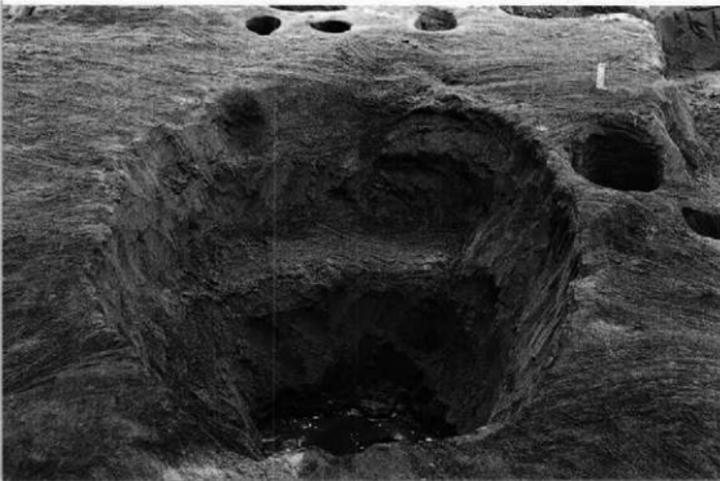
3. 8号井戸井戸枠 (南から)



1. 9 (左)・10 (右) 号井戸完掘
〔北東から〕



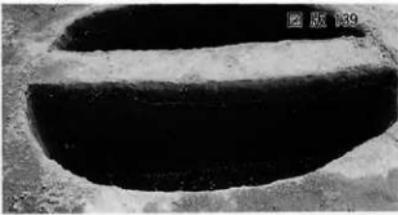
2. 9 (手前)・10 (奥) 号井戸井戸枠
〔南から〕



3. 23号井戸発掘途中 (南西から)

各土坑

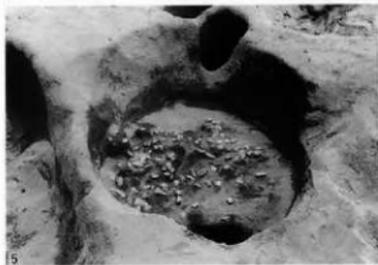
1. 12号土坑 (南東から)
2. 13号土坑 (南から)



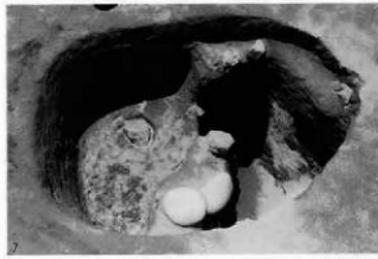
3. 17号土坑 (東から)
4. 22号土坑 (東から)



5. 24号土坑 (南から)
6. 24号土坑 (上面)



7. 36号土坑 (西から)
8. 68号土坑 (西から)



9. 68号土坑 (北から)
10. 68号土坑遺物出土状況

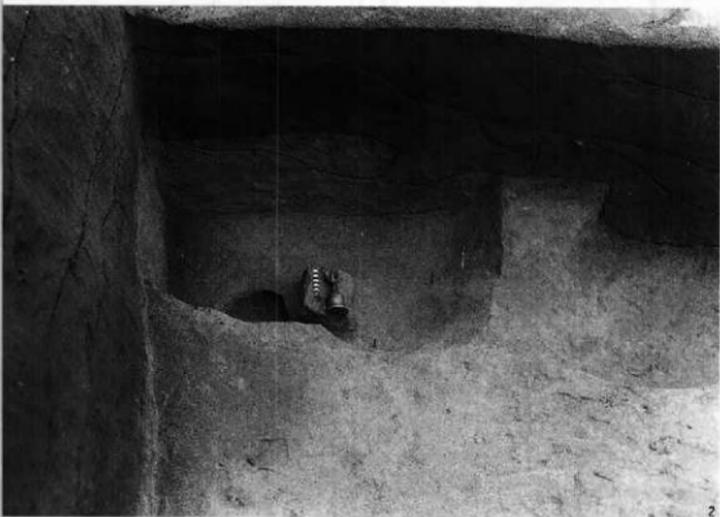


11. 244号土坑 (北西から)
12. 245号土坑 (南東から)





1. 54号土坑仏具出土状況 (南から)



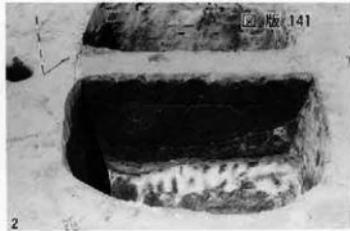
2. 54号土坑土層断面 (西から)



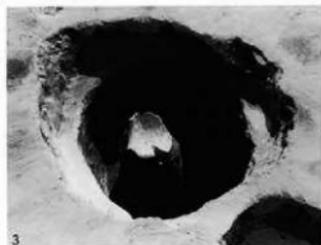
3. 54号土坑四耳壺出土状況 (西から)
4. 54号土坑仏具出土状況 (南から)

各土坑

1. 246号土坑
2. 266号土坑



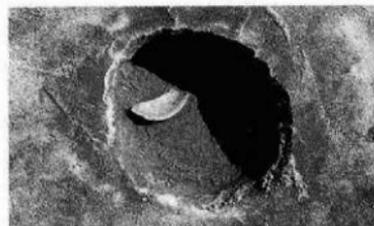
3. 286号土坑
4. 519号土坑



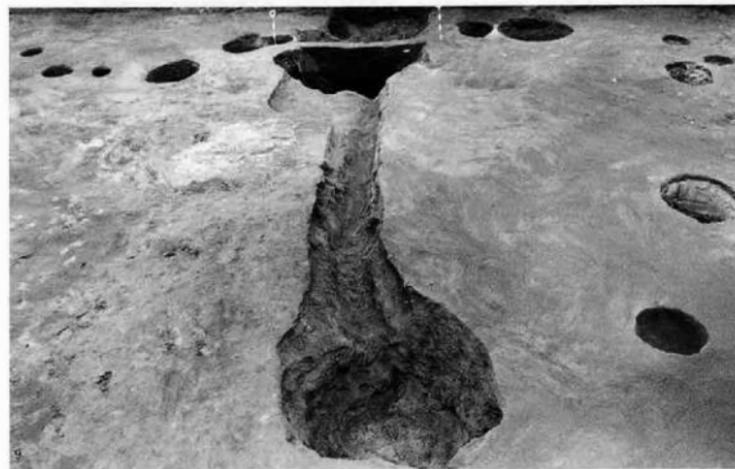
5. 666号土坑
6. 555号土坑



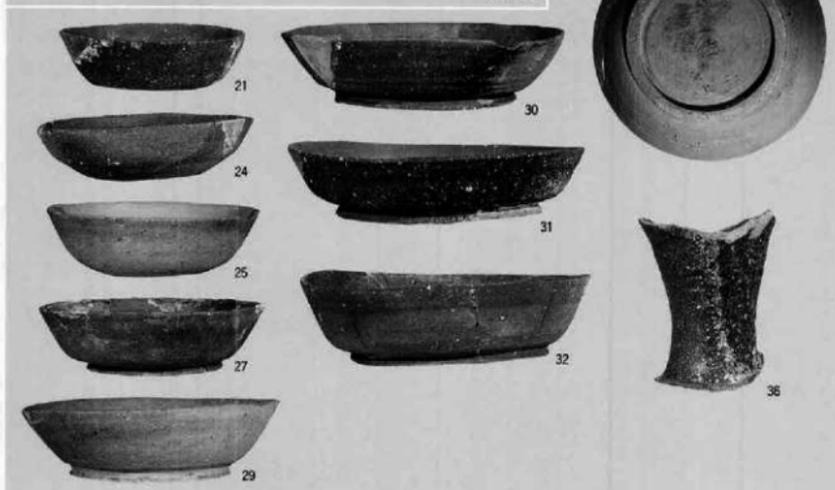
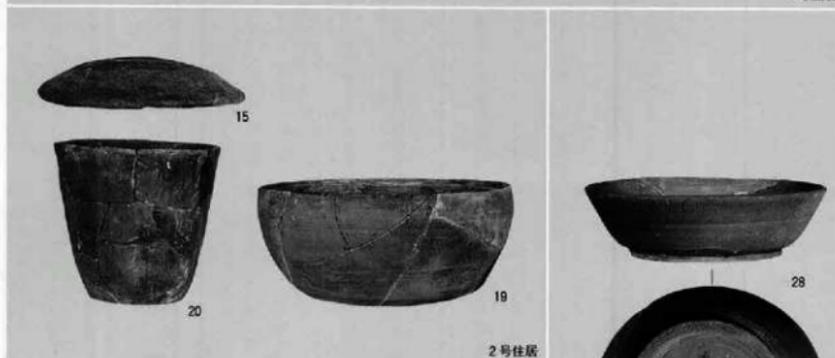
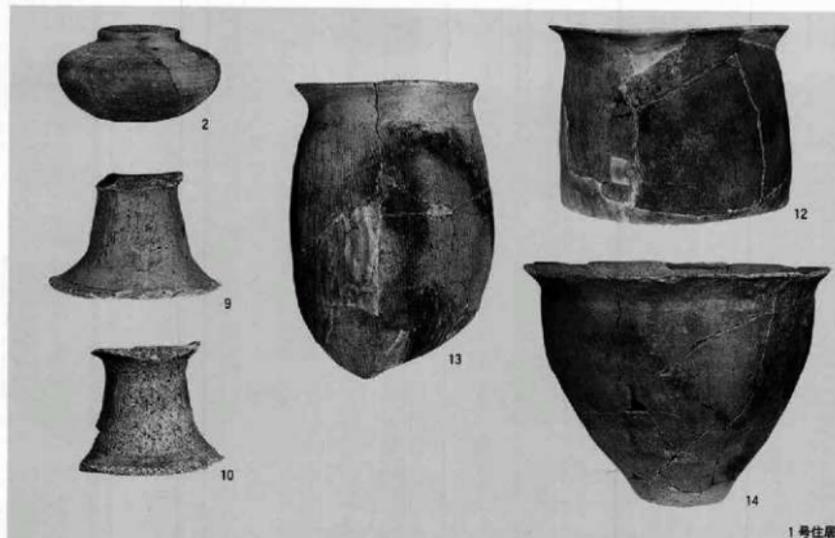
7. 400号土坑
8. 572号土坑



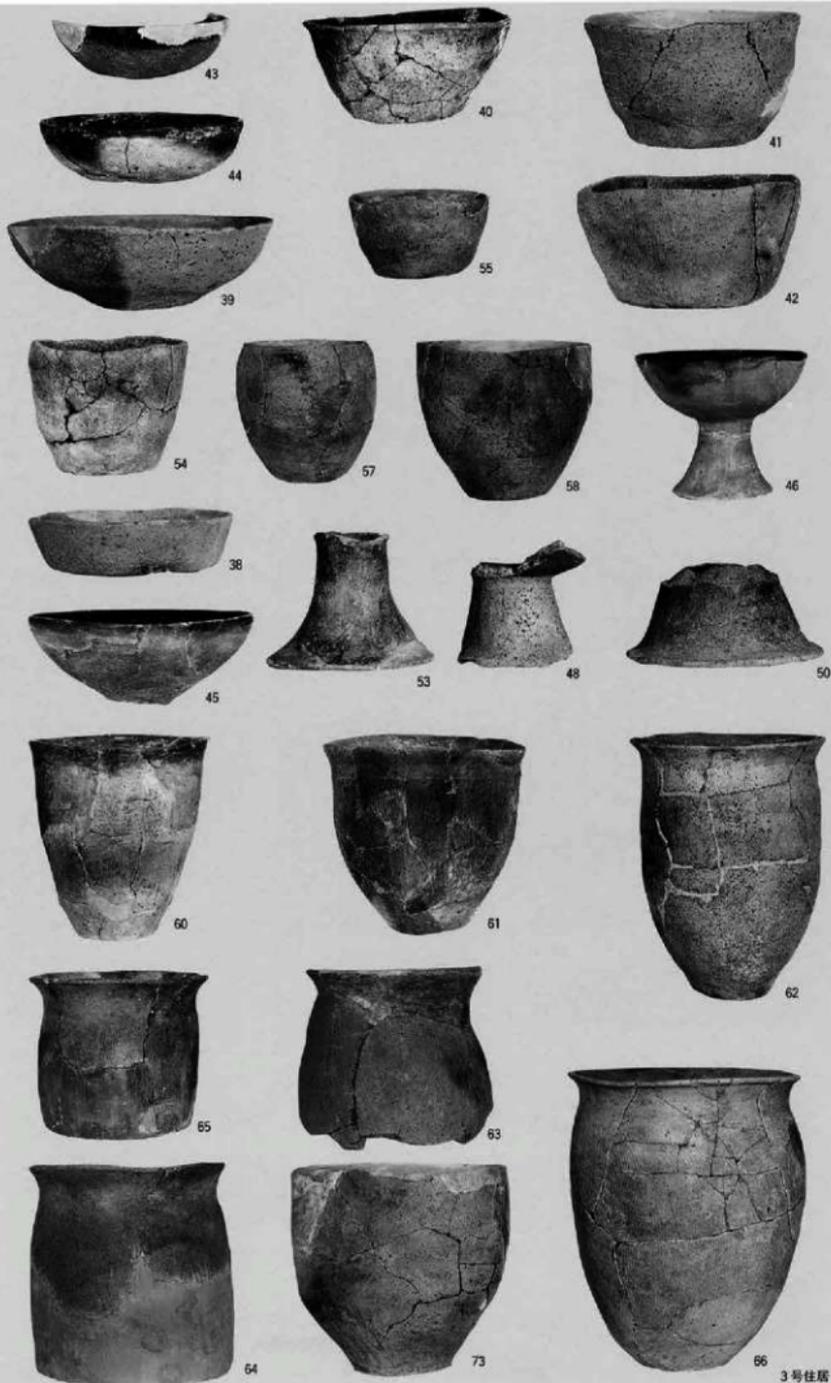
9. 663号土坑



1:3 その他
1:4 2-12~14・
20-19



1:3 その他
1:4 46・57・58・
60~66・
73



1:3 その他
1:4 67-70~
72-74・76・
83-84



67



70



71



74



72



76

3号住居



78



79



80



83



84

4号住居



86



88



87



89



90



91



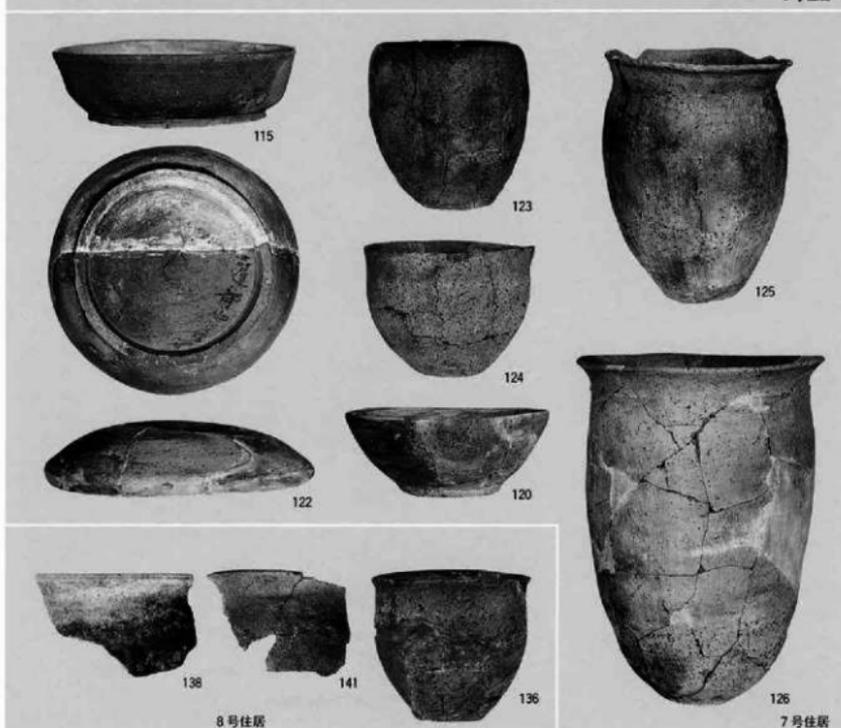
93

5号住居

1:3 その他
1:4 107~111・
123~126・
136・138・
141



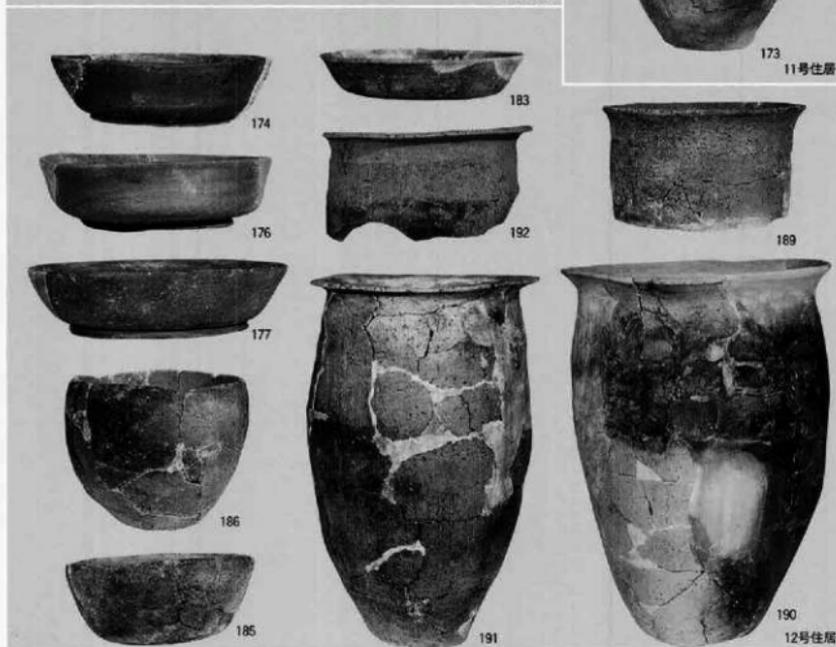
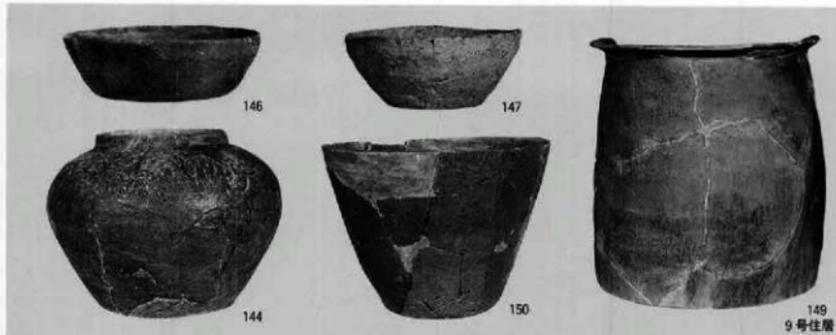
6号住居



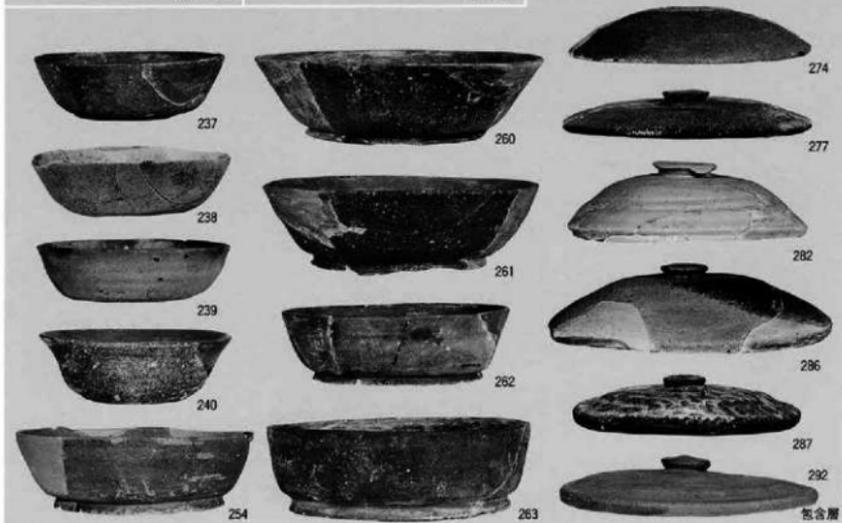
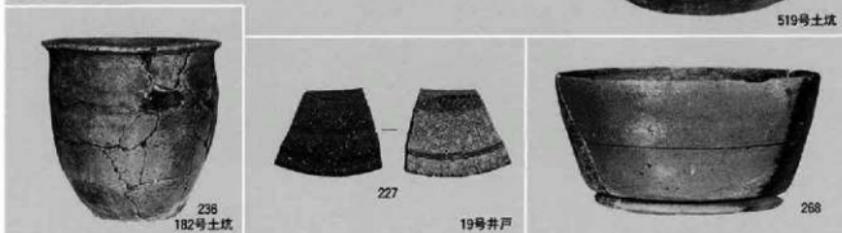
8号住居

7号住居

1:3 146-147・
152-158・
169-174・
176-177・
183
1:4 その他



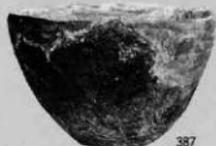
1:3 その他
1:4 217-222-
223-225-
236



1:3 その他
1:4 309-319-
322-323

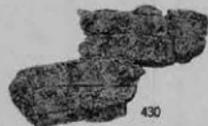
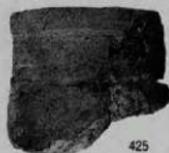


1:3 352-369-
372-374-
381-393
1:4 その他

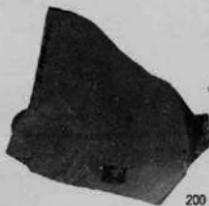
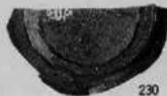
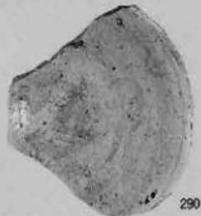
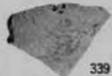




1:3 その他
1:4 402-404・
405-425・
429



1:3





1:3 その他
1:4 15・28

8号土坑(1~3)
17号土坑(4)
68号土坑(9)
127号土坑(11)
144号土坑
(13-14)

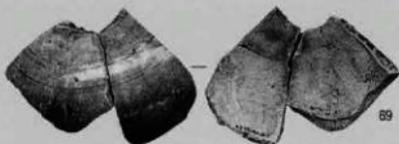
54号土坑
(15~27)
256号土坑
(28-29)
553号土坑
(42-43)
385号土坑(35)
556号土坑(40)

560号土坑(46)
568号土坑
(47-48)
572号土坑
(50-53・55-59-
60)

1:3 その他
1:4 83



63



89



67



73

628号土坑(63)
666号土坑
(67-89)
1号溝(73)
2号溝(71)
土塁
(81-77-78-80)



71



81



77



78



80



84



85



86



88



90



87

91



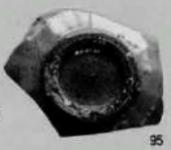
92



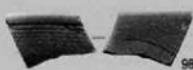
94



96



95



98



99



100



102



103



104



105



106



107



108



110



116



117



118



119



122



123



120



128



124



125

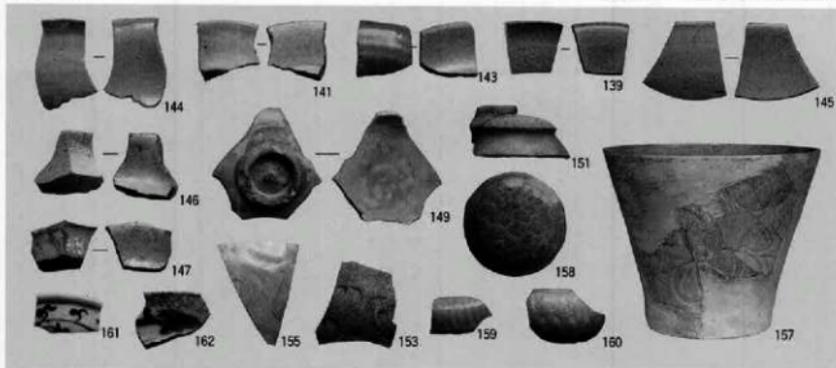


126



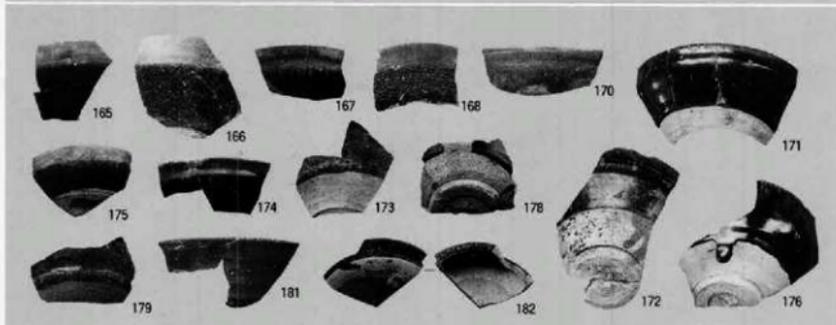
129

青磁
(84-88・90-
92-94-96-98
-100-102-
108-110-116-
120-122-126-
128-129)

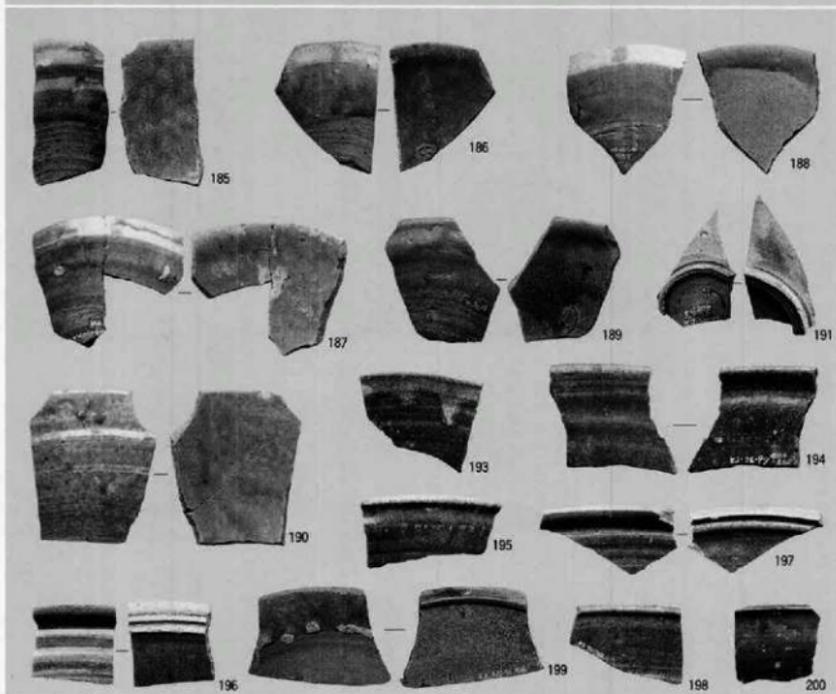


1:3 その他
1:4 157

白磁
(139-141-143~
147-149)
青白磁
(151-153-155-
157~160)
検付(161-162)



天目茶壺
(165~168-170
~176-178)
香伊
(181-182)
半筒輪
(179)

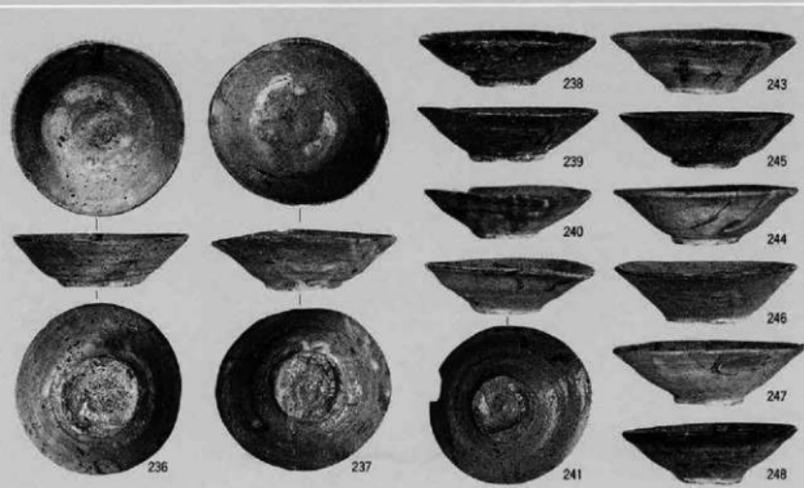


灰輪平桶ほか
(185~191-193
~200)

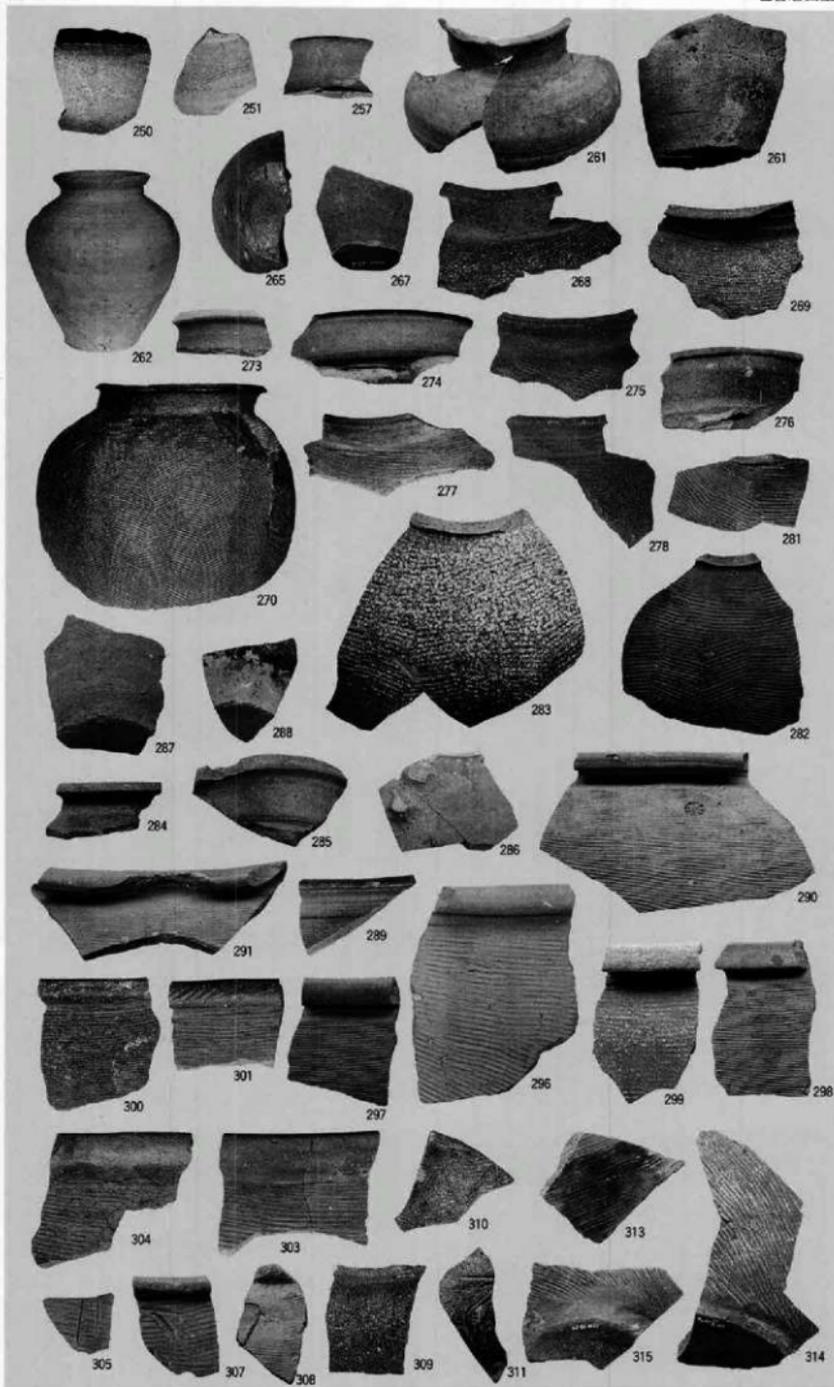
1:3



瀬戸・美濃
灰輪皿
(201~207・209
~220)
灰輪四耳壺
(221~222)
灰輪梅瓶(223)
灰輪花瓶
(224~226・228・
230)
灰輪香伊
(231~233)
灰輪壺(235)

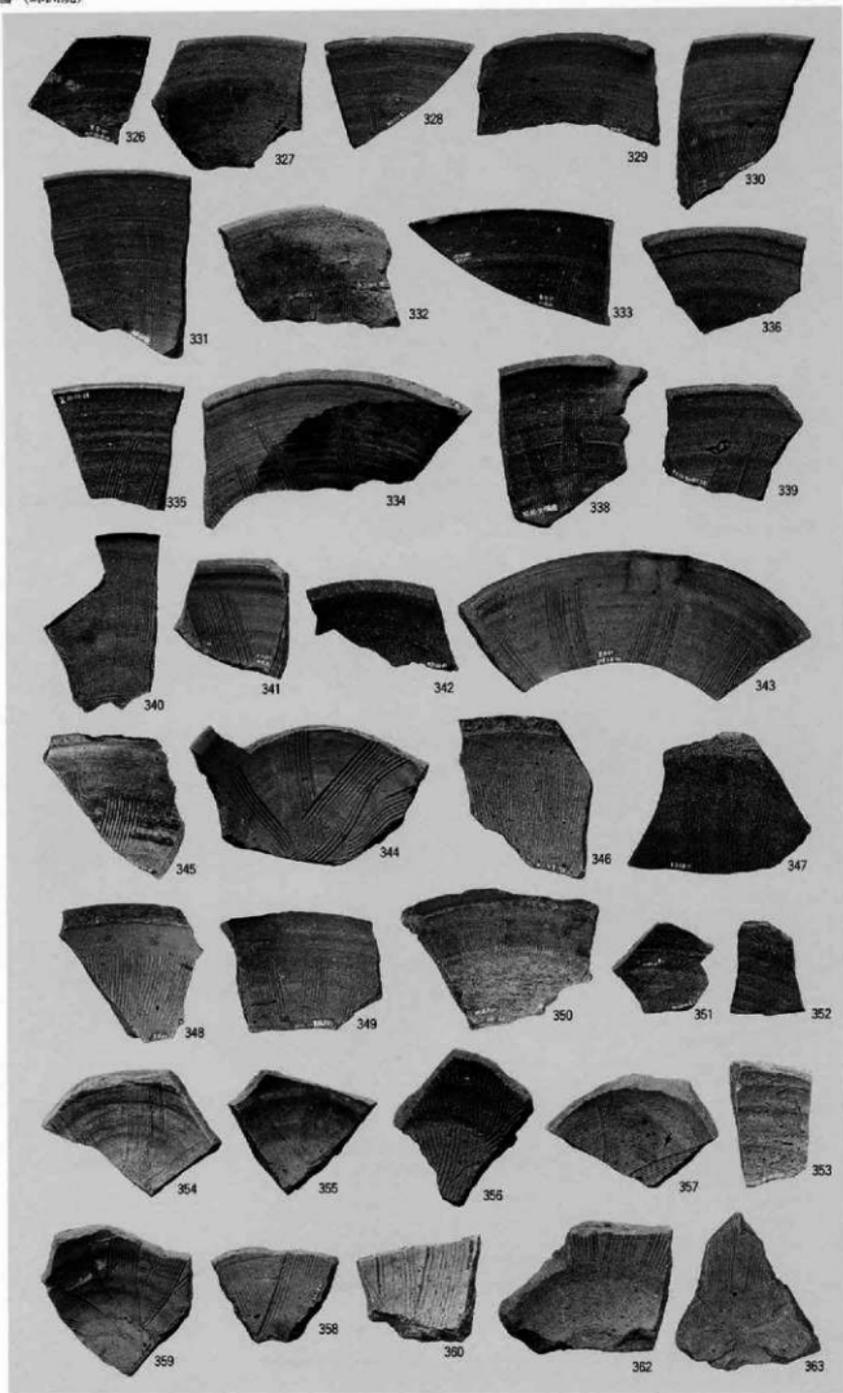


朝鮮陶器
灰輪皿
(236~241・243
~248)

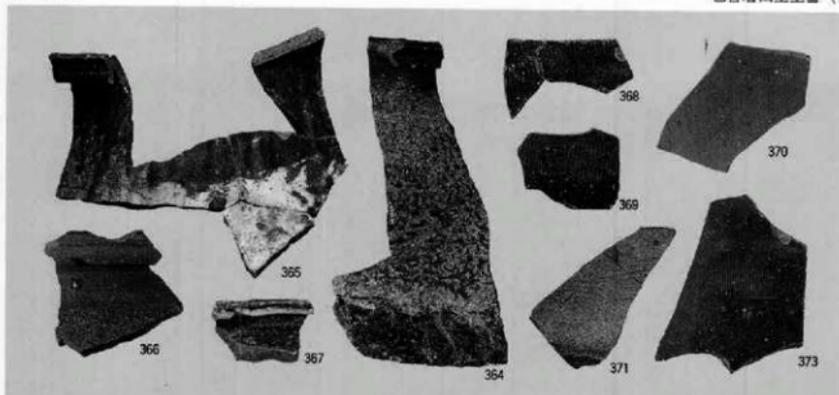


壺
 (250・251・257・
 261・262・265・
 267～270・273
 ～278・281～
 283・287・288)
 大壺
 (284～286)
 大壺
 (289～291・296
 ～301・303～
 305・307～311・
 313～315)

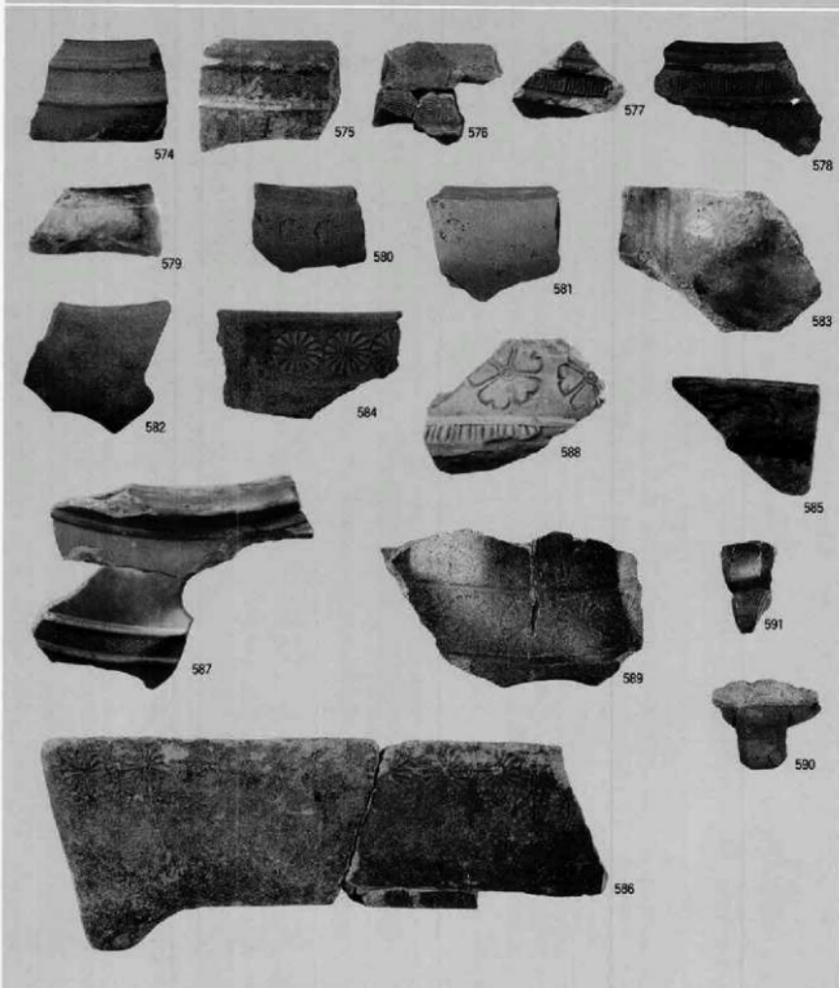
1:4



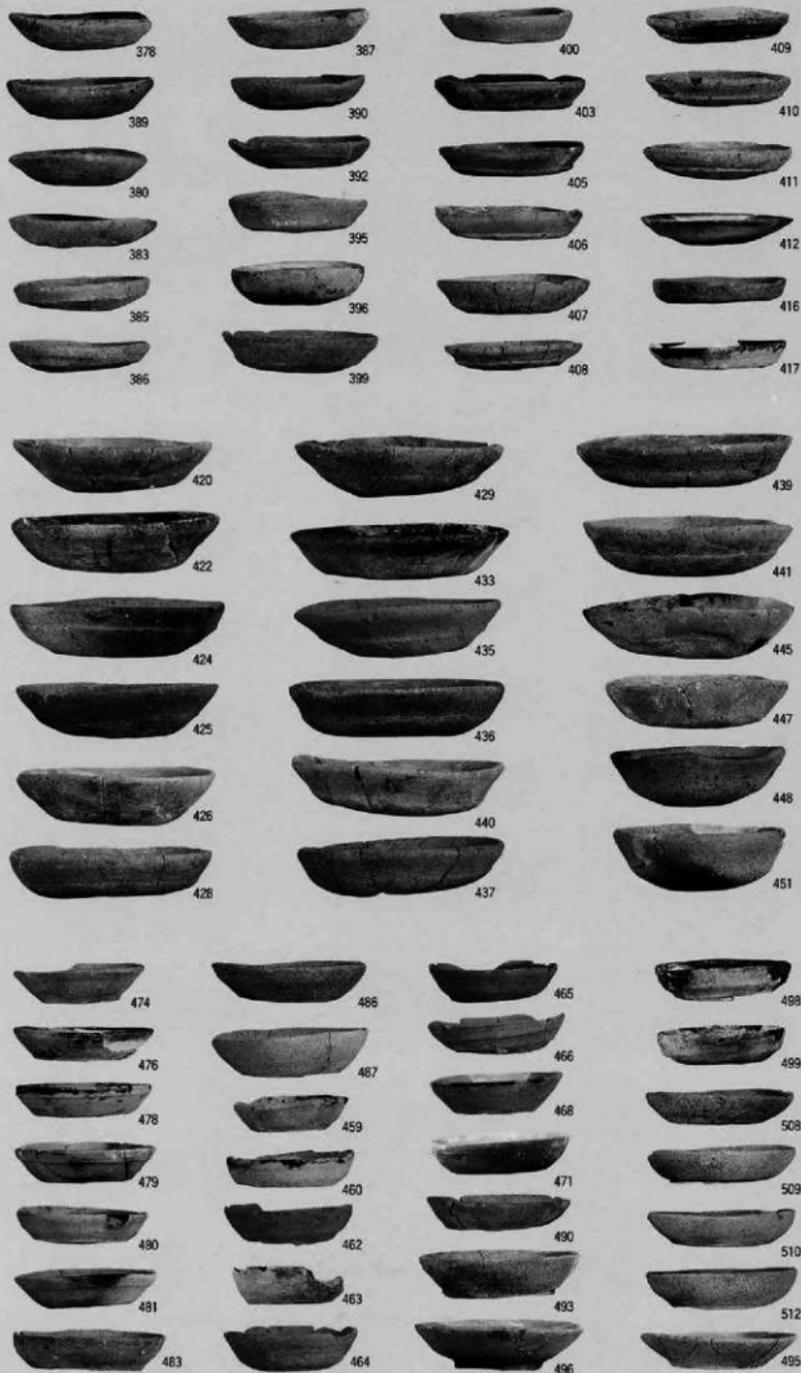
1:3

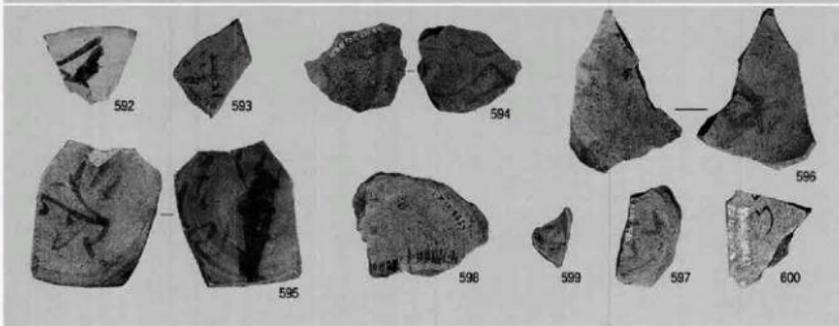
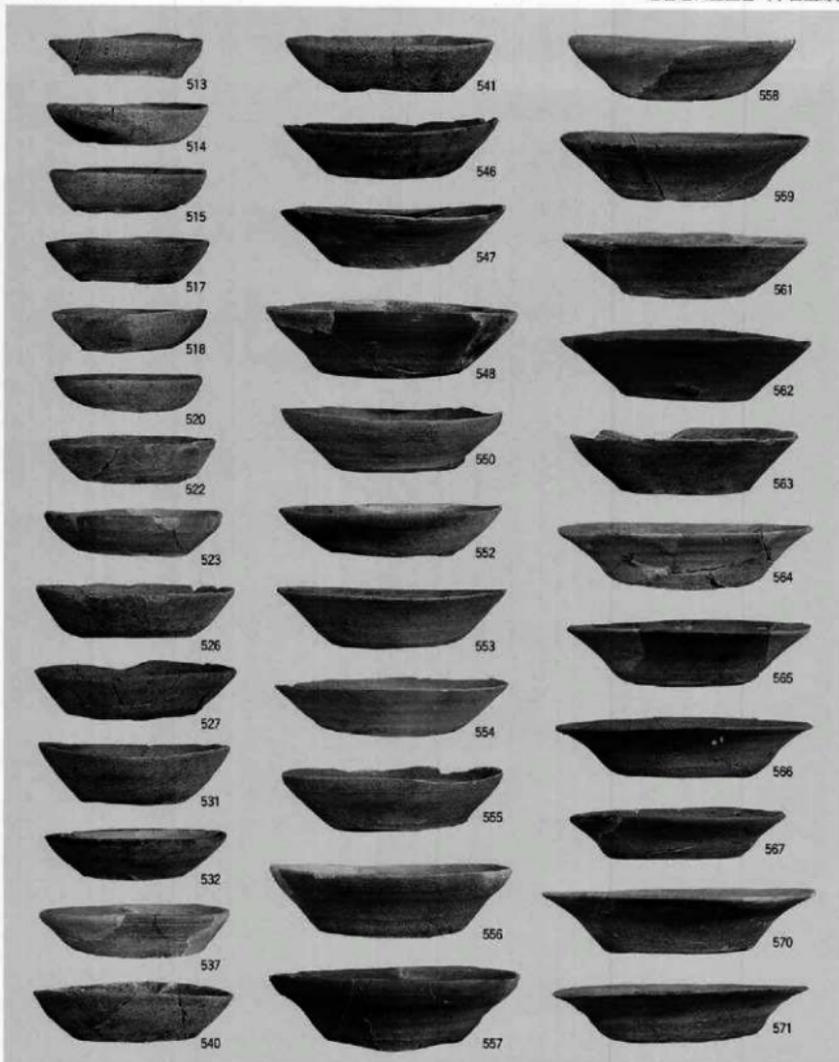


集
(364~371・373)



1:3



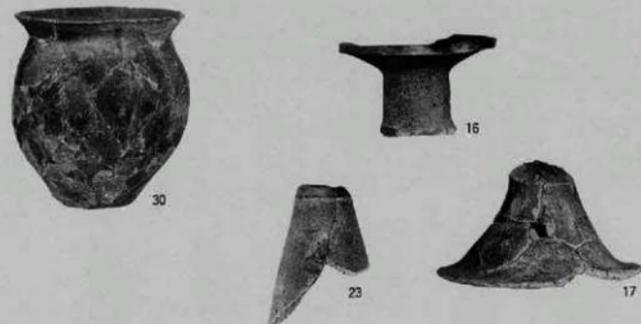


1:1 52~57
1:3 その他
1:4 30

縄文土器
(1~3・5・6)

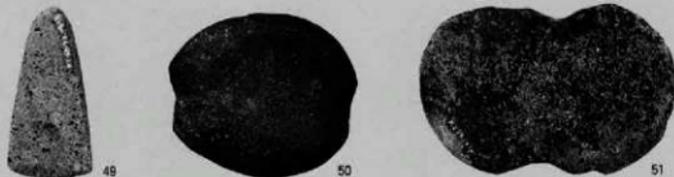


弥生土器
(9~15)



古墳時代土器
(16・17・23・30)

縄文時代石器
(49~52)
弥生・古墳時代
玉(53~55)
その他
(56・57)

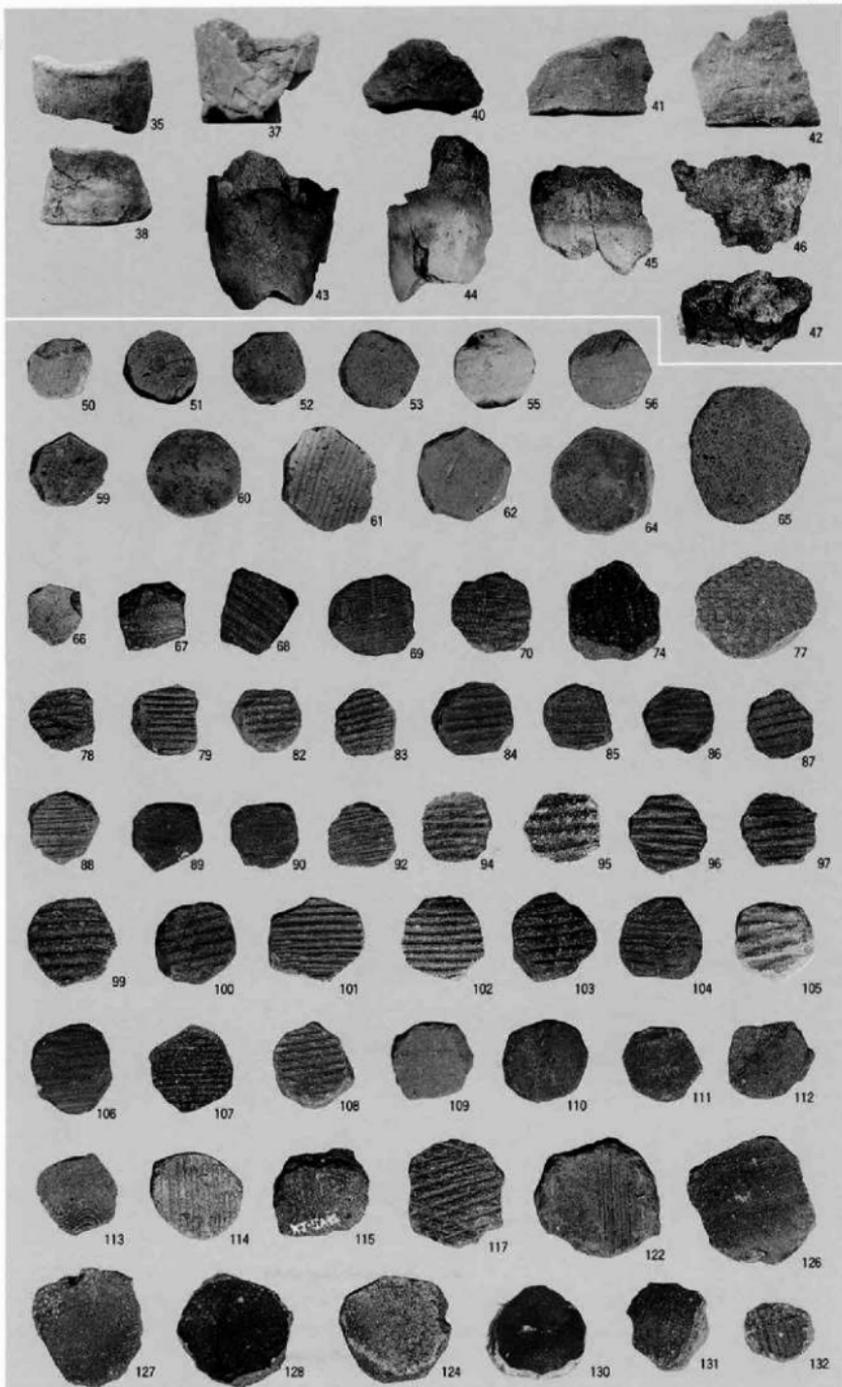


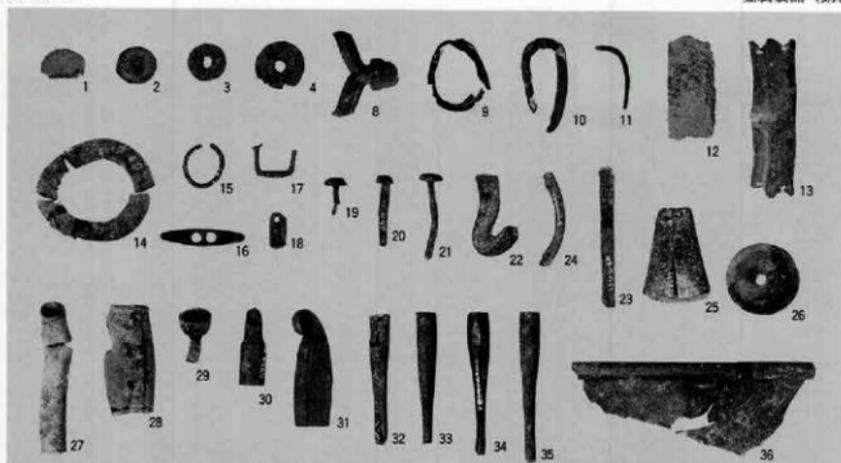


1:3 35-37-38

40-47

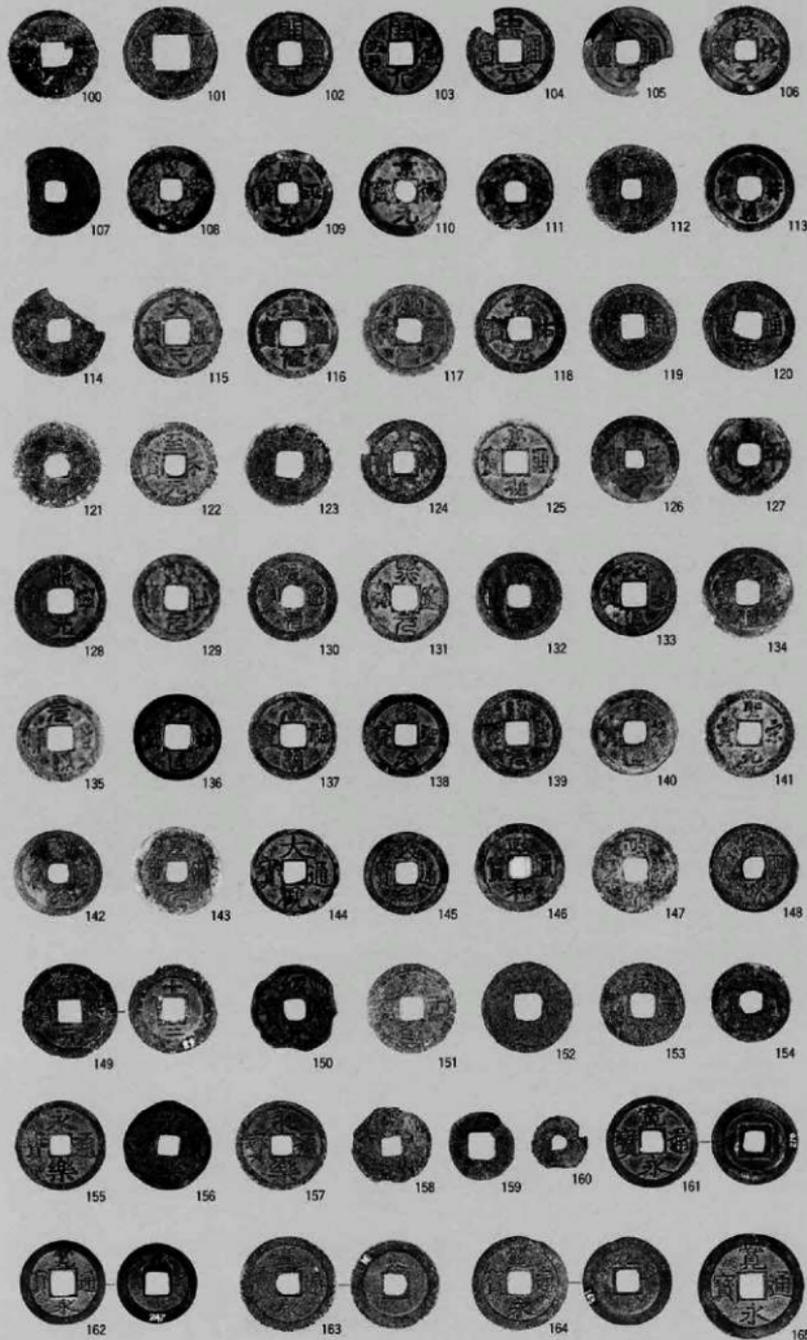
2:3 その他

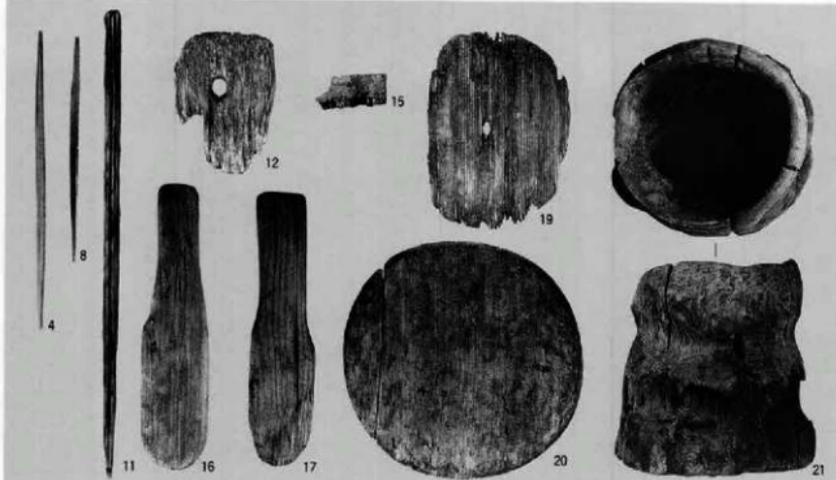




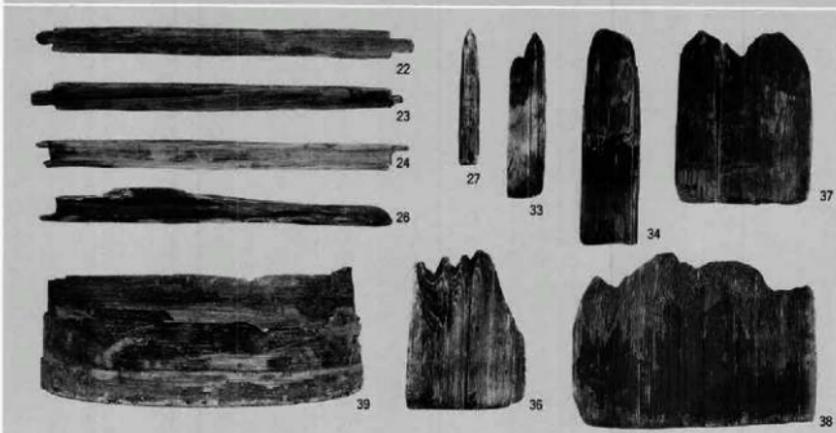
1:2 1~4・8~
36・90~
92・94~
99
1:3 その他



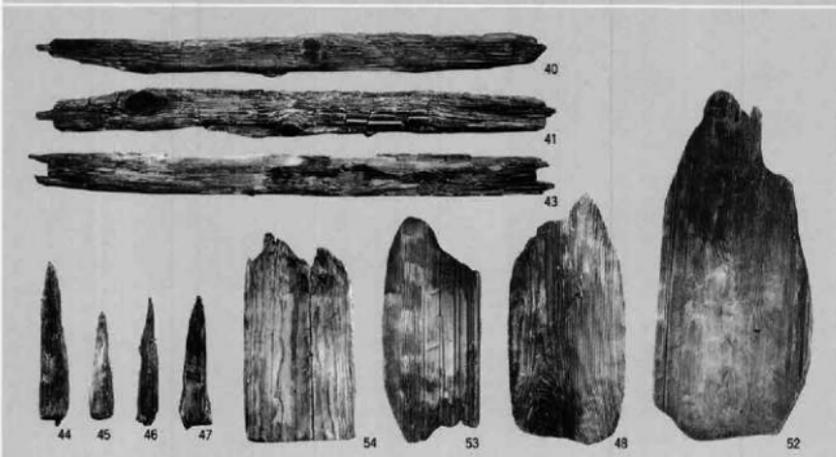




2:1 15
 1:2 4・8・16・
 17・19・20
 1:4 11・12・21
 1:6 その他



1号井戸杵
 (22~24・26・27・
 33・34・36~39)



2号井戸杵
 (40・41・43~48・
 52~54)

1:6

2号井戸杵
(50-51-56-60)

50



51



56



57



58



60



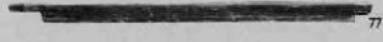
74



75



76



77



78



81



61



62



63



64



65



68



79



83



67



80

3号井戸杵
(61-65-67-68)4号井戸杵
(74-81-83)

71

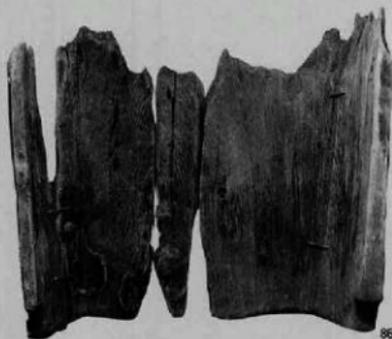


70

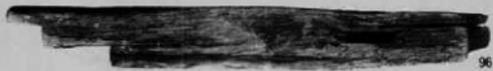
7号井戸杵
(70-72)

72

1:6



8号井戸枠
(86~88・90・91)



9号井戸枠
(92~96・103)

1:6



101



102



107



106



108



103



104

9号井戸枠
(101~104・106
~108・111)



111

10号井戸枠
(112~114)



112



113



114

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第28集

北陸自動車道関係発掘調査報告書

木崎山遺跡

平成4年3月25日印刷

平成4年3月31日発行

発行 新潟県教育委員会

新潟市新光町4番地1

電話 025 (285) 5511

印刷 長谷川印刷

新潟市小針1丁目11番8号

電話 025 (233) 0321

頁	位置	誤	正
図版169	2列目	103	109
図版169	キャプション	(101～104・106～108・111)	(101・102・104・106～109・111)